

四葉を継ぐ者

ムイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第1高校に入学した達也と深雪。周りからはとても優秀な妹と、劣等生の兄として見られている2人。実は四葉家の縁者である。

もしその四葉家当主である四葉真夜に隠し子的な存在がいたら。

そして彼が四葉と名乗り1高に転校してきたら。

これから主人公達を巻き込む事件とは？

主人公は真夜の実の息子として書いていきます。

※ストーリー展開はほぼ原作沿いですが、原作と異なる展開、個人や家、企業のオリジナル設定、メインキャラのキャラ崩壊があるかもしれません。

※九校戦編からスタートします。

※原作と違うところもあります。

目次

九校戦編

第1話	四葉真夜の息子	1
第2話	魔法科高校へ	8
第3話	風紀委員への誘い	16
第4話	真夜からのお電話	24
第5話	選手	30
第6話	達也のエンジニア入り	37
第7話	飛行魔法の完成	43
第8話	FLT社へ	48
第9話	発足式	57
第10話	事故？	64
第11話	ホテル着	72
第12話	懇親会	78
第13話	みんなでお風呂！	86
第14話	賊	93
第15話	九校戦スタート	99
第16話	スピード・シューティング本戦	105
第17話	クラウド・ボール	112
第18話	花音の実力	117
第19話	試作デバイス	121
第20話	バトル・ボードの悲劇	126
第21話	新人戦開始	136
第22話	スピード・シューティング決着	143
第23話	ほのかの予選	151

第24話	新人戦ピラース・ブレイク	159
第25話	智宏の予選	165
第26話	宴会。そして新人戦3日目	172
第27話	アイス・ピラース・ブレイク決勝	180
第28話	新人戦メイン競技	187
第29話	達也の選手入り?	193
第30話	モノリス・コードへ参戦	201
第31話	快進撃	206
第32話	将輝の挑発	214
第33話	第1高校VS第3高校 前編	221
第34話	第1高校VS第3高校 後編	229
第35話	工作人員	235
第36話	飛行魔法の晴れ舞台	243
第37話	本戦ミラージュ・バット決勝	251
第38話	智宏VS実行部隊	260
第39話	悪魔の降臨	268
第40話	九校戦最終日	275
第41話	ダンスパーティー	282
夏休み編		
第42話	海へ!	290
第43話	眩しい女性陣	297
第44話	ちよつとした事故	303
第45話	波打ち際にて	309
第46話	ほのかの大勝負	315
第47話	予期せぬお誘い	319

第48話	新しい魔法	325
第49話	会長選挙・前編	331
第50話	会長選挙・後編	338
横浜騒乱編		
第51話	論文コンペと不審な影	345
第52話	勾玉	352
第53話	閲覧室にて	358
第54話	小さな監視者	366
第55話	通り魔	372
第56話	男の後処理	378
第57話	タックルで確保	382
第58話	保健室での事情聴取	389
第59話	突然の欠席	395
第60話	レオの修行	400
第61話	警備隊模擬戦	404
第62話	ラッキーかアンラッキーか	409
第63話	FLT社への襲撃	415
第64話	睡眠ガス	420
第65話	人食い虎VS幻影刀	426
第66話	狐の巣穴探し	432
第67話	鑑別所への侵入者	438
第68話	コンペまであと2日	445
第69話	嵐の前日	451
第70話	論文コンペ開催	457
第71話	殺気立つ街中	463

第72話	重力制御型熱核融合炉	470
第73話	横浜事変	475
第74話	梓弓	482
第75話	VIP会議室	489
第76話	封印解除	496
第77話	クリムゾン・プリンス	502
第78話	ムーバルスーツ	509
第79話	油断と被弾	514
第80話	氷の女王	520
第81話	摩醯首羅	528
第82話	重力の暴走	533

九校戦編

第1話 四葉真夜の息子

ここは旧山梨県の山奥。

そこでとある実験が行われていた。2人の男が立っており、その内の1人が5kmほど先にある巨大な岩に向けて魔法を放つ。

その岩に魔法が命中すると、なんの抵抗もなく融解して周囲も溶かしながら消え去った。

すると後ろに立っていたもう1人の男が拍手をした。

「お見事です」

「いえ、まだまだですよ」

「しかしあつという間にこれらの魔法を習得なさるとは……さすが真夜様のご子息ですな」

「葉山さん……」

この男は葉山忠教はやま ただのりといい、四葉家に仕える執事で本宅の執事長を勤めている。

四葉家の先代当主である四葉英作から仕えており、四葉家の中でも重鎮の存在。

他の7人の執事と違い、主のプライベートな用向きを果たす本当の意味での執事バトラーは彼だけである。初老に見えるが、実年齢は70歳を超えているらしい。

達也のことを他の者の様に『出来損ない』と軽んじておらず、高い評価をしている。また警戒すべき魔法師とも思っている。理由は簡単。本当の事を知っているからだ。

ちなみに達也に（深雪のコーヒーより）美味しいと言わせるコーヒーをいれる技術を持っている。

葉山はいいタイミングで迎えに来た車をチラリと確認した。

「では帰りましょう。真夜様がお待ちしておられるはずですよ」

「わかりました」

「智宏様。こちらへ」

先程の魔法を放ったのは四葉智宏^{ともひろ}。

14歳まで東京の隅っこで育てられてきたが、女手1つで育ててきた母親が病死し、葬式で四葉の当主真夜と出会う。そこで智宏は自分が真夜の息子だと知る。そして今まで育てて来てもらった母親は智宏の代理母だった事も。事情を聞くと子供が産めなくなった真夜の卵子を代理母に預けていたと言う。

本当は二十歳になったら迎えに来る予定だったらしい。

達也と深雪を含めた四葉家とは既に顔合わせ済みで、一年半前に正式に四葉家の本家に入る。その後数人だけで山奥に行き、真夜の命令で本気の達也と戦わされたが結果は惨敗。しかし特訓しおよそ6ヶ月でとてつもないサイオン量をその身体に収めることができた。また、大型電動二輪（バイク）^{ミーティアライン}の免許もとらされたので運転もできる。

使う魔法は真夜の流星群^{ミューティアライン}や領域干渉、そして対人戦で最も得意な重力核^{グラビティコア}。あとおまけにサテライトアイ。種類は少ないが威力は馬鹿にできない。ちなみにサテライトアイは、精霊の目と同じように1度認識した物を遠くから視れる。しかし違うのはその範囲。サテライトと名がつくだけあって、世界中のどこにいても対象を見つけられる。また、他の効果も精霊の目と同じでエイドスを認識して魔法を放つたり、話しかけたりすることができる。

先程の魔法は戦略級魔法の実験。達也のマテリアルバーストに並ぶ魔法を使っていた。まだ改良の余地はありそうなので実践にはまだ至らないだろう。それと体術も九重八雲から教わっており、設定では達也は会ったことのない兄弟子という風になっている。

智宏と葉山を乗せた車は帰ってきた道を走り抜け、気がついたら四葉家の本家が姿を表した。

玄関前に到着し、車を降りた智宏は真夜が待っている部屋に向かう。中に入ると既に葉山が2人分の紅茶を入れており、その横には真

夜が微笑みながら座っていた。智宏の姿を見た途端に真夜の顔がパアツとなったのは気の所為だと思いたい。

「母上。今帰りました」

「お帰りなさい。どう？戦略級魔法はできました？」

「なんとかですね」

「じゃあこれで四葉は戦略級魔法師クラス……いえ、それ以上の猛者を2人持ったと。さすが私の息子ですね」

「ありがとうございます」

「さ、座って」

「はい」

四葉真夜。この女性に関しては詳しい事は何も言うまい。世界最強魔法師の1人で『極東の魔王』『夜の女王』などの異名をもち、なおかつ智宏の母親でもある。

智宏が初めて真夜にあつた時不思議と他人とは感じなかった。逆に代理母と暮らしていた頃は歳を重ねるごとに何か違和感を感じていたほど……

葬式にいきなり現れ、目に若干の涙を浮かべた真夜に抱きしめられて智宏はなぜか安心したように泣いたのだ。もしかするとその時から気づき始めていたのかもしれない。

智宏はソファアーに座り、葉山が入れてくれた紅茶をひと口飲む。

すると真夜が再び口を開く。葉山曰く「智宏様がいらしてから真夜様が明るくなった」らしい……

「さてと。智宏さん、一応流星群は使えるのね？」

「はい」

「それでは問題ありませんね。智宏さん、昨日達也さんがブランシュのアジトを襲撃しました」

「へえ」

「学校はあと数日後には一段落つきそうなので智宏さんには1高に

行ってもらいます」

「・・・なるほど。九校戦ですか？」

「その通り。智宏さんには九校戦に出て四葉の力を世間に知らしめてもらいます」

「そして達也の事を世間から逸らすための工作でもあると」

「あら？気がついた？おそらく達也さんはいやでも九校戦に出場する可能性が高いの。だから・・・ね？」

智宏が聞く限り達也は二科生。しかしその実力は一科生を遥かに越しており、出場してしまうかもしれない。

本来達也と深雪は四葉とは関係のないようにしたのだが、この大会でいろいろと怪しまれる可能性もある。なので智宏が活躍し、少しでも世間の目を2人（主に達也）から逸らす必要があった。

智宏は事情をしっているのです。さほど悩む必要はなく、すぐに返事をする事ができた。

「わかりました。母上の息子として恥じぬように挑みます」

「ありがとうね」

その後しばらく話し、夕食の時間が近づくと智宏は1度自室に戻る。

着替え終わり時計を見たらまだ時間があった。

丁度よかったので1高に転校する事を達也と深雪に伝えようと思いい、電話をかけた。

2度目のコールで大きなパネルに司波家の居間が映し出され、達也と深雪が立っていた。

「達也、深雪。久しぶり」

『智宏兄様。お久しぶりです』

『元気そうだな』

「ああ。相変わらず2人は仲がいいなあ」

『か、からかわないでください・・・』

「ははは(そのわりには嬉しそうだな)」

『智宏。本題に入ろう』

「おっとそうだった。達也、ブランシユの話は聞いた。これで達也の実力は高校の上層部に知れ渡っただろう。とくに・・・十文字克人にはな」

『そうだな』

「もうすぐ九校戦だし・・・俺は母上の命令で1高に転校することになった」

『え!?!智宏兄様がですか!?!』

『・・・なるほどな』

『お兄様?』

智宏がそつちに行くと言すと話すと達也は全て察したような反応をし、深雪は素直に驚いていた。深雪は智宏の事を『兄』と読んでいるが、智宏の誕生日は4月25日。達也の1日後なので一応同い年だ。しかし智宏の事は従兄であり信頼できる人間の1人なので、もうひとりの兄として慕っているのだ。

そして智宏は予想通りの反応が少し嬉しかった。

『深雪、叔母上は世間の目を俺から智宏に向けさせたいんだよ』

「その通り。まあそれでも達也は九校戦でそれなりに注目を浴びるだろう。母上は四葉の跡継ぎを決めるまでバレなければいいと言っていた。深雪はともかく達也は探られるとめんどくさい事になる」

『そうだったのですか・・・』

「それに当たって・・・深雪」

『はい』

「俺の事はできるだけ『兄』をつけないで欲しい」

『そうだな。世間の目が届かない自宅や四葉家の息がかかった所はともかく学校ではな。俺達が四葉の者と知られたらいろいろとまずいだろう』

『お兄様と智宏兄様が仰られるのなら・・・かしこまりました。それでは・・・智宏さん、と呼ばせていただきます』

「よろしく頼む。ではまた」

『はい。お待ちしております』

智宏は通話を切ると食堂へ向かい夕食を取った。

その日は真夜から1高に行くにあたり詳しい説明を聞くことになる。

智宏が住むのは達也と深雪が住んでいる家から50mほどの空き地に建てる新築の家だ。

少々2人の家と近い気もするが、逆にこれくらいの方がお互い何かあった時にすぐに駆けつけられるし周りの警戒もしやすい。

もちろん四葉と知っていてもよからぬ輩が来るかもしれない。なのでセキュリティも万全にしてある。

まあ智宏ならば別に問題ないだろう。ただし『再生』は使えないので、腕を吹き飛ばされたら達也に直してもらうしかないだろう。吹き飛ばせる奴がいればの話だが・・・

それから数日後。

四葉家の玄関では荷物を抱えた智宏が真夜や葉山達と別れの挨拶をしていた。

「智宏さん。いってらっしゃい」

「いってきます、母上。葉山さん。母上をよろしく願います」

「もちろんでございます」

「もう・・・私はそんなヤワじゃないわ。あ、そうそう。智宏さん、この娘も連れていきなさい」

そうやって真夜の後ろから出てきたのは智宏と歳が近そうな女の子。

深雪には劣るがその美少女に智宏は少し見とれてしまう。しかしただの女子ではないとすぐに察した。

「母上？この人は？」

「智宏さんの護衛兼メイドよ。今は私服ですけど」

「メイド？」

「お世話をする人が必要でしょう？あとついでに周りの監視もしてもらおうかな・・・ってね？」

「は、はあ・・・」

「では挨拶なさい」

「はいご当主様。初めまして智宏様。私は『月シリーズ』の香月彩音と申します」

香月彩音。彼女は深雪を例に作られた『月シリーズ』の1番目。2番目以降はまだ時間がかかるようだ。容姿は深雪を参考にしただけあって可愛く、髪は黒髪のセミロングで身長は160cm程度、腰周りは細く足もスラツとしている。出ているところは出ているので、私服で街中を歩かせたらモデルと間違われるかもしれない。

得意といっている系統は振動系。彩音は防御や隠密の魔法に特化している。

「この娘は深雪さんよりは弱いけどウチの調整体魔法師ではトップクラスの實力よ」

「準完全調整体？」

「俗に言えばそうね」

このまま行けば話が長くなりそうだったので、横から葉山が「そろそろ・・・」と口を挟む。本来ならばこのような事は許されないのだが、これは葉山にしかできないだろう。証拠に真夜は少し頬を膨らませただけで文句は言わなかった。

智宏と彩音は車に乗り込むと四葉家を出発して行ったのだった。

第2話 魔法科高校へ

数日後。学校で手続きを終えた智宏はある人物に言われて講堂の控え室に通された。

理由は簡単。ついこの前に四葉真夜の息子として発表され、世間を騒がせていた人物が転校してくるのだ。なので全校生徒を集めてそこで智宏を紹介するとの事だ。

智宏が携帯端末を弄っていると、ドアの向こうから智宏を控え室に連れ込んだ張本人の気配がした。

それと同時にドアが開く。

「ごめんなさい。待たせてしまって」

「いえいえ。大丈夫ですよ」

「そう……？コホン、では改めまして。私はこの学校の生徒会長を務めている七草真由美です」

「貴方が七草の……あ、四葉智宏です」

「いろいろ聞きたい事があるのだけれど、とりあえず講堂で貴方の事を紹介するわね」

「わかりました」

「ついでになんだけど——」

「何か言うんですか？」

「……そうよ。頼めるかしら？」

「はい。大丈夫です」

「じゃあ決定ね！もう準備はできたはずだからこっちも移動するわよー」

「は、はあ」

智宏は真由美に引きずられるようにして講堂のステージに向かう。舞台裏から講堂を見ると本当に全校生徒が集まっているようだ。後ろで立っているのは生徒会役員と風紀委員だろう。

そして生徒達は今か今かと智宏を待っていた。

『それでは転校生の四葉智宏君です。どうぞ！』

「ほら行って行って！」

真由美に背中を押されながらも智宏は拍手が鳴り響くステージに出る。

言い忘れてたが、智宏ははたから見てもかなりルックスがいい。その証拠に女子生徒から黄色い声が上がっている。

そして学校内の実力者数名は智宏の実力を感じ取り、警戒や関心や興味の含んだ視線を智宏に向けている。しかし大部分の生徒は、裏でいろいろやっている四葉という家に恐れを抱いていた。

智宏はマイク前に立つととりあえず自己紹介をする。

「どうも。四葉智宏です。まずはこの1高に入れた事を誇りに思います。約3年という短い期間ですがどうぞよろしくお願いします」

挨拶を終えると再び拍手が講堂を包む。

ぐるりと講堂内を見渡した智宏は「やはりか」と思う。

本来ならば学校側から提示された原稿用紙を読むのだが、ここから智宏は個人的な意見を言い始める。

「さて、挨拶はここまでにして少し言わせてもらおう。ここから見ても君達の実力は明らかだ。この学校には一科生と二科生がいると聞いていたが・・・そうだな、ここから向こうが一科生で反対側が二科生かな？」

会場がざわつく。

どうやって実力がわかったのだろうか。

しかも敬語を使っていないし・・・とも。

「それで一科生は二科生の事を軽蔑し差別しているとか」

心当たりがあるのだろうか？何人かの一科生は智宏から目を背けた。

逆に二科生達はなんだろうかと智宏をしつかりと見る。

「言わせていただく。實にくだらない。なぜ差別をする？自分達より劣っているからか・・・？まあそれはいいとして、この前のブランシユの事は聞いた。聞けば活躍したのは学校の役員以外ほとんど二科生だったらしいじゃないか」

ブランシユの事件を思い出したのだろう。身に覚えがある二科生は下を俯いている。

騙されていた彼らに罪はない。しかし騙されていなかった二科生も自分だったら賛同していたかもしれないと思ってしまうのだ。

「二科生はその時何をしていた？全て風紀委員に任せっきりじゃないか。自分達の学校が襲われていたんだぞ？少しは協力したりしなかったのか？」

一科生は何も言い返せなかった。

席を立てて言い返そうとしたが周りの空気が重すぎて結局立てなかつた生徒や、克人や摩利が頷いているのを見て「うっ」と思った生徒が多数いた。

二科生からもうんうんと頷いている生徒が多く見られた。

「だから俺はブルームやウィードなどの差別を認めない。そうそう。見た感じ二科生の中には一科生よりも強い人が何人かいるみたいだから足をすくわれないように。以上です」

智宏は言いたいことを言い終わると、とつとつとステージから去っていく。

消えた途端講堂内はガヤガヤとざわつき始め、様々な意見を言っている生徒がいた。二科生の女子で泣いている生徒も何人かいる。もしかすると彼女達は差別されるような言葉を何回も言われてきたのだろう。

真由美は満面の笑みで智宏を送り、摩利や克人は満足そうにしていた。

智宏は講堂を出て初めて自分が真由美に使われたのだと察する。しかしあの言葉は嘘ではなかったのであまり気にはしていなかった。

智宏のクラスは1年A組。なんと深雪と同じクラスだ。そして教室に行くとき「まじ？」と言いたげな生徒が何人かいた。そんなに四葉が怖いのか。

休み時間、智宏はクラスメイト（主に女子に）話しかけられる前に深雪の所に向かう。

深雪もそれに気が付き、周りにいた2人の女子生徒を分けて智宏の前に立った。

「初めまして、俺は四葉智宏です。貴女が司波さんですか？」

「はい、私が司波深雪です。深雪で結構ですよ」

「・・・ではそうする。事件当時の活躍は聞いた。すごいじゃないか」

「私などお兄様には及びません」

「お兄様？ああ、そういう兄がいたのか」

もちろん初めて会ったという演技はする。シナリオは、真由美にブルンシュの事件の内容を聞き、活躍した深雪に興味を持った。という風にしてある。

多少なりとも2人の演技はクラスメイトは騙せただろう。周りのクラスメイトは違和感など覚えずにこちらを見ている。それに智宏と深雪の話聞いて智宏の印象をクラスメイトに対して少し良くする事ができただろう。

ここで深雪は隣にいる2人の紹介をしてくれた。

「四葉・・・さん」

「智宏でいい」

「では智宏さん。こちらは北山雫さんと光井ほのかさんです」

「よ、よろしくお願ひしますー!」

「よろしくね。私達の事も名前でいいよ」

「おう、よろしくな。ほのか、雫」

ここで智宏は「おや?」と思った。

深雪の周りにいた雫とほのかの事だ。

北山と言えば雫の父親は国防軍に武器を生産して売り渡している超がつくほどの兵器メーカーの社長。日本では唯一とっていいほどの巨大な兵器会社なので、特に国防軍の中枢からは重要視されている。ちなみに雫を名前で呼んだ時に彼女の頬がぽーつと薄く赤くなったのは気の所為だろう。

片やほのかはあの光のエレメンツの末裔だとすぐにわかった。ちなみに『エレメンツ』とは日本で最初に作られようとした魔法師である。そしてエレメンツの1族は、裏切りを避けるために忠誠を絶対のものとした。その血は子孫にも流れ、強い依存癖があるのは間違いない。ほのかもそれを自覚している。

休み時間が終わり、そのままこの日は普通に過ごして終わった。

放課後、智宏は再び深雪の所に行こうとすると、1人の男子生徒が行く手を阻む。

「なんだ?」

「僕は森崎駿だ。話がある」

「手短に頼む」

「なんで講堂であんな事を言った」

この言葉に教室内の室温は一気に下がる。

それは深雪が関係しているのかと言われればそうではない。あの四葉に対抗する素振りを見せた森崎に対してクラスメイト達が青ざ

めたのだ。今まで四葉に消されてきた人は数知れず、国家に反旗を翻す国賊を肅清している噂も流れている。

深雪も本来ならば教室を氷漬けにしてしまうところだが、深雪は相変わらず笑みを浮かべている。

「別に？ 本当の事を言ったままでだ」

「二科生を見下して何が悪い！ 魔法を使えないあいつらが悪いんだ！」

「じゃあ森崎。お前は深雪の兄に勝てるのか？」

「勝てる！」

「無理だ。会長の言うことが正しければいくら森崎の魔法発動スピードが早くても避けられてやられるのがオチだな」

「何?！」

「なんだ？ 校内でのCAD使用は禁じられているはずだ。いくら風紀委員でも許される事ではないぞ」

森崎はカツとしてCADを抜こうとした。

しかし智宏に言われて慌てて腕を戻す。

すると後ろで見ていた深雪達が止めに入ってきた。

「森崎君！ 何やってるの！」

「光井？」

「今のは森崎君が悪いよ！」

「ほのか、落ち着いて。智宏さんごめんなさい」

「いやいい」

「でも森崎君も実力で示したいようなので模擬戦をしたらどうでしょうか」

「模擬戦・・・ね」

「部屋の使用許可はとりますよ？」

「・・・だそうだ。森崎？」

「くそ！ やってやる！」

「では決まりですね。少し待っていてください」

智宏と森崎の模擬戦が決まり、関係ないクラスメイトも何人かがついてきた。

許可はすぐにおりたが、条件として立会人として生徒会と風紀委員が同行するらしい。

深雪を先頭に演習室に向かう途中で、ちょうど真由美と摩利、克人や服部形部少丞範蔵（はんぞー君。あと以後服部で）

と合流し、演習室に到着した。

演習室に着くと、中心を2人に空けて他の生徒は全員壁際に寄った。

審判は摩利が務めるようで、2人の間に立つ。

智宏と森崎はCADを準備する。

「ほお。四葉、お前のCADは指輪型なのか？」

「はい。母上から貰った物です」

「そうか・・・コホン。では模擬戦を始める。ルールは相手を降参させるか行動不能にするかだ。2人共いいな？」

「はい」

「はいー」

「では・・・試合、開始！」

模擬戦が開始され、森崎はCADを智宏に向けた。しかし智宏は何もしない。勝ったと思ひ込んだ森崎は、魔法を発動しようとする。

だがその瞬間、演習室を夜が包み込んだ。

「い、これはー」

驚愕する森崎に智宏は発動した魔法、《流星群》を続行した。

智宏の頭上から無数の光が現れたと思うと、その正体は直ぐに明らかになった。星の集合に見えたそれはまっすぐ森崎に向かって降り

ていく。

接近してくる光球に気がついた森崎は防御魔法を発動。森崎の周りを防壁らしき物がとり囲む。

光球はまるで流れ星のように森崎に降り注ぎ、展開している防壁に命中した。

普通なら弾かれるほどの大きさだが、今回は違った。光球は次々とシールドを貫通し、森崎に直撃した。それも1つだけではなくその全てが森崎に攻撃を浴びせている。

威力は抑えてあるがこれ以上命中すれば九校戦に出れなくなる。そう判断した摩利は――

「四葉！やめろ！試合そこまで！」

「わかりました」

試合を強制的に止めさせた。

智宏が魔法を止めると森崎はドサツと床に倒れる。

「うっ……」

「森崎！おい、保健室に運べ！」

「はい！」

摩利は智宏のクラスメイトの男子2人に森崎を保健室に運ぶように指示を出す。

智宏は横で見ていた深雪をチラリと見ると、深雪は満面の笑みで立っていた。最初から結果はわかっていたようだ。

智宏が深雪の所に行こうとすると、今度は摩利が話しかけてきたのだった。

第3話 風紀委員への誘い

「おい四葉」

「渡辺先輩、なんですか?」

「今の魔法は?」

「あれですか?あれは流星群ですよ」

「流星群?」

「智宏くん。摩利には『夜』って言った方がわかりやすいんじゃないかしら?」

「会長と・・・十文字先輩」

「何っ!夜!?それってあの四葉家の現当主の得意魔法じゃないか!」

摩利が大声を出したため、いやでも他の生徒に聞こえてしまう。

真夜の使う流星群はその使用する時の状況から『夜』と呼ばれており、克人のフランクスですら防げないので危険視されている。

故に一般でも見たことはないが知っている人はたくさんいるのだ。

「そうだ。俺のフランクスですら効かない・・・正直やっかない魔法だ」

「私も最初聞いた時は嘘だと思ったわ。でも今回でそれが本当だとわかった・・・。流星は四葉家現当主様の血を継ぐ事はあるわね」

「四葉。お前は夜しか使えないのか?」

「まさか。そんな事はありませんよ。流星群はメインの1つです」

「他のはなんだ?そのCADは指輪型の割には特化型のようにだし・・・」

「知りたいですか?」

「いいのか?」

「はい」

「では俺のフランクスが相手しよう」

「十文字?」

「問題ない。四葉、あそこにフアランクスを発動する。そこに撃ち込んでくれ」

「わかりました」

克人がフアランクスを発動する。

すると森崎の時よりも頑丈そうな防壁が出現した。

克人は未だサイオンを流し込んでいたので、生半可な攻撃では破壊できたとしても直後に新しい防壁が生成されるだろう。

智宏は防壁から10mほど離れると、智宏が最も得意な魔法を撃ち込んだ。魔法が防壁に命中すると防壁は中心に向かって一気にぐしゃぐしゃと潰れる。

周りの生徒達は相変わらずポカンとしていた。

「終わりました」

「……」

「十文字先輩?」

「……む、すまん。今の魔法はなんだ? 収縮系だと思うが」

「違いますよ。今のは加重系魔法、重力核^{グラビティコア}。重力魔法です」

「まさかオリジナルなのか?」

「はい。俺が創りました。近距離から中距離の対象を今のように潰したり地面に押し付けたりします」

「なるほどな」

「さすがです。智宏さん!」

「深雪……ありがとう」

智宏が重力核を見せるとやはり周りの生徒や克人でさえも(顔にはでていないが)驚いていた。

重力を操る魔法はあるが、ここまで対人戦闘に特化した魔法は存在しない。実はこの魔法は真夜の全面協力で創られた智宏専用の魔法。

対象の中心を軸にしてスクラップみたいに潰したり、従来通り人を

地面に押さえつけたりできる。後者の使い方では重力の大きさも変えられるので、使いようによっては相手を圧死する事が可能だ。また、格闘戦でも使いようはある。人体または武器に命中した時にそれを吹き飛ばす事が可能だ。例えば腕に命中したら、その腕に圧力がかかり瞬時に吹き飛ぶ。

先程智宏は中距離までと言ったが、サテライトアイを使えば達也のように遠距離攻撃も可能になる。

智宏は深雪に褒められていると、横から真由美と摩利が近づいてきた。

「これはすごいわねえ」

「四葉。どうだい？風紀委員会に入らないか？」

「風紀委員にですか？」

風紀委員とは、魔法を校内で勝手に使用した違反者の摘発、魔法を使用した争乱行為の取り締まりを行う役職だ。

普段は交代制で校内の巡回を行っているが、春の新生の勧誘活動期間には、期待の大きい新人の獲得争いと、CADを校内で持ち歩くのを禁止する条例の解除によって魔法による争乱行為が頻発してしまう。

なので風紀委員は全員がフル出勤することになる。特に今年は達也が活躍したそうな。(深雪談)

ここで風紀委員に入っておけば世間にもいいアピールになるし周りへの抑止力となる。

智宏の決断は早かった。

「わかりました。風紀委員会に入ります」

「そうかーよかった。そうそう、入るなら紹介したいやつがいるんだ。部屋に来てくれないか？」

「はい」

智宏は摩利と後からついてきた深雪と風紀委員が使用している部屋に向かう。

部屋の中に入ると1人の男子生徒がCADを片付けていた。入ってきた摩利に気がついた男子生徒は少し呆れたような顔で近づいてきた。

「渡辺先輩。途中でいなくなるのはやめてくれませんか？」

「や、すまん。審判を真由美に頼まれてだな……って2人もそんな呆れた目で見ないでくれないか？」

「……まあいいですけど。ところで後ろの生徒は？」

「ん？ああ。彼はあの四葉智宏君だ。優秀そうだからスカウトしてきたんだ。四葉、こいつは後ろの司波深雪の兄、司波達也君だ」

「ああ深雪の……初めまして。深雪のクラスメイトになりました四葉智宏です」

「司波達也だ。よろしく」

2人は今初めて会ったような挨拶をする。

それが演技だと気づいているのは深雪だけ。摩利は何も違和感を感じずに自分の席に戻って行った。

智宏は達也から風紀委員の詳しい仕事を聞き、明日から仕事を始めると摩利に言った。

その日は特に何もなく、1時間後には達也の仕事が終わり、3人は校門前で集合することにした。

智宏が周囲を監視しながら2人を待っていると、後ろから知った足音が2つ聞こえた。智宏は後ろを振り向くと達也と深雪がこちらに來ていた。

「やあ」

「待たせた」

「では行きましょう。周囲にこちらを見ている人はいません」

「達也の家に行つていいか？CADの調整をしてもらいたくてさ」

「大丈夫だ」

3人は達也の家に向かう。

一応話したいこともあったのでどこかで説明する必要がある。しかし設定上初めて会ったばかりの人とそんな難しい話はできない。なのでCADの調整という名目で達也の家に行くということになる。30分ほど歩いただろうか。2人で住むには立派な家が見えてきた。

深雪は先に玄関の鍵を開けて中に入っていく。

智宏と達也が扉を開けると、深雪が既に靴を脱いで2人を待っていた。

「おかえりなさいませ。お兄様、智宏兄様」

「ああ、ただいま」

「お、おう……なあ達也、お前らって毎日こんな感じなのか？」

「問題でもあるのか？」

「え、あついや……問題ない」

「そうか」

達也と智宏は深雪について行き、リビングに向かう。

リビングのソファに座ると深雪がコーヒーを入れにキッチンに行った。

智宏は尾行されていなかったの周囲の警戒を少しだけ解き、達也に向き直った。そして自分の指からCADを外して机の上に置く。

「さてと。さつそくだが俺のCADを見てくれないか？まだ調整しなくていいから」

「わかった。ふむ……これは叔母上から頂いたCADだな？」

「ああ」

「さすが四葉の技術者達が作っただけあって高度なCADだ。だがまだ無駄が多いな・・・発動スピードはどうだ？」

「他のより少し遅いかな。無理な小型化で発動スピードが遅くなっただんだと思う」

「俺のCADみたいに銃身があれば機能も安定するんだが・・・」

「一応拳銃の特化型も持つてるんだけどそっちは加重系にしたい。やっぱ無理か？」

「いや、なんとかしよう」

「すまん」

智宏は戦略級魔法は別として、流星群などは指輪で発動したいと思っている。重力魔法はもう1つサブで用意した長身の拳銃型CADに入れればよい。指輪型は右手の人差し指に、拳銃型も・・・右手でいいだろう。

CADの話が切りよく済んだところで、2人の横にコーヒーが置かれた。

隣を見ると深雪が立っている。

「お兄様、智宏兄様、コーヒーです」

「ありがとう」

「深雪が・・・どれどれ・・・？ん！美味しい！」

「本当ですか！ありがとうございます！」

達也はコーヒーを持ってきた深雪を座らせる。話で深雪が加わると会話に華が付いたように感じた。

智宏は先日達也が飛行魔法の開発にもう少しで成功すると深雪から聞いた。当然真夜も知っていると思うので、近いうちに連絡を寄越すのではないのだろうか。

飛行魔法とは、加速・加重系魔法で、重力制御により地面に足を着くことなく任意に飛行（空中移動）をすることができる。

この魔法は長きに渡り加重系魔法の技術的三大難問として扱われ

てきたが、ついに『トールラス・シルバー』こと達也が開発に着手したのだ。

これまで様々な研究が行われたが、魔法の重ねがけは10回が限界で、それを超えてしまうと魔法が全て解除されてしまい術者は落下してしまふ事もあった。

ちなみに飛行魔法で出せる速度は魔法師がどれだけこの魔法を習熟しているかによって決まる。

途中達也は智宏のCADを調整しに下に降りて行く。智宏はその時に深雪から達也の昔話を聞いたりして2人で盛り上がった。

20分ほどすると達也はリビングに戻ってきた。

「何でそんなに盛り上がっているんだ？」

「今智宏兄様にお兄様の昔話をしていたのです」

「どっちなかって言うのと深雪の昔話みたいなもんだったけどな。沖縄

の事を聞くと改めて深雪の豹変ぶりに驚くよ」

「もう・・・そんな事仰らないでください！」

「智宏、あんまり深雪を弄らないでくれ。それはそうと・・・できたぞ」

「おっ！」

「テストしてみてくれ」

「わかった」

智宏は達也からCADを返してもらうと、いらなくなったメモ用紙に向けて魔法を放つ。

すると前よりも発動スピードが一段と上がっており（元々特化型なので早くないとおかしい）、拳銃型の特化型も同様だった。拳銃型には重力核を初め、重力魔法が組み込まれていた。

さすがだとしか言いようがない。

「どっちなだっ？」

「素晴らしいよ。前よりも全然いい」

「そうか、よかった」

「さすがはお兄様ですね！」

3人で改良したCADの結果に満足し、拳銃型の説明を達也から受けていると、テレビ電話にコールがかかった。

それは秘匿回線。

四葉家からだった・・・

第4話 真夜からのお電話

「お兄様ー!」

「ああ、これは叔母上だな」

「ん? あ、ホントだ」

達也は素早くコールボタンをタッチすると、画面に真夜が映る。画面越しでもその美しさは変わらない。

真夜は智宏を見ると少し驚いたような顔をした。(しかし一瞬だったので、気づいたのは達也と智宏だけだった)

真夜は3人の顔を見るときもう一度まっすぐに達也を見た。

『達也さん、深雪さん、智宏さん、こんばんは』

「叔母上ご無沙汰しております」

「叔母様、お久しぶりです」

「どーも」

『実は2人に話があつて電話したのだけれど・・・やっぱり智宏さんはそっちに来ていたのですね』

「退きましようか?」

『いいえ。別に智宏さんに隠すことはありません。どうせ隠してもすぐにバレますし』

「そりゃどうも」

智宏と真夜の親子の会話に深雪は少し羨ましそうな顔をする。深雪の母である深夜は亡くなり、父はすぐに違う女と再婚したのでもはや父親として見ていない。なのでこういう親子を見ていると少し羨ましくなってしまうのだ。

達也は深雪の雰囲気を見ると、真夜に話を聞き出す。

「それで叔母上。話と言うのは?」

『重要な事は特にありません。ただの九校戦前の様子見です。元気に

していましたか?』

「問題ありません」

「はい。私も大丈夫です」

『深雪さん。ブランシユの時は大丈夫でしたか?』

「つ……!大丈夫です」

「母上!」

『……ごめんなさいね』

「いえ……」

『ところで智宏さん。達也さんが飛行魔法の開発が進んだ件は知っていますね?』

「はい。先程」

『そう。達也さんの所にいるという事はやはり聞いたのね。話は変わるけど……今日森崎家のご子息と模擬戦をやられたようですね?』

まったくもってびっくりである。

一体全体どこに四葉の草が潜んでいるのだろうか?

諜報系は黒羽家なのでもしかすると案外近くにいるのかもしれない。

四葉の情報収集力を甘く見てはいけない。これまで気づいたら弱みを握られてしまう者もそう少なくはなく、四葉の手足となり動いている。

他の十師族も警戒しており、特に七草家があちらこちらに気を配っている。今回も黒羽家が調べたのだろうか?

だがその考えは杞憂に終わった。

『1時間ほど前に森崎家の当主から百家を通じて四葉家に謝罪の文が届きました。『この度は四葉家の跡取りにとんだ御無礼を働き申し訳ございません』ですって』

「そうですね。確かに森崎が俺に突っかかってきたので模擬戦をしましたが……そこまでの事ではないでしょうに」

智宏は少し森崎の父親が可愛そうに思えてきた。息子の不憫でこのような自体になってしまったのだ。もしかすると本家である百家から怒られているのかもしれない。

その百家も大変だ。分家の1つが四葉に喧嘩をフツかけたのだから。

同情した雰囲気伝わったのか、真夜が少し笑いながら智宏に言葉をかけてきた。

『智宏さん。今日の事は家同士の関係を悪化させる原因になりかねません。なので一応謝罪をしてきたのでしよう』

「あれですか」

「智宏。お前はもう少しそういうのに気を配った方がいいぞ」

「・・・わかったよ。帰ったら少し勉強する」

今まで智宏は家同士の関係を大雑把にしか認識しておらず、今のように少し鈍感な所がある。というか細かい所まで知らないだけ。

そして自分よりも知識が豊富な達也に注意されたので、智宏は十師族や百家についてもっと勉強しようと決意したのだった。

『森崎家についてはもう収まりました。智宏さんが心配する必要はありません』

「わかりました」

『それと、そろそろ帰らないと彩音さんが心配するのではなくて？』

「え・・・？あつ！もうこんな時間！」

『ふふふっ。それじゃあ3人共、また電話しますね』

「はい！」

「わかりました」

「叔母様、ごきげんよう」

真夜からの電話が切れると智宏は達也からCADを全て返してもらい、急いで自宅へ帰る。急いでも達也の家から200mも

離れていないのですぐに着く。

帰り際に深雪に少し「もう少し女の子の気持ちを理解してくださいね？」と言われてしまう。

智宏が家に帰ると、彩音が少しむくれて待っていた。しかも玄関で。まさかずっといたのだろうか？

智宏は恐る恐る話しかける。

「た、ただいま」

「おかえりなさいませ。智宏様」

彩音の声は少し尖っており、目も若干細められている。

2人は黙ってリビングに向い、彩音がドアを開けると智宏はそのままソファーに向い腰を下ろす。

数分後。

彩音はお茶を智宏の所に持ってきた。

が、智宏はその瞬間に覚悟を決める。おそらくお説教だろうと。

「失礼します」

「おう」

「智宏様。今日は今までどこへ？」

「達也の家だ」

「達也様と深雪様の所でしたか。しかしいくら身内といってもせめて連絡くらいはしてください」

「うん、すまん」

「いいですか？私は智宏様のメイドである前に護衛なのです。何も連絡がないのでは心配します！」

「お、おい？とりあえず落ち——」

「どれだけ私が心配したか！もし智宏様に何かあったらご当主様になんて言えばよいのです!？」

「彩音！落ち着くんだ！」

「ひっ……！も、申し訳ございません！」

彩音は半分暴走状態になりながら智宏に説教をしていた。このままでは收拾がつかないので、智宏は少し殺気を込めて彩音に詰め寄り、両手で肩を押さえつけて強制的に落ち着かせた。

一方の彩音は無理矢理智宏に落ち着かされ、一拍あけて我に帰る。そして今自分がした事と殺気の込められた視線に怯え始めてしまう。その証拠に身体が震え始めてきた。

「わ、私はなんて事を・・・」

「・・・はっ! すまん!」

「智宏様申し訳ございません・・・申し訳ございません」

「彩音。もう怒ってないよ。少し落ち着いて話そうか」

「・・・本当ですか?」

「ああ」

「本当に申し訳ございません。落ち着きました。それと・・・」

「ん?」

「手をどけて欲しいのですが・・・」

「・・・」

落ち着いた彩音はなぜか頬を赤く染めている。

この現状を第3者が見ると、メイド服を着た少女を高校生が襲っているようにしか見えない。

この家には2人以外だれもいないが、もし深雪とかに見られたら大変な事になる。おそらく氷漬けだけでは済まされないかも・・・

智宏は急いで手をどけた。

「すまん」

「いえ・・・大丈夫です」

「それとさっきの件についてだが、今度からちゃんと連絡する」

「本当ですか?」

「ああ」

「わかりました。それでは夕食に致しましょう」

今回の事態はなんとか丸く収まった。

そしてこの日の事を彩音は日記にこう記した。

7月某日

今日は智宏様が遅く帰られた。

私は暴走気味に説教をしてしまい、智宏様から逆に怒られてしまった。少し反省・・・

しかもあの殺気が込められた視線はびつくりした。智宏様が本気になれば私など死体も残らないかもしれない。あと両肩を掴まれた感覚は今でも残っている。強く掴まれたけど痛くはなかった。

でもあの視線は少しだけゾクツとした。ちよつと気持ちよかつた・・・かも。

それともう一つ。

智宏様と話している時とても嬉しくなるのはなんで？智宏様がクラスメイトの女子や先輩や他クラスの女子の話をなされている時に胸の奥がチクリとするのはなんで？

それがわからない。

ただ一つだけ思い浮かぶのは・・・これ以上は主従の関係を崩したくないので確信が得られるまで日記にも書かないでおこう。

以上がこの日の内容だった。

第5話 選手

智宏が転入してから数日後、智宏は真由美に誘われて生徒会室で昼食をとっていた。もちろん達也と深雪も一緒だ。

で、智宏を昼食に誘った本人は弁当箱に箸を伸ばしている回数が少ない。突っついて回数の方が多いかも。

そしてこれで何度目かわからないため息が真由美から漏れる。

「あーあ・・・選手の方は十文字君が担当してくれたからなんとかなったんだけど・・・」

今日の昼食は真由美の愚痴を発する溜まり場のような感じになっている。

智宏達は視線を交わし、内心ため息をついた。もうどうしようときかないと。

智宏・・・というか生徒会室にいる真由美以外全員の気持ちも知らずに真由美は愚痴を続ける。

「選手が少ないのもあるんだけど、1番の問題はエンジニアよ」

「まだなのか？」

摩利もその話題には賛同するようで、真由美に話しかける。

「ええ。ウチは魔法師の志願者が多いから魔法工学関係の人材が不足しているの。2年生はあーちゃんとか五十里君とかがいるけどまだ数が足りないわ。特に危ないのは3年生よねえ」

「3年は実技がほとんどだからな。ところで五十里は調整得意なのか？」

「いいえ。でも贅沢言ってもらえないわよ。せめて摩利が自分のCA

Dを調整できればいいんだけど」

「・・・本当に事態は深刻だな」

真由美の半目の視線に摩利は顔を背けて外を見た。

智宏は隣を見ると達也が深雪に目配せをしている。もしかしてでもなく教室を出たいのだろう。

「ねえリンちゃん。エンジニア——」

「無理です」

真由美は鈴音に何度目かわからないアプローチをし、見事撃沈している。

鈴音もいい加減慣れたのか、返事はまだ真由美が話している途中で返していた。

真由美はすっかり意気消沈してしまう。

達也は今だと言わんばかりに席を立とうとしたが、そこで思わぬ伏兵に遭遇してしまった。

「あの、司波君とかどうですか？」

まさかのあずさから真由美に支援が入ってしまう。達也は椅子から立つタイミングを逃してしまった。

「ほえ・・・・・・？そうよ！盲点だったわ！」

「あー、確かに私も見落としていたよ」

「そうですね。司波君は深雪さんのCADの調整をしてるらしいですし」

真由美に続き摩利と鈴音に会話が広まってしまった。達也はもはや逃げるという選択肢はないと感じていた。

その顔には何も映っていないだろうが、内面は不満だらけだろう。

あずさを加えた3年生組は達也のこれまでの実績を再確認している。(主にあずさがマシンガントークをしているだけ)

そして結論が出たのか、4人揃って達也の方を向いた。

「コホン。達也君、エンジニアやってくれないかしら?」

「俺は構いませんが他の生徒の反感を買うだけなのでは?」

「それは・・・」

達也の言う通り、達也がエンジニアとして九校戦に参加するとすると1科生がうるさいだろう。

しかしここでも思わぬ所から支援攻撃がはいる。

「大丈夫です!お兄様なら絶対にできます!それに反対する有象無象共は深雪がなんとかします!」

「深雪!?!」

「じゃあ俺も賛成」

「と、智宏」

「じゃあ決定ね!」

「・・・はあ、わかりました」

「これでエンジニアの方は楽になりそうね。あとは選手なんだけど・・・智宏君、新人戦だけでも出場してくれないかしら?」

「俺ですか?もちろんいいですよ。初めからそのつもりでしたし」

「そう!じゃあ出たい競技とか決めといてね!できれば早めに」

「はい」

摩利と鈴音、あずさは気づいていないだろうが、これは四葉の実力を世間に知らしめるための布石なのだ。

真由美や克人も十師族として充分にアピールしている。四葉も遅れをとるわけにはいかないのだ。

そのため真由美は気がついていいるだろう。自分もそうだったから。

故に詳しい事情は聞かない。というか聞けない。

とりあえず現状はなんとかなったので、生徒会室は先程の重苦しい空気は消え去っていた。

昼休みもそろそろ終わる頃、智宏は出たいと考えた種目を真由美に進言した。

「会長」

「何かしら？」

「俺はアイス・ピラーズ・ブレイクに出ようかと思うんですけど……空いていますか？」

「棒倒し？うーん……リンちゃん、どう？」

「問題ありません。新人戦の男子アイス・ピラーズ・ブレイクはまだ定員は空いています。空いていないのはモノリス・コードとバトル・ボードですね」

「ありがとー！じゃあ智宏君。いい？」

「任せてください」

九校戦において、選手は2つまでの種目に参加できる。

『アイス・ピラーズ・ブレイク』は縦12m、横24mのフィールドを半分に区切り、それぞれの面に縦横1m、高さ2mの氷柱を12個ずつ配置し、相手陣内の氷柱を先に全てを倒すか破壊した方が勝者となる競技だ。

選手は遠隔魔法のみなので、フィールド内限定であれば魔法の安全規制が解除されるために九校戦で最も過激と言われている。

ちなみにユニフォームは自由であり、選手は思い思いの衣装を身に着ける事ができる。

『モノリス・コード』は自陣に設置されたモノリスを守りながら敵陣のモノリスを攻める競技。3人一組でチームを組んで戦う。

勝利条件は、敵陣のモノリスに隠された512文字のコードを腕についている端末に打ち込むか、相手チーム3人全員を戦闘不能にすることで勝利となる。

『バトル・ボード』は紡錘形ボードに乗って人工水路を走る競技。かなりのスピードが出ており非常に強い向かい風を受けるため、選手は結構体力を消耗してしまう。

選手の体やボードに対する魔法攻撃や直接攻撃は禁止されているが、水しぶきを上げるといった魔法で水面に干渉することは禁じられていない。

4人1組でレースを行う。水路は狭いため、いざという時に救護班が近くに待機しているらしい。

『スピード・シューティング』は通称「早撃ち」と呼ばれ、30m先の空中に発射されるクレーを魔法で破壊する競技で制限時間内に破壊できたクレーの個数を競う。

予選は5分間の間に発射される100個のクレーを破壊した数で競うスコア戦。準々決勝からは紅白の標的が100個ずつ用意され、自分の色のクレーを破壊し、破壊した数を競う対戦型となっている。

『ミラージュ・バット』は女子限定で、立体映像の球体を、専用のステイツクで叩いて消し、その数を競う競技。球体の位置まで素早く飛ぶ事が勝利の鍵だ。

ちなみに周りからは競技中の姿から、「フェアリーダンス」とも呼ばれている。

『クラウド・ボール』は握りこぶしより小さめなボールを、ラケットまたは拳銃型CADを使って制限時間内に相手コートへ落した回数を競う競技。

九校戦の中で最も試合回数が多く、1日で試合が最大五試合組まれる事がある。

テニスに似ている。

これらの種目には1年生限定の新人戦と1年生から3年生まで参加できる本戦がある。

新人戦では自分の能力を他校や世間に広められる最初のチャンスだ。本戦では上級生との実力差に負けてしまうが、新人戦は同じ1年生なので経験の差で負ける事は少ないだろう。

ちなみに深雪が出場する種目はアイス・ピラーズ・ブレイクとミラージ・バットとのことだ。

昼休みも終わりに差し掛かってきた頃、あずさはうーんと唸りながら課題を進めていた。

あずさ以外はお茶を飲んだり生徒会の作業をやっている。

「あーちゃん。課題終わる?」

「会長」

「しようがないわね。何やってるの?」

『3大難問』の解決を妨げている理由については。2つはできたんですけど・・・汎用的飛行魔法がなぜ実現できないのかが説明できないんです」

「それならいくつかの事例があるじゃない」

それが上手く説明できないんですとあずさは首を横に振る。

魔法による飛行中に新たな動きを加えるためには魔法を重ねがけしなければならず、1人の魔法師が重ねがけできる回数はせいぜい十段階。それ以上魔法を行使した場合、魔法式が解けて落下してしまうのだ。

一応これが飛行魔法が実現できない理由だ。

また、鈴音が言うには一昨年前にイギリスで実験が行われたが、結果は失敗。

真由美も少し期待したが、結果を聞いてがっかりしていた。

「やっぱり無理なのかしら・・・智宏君はどう思う?」

「俺にそのような知識を求めないでくださいよ。俺より達也の方がいいと思います」

「じゃあ達也君」

「そうですね・・・まず先程のイギリスでの実験は基本的な考え方が間違っているのですよ」

「え?」

「例えば――」

例えば、魔法式Aを打ち消すために魔法式Bを発動しても魔法式Aは効力を失っただけで完全に消えはしない。

従って、イギリスでの実験は消したと思っていた魔法式がまだエイドス上に残っていたのが原因だったのだ。

真由美も鈴音も達也の答えに呆気にとられている。まさか年下の二科生がここまで考えていた、そして自分の考えにきちんとした結論をもっていたなど思ってもいないからだ。

真由美は3人を代表して達也に質問をした。

「つまりイギリスの実験は余分な魔法を掛けちゃっていたってこと？」

「そうです」

「なるほどねえ」

達也が説明を終え、説明した本人を除いた全員がうーんと考えている中、昼休みが終了したチャイムが学校中に響き渡った。

智宏は達也と深雪の3人で生徒会室を出る。

するとあずさが課題を終わらせていない事に気が付き、外まで聞こえそうなくらい大きな声で悲鳴(?)を上げていたのだった。

第6話 達也のエンジニア入り

「これよりエンジニアをどうするか。その会議を始めます」

真由美が達也をエンジニアに誘ってから1週間後、正式に達也を九校戦のエンジニア担当として決定させるため、生徒会・風紀委員・九校戦選手を集めて会議を開く。

克人も参加しており、なぜかこの場にいる達也に視線を向けている。

「会長。エンジニアが決まったのですか？」

「ええ。私は1年E組の司波達也君を推薦します」

事情を知らない生徒が一気にざわつく。

真由美が推薦したのがまさかの二科生だったからだ。

ここで当然のごとく風紀委員のメンバーから否定的な声上がる。

「二科生が？それは危険では？」

「そうです。事故に繋がりがねません」

「・・・達也さんの実力も知らないで」

「雫・・・」

智宏は後ろにいた雫がぼそつと文句を言ったのを聞き逃さなかった。そして深雪の周りが徐々に凍っていくことも。

すると文句を言っている一科生は、隣に座っていた智宏にも話しかけてくる。

非常にめんどくさい。おそらく四葉という大義を得たいだけなのだろう。

しかし智宏は――

「四葉。お前は どう思う？」

「俺ですか？もちろん賛成です」

「え？」

「・・・か、彼はウイードだぞ？」

「ウイード・・・ね。そんなの関係ありません」

当然智宏は賛成だ。

智宏は問いかけてきた先輩に対し、深雪のフォローをするつもりで意思を込めながら逆に問う。

「彼は正式な試合で服部先輩を負かしたのを知らないんですか？」

「それはっ！・・・単なる偶然だ！」

「ほう、その言いようでは服部先輩を侮辱するように聞こえますが？」

「違う！」

「達也の実力は本物です。技術力もこの学校1でしょう」

「実力は渡辺先輩から聞かされている」

「では二科生だからですか？二科生だからエンジニアにしたいくないと？風紀委員ともあろう先輩がそんな馬鹿げた理由で」

「うっ・・・」

「お前達、やめろ。四葉。仮にも上級生相手に失礼だぞ」

「わかりました。先輩、失礼しました」

口論（智宏の一方的）がヒートアップするのを悟ったのか、克人が2人の間に割り込み会話を止めさせた。

智宏も今は克人とやりあうつもりはないので素直に従っておく。その時すでに深雪は落ち着いており、深雪は智宏にありがとうごさいますと会釈した。

事が落ち着くと、あずさが珍しく介入してくる。

「わ、私が最初に司波君を推薦しました！」

「あーちゃん？」

「なので司波君に実力を証明してもらうのではどうでしょう……」
「あつ、なるほど。それはいいわね」

「だな。達也君の腕をみんなに見せた方がいいだろう」

あずさの意見は真由美を動かすに至り、摩利もこれに賛成してくれた。

克人も無言で頷き、その席から室内全てを見渡す。それは何も言わせない圧力がかかっている。

そして克人はその実験台を誰にするかと聞いてくる。もちろん誰も手を挙げない。深雪や雫も挙げなかった。このテストは達也を認めていない者がやらないと意味が無いからだ。

すると1人の生徒が立ち上がった。

「俺がやりましょう。戦闘面は知っていますが技術面は知りません」

「桐原か。司波、どうだ？」

「問題ありません」

「よし、では移動する。七草」

「ええ。じゃあ行きましようか」

実験台になるのは桐原になった。

克人は席から立ち上がると会議室から出ていく。真由美や摩利もそれに続き、他の全員も席を立ち上がった。

この学校にはCADの調整設備が実験棟にあり、教員はもちろん生徒も使用できる。今回のテストで使用するのは九校戦で使用する車に搭載できる専用の調整機だ。

達也と桐原は機械を挟んで向かい合わせになり、その周りを智宏達
が囲った。

達也は調整機を起動させると真由美にテストの条件を確認した。

「それで会長。テスト内容はなんですか？」

「そうねえ・・・桐原君のCADの設定をコピーして競技用のCADに写すというのはどうかしら？」

「それでは起動式はどうしましょうか」

「競技用のはすぐデリートするからいじっても構わないわよ。桐原君もいいわよね？」

「はい」

「本来ならばスペックの違うCADのコピーはあまり勧められないのですが・・・わかりました。始めます」

真由美に条件を指定され、達也は早速作業にとりかかる。桐原はCADを台に置き、計測用のパネルに両手を置いた。

普通の生徒は自動で調整するのだが、今回はエンジニアとしてのテストのため、マニュアルで調整する事が腕の見せどころになる。

桐原は計測が終了すると頭に付いていた機械を外し、移動して達也の作業を後ろで観察し始める。

あずさが不意に達也の肩越しにディスプレイを見ると、驚きの声を上げた。今達也が見ている画面は計測結果ではなく、大量の文字列だったのだ。

しばらく画面を見ていた達也は、高速でキーを叩き始めて競技用CADにコピーを開始する。するといくつもの小さいウィンドウが開かれては閉じ、開かれては閉じというのを繰り返している。あずさや五十里はすぐに達也が完全マニュアル調整をしていると理解した。そして悟った。達也が自分達よりも圧倒的に調整技術が優れているという事を。

数分後、CADの調整を終わらせた達也は競技用CADを桐原に渡して魔法を発動させた。

桐原は若干緊張していたが、『高周波ブレード』を発動するとその表情が一変し、驚いたものになる。

「桐原。どうだ？」

「問題ありませんね。それどころか今自分が使っているCADよりも使いやすいです」

春の1件を知る者はまさか桐原が達也を庇ったりする行為をするなど思っても見なかっただろう。

しかもいつもより使いやすいついて言っている。この結果には最初に推薦した真由美もびっくりしていた。

「これなら何も言いません。司波達也のエンジニア入りを俺も推薦します」

「し、しかし・・・」

「ふん。お前にこれができるのか？とところで司波兄、ついでに俺のCADも調整してくれよ」

「構いませんよ。データは残っていますので」

達也は桐原に頼まれ再びディスプレイに向き直る。

そしてその後ろではどうするか審議が行われていた。

あずさは珍しく気弱な表情を捨て、グツと手を握り達也を推薦する。

「私は司波君のチーム入りを支持します！これはエンジニアとして見逃せません！」

「僕も賛成かな。あんな芸当は僕にもできないよ」

「自分も賛成です」

「え？はんぞーくん？」

「桐原の所持しているCADと競技用CADとの違いをほとんど感じさせなかったのは評価すべき事です。ましてや今は肩書きに拘わっている場合ではありません」

まさか服部が達也入りに賛成してくれるとは誰も思っていなかった

た。これには作業中の達也も少し驚いている。

達也を支持しなかった生徒にとってこれは以外だったのだろう。一気に反対派が静かになる。

克人もこの状況でようやく結論を出す。

「俺も賛成だ。お前達、いいな？」

克人の達也支持により、達也のエンジニア入りが決まったのであった。

第7話 飛行魔法の完成

智宏は珍しく彩音を伴い達也の家に遊びに来ていた。

彩音はお茶をいれようとする深雪を出し抜きキッチンでお茶を入れ始める。この中で1番序列が低いのは彩音なので当然だろう。しかし深雪は達也に言われてソファアームに座っているが、少しソワソワしている。そんなに家事がしたいのだろうか？

達也は智宏が来る前に国防軍の風間少佐と九校戦について話していた内容を智宏にも伝える。達也の所有権を持っている四葉には隠す必要はないと達也は判断したのでだろう。

「智宏。実はさつき風間少佐から電話があった」

「風間少佐？もしかして独立魔装大隊の？」

「そうだ。少佐が言うには九校戦で何かあるらしい」

「何？」

「該当エリアに不正侵入者の痕跡と最近国際犯罪シンジケートの構成員の目撃情報、そしてその時期から九校戦が狙いだという結論が出たと少佐は仰っていた」

「ブランチシュとは違うのか？」

「ああ。情報によれば香港系犯罪シンジケート『無頭竜』ノーヘッドドラゴンかもしれないと言うことだ」

「うーん・・・この事を母上は？」

「知っているはずだ」

「ま、当然か。よし！彩音！」

「ハッ」

「俺の家から四葉家に連絡を取り母上から指示を仰げ」

「かしこまりました。それではお先に帰宅させていただきます」

「今じゃなくてもいいんだぞ？」

「いえ。智宏様のご命令とあらば。失礼します」

そう言うと彩音は姿を消し、司波家から智宏の家に戻っていく。唯一聞こえたのはこの家のドアを閉める音だけだった。

「行っちゃったよ」

「智宏兄様。彩音ちゃんをあまりこき使わないでください」

「いやいやいや。彩音には無理しないでって言ってあるんだぞ？でも本人がやりたいんだってさ」

「智宏。彩音は調整体魔法師だ。それを忘れないでくれ」

「わ、わかってる」

「じゃあ深雪、智宏。俺は研究室でやる事があるから」

「かしこまりました」

「おう」

達也は地下の研究室に向かい、部屋には深雪と智宏だけが残された。

深雪はリビングに勉強道具（ディスプレイ状のノートとキーボードだけ）を持ってきて勉強を始める。智宏は既に予習を済ませているので深雪の勉強を見ることにした。智宏は達也ほど天才ではないが、それなりに知識を積んだつもりでいる。それをわかっているのか深雪も分からない所は智宏に聞いている。

それから2時間は経っただろうか。深雪が時計を確認するともう9時になっている。

「ん？もうこんな時間か。深雪、今日の分は終わったかい？」

「はい。お陰様で。あの・・・お兄様に紅茶を持っていてもいいですか？」

「もちろんだ。そーいや深雪はミラーズ・バットに出るんだよね？」

「はい」

「じゃあその衣装で達也の所に行こう」

「それはいいですね！」

「俺がお湯を沸かしておくから深雪は着替えてきていいよ」

「ありがとうございます。では」

深雪がミラーズ・バットの衣装に着替えている間、智宏はキッチンに向かいポットの中に水を入れて火にかける。

2分後、深雪が自室からリビングに戻ってきた。

智宏はうつかりその姿に見とれてしまう。

深雪はヒラヒラとしたミニスカートに髪を纏めているカチューシャは羽の飾りを付けている。上から下まで布で覆っているが、意外と薄手の生地なのかもしれない。

深雪は智宏の所に駆け寄ってくる。

「智宏兄様」

「深雪・・・よく似合ってるよ」

「そうですか!?ありがとうございます!」

「お湯も沸いた。後はよろしく」

「はい!」

深雪は慣れた手つきで紅茶を用意する。

お盆に3人分の紅茶を乗せると達也がいる地下研究室に2人は向かった。その時深雪の顔には悪戯っぽい笑みが浮かんでいた。

研究室のドアが開かれると深雪はまっすぐに達也の座っている席に向かう。

「お兄様。紅茶をお持ちしました」

「そうか。ありが・・・それはミラーズ・バットの衣装かい?」

「はい」

「よく似合ってるよ。とても可愛い」

「ありがとうございます・・・!え?」

「ん?んん!」

智宏と深雪は改めて達也を見ると、達也は座ったままのポーズで宙

に浮いているではないか。

達也もしてやったりと言いたげな笑みでこちらを見ている。驚かされたのはどうやらこちらのようだ。

深雪は目に涙を浮かべて喜んだ。

「おめでとうございます！ついに飛行魔法が完成したのですね！さすがお兄様です。お兄様はまた不可能を可能にしました！」

「おめでとう。帰ったら母上に伝えておくよ」

「二人共ありがとう。深雪、紅茶を飲んだら実験をしてくれないか？もしかしたらミラージュ・バットに使えるかもしれない」

「本当ですか！喜んで！」

深雪が作ったとても美味しい紅茶を飲んだ後、研究室の奥にある広い空間に移動する。そこは学校の演習室に少し似ていた。

深雪は達也から飛行魔法のデバイスを受け取ると、部屋の真ん中に移動してくるりとこちらを向く。その顔にはほんの少しだけ緊張が浮かんでいた。

「いきます」

深雪はCADのスイッチをONにした。

以外と小規模な起動式に驚きながらも頭の中に天井近くまで浮かび上がるイメージを浮かべる。

するとなんの違和感もなく深雪の身体は空中に浮かび、イメージした辺りまで上昇して行った。

そこから地面から1mくらいまで降下すると、達也は深雪に話しかけた。

「深雪。何か負担とかないか？」

「大丈夫です」

「じゃあ次は水平に移動してみてくださいないか？」

「分かりました」

達也の指示通りに深雪は水平に動くイメージをすると、その通りに深雪の身体は移動した。

慣れてきたのか、深雪は徐々に飛行スピードを上げ始め、部屋中をいろんな風に飛び回っている。

達也と智宏はその美しさに実験の事など忘れるほど見とれていたのだった。

その後、未だに興奮を隠せない深雪とそれを苦笑しながら見ている達也に見送られて智宏は自宅へと戻る。出迎えてくれた彩音に飛行魔法の完成を伝えると、彩音もとても喜んでいた。

そして彩音は真夜に言われた事を智宏に伝える。

「智宏様。ご当主様の伝言です」

「言ってくれ」

「九校戦に四葉の援軍は送れない。しかし大会中何かあった場合は十師族として対処する事を許可するそうです」

「つまり敵が来た場合は捕獲または殲滅しろ・・・と」

「はい。それと周りにバレそうになったら消して構わないそうです」

「そうか、ご苦労だったな」

「い、いえ・・・」

智宏は労いに彩音の頭を撫でる。彩音は嬉しそうにそれを受け入れ、その顔は智宏に見えない角度でだらしなくデレっとしていた。

そして智宏は真夜にメールを送る。もちろんハッキング対策バッチリだ。内容は先程の飛行魔法の完成について。

その夜。2箇所の家では嬉しさのあまりベッドの上で無言で悶えている少女がいたのだった。

第8話

F L T社へ

次の日曜日。智宏は達也と深雪と一緒にF L T社のC A D開発センターに来ていた。

ここは技術力を売っているようなものなので、警備もすごい数だ。機械はもちろん人もあちこちに配置されている。深雪はこんな所に来ていても上機嫌に達也の腕にくつついていた。

入り口では何もなかったが、入ってすぐの受付で3人は引つかかる。いや、この場合引つかかったのは智宏だけ。前からここに来ていた達也と深雪は巻き込まれたただけだろう。

「あの一！」

「ん？」

「そちらの方は・・・」

「この人は四葉の関係者です」

「っ！申し訳ございません！どうぞ！」

達也は智宏を四葉の関係者として説明した。それだけで警備員は通してくれた。一応警備員は四葉が雇っている。なぜか？それは後でわかるだろう。

3人は窓すらない廊下をまっすぐに奥へ進んでいく。
やがて1つの部屋に出た。

そこでは忙しなく研究員が歩き回っており、互いに議論を交わしたりうーん・・・と悩んだりしている。

3人が中に入ると1人の研究員が達也に気づく。

「あ一！御曹司一！」

「え？あ一！御曹司一！」

「御曹司一！」

御曹司という呼び方は達也がここに入入りし始めた頃からついているあだ名みたいなものだ。実際間違っていないが。

達也は恥ずかしいからやめて欲しいのだが、深雪が我がものように達也がそう呼ばれて喜んでいたので、もう何も言わない。

「ご無沙汰しています。ところで牛山主任はどこに？」

「お呼びですかい？ミスター？」

「すみません。忙しかったですか？」

「なんのなんの。それよりいけませんなあ。ここにいるのは全員アソタの部下だ。そんな腰が低くちやこつちが変な気分になつちまいます」

「そんな」

「いいんですぜ？我々は天下のシルバーの下で働いている事が光栄なんです。ところでそちらの人は？」

「紹介します。彼は四葉智宏。俺の従兄弟です」

「なっ！あのご当主様の息子さんですかい？」

「はい。牛山さん。はじめまして」

「い、いやいやこちらこそどうも」

「では本題に入っても？」

「ええもちろん」

「牛山さん。今日はこれを持ってきました」

智宏の紹介を手早く終わらせ、達也は牛山に持ってきた小さいアタッシュケースの中身を開いて見せた。そこには試作CADが置かれている。

牛山は一瞬黙り込み、即座にこれがなんなのかを突き止めた。

「お、御曹司。これはまさか飛行デバイスですかい？」

「ええ」

「て、テストは？」

「もちろんしました。しかし俺と深雪ではテストにならないでしょう？」

研究室一帯に息を呑む音が響く。

彼らは全員牛山の手の中にあるCADを凝視していた。

「・・・テツ」

「はい！」

「これと同じ型のデバイスは何個ある？」

「えー110機です！」

「・・・はあ!? たったそれだけか!? バカ野郎! なんで補充しとかねーんだ! てめーら! テスターを全員呼べ! あとあるだけの同型デバイスに御曹司のシステムをコピーしろ!」

「「はい!」」

「急げ急げ! これは現代魔法の歴史が変わるんだぞ!」

部屋の中は先程よりも慌ただしくなり、テスターは無理矢理連れてこられ、起動式は達也が持ってきた同型のデバイスにコピーを開始。およそ20分後には全ての準備が整った。

CADの試験場では飛行魔法が組み込まれたデバイスを持ったテスターが何人も待機しており、牛山の指示を待っていた。

「よし! 実験を始めろ!」

ごつい防護服に身を包んだテスターは緊張しながらもCADのスイッチを入れる。

するとテスターの身体はゆっくりと上昇し、智宏達がいる計測室の窓がある所まで到達した。

テスターは計測室から出された指示通りに動く。やはり深雪がやったように問題はない。

計測室は興奮した空気に包まれる。

それはテスターも同じだったようで通信が入った。

『こちらテスター・ワン。僕は・・・僕は今空中を歩いて・・・いや、空中を飛んでいます!』

その言葉に何かが外れたのか、他のテスター達もCADのスイッチを押して空中に浮かび上がった。

スピーカーから彼らの興奮した声が次々に聞こえ始め、試験場では色んな動きをテスターはしていた。

その瞬間計測室は歓喜に包まれた。

「やった!」

「やったぞ!」

「御曹司! やりました!」

「おめでとうございます!」

「御曹司!」

智宏は深雪と視線が合い、互いに笑いあう。

ただ達也と牛山は冷静にテスターを見ていた。

数分後、智宏達は試験場に降りていった。

牛山はため息をつきながら地面にへたりこんでいるテスター達を見下ろした。

「あのなあ・・・お前らアホか?」

「うう・・・」

「なんで空中鬼ごっこなんてやっちゃまうんだ。御曹司達はともかくお前らの魔法力じゃ長時間使えねーだろーが」

魔法の使用にはある程度の魔法力を使う。

特に継続的に発動する魔法はそれ相応の魔法力が必要になってくる。元々継続的に実験するわけでもない彼らにとって負担は大きく

なる。つまり発動時間も制限があるのだ。

幸い全員後遺症が残らなかったので、達也は少しだけホツとした。牛山は隣で少し悩んだ顔をした達也に近寄った。

「どうかしましたかい？」

「いえ、やはり起動式の連続処理がキツそうなのでもっと効率化する必要がある……と」

「おいおい達也、多分この結果が普通だと思うぞ？ テスターのサイオン量は平均値並。俺や深雪のサイオン量を基準にして考えてないか？」

「そうか？」

「そうそう」

「じゃあそれはこちらでやっておきますんで。御曹司は帰って休んでください」

「牛山さん……」

「お兄様。いいではないですか。智宏兄様もそう思うでしょう？」

「ああ。達也、お前少し休んだ方がいい」

「……ではそうします。牛山さん、後をお願いします」

「了解！ 来週までにやっておきますんで次の日曜にでもまた来てください」

「はい」

後の作業を牛山に任せた達也は、智宏と深雪を連れて計測室を出る。

智宏は途中トイレに行きたくなり、達也に場所を教えて貰ってそこに小走りで向かう。一応集合場所は受付のロビーにしてある。

しかしトイレも凄かった。研究施設というのもあり、トイレの設備も最新式の物だった。

智宏がトイレから出て少し歩くと、前の方から声がした。

達也と深雪以外にもう2人いる。片方はよく知った顔である四葉家執事の青木だが、もう1人は知らない。

智宏は気配を消して4人に近づいた。どうやらちよつとばかりの口論をしているみたいだ。しばらく聞いていると、どうやら青木が達也に負けていた。すると苦し紛れに青木がこう言い捨てる。

「ふん。真夜様は何も仰られていないが我々はそう思っている。まあ？心を持たぬエセにはわからんだろうがな」

その瞬間智宏の中で怒りの感情が吹き上がった。気配を戻そうと思つた瞬間、廊下の壁が薄く凍る。深雪がキレたのだ。

青木の足元が徐々に凍り始める。さすがに見過ごせないのも、智宏は深雪を止めて口を開こうとした達也の肩を掴んだ。達也は気づいていたのでさほど驚きはしなかった。

「青木さん。それはダメでしょう」

「あ、あなたは、智宏様！」

青木ともう1人の男はいきなり現れた智宏に驚き数歩下がった。

泣き始めた深雪を青木の前から身体で隠しながら智宏は言葉を続ける。

「今の話聞かせてもらいました。エセ、とはどういう事です？」

「そ、それは・・・」

「まさかその言葉の意味を知らないと？達也は母上の姉であらせられる深夜さんの息子。その達也を侮辱するとは深夜さんを侮辱する事と同じ。しかし・・・わかつて言っているなら話は早い」

深雪を泣かせた青木に、達也並に智宏も怒っている。

その証拠に廊下の壁や床に出来た氷や霜が砕け、智宏の足元の床もベキッと音を立ててへこむ。

目の前の2人は潰れないように立っているだけで精一杯。

達也は黙って智宏を見ていたが、深雪は驚愕の目で智宏を見つめる。これだけの魔法干渉力、自分より凄いのではないのか？と。

「青木さん。この事は母上に報告させてもらいます」

「っ!？」

「母上が聞いたらなんて言うだろうか・・・さぞお怒りになるだろう。姉を侮辱し姪を泣かせたなんてな」

「ど、どうかそれだけは・・・」

青木は真つ青になりながら智宏を止めた。

それほど真夜が恐ろしいのだろう。確かに真夜を怒らせたくはないと誰もが思うだろう。

智宏は青木を冷たい目で見下ろしていたが、横から智宏を止めにはいる男がいた。それは智宏が知らなかった男。達也と深雪の父・司波龍郎である。智宏は自然と発動していた魔法を解く。

「智宏君・・・・・・・・やめないか」

「誰だ？」

「ふう。私は達也と深雪の父親、司波龍郎だよ」

「ああ・・・深夜さんが亡くなられた後すぐに別の女と結婚した」

「その認識はどうかと思うが。青木さんを攻めないでくれないか？」

「くだらん。お前に指示される筋合いはない。達也と深雪の父親だろうが俺には関係ない。本家にも入れさせてもらえない者が口を出すな。お前は達也と深雪がいるからこそ四葉家と繋がっていられるんだ。それを忘れないでほしい」

「むっ」

「母上への報告は絶対だ。青木さん、残念ですよ。2人共、行こう」

「ああ」

「・・・はい」

固まった青木と龍郎を置いて3人はFLT を出る。
しばらくバスを待っていると、深雪が智宏の裾をくいくいと引つ
張ってくる。

「深雪？」

「智宏兄様・・・ありがとうございます」

「いいんだ。あれは怒って当然の事なんだ」

「叔母様には」

「報告する。多分青木さんは減給じゃないかな？できればそれぐら
いで済ませたい」

「ご迷惑をおかけしました」

「智宏。俺からも礼を言う」

「いや、それよりもこっちこそ父親を少し悪く言ってしまった。す
まん」

「そんな！あんなの父親ではありません！」

「おい深雪」

「お兄様。私はお兄様さえいれば充分です」

「ははは（ますます重いな）。ところで何があったんだ？」

智宏が事情を聞くと深雪の顔が少し紅く染まる。
達也に目線をずらすと、きつちり答えてくれた。

「実は深雪を智宏の嫁にすると言われてな」

「深雪を!?!母上は何も言っていないぞ?」

「おそらく使用人の中でなんとなく決まっているんだろう」

「バカな。深雪には自由に恋愛してほしいんだ。俺はそんなの認め
ないぞ」

「智宏兄様・・・」

「深雪。お前の結婚相手は自分で見つけるんだ。いいね？」

「はい！うふふふ」

深雪は智宏からそう言われると自らの頬に両手を当て、身体をくねくねさせる。

その様子の深雪を見て、智宏と達也は帰るまでほっこりしていたのだった。

その後、青木は無礼を働いたために半年の減給となる。それには処分はいつでもできるといふ意思も込められている。だが青木は優秀な人材、失うわけにはいくまい。

それと同時に司波龍郎と青木の接触もしばらく禁じられたらしい……

第9話 発足式

智宏がFLTに行ってから2週間ほど経ち、1高では九校戦の選手とエンジニアの発足式が行われようとしている。

智宏は深雪の協力の下、アイス・ピラーズ・ブレイクの練習に励む。智宏も深雪の手伝いをしたり達也の体術に付き合ったり、最低減手伝える事は手伝った。

場所は達也と智宏の師匠である九重八雲に提供させてもらい、周りで見られることなく練習する事ができた。

そしてついに発足式当日。

講堂の舞台裏に行くと真由美と深雪が上着を持って2人を待っていた。

「こんにちは。会長、それなんです?」

「はい!これが選手のジャンパーよ。試合の終わった時とか夜寒かったら着てね。深雪さんは達也君に」

「お兄様。これは技術スタッフのユニフォームです!」

「ありがとうございます(ごこぎいます)」

達也は2人に渡された上着を着る。智宏は上着をテーブルの上に置き、発足式が終わったら取りに来ることにした。

ユニフォームを着た達也を深雪は満足そうな笑みで見ている。

「お兄様。お似合いです!」

「そうか?ありがとうございます」

「さっ!あつちに皆いるから行きましょ」

「「はい」」

真由美は智宏の袖を引っ張りながら代表チームがいる壇上に上が

る階段近くまで歩いていく。そこには克人を始めとした選手と五十里やあずさなどのエンジニア達が待っていた。

代表チームは拍手されながら壇上上がる。

真由美は1人1人選手の紹介をする。紹介内容は特に凝ったものではない。選手の名前、出場競技、これまでの実績など簡単なもので済みます。

特に智宏と克人は十師族なので、真由美から一言コメントが付けられる。智宏の場合は「初めての九校戦では実力を充分に発揮しろ」との事だ。

最後に達也の紹介をし、選手の紹介は終わった。

それと同時に深雪が1人1人にIDチップが内蔵された徽章をユニフォームの襟元に付け始めた。

男子は嫌でも深雪が至近距離に来るので顔を崩さないように努力していたが、どうしても顔が赤くなってしまふ。ただ五十里は千代田花音という許嫁がいるので、全くではなかったが他の男子よりは冷静だった。智宏も深雪に付けてもらい、1歩離れた深雪の顔は誇らしげに笑っている。

達也も深雪に付けてもらったが、達也の時だけ深雪は他の選手よりも襟元に触っている時間が長く、付け終わった後は数秒とろけそうな笑みで達也を見ていた。

真由美は達也へのブーイング等が起きないように素早く拍手をする。深雪もステージの横に移動して拍手をした。

その拍手につられて講堂全体が代表チームに大きな拍手を送ったのだった。

帰り際に智宏がジャンパーを取りに行っていると、後から声がかかる。

「智宏さん」

「ん？ 雫か。ほのかはどうした？」

「私とほのかはワンセットじゃないよ。ほのかは深雪と達也さんと一緒に教室に戻った」

「すまん。じゃあなんでこっちに？」

「智宏さんがここに行くのが見えたから気になっただけ。上着を取りに来てたんだね」

「ああ。じゃあ行こうか」

「うん・・・あつ」

「雫？つとー！」

雫は来た道を引き返そうとする。しかし段差があるのに気が付かず、身体が前につんのめってしまう。

すんでのところで智宏は雫の肩を掴んで自分の方に寄せた。

雫は今の自分の状態を見る。智宏は雫を後ろから抱きしめているように見えてしまった。

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ。あと・・・離してほしいな」

「あ・・・すまん」

「気にしないで」

智宏は慌てて雫を解放し、何歩か後ろに下がる。その時智宏には見えなかったが雫の顔は珍しく赤くなっていた。普段クールな表情な雫だが、もしかするとこういうのには弱いのかもかもしれない。

そこで何もなかったのはよしとしよう。だが次にここへ入ってきた人物に問題があった。

「あらあら2人共どうしたの？逢引かしら？」

「会長・・・違いますよ。雫は俺がここに来たのを追っかけてきただけです」

「ほんとに？じゃあ早く行きましよ。もう全員出ちやつたわ」

いきなり登場した真由美は智宏の腕をぎゅっと抱いて部屋を出ようとする。特に従わない理由はないので真由美の密着している部分

の感触に少しだけ浸りながら移動しようとする、智宏の制服が引つ張られる感触がした。

どうやら雫が掴んだみたいだ。

「会長は3年生です。智宏さんは同じ学年の私が連れていきます」

「あら嫉妬？可愛いわね」

「……………」

「痛たた。雫、そこ肉、肉だから」

雫は真由美にからかわれると智宏の服どころか肉を掴んでいた。そして負けじと智宏の腕にしがみつく。もしこの光景をほのかが見たらとても驚くに違いない。

さすがに講堂を出ると2人は離れたが、雫は真由美が3年の教室で別れるまで智宏の隣をぴったり歩いていった。真由美も最後に牽制なかわからないが、智宏の手をしっかりと握り「頑張ろうね」と言って教室に戻っていく。

雫はジト目で智宏を見るとスタスタと教室に戻って行ってしまった。智宏も慌てて雫を追いかける。

（あれ？なんで私会長に嫉妬してるんだろ？）

雫は追いかけてくる智宏と教室に戻った真由美に変な感情を抱きながら自分の席に座った。

発足式が終わり、1高は夏休みに突入する。

そしてついに出発日になった。

会場の近くのホテル前まで移動するバスの席順はほとんど自由と言ってよかった。

深雪の隣にほのかが座り、雫の隣には別の1年生が座っている。雫は智宏を隣に座らせたかったのだが、前日真由美が智宏にメールで隣の席にどう？と誘ってきており、別に断る理由もないので了承してしまう。智宏は事情を雫に説明すると雫はほのかの方を向いてしまっ

た。

「雫?」

「ほのか。智宏さんが会長に取られた」

「え!?!」

「うっ……」

「ど、どどどどういう事?」

「雫。理由は聞いたのかしら?」

「うん。昨日会長からメールが来たらしい」

「それでは仕方ないわよ」

「……そうだ! 帰りはどう?」

「帰り……? そうだった。智宏さん、帰りはいい?」

「え、OK OK」

「よかった。約束だよ」

ほのかと深雪は既に雫が智宏にどんな感情を抱いているのか察しがつく。何があつたかは知らないが、2人は雫の視線が自然と智宏を追っかけているのを何度も視ている。ただ、雫は『智宏を異性として意識している』という確信が持てていないのだが。

さつきまでご機嫌斜めだった雫は智宏と帰りの約束をすると、機嫌を戻して1年女子の隣に座った。通路を挟んで隣にはほのかがいるので完全に1人という訳ではあるまい。

しかし智宏の隣に座るはずの真由美も来なかった。

家の用事らしいが、心配なので外で待っている達也の話し相手にもなろうかと思ひ、智宏となぜか付いてきた摩利は灼熱の太陽の下に出ていく。バスを降りると達也は降りてきた2人を見て不思議そうな視線を向けた。

「おーっす」

「やあ達也君」

「2人共どうかしたのですか?」

「いやなに。真由美がなかなかこないからな」

「俺はお前の話し相手だ。暇だろ?」

「智宏はともかく渡辺先輩はバスに戻っては?真夏の直射日光の下に淑女が肌を晒すものではありませんよ」

「安心しろ。日傘を持ってきた」

「はあ……」

こんな調子で3人が話していると、サンダルをぺたぺた鳴らしながら1人の女性が走ってきた。それは大きめの帽子に女子の制服と同じようなデザイン入りのサマードレスを着た真由美だった。

達也は出席簿のパネルにある真由美の場所をタップし、摩利は呆れた様子で真由美を見る。

「ごめんなさい!」

「遅いぞ。1時間の遅刻だ」

「本当にごめんなさい。待ったでしょう?」

「大丈夫ですよ。時間的には問題ありませんから」

「そう?あ!智宏君!待っててくれたの?」

「ええ、余りにも遅いもので。でも家の用事では仕方ありませんね」
「全く……真由美と智宏君、早く乗ってくれ。達也君もすまなかったな」

「いえ。それでは失礼します」

達也は出席簿を持ってエンジニア専用の車両に戻っていく。
摩利がバスの中に入るのを横目に真由美は先に乗ろうとした智宏の制服の裾を引っ張った。

「なんですか……?あ、レディーファーストですよ。すいません」

「違……わないけど。ねえ、どうかしら?」

「……あ、服ですか?よくお似合いですよ」

「ふっ。ありがと」

智宏は上機嫌にバスに乗っていく真由美を内心ため息をつきながら見届け、他に乗っていない生徒がいなか確かめて運転手に合図をする。

智宏が席に座るのを確認した運転手はマイクで発進する事を伝えると、選手を載せたバスはゆっくりと走り出したのだった。

第10話 事故？

「うふふ。ねえ智宏くー」

「会長。四葉君には迷惑をかけないでくださいね」

「り、リンちゃん？まだ何もしてないわよ？」

真由美は智宏を隣の席に座らせ、なおかつ智宏に近寄ろうとする。しかし（真由美にとつて）悪いタイミングで後ろの席に座っていた鈴音がストップをかける。

真由美はビクツとしてすぐに智宏から離れた。

「会長は四葉君と司波君を毒牙のターゲットにしたらしいですね」

「違うわよ。智宏君と達也君はなんというか……弟？みたいなノリで接してるだけよ？」

「弟ですか……（司波君はそうだとしても四葉君に対してはどうなのでしょうか？）」

智宏は真由美のからみ相手が鈴音に変わった事で少しだけ自由になれた。

それと同時に真由美の言ったことが気になった。自分と達也の事を『弟』と称していたが、おそらく自分と達也どちらかが真由美と並んでも真由美は年下に見られてしまうのではないだろうか？

確かに真由美は2人より小さい。そして自分では大人ぶって『お姉さんキャラ』をやっているつもりだろうが、智宏から見ればそれがまだ子供のように見れた。真由美には兄と妹が何人かいたはずだが、弟だけはどうかやらないらしい。なので自然と弟を求めてしまうのかもしれない。

そんなしよーもない事を考えていると、智宏の隣（通路側）に誰かが立っているのに気がつく。それはブランケットを持った服部だった。

「あ、服部先輩」

「はんぞーくん?」

「会長……どこが悪いのですか?先程からゆっくりしておられない様子ですが」

「ち、違うわよ?」

「会長が我々を気遣っているように我々も会長が心配なの……です……」

服部は何を勘違いしたのか、真由美のためにブランケットを前から持ってきていた。

真由美に話しかけるのはいい。しかし服部にとってそれは少し可愛そうな結果になる。

服部は真由美を見て話している。つまり真由美の姿をもろに見るのだ。今日の真由美は肌を露出している所が多い。服部の視線は徐々に真由美の露出している太ももや肩に向いていった。

智宏はその視線に気づいていたが、いち早く反応したのは真由美の後ろで服部を見ていた鈴音だった。

「服部君。どこを見ているのですか?」

「……え、あ!なんでもないです!と、とにかくこれを!」

「そうですか?四葉君、少し席を立てあげてください」

「あ、わかりました。服部先輩が会長にブランケットをかけて差し上げるのですね?ではどうぞ」

「ええ……?」

「なっ!」

鈴音が珍しく服部をからかい、智宏もわざとらしく席を立て服部がブランケットをかけやすくしてあげた。すると真由美は胸元を手で隠し、恥ずかしそうな上目遣いで服部を見た。

真由美は服部が自分に対してはどのような感情を持っているのか

知っている。なのでそれを利用して服部をからかって遊んでいるのだ。その証拠に今の真由美の目には嗜虐心が浮かんでおり、内心楽しんでいるように見えた。

鈴音は服部の反応を見て満足したのか、視線を手元のタブレットに戻した。

服部が固まったままなので、ひとまず智宏が動く。

「服部先輩。ブランケットは俺が」

「あ、ああ」

「会長」

「ふふっ。2人共ありがとね」

「はい！失礼します！」

前の方で智宏達が騒いでいると同時に、さっきまで固まっていた服部を見てため息をついている者がいた。

摩利である。

「何をやってるんだあいつらは？」

「はあ・・・」

「ん？」

呆れている摩利の隣で、つられたのかももう1人がため息をついている。

1回だけならよかったのだが、回数を重ねられると鬱陶しい。

「おい花音。なんで2時間も待てないんだ？」

「あつ、それは酷いですよ！あたしだってそれくらい待てます！」

「じゃあなんだと言うんだ？」

「私バスは選手とエンジンアは同じだと思ってたんです。せっかく啓と旅行気分が味わえると思ったのに・・・なんでエンジンアだけ別の車なんですか？まだこっちにも席はあるのに！私は啓と座りた

かったんです！」

胸(?)を張ってギャーギャーと文句を言い続ける花音に、摩利は表面に出さないようにもう1回ため息をついた。どうやら花音は五十里が絡むとちよつとめんどくさい事になるのかもしれない。

そしてその後ろでも不満を抱えている少女がいた。それは雫ではなく深雪だった。

深雪は花音のように人に文句をぶちまける行為はしなかったが、かえってそれが周りの生徒は怖かったらしい。

いい加減見ていられなくなったのか、ほのかが勇気を振り絞り深雪に話しかける。

「深雪・・・お茶いる？」

「ごめんなさい。今はいらないの」

「暑くない？大丈夫？」

「ええ。でもあんな暑い中お兄様は文句ひとつ漏らさずに会長を待っていたのに・・・」

「・・・ダメだよほのか。深雪に達也さんの事を思い出させちゃ」

「ご、ごめん」

「全く・・・」

ほのかがうっかり達也を思い出させるような事を言ってしまう。深雪の周りからは少しずつ冷気が漏れており、ほのかは寒そうにしている。

しかしその後の雫の迅速な対応により、バスの中が氷漬けになる事は避けられる。それどころか深雪は達也に陶醉しており、達也の妹とは思えないほどのとろけつぷりを見せていた。

智宏も深雪を鎮めようと立とうとしたのだが、いつの間にか真由美が智宏の手をしっかりと握りながら寝てしまったので立とうにも立てなかった。

この状況を誰かに見られる心配もある。しかし真由美は肩からブ

ランケットを被せており、智宏の手はブランケットの中に引きずり込んでいたのでその心配はない・・・と信じたい。

智宏もホテルに着くまで寝ようとする。しかし――

「あー危ない！」

と花音が声を上げて立ち上がった。

智宏もつられて外を見ると、反対車線で一台の車がガードレールにぶつかっている。まだそれだけならよかったのだが、車はガードレールにぶつかった後その勢いなのかこちらの車線に飛び込んで来た。

そしてあろう事か車は炎上して逆さまになり、屋根がギヤリギヤリ音を立てて1高のバス集団に突っ込んでくる。

運転手はブレーキを踏み、車体を横にしてバスを止めた。

「止まれ！」

「止まって！」

「お前ら待て！」

花音と森崎、雫は車を止めようとし、摩利は3人を止めた。

だが――

「え？」

「なんで魔法が発動しないの!?!」

「まさかCADの故障か!?!」

3人は魔法が発動しない事に驚いている。

それはCADの故障でも個人のミスでもない。智宏が領域干渉を発動させたのだ。

智宏は真由美の手を振り切り、席を立ってバスの中を睨みつけている。そしてその指についているCADからは魔法が発動されているのがわかる。

花音は自らの魔法が発動しない原因を智宏にあるとすぐに悟った。

「四葉君！何するの！」

「何？おい四葉」

「後にしてください。今はそれどころではありませんよ。深雪は火を、十文字先輩は車を止めてください」

「はい」

「任せろ」

深雪は智宏に言われるまでもなく、声をかけられた瞬間に魔法を発動し車の炎を鎮火した。もちろん領域干渉は切つてある。いや、切る前に達也が領域干渉を吹き飛ばしたというのが正解だろう。本当にこの兄妹は仕事が早い。

そして鎮火した車を克人がフアランク스로壁を作つて受け止める。

二次災害はなんとか防がれたが、バスの中では深雪を除いて智宏に疑問を持っている生徒がほとんどだった。

その中で最初に口を開いたのは摩利だった。

「四葉」

「はい」

「さっきのはなんだ？まさかとは思うが・・・」

「渡辺先輩の思っている通りだと思います。俺が使つたのは『領域干渉』。対抗魔法です」

「やはりか」

「『領域干渉？』」

「領域干渉だど!?!」

「領域干渉は効果範囲内の自分より低い干渉力を持つ魔法を完全無効化します。さっきの3人の魔法は無効化させていただきました」

「なんでよー！」

「いや花音。四葉の言う通りだ。あのままお前達が魔法を発動していたら司波は炎を鎮火できなかつたはずだ。全く・・・1年の2人は

ともかくお前は2年なんだ。それくらい理解しろっ！」

「痛たた・・・はい」

バスの中の空気も入れ替えられ、魔法を発動しようとした3人は（特に摩利から軽い拳骨をくらった花音は）反省して大人しく席に座っている。

ただ、克人とさつき起きた真由美は同じ十師族として智宏に新しい警戒心を生んだ。まあ真由美はすぐに忘れてしまったのだが・・・

「智宏君、深雪さん、十文字君、ありがとう。もちろんリンちゃんもね」

真由美は衝突事故を防いだ4人に礼を言う。鈴音は何もしていなかったかのように見られたが、実は1高のバスが緊急停車する時に止まるのをサポートしていたのだ。

これで丸く収まった。しかし摩利の中の疑問はまだ解決していなかった。

（あの時領域干渉は吹き飛ばされた。一体誰が・・・まさか・・・な）

事故の後片付けは達也達エンジニアに任せ、智宏達選手は先にホテルに向かう。作業も達也と五十里が中心になって交通整理をしたり車から死体を引きずり出していた。

そしてバスの中では――

「ホント凄かったわねえ」

「そ、そうですね（ん？この鋭い視線は雫だな・・・後で謝つとこう。後は誰だ？深雪か？なんで？）」

「雫？怖いよ？」

「むう・・・」

「雫。それくらいにしておいたらどうかしら？（智宏兄様は雫の気持ちを知っておられるのでしょうか？）」

ホテルに着くまで真由美はさらに智宏にくつつき、智宏は後ろから感じる2人分の視線に耐えていたのだった。

第11話 ホテル着

一同はホテルに到着し、荷物を持ってそれぞれの部屋に入っている。

その中でも智宏と深雪は最後まで残り、エンジニア組の到着を待つ。達也達はそんな遅くはなく、選手のバスが到着して15分ほど遅れてホテルに到着した。

智宏と深雪は機材を運んでいる達也の所に向かった。

「お兄様！」

「達也」

「2人共待っていてくれたのか？」

「お兄様を置いて先に入れませんよ」

「俺は深雪のガードさ。一応従妹だからな」

「そうか」

「ところで達也。さっきの事故で俺の領域干渉を吹き飛ばしたのはお前だろう？」

「ああ。あれでは深雪が魔法を使えなかったからな」

「やっぱり干渉力は達也に負ける・・・か。本気を出していないといえまだまだ修行は必要だな」

「智宏さんも充分お強いですよ」

「そうか？」

「智宏、深雪。言っておくがあれは事故ではない」

「・・・やっぱりそうか」

「え？では人為的な・・・」

「そうだ。あれはわざと起こしたのだろう」

先程の事故。常に警戒していた達也曰く、あの事故の時吹き飛んできた車に魔法がかかっており、タイヤをパンクさせる魔法、車体を回

転させる魔法、車体に斜め上の力を加えてガードレールをジャンプ台として飛び上がらせた魔法。この3つの魔法が全て車内から放たれていたという。

つまり魔法を使ったのは魔法師である運転手自身なのだ。ちなみにその運転手は焼死体になっていたが、一応病院にまわされた。

「自爆攻撃……」

「卑劣な……！」

智宏は理解したように頷き、深雪はその犯人とその首謀者に対して怒りを覚えていた。

誰かを殺しそうな雰囲気を出している深雪を見た達也はまずいなと思ったのか、智宏に話題を振った。

「智宏。彩音はどうした？」

「彩音は本家に帰らせている。母上は彩音と九校戦を見たいらしくてな」

「そうか」

「彩音ちゃんが本家に？まあ1人にするよりは安全ですし」

深雪の表情が元に戻ったのを確認した達也は少しほっとしたのだった。

この会話の内容までは聞こえなかったが、最後にバスから降りた桐原は3人を見ていた。

そして俯きながら前を歩いている服部に桐原は声をかける。

「よお。何辛気臭い顔してんだ？」

「桐原……そんな事はないさ」

「本当か？」

「……少し自信をなくしてな」

「お、おいおい。競技に差し支えるんじゃないかねーか？」

桐原の言う通り、競技に影響を与えるほどに精神状態はよろしくない。服部は一高の主力選手なのだ。特にモノリス・コードはチーム戦なのでこのままでは大きな影響を及ぼしてしまうかもしれない。

「桐原、俺はあの事故の時何もできなかった」

「ありや凄かったな。しかし何もしなくてよかったんじゃねーか？お前まで先輩に怒られるとこだったしな」

「ああ……それでも四葉と司波さんはやってみせた」

「領域干渉だっけか？あれは俺達魔法師としてはちよつとめんどくさいな」

2人は事故の事を思い出しながらホテルの中に入っていく。

服部は一瞬立ち止まって達也を見る。すると再度桐原が絡んできた。

「ん？司波兄か？」

「俺は春にあいつに負けた」

「知ってるぜ。瞬殺だったな」

「あの時から俺は悩んでいるんだ。二科生とはなんだ？なぜ俺はこんなにも差別意識を持っていたんだ？とな」

まさか服部がこの事で悩んでいるとは桐原には想像もつかなかった。

ますます自信を無くしていく服部に桐原は慌ててフォローにはいる。

「いやいや、あれは司波兄が特別なだけだ。だが……ありや殺ってるな」

「殺ってる？実戦経験があるという事か？」

「ああ。親父の知り合いにいる海軍の軍人と同じ気配がするぜ」

「魔法師として必要なのは実技試験の結果だけが全てではない。似たような事を司波さんは言っていた」

「正論だな。その証拠に俺も司波兄にやられた。奴は強い。その上妹も強いんだからシヤレにならねえ」

「四葉はどうだ?」

「あいつはもはやバケモノだ。まだ人を殺した事はなさそうだが・・・おそらくなんの抵抗もなく殺るだろうな」

「現当主の魔法を使いそれ以上の魔法も使っている。確かにそうかもな」

「ま、お前が二科生差別をおかしいと思いはじめているなら・・・会長は喜ぶと思うぜ?」

「な、な・・・」

「はっはっは!」

「お、おい待て!」

桐原は最後に服部をからかったところで再び歩き始める。2人がホテルの中に入っていき、角を曲ったところで智宏達もロビーに到着した。

すると達也にここに居ないはずの人から声がかかる。

その人はバカンスにでも行くのか?というくらいラフな格好でロビーの椅子に座っていた。

「やつほー。達也君」

「エリカ?」

「エリカ。なぜここに?」

「いやね?あたし達も見なくなっさ。そっちが四葉智宏君ね。二科生こつちでも有名よ」

「どうも。君は千葉家のご令嬢か?」

「そうよく。あ、エリカでいいわ」

「わかった」

「エリカちゃん。お部屋とれた・・・よ」

エリカと話していると、受付からもう1人の女子が小走りでこっちに向かってくる。

それはエリカに連れてこられた美月だった。

「美月も来ていたのか」

「達也さん、深雪さん、こんにちは」

「ああ。美月、こいつは四葉智宏だ」

「四葉です。智宏でいいよ」

「柴田美月です。よろしくお願いします」

「ところでエリカ。ここは軍の施設のはずよね？よく部屋がとれたわね」

「ふふん。家のコネよ」

「実家はあまり好きではなかったのか？」

「使えるものは使うのよ」

ぶつきらぼうに言い張ったエリカは罪悪感の欠けらも無い表情だった。

他にも西城レオンハルトと吉田幹比古が来ているはずなのだが姿は見えない。どこかで荷物でも持たされているのだろうか。

すると達也は「先輩を待たせているから」と言い、機材を押してホテルの奥に入っていく。

智宏は達也から視線を戻すと、深雪が美月の服を上から下まで視線を巡らしているのが見える。

「深雪さん？」

「美月。その服装はここに来るにはどうかと思うのだけれど・・・」

「や、やっぱりですか？エリカちゃんにこれにしろって言われたんですけど」

深雪はエリカに視線を向けるとエリカは顔を背け誤魔化すように

口笛を吹いていた。(吹けていない)

美月は自分の服装を改めて見て頂垂れている。

「美月？他には服はないのかしら？」

「ありますよ。部屋に行ったら着替えます。念の為に制服も持つてきましたし」

「その方がいいわね」

「深雪。そろそろ行こうか」

「はい。エリカ、美月」

「うん、じゃーね。でもすぐに会うと思うけど」

「？」

「あたし達『関係者』だから」

智宏と深雪はエリカ達と分かれ、選手が集まっている部屋に向かったのだった。

第12話 懇親会

九校戦の参加者は選手だけで360人。エンジニアなどを含めると400人を超える。

その人数で懇親会をするには会場も比較的大きなものになり、ホテル側のスタッフも大忙しで働いていた。正規社員の増援だけでも足りないらしく、アルバイトの学生の姿もちろはらと見られる。

しかしそこまではいい。

そのアルバイトの中に知った顔があったら驚かすにはいられないだろう。

智宏と達也は端で話していると、後ろから声がかかった。

「お客様？お飲み物はいかがですか？」

「エリカ、関係者ってこの事だったのか」

「美月やレオ達もいるはずだが・・・」

「驚いた？あとその2人なら厨房にいるよ」

学生のアアルバイトと言っても未成年は雇わないだろう。しかしそこも千葉家のコネなのかもしれない。少々使い道を間違っていると思うが、ここはさすがと言うべきだ。

智宏はふとエリカをよく見ると、少し化粧をしているようだった。大人びたメイクをしていればさほど他のコンパニオンと変わらないう見た目になっている。

エリカは智宏の視線に気がついた。

「智宏君？何よ」

「いや・・・化粧をしてるんだなって」

「あ、気づいた？」

「エリカ。そんな可愛い格好で現れるとは思わなかったわ」

「深雪じゃん。やっぱり可愛い？ 智宏君と達也君は何も言ってくれなかったけどね」

「智宏さんとはもかくお兄様は無理よ」

「そうよねー。達也君はこういうの興味ないっぽいし。あーちよつと待ってて！」

エリカは用事を思い出したかのように人混みに紛れてどこかへ行ってしまう。

トレーに飲み物を乗せ、こぼさずに走っていく姿に達也は――

「以外と器用だな。バランス感覚がいいのか？」

「(そのコメントは違う)」

達也が感心している隣で智宏と深雪は頭の中でツツコミを入れた。もちろん口には出さない。

しかし何かしら話した方がいいと思ったのか、深雪は別の事を聞いた。

「どうしたのでしょうか？」

「おそらく幹比古を呼びに行ったのだろう。俺のクラスメイトだ」

「そうでしたか」

「あ、千代田先輩に五十里先輩じゃないすか」

「やあ」

「なんか一瞬ウチの生徒がいた気がしたんだけど？」

「バイトに来ているみたいですよ」

「ふーん」

花音は風紀委員というだけあってエリカの事を智宏に聞いてきたが、智宏がアルバイトと伝えるとあっさり引いた。校外の事はあまり気にしないのだろうか……

達也が五十里と、深雪が花音と話していると、智宏は一高の集団から2人近づいてくるのに気がついた。
振り向くと雫とほのかがこつちに歩いて来ている。

「智宏さん。会長が探してたよ」

「し、雫？なんか怖いよ？」

「会長が？でも俺はしばらくここにいるかな」

「わかった」

「ん？雫とほのかじゃないか」

「あ、達也さん」

「達也さん！」

「2人はいつも一緒だな」

「・・・それ前にも智宏さんに言われた」

「ああ・・・そうだったな」

「すまん」

達也は謝りながら智宏を見る。

智宏はスッと目を逸らした。いや別に逸らす必要はないのだが、なんとなく達也と目線を合わせたくなかった。

達也もそこまで追求するつもりはなかったのか、すぐに視線を智宏から雫達に戻す。

「2人はなぜここに？」

「深雪を呼びに来たの」

「深雪をか？」

「そうなんです。深雪に話しかけたい人が結構いるらしいんですけど・・・」

「達也さんがガードしてるから来れないっぽいよ」

「俺は番犬か？深雪、皆の所に行ってきなさい。団体戦はメンバーとの関係が重要だ」

「ですがお兄様が」

「達也の所には俺がいるさ」

「智宏さん・・・ありがとうございます。では」

深雪は雫とほのかと一緒に一高のメンバーが居る所へ戻っていく。花音はそんな達也の対応に感心し、手に持っていた飲み物を飲み干すと五十里の腕に抱きついて別の場所に移動した。婚約者とバスで一緒になれなかった分ここでイチャイチャしているのだろうが、近くにいる他校の生徒は居心地悪そうにしている。

するとタイミングがいいのか悪いのか、エリカがようやく幹比古を連れて戻ってきた。

「あれ？深雪は？」

「深雪はあっちだ」

「遅かったか。まあいいわ。智宏君、こいつがミキよ」

「僕の名前は幹比古だ！全く・・・四葉君だっけ？僕は吉田幹比古。よろしく」

「こちらこそよろしく。智宏でいい（なんか警戒されてる気が・・・まあ四葉だし）」

「じゃあ僕も幹比古でいいよ」

「幹比古。てつきりレオといるのかと思ったぞ」

「実は僕も裏方の仕事があったんだ。でもホテル側の手違いでさ」

「なるほど」

「文句言わないの。ほら、あそこのお皿空いてるよ」

「くっ・・・エリカ、覚えてろよ」

そう言つて幹比古は去っていく。

少々いじめすぎじゃないか？と智宏は思った。しかしエリカが幹比古を見る顔は少し心配している顔だったので、なにも言えなかった。

場所は変わり、第三高校では智宏と変わらない年齢の男子生徒が一

高の方を見ていた。

「将暉。どうかしたのかい？」

「ジョージ。あの女子生徒を知ってるか？」

「え？ああ・・・彼女は司波深雪。同じ1年生で実力は一高の中でも高いとの噂だよ」

「噂どころか本当に強いのかもな」

この2人は第三高校のエースと言っている存在。クリムゾンプリンスこと一条将暉、カーディナルジョージこと吉祥寺真紅郎だ。

『一条』は十師族の中の1つ。将暉はクリムゾンプリンスなんて呼ばれているが、その本当の由来を知る者は多くない。

戦闘力も恐ろしく高く、一高は苦戦を免れないかもしれない。

「珍しいね。将暉が他校の女子生徒に興味を示すなんて」

「そうか・・・？おいジョージ、端にいるのって・・・」

「・・・四葉智宏だね」

将暉は達也の隣にいる智宏を見つめる。別に見つけたくて見つけたのではなく、単に深雪からこちらに視線を戻す時に偶然視界に入ったのだ。

「現当主の実際の息子だと聞かされた。実力は未知数だが『夜の女王』と同等だと一条^{ウチ}では判断している」

「将暉でも苦戦するって事かい？」

「おそろくな。噂によるとモノリス・コードには出ないようだが、四葉はどこに出場するんだ？」

「多分アイス・ピラース・ブレイクじゃないかな。将暉の言う通りモノリス・コードは既に決まっています出れなかった可能性もある」

「棒倒しになった理由はあるのか？」

「彼は現当主の息子だよ？だとしたら彼が得意そうな魔法は・・・」

『流星群』

「そう。だから流星群を使う前提で競技を選ぶとしたらピラース・ブレイクがそうかなって思ったんだ」

「なるほど。さすがはジョージだな」

そう。吉祥寺の言う通り智宏はアイス・ピラース・ブレイクに出る。アイス・ピラース・ブレイクとモノリス・コード以外の競技は指定された道具、つまりバトル・ボードのボードなどの使用が求められる。なので流星群を生かせる競技は少ないのだ。

将暉も吉祥寺の意見に納得している。それは彼らが互いを信じあっている証拠だった。

「じゃあ棒倒しの優勝は難しいってことか」

「でも僕達がモノリス・コードで優勝すればそれなりに点数は入る」

「そうだな。頑張ろう」

「うん」

しばらくすると、来賓の挨拶が始まる。

生徒達はこういうのに慣れていない生徒が多数いるため、至って真面目な態度で大人達の話に耳を傾けていた。

その中でも彼らが最も注目したのは十師族の長老とも言われている九島烈だった。

かつて最強と呼ばれた魔法師で、第1線を引いてから表に出ないとされてきたが、何故かこの九校戦には出てくる。

智宏も会ったことはない。

智宏を含めた全員が九島の登壇を待った。

しかしそこに現れたのは金髪の女性だった。

会場内にざわめきが広がり、何人かが小声で囁きあっている。

智宏は何かあったのか心配したが、すぐにこの茶番に気がついた。

「おい達也」

「なんだ」

「あれってやっぱり・・・」

「智宏にも見えたのか。あれは精神干渉系魔法だな」

「だよなあ」

智宏は達也に小声で話しかけると、どうやら達也も真相に気がついていたみたいだ。

おそらくこの会場全体に魔法が展開されており、それに気づいていない生徒達は壇上にいる美女に目が吸い寄せられている。

(これが最強の実力・・・)

智宏と達也は美女の後ろを凝視する。

すると九島は2人の視線に気がついたのか、ニヤリと笑った。

九島は目の前の女性に囁くと、彼女はスッと脇にどく。

ライトが壇上を照らし出すと、ようやく九島の姿が全員に認識された。

見えなかった生徒達は九島が空中から現れたように見えただろう。

九島は智宏と達也をチラリと見た。2人は周りに気づかれないように目礼で返した。

「まずは・・・悪ふざけに付き合わせたことを謝罪しよう」

九島・・・いや、九島老師はもう御歳90歳近いはずだが、その声はまだ若々しかった。

「今のは余興。この手品に気づいたのはざっと6人だけだな。つまり・・・私がテロリストで、毒ガスや爆弾をしかけようとしても、それを止めようと素早く行動できたのは6人・・・いや、その中でも4人くらいだ」

彼は別に怒った訳ではない。
しかし会場は静寂に包まれた。

「魔法を学ぶ若人諸君、魔法は手段であって目的ではない。今回諸君らは私の悪戯に気づかなかった。先程の魔法はとても弱い但至少工夫している。これを機に、魔法を磨く事だけでなくその工夫もしっかりやってもらいたい。私は諸君らの工夫を楽しみにしている」

九島老人の演説が終わると、一斉に拍手とはいかなかったが会場の全員が拍手をしていた。

智宏と達也は少し笑いながら（声には出さず）拍手をした。

（これが『老師』か）

2人はこんな事を思いながら壇上を去っていく九島老人をずっと見ていたのだった。

第13話 みんなでお風呂!

懇親会は大会の前々日に行われる。理由は前日を休養に当てるためだ。

その大会前日、夕食後に智宏と達也の部屋に深雪、ほのか、雫の3人が遊びに来ていた。しかし智宏が自分のCADのチェック、達也が試合で使う起動式の調整に取り掛かるといっているので早めに自分達の部屋に戻っていく。

明日から競技がある上級生は寝ているだろうが、当校や他校の1年生はまだまだ活力が有り余っていた。

ちなみに女子が数人で部屋でする事といえばお喋りと決まっている。深雪達がしばらく九校戦について話していると、部屋の扉がノックされた。

「私が出るよ」

3人の中で1番扉に近かったのがほのかだった。

ほのかは扉を開けるとそこには見慣れた一高の1年女子が数人いる。

「こんばんはー」

「あれ、エイミィ。みんなもどうしたの?」

「あのね、ここって温泉があるのよ」

「・・・もう少しわかりやすく」

「そう言えばここの地下って人工の温泉があったわね」

「へえー。それでエイミィ、その温泉がどうしたの?」

「だからね?みんな温泉行こ!」

「いいの?ここ、軍の施設のはずだよ?」

「聞いてみたら11時まではOKだったよ」

そう。ここは軍の演習場に付属する施設。いくら九校戦で貸してもらっているとはいえ、立ち入り禁止の所もあるのだ。

しかし雫の疑問を英美はぶっ飛ばし、ほのかに呆れるような感心しているような呟きを出させた。

深雪も一つ思い当たる点がある。

「エイミィ?ここは水着が必要なはずよね?」

「湯着も貸してくれるって」

今回の英美の行動力にはさすがに感心する。ここまで用意してくれたなら断る必要もないだろう。

深雪達は温泉に同行することとなった。

地下にある大浴場は高一女子の貸切だった。

身体を洗うのはシャワーブース。温泉の中には湯着を着るのが前提になっている。その湯着はミニ丈の浴衣みたいな物で、それが水着の代わりになるのだ。下着を着けないで浴衣を着ているため、ほんの少し違和感を感じる。

正直水着より恥ずかしいので男共には見せたくない格好だろうが、ここには女子しかいない。だがそこで隙をみせてはいけなかった。

「わぁお」

「え?」

英美はほのかの身体を上から下までくまなく見る。ほのかは恥ずかしさと警戒心で胸元を隠した。

そして英美の目は最終的にほのかの胸に向けられて・・・ロックオンされていた。

その証拠に英美はジリジリほのかに近づいていく。

「ほのか、スタイルいい〜」

「え、ええ!?!あ!」

ほのかも英美の動きに合わせて後退するが、所詮浴槽の中。すぐにほのかの背中では浴槽の壁にぶつかかった。

「ほーのか」

「何よ!？」

「むいていい?」

「いいわけないでしょ!？」

英美の目は笑っている。笑っているが冗談で済ます気はないように、英美は両手を開いたり閉じたりしながら動けないほのかにさらに近づく。

助けを求めて周りを見ても彼女達の目は英美と同じく笑っており、さらには混ざろうとしている生徒もいる始末……。

「いいじゃんいいじゃん。ほのか、胸大きいんだからさ」

「じゃあ私も混ざろうかな」

「私も」

「ええ!?!し、雫、助けて!」

ほのかはこの中で1番信用できる親友。雫に助けを求める。
しかし雫は――

「いいんじゃない?」

と言って浴槽から出ていってしまふ。

ほのかは親友の裏切りが信じられないのか、必死になって雫に理由を聞く。

「どうして!？」

「だって…….ほのか、胸が大きいから」

一瞬自分の胸を哀しそうな目で見るとそう言い放つ。
そしてそのまま雫はサウナに姿を消す。

英美達は雫が許可を出した事でさらにヒートアップしていた。

「そんな！」

「雫の許可も得たことだし……」

「むいちゃえむいちゃえ！」

英美がほのかに襲いかかろうとしたその時、タイミングが良いのか悪いのか、深雪が人間洗濯機もといシャワーブースから浴槽の方に歩いてくる。

深雪が浴槽に近づくと、チームメイトの視線が一斉に深雪の身体に向けられた。

「な、なにかしら？」

「ダメよみんな！深雪はノーマルなんだからね！」

「い、いやあ。ついつい見とれてしまったよ」

深雪は最初何が何だかわからなかったが、ボーイツシユなスバルにこう言われるときさすがに気づいてしまう。

しかもほのか以外全員の視線が同じ物だということも。

「ちよっと……女の子同士でそういうのは……」

深雪は恥ずかしさで湯着の胸元と太もも付近にある短い裾を引っ張るような仕草をする。

しかしその行動は逆効果となり、浴槽は再び変な空気が流れてしまった。

身体を洗ってきた深雪の身体にぴったり張り付くような湯着は彼女のスタイルを充分周囲にアピールしており、身体のラインをくつき

り浮き上がらせている。もはや浴衣ではなくタイツみたいだ。

腰から踝まで伸びる細く美しい脚。ほんのりと赤くなつた素肌。張りのある双丘。これが湯着を着ている事によりとてつもない色香を発生させていた。

「女の子同士かあ……分かつてはいるんだけどね」

「何か性別なんて関係ないって思ってくるよね」

「もう！いい加減にして」

危ない眩きで溢れる浴槽に深雪は勇気を出して入り込む。

首まで浸かると湯着が『布』という性質上、深雪の肌から離れてお湯に浮こうとする。そうなることさあ大変。湯着に隠されていた深雪のうなじが露になつてしまった。

するとまたしても誰からかため息が漏れた。それと同時に妖しい空気も。

「私は深雪の味方だからね！」

ほのかはすかさず深雪の隣に座り、助けようとした。さつきまで自分が被害にあつていたので忘れていたのだろうか？これではほのかまでターゲットに戻されてしまう。

先程よりは遅いスピードだが、追ってくる友人に向けてほのかは最終手段だと言わんばかりにあるセリフを言い出す。

「いい加減にしないと……全員氷水で冷水浴する羽目になるよ！」

このセリフが功を奏したのか、英美達は深雪から顔を背けて一気に冷静になる。

深雪もさすがにそんな事はしないと云おうとしたが、この状態を保つために何も言わない方が得策だと感じた。

「どうしたの？」

個人のサウナに入っていた雫はこの状態を見て何があつたのかを聞いてくる。

このぎこちない空気の中説明する猛者はいないと思われたが、なんと英美が1番早く復活した。

「ううん。なんでもないよ」

雫はさつきまでの元気だった英美が今は冷静になっていたので理由を聞こうとしたが、このぎこちない空気をなんとなく察し、聞くのを諦めた。

そしてそれからは普通の女子トークが繰り広げられる。

恋愛やファッション、懇親会の噂話などなど。

今は恋愛話をしている。そしてとうとう深雪に話が振られてしまった。

「ねえねえ。深雪はどんな人が好み？やっぱりお兄さんみたいな人？」

「お兄様は兄よ？兄妹で恋愛なんてないわよ」

「じゃあ一条の跡取りは？懇親会の時に深雪を見てたけど」

「えー！そうなの!？」

「それもないわ。それどころか姿も見てなかったもの」

深雪の冷静な回答に英美達はなんとも言えない表情になってしまったが、めげずに次の質問に移った。

「じゃ、じゃあ四葉君は？」

「智宏さんもないわ」

「ええー！あんなにカッコイイのに？」

「智宏はお兄様とどこか同じような感じがするのよ」

「あー・・・そうきたか」

「じゃあ四葉君は誰が好きなんだと思う?」

「ッ!」

「雫?」

「なんでもないよ」

「英美。人の事より自分の事を話したらどうかしら?」

「わ、私はいいよ!」

深雪が達也を兄としてしか見ていないことに納得した者がほとんどだった。だが1人だけ、その答えにホッとしている女子がいた。

智宏の話では雫が若干反応するが、深雪のフォローで話の流れが英美に移る。

大浴場で深雪達が女子トークをしている頃、智宏は中々帰ってこない達也を心配して、外にある作業車に向かってホテルの階段を降りていた。

「ひえつくしゅん・・・!なんだ、冷めたのか?」

第14話 賊

「達也ー」

「ん？智宏か」

「やあ四葉君」

「こんばんは五十里先輩」

達也は五十里と共に作業車の中で起動式のアレンジやチェックをしていた。

智宏が作業車の中に入った時、2人はまだ集中していたが、智宏の声ですぐに作業を中断する。

「そうだ。司波君はもう戻っていいよ。僕はもう少しやるから」

「もうこんな時間ですか。わかりました、お疲れ様です」

「うん、おやすみ」

「達也はいいとして、先輩は大丈夫なんですか？」

「2年生は明日から試合だからね。しっかりやらなくちゃ」

「そうですね・・・頑張ってください」

「ははは。後輩の期待には答えたいかな」

智宏と達也は五十里に軽く挨拶すると作業車を出る。

もう夜は遅く、ホテルの方を見ると1部の部屋が消灯している。おそらくその部屋は2年生と3年生が止まっているのだろうとすぐに察しがついた。

智宏が雫とほのか、達也は深雪が泊まっている部屋を見ると部屋の電気が消えている。この時彼女達はまだ地下の大浴場から帰っていないなかった。智宏と達也も深雪達が地下にいるのはしっかり視えている。ただし、場所を把握しているだけで何をしているのかまではわからない。

2人はそのまま部屋に戻ろうとする。

しかし、ホテルの生垣に偽装した侵入防止のフェンスを何者かが突破したのをすぐに感じとった。

それと同時に。

幹比古は自分の術の特訓を密かに行っていた。一年前の事故で力を失い、本来参加するはずだった九校戦を父親に見てこいと言われ、渋々エリカに同行したのだ。

精霊を周りに纏わせている今の幹比古は美月から見れば綺麗な光景だったかもしれない。

（今の僕は一年前よりも力がない。でも完全に失ったわけじゃない！特訓を重ねれば僕だって……ん？）

生垣の方に精霊が反応し、幹比古は精霊を何匹か飛ばす。

すると精霊はバチンと弾けた。

（精霊が!?!しかも『悪』の気配がする……侵入者!?!誰か呼びに行かないきゃ）

幹比古は侵入者を確認すると、急いでホテルに戻ろうとする。しかし足はホテルではなく侵入者の方を向いていた。

（いや、僕でもやれる。やれるんだ!）

侵入者はホテルに向かい生垣に沿って走り出す。幹比古も同じように走り出し、呪符を空に展開する。

すると侵入者は幹比古に気がつき、持っていた拳銃（CADではなく実弾銃）を幹比古に向けた。

智宏と達也も走り出し、侵入者達を視界に収めるが、そこに侵入者と並行して走っている幹比古の姿を見つける。

幹比古は呪符を展開しているが――

「幹比古？」

「智宏、あれでは間に合わない」

「わかっている。俺が足止めする」

「了解した」

智宏は重力魔法で侵入者のバランスを崩させ、タイミングよく達也は侵入者が持つている全ての銃火器をバラバラに分解した。

すると幹比古の術が発動し、侵入者3人を雷撃が直撃した。

雷撃を放った幹比古は、仕留めたと言うよりも自分の無力さに悔いていた。

「いったい誰が・・・あの時僕はやられていたのに・・・誰だ！」

「俺達だ」

「おっす」

「達也、智宏」

幹比古は再び気配のする方向に殺気を出しながら警戒する。

すると暗闇から現れたのは智宏と達也だった。

幹比古はホツとして警戒を解く。達也は侵入者に近づき状態を見ている。

「ありがとう。智宏達が手伝ってくれたんだね」

「まあな。達也、どうだ？」

「死んではないない。幹比古、いい腕だ」

「いいや。発動スピードは遅かった僕の失態だよ」

「ふうん・・・しかし何者だ？」

智宏が気絶した犯人を監視するのを確認した達也は立ち上がり、幹比古をまっすぐみつめる。

達也の口から出たのは励ましの言葉やフォローではなく、幹比古の術に対しての反論だった。

「俺はそうは思わない」

「え？」

「お前自身は何も悪くない。悪いのは術式だ。幹比古の術式は無駄が多い」

「何だって？」

「幹比古の術式には無駄があると言ったんだ。発動方法でもなく、術式そのものが」

「達也！君は吉田家が代々使う魔法が欠陥品だと言いたいのか！」

「幹比古、俺にはわかるんだ」

「何が！」

「俺は視ることと魔法の構造が分かる。視るだけで起動式を読み取って解析する事が可能なんだ」

幹比古はこの達也のセリフに混乱する。

そんな事ができる魔法師なんて聞いたことがない。

もしかしたら自分にはたどり着けない領域に達也はいるのかと感じてしまった。

すると達也は話はこれで終わりだと言うように無理やり話題を変えた。

「今はここまでにしよう。幹比古、警備員を呼んできてくれないか？」

「うん。わかった」

幹比古は『跳躍』の魔法でホテルに戻っていく。

達也はその背中を視線で追いながら周りに気を張る。

「智宏」

「ん？大丈夫。しつかり気絶してるな……誰だ！」

智宏は茂みの向こうに誰かがいるのを感じた。

達也はさほど慌てている様子はなく、誰だか分かっていたみたいだ。

問題の人物はすぐに姿を表す。

「まさか気づかれるとはな。ところで達也、少し容赦ないんじゃないかね?」

「少佐・・・」

「少佐?」

「はじめまして、四葉殿。私は国防陸軍第101旅団・独立魔装大隊の隊長をしている風間です」

「俺は四葉智宏です。あなたが達也の上官ですか?」

「そういう事になるな」

風間玄信。

達也と同じように九重八雲に教えを受けており、アイデアにアクセスしていない状態の達也には風間の気配は察知できない。

「達也。君が他人にあのような事を言うのは珍しいのではないかね?」

「自分はこの程度の悩み・・・卒業しております」

「そうかね」

「少佐。この者達をお願いしてもよろしいでしょうか?」

「構わんよ。基地の司令官には俺から言っておこう」

「ありがとうございます」

「では達也。明日の昼にでもゆっくり話そう。四葉殿、今回の件は・・・」

「わかっています。内密にしておきます」

「すまないな」

「少佐。それでは失礼します」

「ああ」

智宏と達也は風間と別れてホテルに向かう。

途中幹比古と会ったが、巡回中の警備員が先に3人を引つ張っていったと言うと少しだけ不思議そうな顔をするが、すぐに納得して幹比古も部屋に戻っていく。

智宏は達也にさっきの侵入者の事を秘密にしておけと改めて言われた。幹比古にもメールで注意したらしい。

理由は聞かなかつたが、試合前というだけあってわざわざ表に出す義務はないのだと智宏は思ったのだつた。

第15話 九校戦スタート

智宏、達也、幹比古は昨晚は掃除をさせられていたが、それに構わず九校戦は開幕した。

一高最初の出場選手は真由美、競技はスピード・シューティングだ。智宏と達也、深雪が観客席に向かうと、最前列に智宏の知った顔が何人かいた。

「おーい。達也くーん」

「エリカじゃないか」

「ここ、ちょうど3人分取つといたよ」

「すまん」

そこには制服を着たエリカと美月を始めとする一高1年が集まっていた。

3人が座ると、ちょうど競技が始まろうとしていた。今回のスピード・シューティングは予選。一高は最初に前回の成績優秀者である真由美が選ばれた。

真由美はシンプルな形をした小銃形態のCADを持って射撃位置に立つ。

するとほのかが達也に話しかけた。

「知ってますか？七草先輩って『エルフィン・スナイパー』と呼ばれているらしいですよ」

「あたしも知ってる」

「ほのか、会長はその異名をあまり好んではいなさそうだから本人の前では言わないほうがいいぞ」

「あ、そうですよね・・・わかりました」

智宏達は真由美の真後ろに座っている。偶然かそれとも声が聞こえたのか、真由美はくるりと身体ごとこつちを向いた。

周りからは自分の高校の生徒を探しているのだと思われるが、智宏からすれば真由美の目はしつかりと智宏を見ていた。

真由美は一瞬ニヤリとするともう一度射撃位置につく。

CADをかまえると会場は一気に静かになる。するとブザーが鳴り響き、フィールドの横からクレールが発射される。

真由美は次々にクレールを破壊し、生徒達が見守る中で全てのクレールを撃ち抜いた。予選からパーフェクトを出した事により、会場は歓声に包まれた。

ほのかや英美が歓声を上げる中、智宏は達也や深雪と軽く微笑んで拍手をしている。結果がわかつている智宏達には当然の反応なのだ。

智宏が真由美を見ていると真由美はもう一度こちらを向き、一高の生徒が居る方に向けて大きく手を振った。真由美本人は智宏に手を振っているつもりなのだろうが、ファンが見るとファンサービスに見えるみたいらしくさらに歓声（主に男子）が大きくなる。

智宏も目立たないように小さく手を振ると、真由美は少しだけポツと赤くなって会場から出ていった。

智宏は後ろから謎の圧力がかった視線に耐えながら次の選手を見ている。

この視線に気がついているのは達也と深雪、それとエリカだ。エリカは視線の出どころを見るとニヤニヤしている。よからぬ事を企んでいるのかもしれない。

その視線を出している張本人の雫は、嫉妬しながら自分も同じ競技で競うから頑張ろうとしつかり意気込んだ。

一行は次のバトル・ボードの試合会場に向かう。ちなみに摩利が出場するのは第3レース。

バトル・ボードの最高速度は約60km。ボードに乗っているだけの選手に風除けはない。向かい風を受けるだけでも体力はかなり消費するだろう。

「ほのか。体調管理は大丈夫か？」

「大丈夫です。達也さんにアドバイスしていただいた通りにしていますから」

「お兄様、ほのかも随分と筋肉が付いてきたんですよ？」

「ちよ、やめてよ深雪。私マッチョになるつもりはないよ」

達也は真剣にほのかに聞いていたつもりが、口をはさんできた深雪とほのかの会話に思わず吹き出してしまう。

ほのかは達也の反応を見るとますます顔を赤くする。

「深雪く。達也さんに笑われちゃったじゃない」

「笑われたのはほのかのせいだよ」

「し、雫まで・・・いいわよ別に。2人と違って私は達也さんに全部見てもらえないもん」

落ち込むほのかに達也がフォローを入れる。

「ほのか。ミラーズ・バットは俺が調整してあげるだろ。練習にも付き合ったじゃないか」

だがそれは逆効果のようだったらしく、ほのかはますます落ち込んでしまう。

達也はやってしまったと思ったが既に手遅れ。ちよつと気の毒な気分になる。

すると今度は美月が話に入ってくる。

「達也さん、ほのかさんはそういう事を言っているのではないと思いますよ・・・」

「お兄様・・・鈍感すぎます」

「あれ？達也君の弱点発見く」

「朴念仁」

「なっ！」

美月、深雪、エリカ、雫の集中砲火を浴びせられた達也は言葉が詰まって何も言えなくなってしまう。確かに達也は感情のほとんどがないとはいえ、ここまでひどいとは智宏も思わなかった。

智宏は笑いながら視線を戻すと、第2レースが終わって次のレースの選手が出てきた。

「おい。先輩来たぞ」

「ほんとだ……む、相変わらず偉そうな女」

達也から視線を戻したエリカは選手の中に摩利を見つけるとなぜか悪態を吐く。

摩利は既にコースの上に待機している。他の3人がしゃがんでいるか片膝をついているのに対し、摩利は腕を組んでまるで女王のように立っていた。

今4人がいるのは水の上。魔法を使っていないので、ボードの上に待機する時に大抵の選手が片膝をつく。しかし摩利は自信たっぷりな顔でボードの上に立っている。これは摩利のバランスを維持する能力が高い事を表している。

アナウンスが選手の紹介を始める。

摩利の名前が呼ばれると観客席が真由美の時同様他の選手よりも応援の声大きい。

摩利は観客席に手を振ると一高だけでなく他校の女子生徒までが黄色い声を上げた。智宏が耳をすましてみると「摩利様ー！」という声が聞こえる。

「渡辺先輩は女子にも人気なんだな」

「先輩はカッコイイですね。当たり前です」

「ふん。どうせ作ってるのよ」

摩利の人氣に智宏達はそれぞれ感想を言っているが、それをよそに試合が始まろうとしていた。

スタートした瞬間、四高の選手が後方の水面が爆破した。

おそらく他の選手を攪乱するつもりだったらしいが、自分もバランスを崩してしまつては意味が無い。

だが摩利は何事もなかったかのようにスタートダッシュを決め、あつという間に独走状態に入っていた。

摩利はボードと自分をひとつの物体として移動させている。つまりボードは摩利の足としてなつていているのだ。曲がり角を鮮やかにターンし、スピードを維持したまま走り続ける。

智宏と達也は摩利が何をやっているのかに気が付いた。

「なるほど。硬化魔法と移動魔法のマルチキャストか」

「ん？どういう事だ？」

硬化魔法と呟いた達也に真つ先に反応したのはレオだった。

「ボードと自分の相対位置を固定しているんだ。硬化魔法が物体の強度を高める魔法じゃないのは解つてるだろう？」

「使つてるしな。当然だ」

「渡辺先輩は自分とボードを1つの物体として固定している。その上移動魔法を使っているんだ。流石だ」

「へえ・・・そりやすごいな」

レオも自分が得意な魔法故に摩利がどれだけ高度な技術を使っているのかは理解できる。

智宏も感嘆を漏らしている一方で説明を終えた達也は――

「面白いな・・・これなら・・・使えそうだな・・・」

「お兄様？」

「ん・・・？なんでもない」

達也が解説をしている間に摩利はぐんぐん進み、坂を登りきって滝をジャンプ。

着水と同時に水面が波打つ。その波は摩利の後を急いで追ってきた選手を呑み込み落下寸前まで追い込んでしまった。

現在コースを半周したが、もう誰が見ても摩利の勝利は確定だろう。

「戦術家だな」

「ああ」

「性格が悪いだけよ」

エリカは憎まれ口でコメントしたが、それが本心なのかそうでないのかは誰にもわからない。

だが戦術に関しては褒め言葉だろう。

第16話

スピード・シューティング本戦

真由美の試合は午後が続くが、その前に昼食を挟む。

達也は風間に呼ばれていたので、智宏達にCADの調整をするからと言ってホテルの1室に向かっていた。

その間、智宏達は昼食を食べることする。

やはり九校戦のホテルに選ばれるだけあってご飯は美味しい。席は雫、智宏、レオ、幹比古。向かいにほのか、深雪、エリカ、美月の順で座る。

雫は当然のように智宏の隣に座る。しかも椅子を少し寄せてきているのでちよつと狭い。

「あの・・・智宏さん」

「ん？」

「達也さんはお昼ご飯食べなくていいんですか？」

雫の前に座っているほのかは達也を心配して智宏に問いかけてきた。

ほのかは達也の事がホントに気になるらしい。

「大丈夫だと思う。売店もあったし」

「そうですね・・・」

「えー。じゃあほのか、心配だったら達也君と2人きりでご飯食べてきたら〜？」

「ええ!？」

「そうだよ。ほのか、行ってきていいよ」

「もう！雫まで」

「達也君はホントに女子を落とすのが早いわよね」

「いや本人に自覚は・・・って深雪？」

「・・・お兄様が・・・女性を・・・」

「おーい。深雪さん？」

「智宏さん、大丈夫です………ところでエリカ？」

「え」

「あまり余計な事を口に出すと死期が早まるわよ？」

「……あ、オツケーオツケー。ゴメンナサイ」

エリカがほのかをいじっていると深雪が反応し、昼食を凍らせるほどではなかったが周りに霜がくつき始めていた。

エリカもこりやまずいと思っただのか、すぐに深雪に謝る。すると深雪の周りに漂っていた冷気はすっかり消え去った。

その後、智宏はすっかり冷えたお茶を飲んでいると1通のメールが届く。

達也からだった。

「お、達也からメールだ。そろそろ試合が始まるから先に行つてくれだつてさ」

「あら、もうそんな時間？」

「じゃあ行こうぜ」

「あんた走つていつて席取つといてよ」

「んだと？」

「ほら行つた行つた」

「……わかったよ」

レオはエリカに急かされ会場の席を取りに行く。

智宏達も急いで食器を片付けて会場に向かった。

スピード・シューティングの会場まで行くと、運良くいい席が取れていた。

選手はまだ出てきていない。するとタイミング良く風間達と話し終えた達也が智宏達に合流した。

「すごい人気だな」

「お、達也。そりや会長が出るからだろ？」

「なるほど。ところで幹比古はどうした？」

「ミキ？ミキは気分が悪いから部屋で休んでるってさ」

達也は観客席に來ると幹比古がいないのに気づく。

幹比古は昼食はあまり食べていなかった。会場に向かう途中、「気分が悪い」と言つてホテルの部屋に戻つていつてしまったのだ。

そして真由美が会場に姿を見せた瞬間、観客席から嵐のような歓声が発生した。

会場の至る所に設置されているモニターには「お静かにお願いします」とメッセージが映し出される。

智宏は相手選手が少し気の毒になる。このプレッシャーに耐えられるのはよほどの猛者しかないだろう。

試合開始のランプが点灯すると同時に赤と白のクレールが両側の発射機から撃ち出される。真由美の標的は赤色。その赤色のクレールは有効エリアに入つてきた途端に撃ち砕かれた。

「すげー・・・」

『『魔弾の射手』・・・去年より速くなつてるようです』

真由美のプレイにはのかと深雪が感嘆の声を漏らす。

実は戦術的にはあまりおすすめでできない戦い方だ。

先に自分のクレールを撃ち抜くとエリアに残るのは相手のクレールのみ。なので相手は自殺点を心配せずに手当り次第に自分のクレールを粉碎できる。

だが真由美はそんなものともせず自分の技量を見せつけている。

圧倒的な技術力の前に一般の高校生では太刀打ちできないだろう。

真由美の優勝は決まりだ。

本日全ての試合が終わり、智宏は深雪達と別れて自室に戻つて行く。と、階段の踊り場に真由美が立っているのが見えた。

「あれ？会長じゃないすか」

「あ！智宏君！」

「優勝おめでとうございます。さすが会長ですね」

「そ、そう？ありがとう」

「やっぱ……って失礼。電話です……はい、四葉です……うん、うん。わかった」

「誰？」

「深雪からです。夕食を一緒にどうかと」

「あらそうなの」

「では失礼します。お疲れ様でした」

「あ、ちよつと……もう」

智宏は何か言いたげな真由美を置いて夕食を食べに行ってしまった。

真由美は智宏を追いかけようとしたが、これから部屋で軽いお祝いをするのを思い出し、急いで部屋に向かった。

1日目が終わり、予想通りにスピード・シューティングの男女両方の部門で優勝を果たした。

真由美達3年女子にあずさを加えた女性陣は、真由美の自室で簡単な祝杯をあげていた。

「会長。おめでとうございます！」

「あーちゃんありがとう。摩利も予想通りね」

「ああ。今のところ問題ないな。後は身体をしっかりと休めるだけだ」

あずさの祝福に真由美は笑顔で頷き、摩利は明後日の決勝リーグに向けて気合いを入れていた。

しばらく話していると、摩利が真由美にこんな事を聞いてくる。

「なあ真由美。智宏君はどんな反応だった？」

「ええ!？」

「試合が終わった後密会してたんだろ？」

「・・・密会じゃないわ。たまたまホテルの廊下で智宏君を見つけたの（なんでわかったのかしら?）」

「ふーん。どうだかな」

「そ、それでどうなったんですか？」

摩利の鋭い指摘に興味を引かれたのか、あずさも話に入ってきた。

「それが『おめでとうございます。さすがは会長ですね』って。もうちよつと褒めてくれてもいいんじゃないかしら」

「・・・なんかすまん」

「あう・・・と、ところで四葉君の話し方って少しだけ司波君に似てますね」

「そう? あ、でも感情的な部分を除けば似てるかも」

「まあ四葉君と司波君は仲がいいようですし・・・お互い話しやすいのでは?」

「そうそう。それより真由美、お前智宏君をどう思ってるんだ?」

「ど、どうって?」

「好きなんじゃないか?」

真由美は不意に摩利から今のセリフを聞いて数秒間フリーズする。しかしすぐに復帰するが、慌てようがハンパなかった。

「な、なななな何を言ってるの!？」

「智宏君、好きなんだろ?」

「まだ出会って1ヶ月しか経ってないわよ?」

「達也君にも同じ感じで接していたがあれは異性と言うより『弟』みたいな感じかな」

「そうでしょうか? 私にはわかりません」

「間違っではないと思いますよ。たまに会長の2人を見る目を観察していましたが、四葉君を見る時だけ少し輝いてました」

「ちよ、ちよつとあーちゃんとりんちゃんまで……」

この真由美いじりは日付けが変わる数分前まで続けられた。

ちなみに真由美はまだ智宏の事も『弟』だと意識しているが、それが違うというのはいずれ気がつくだろう。

女子トークが繰り広げられてから数時間後、既に寝ている智宏と携帯端末を弄っていた達也の部屋にノックする音が聞こえた。

達也は智宏を起こさないように扉を開ける。そこにいたのは深雪だった。

「深雪？こんな夜に出歩いちやダメだろ？」

「申し訳ございません……」

「とりあえず中に入れ」

「はい」

深雪は達也に部屋へ入れてもらうと、ベッドで寝ている智宏を見て少し微笑む。

もちろん話す時は小声だ。

「智宏兄様は寝てらっしゃるのですね」

「ああ。試合のための体調管理と言っていたが本当は別の理由があるのだろう」

「別の理由？」

「智宏は代理母とはいえ中学生の時に母親を失った。智宏の精神は少しだけ不安定な状態になって、身体に疲れが溜まりやすくなっているのだろう」

「いくら2年経ったとはいえその事実は変わらないのですね」

「智宏は俺達と違って1人だったからな……」

「はい……でも私はもう母上様とは決別いたしました」

「すまん。変なことを思い出させたな」

「いえ、深雪は大丈夫です」

「今の智宏に必要なのは心を完全に許せる存在だ。それも四葉家以外のな」

「智宏兄様・・・」

深雪は寝ている智宏の頬を優しく撫でる。

智宏も寝る時はきちんと警戒しているが、ここにいるのは達也だけと思っているのか全く起きる気配はない。

達也は智宏から深雪に視線を戻す。

「ところで深雪。何をしにここへ来たんだ？」

「あ、そうでした。会長からの伝言です」

深雪は真由美から頼まれていた伝言を達也に伝える。内容は「C A Dの調整が間に合わないから明日手伝ってくれ」だそうだ。

真由美が直接メールしてもよかったらしいのだが、真由美は深雪が頼んだ方が事は上手くいくと考え、なおかつ深雪は達也に会いに行く口実が増える。なので互いにメリットがあるのを真由美からの電話で知った深雪は、喜んで達也の部屋に行ったのだ。

「なるほど。了解した」

「申し訳ございません」

「なに、今の仕事も大事だが俺は深雪を優先させたいんだよ」

「まあお兄様。深雪の方が大切だなんて・・・」

「(何か勘違いをしていそうなんだが)」

深雪は達也の言葉を自動で脳内変換し、それが自分にとって嬉しい言葉にアップグレードされてしまった。

本当に可愛い妹だ。

第17話 クラウド・ボール

九校戦2日目。

達也は第1高校の天幕にいた。

智宏は深雪達と試合会場に行っている。

達也が作業していると真由美が達也の所へやってきた。

「達也君。データは頭に入った？」

「はい。全員覚ええました」

達也が覚えていたのは各選手の想子特性データだ。

真由美は達也の返答に目を丸くする。

「驚いた。それって完全記憶とかいうやつじゃない？」

「俺はこんなものより魔法力が欲しかったんですがね」

「贅沢じゃないかしら？」

達也がポツリと答えると、真由美は何言ってるんだコイツみたいな感じで反論した。しかも両手を腰に当てて頬をぷくぷくと膨らませるおまけ付き。

達也はそのポーズに「それ素だったんです？」と言おうとしたが、言ったら怒られそうだったので、なんとかそのセリフを呑み込んだ。その後、達也と真由美は試合会場に向かう。

真由美がジャンパーを脱ぐと、ミニスカのテニスウェアとしか言いようがないスコートを着用していた。観客席では智宏も真由美の姿に驚いている。

達也はいろいろ思ったが、とりあえず冷静な口調で話す。

「会長。CADは何を使うのですか？」

「いれよ」

真由美が取り出したのはショートタイプの拳銃型CAD。達也のCADと比べて銃身が短い。

銃身が長いほど照準補助を重視しているのだが、真由美には必要ないのだろう。

「達也君。少し押してくれないかしら」

「いいですよ」

達也は目の前にペタンと座りこんだ真由美の背中を押す。すると
なんの抵抗もなく真由美の上半身は足にくっついた。

4回ほど同じ動作を繰り返した後、真由美に「立たせろ」と目で訴えられた達也は、真由美の手を引いて立ち上がらせた。

「ありがと。なんか新鮮ね」

「はい？」

「私弟はいないのよね〜」

「は、はあ・・・」

真由美は何を思ったのか、そんな事を言い出す。

達也はいきなりの事に反応に困っていた。

「達也君って弟みたいよね？」

「そうですか？俺は妹しかいないのでそういう感覚はありませんよ」

「そ、そうよねえ・・・」

真由美は充分なストレッチを終えるとコートに入る。

クラウド・ボールのコートは普通のテニスコートをおよそ2分の1にした大ききで、周りをガラスみたい透明な物で囲われており、ボールが外に行かないようになってる。

数分後、両選手が位置につくと試合開始の音でボールが射出された。

真由美はコート中央に立ったまま動かない。ただ立っているだけ。

いや、動く必要はないのだろう。真由美のコートに相手選手が返したボールが入れるのはおよそ10センチ未満。相手がどの方向から返しても完璧に撃ち返されている。

こうして1点も取られないことなく真由美は1セット目を勝利した。

1セット目が終わり、真由美が相手選手を見送って水分補給に戻ろうとした時、自然と足が止まってしまった。

理由は明白。試合中の視線だ。

別に興味や感心、嫉妬などの視線には慣れてしている。しかしこの1セット目で感じた2つの視線は今までとは違い、初めて体験するものだった。

真由美はその視線の持ち主は智宏と達也だとすぐに察した。

智宏のは真由美の視線、足、腕、呼吸、魔法の動きといったものだけだったが、達也のは「七草真由美」を構成している全てを視られているような気持ちになる視線だった。

真由美は智宏はともかく達也にここまで見られるとは思ってもみなかった。

とてつもない不安感が真由美を襲う。真由美はコートの外に出るのが怖かった。しかしずっとここにいるわけにもいかない。

(・・・よし！女は度胸よ！)

真由美は勇気を振り絞ってベンチに戻る。

「お疲れ様です」

達也はそう言ってタオルを渡してきた。

「達也君。試合はまだ終わってないわよ」

「いえ、終わりです。相手選手がリタイアします」

「え？」

「見てください。相手選手は想子の枯渇で今にも力尽きそうじゃないですか」

「・・・ほんとは。よくわかったわね」

「視てればわかりますよ」

達也の言う通り、相手選手の棄権が会場に告げられる。智宏も相手選手がベンチに戻った時点で結果がわかったらしく、ゆったりとした姿勢に座り直した。

試合が終わるのを確認した達也は真由美とテントに移動する。CADの調整をするためだ。

達也がCADの調整を続けている間、真由美は達也が操作しているディスプレイを観ながら考え事をしていた。

(どうして智宏君は来てくれないのかしら？摩利達はともかく智宏君は暇よね？もしかして他校の試合も観てるのかしら。情報収集は確かに必要だけど・・・顔くらい見せてもいいじゃない)

「先輩？銃口をこちらに向けてないでもらえますか？」

「・・・え、あーごめんなさい」

どうやら真由美は考え事をしながら達也からCADを受け取り、自然に構えてしまったようだ。

たとえば実弾銃であろうが何だろうが、意識せずに銃口を人に向けるのはあってはならない行為。真由美はすぐに謝った。

クラウド・ボールは1日で全てが終わるので当然試合の間は短く、九校戦の中で1日の試合数が最も多い競技だ。

調整を終えた真由美は次の試合のために会場に戻っていった。

その頃観客席では・・・

「あの選手すごいな」

「そうですね。ラケットを持っていながらあんな細かい動作ができるなんて・・・よほど練習したのでしょうかね」

「会長、大丈夫かな」

「大丈夫よ、雫。会長にはお兄様がついているもの」

「そ、そうよ！達也さんが調整してるんだもん！」

「ん？おい皆。会長が出てきたぜ」

レオの言う通り、真由美は会場に出てきている。

パネルを見るといつの間にか真由美の次の試合が始まろうとしていた。

その試合の後も真由美は勝ち続け、ついに、全試合無失点のストレート勝ちで優勝を飾る事ができたのだった。

第18話 花音の実力

女子クラウド・ボールが終わり、智宏達は何人かに分かれて試合を見ている。

男子クラウド・ボールを見に行っただのは紗耶香に付き合ったエリカとそのエリカに引つ張られた美月、幹比古、レオの計4人。

アイス・ピラース・ブレイク（生徒達はピラース・ブレイクと言っている）を観に来たのは智宏、達也、深雪、雫、ほのかの計5人だ。

ピラース・ブレイクは先に相手の氷の柱を倒した方が勝利。その舞台は巨大なものとなり、氷の柱を作る方にも制限があるので男女2面ずつ計4面になり1日で18試合行うのが精一杯だった。

これ以上試合を行うと、大会側はともかく選手にも負担が大きい。この競技はそれだけ魔法力の消耗が激しいのだ。

花音の試合が近づいてきた頃、後ろにいた五十里が席を立った。

「先輩？」

「司波君。上に行かないかい？」

「モニタールームですか。わかりました」

「では私も」

「雫、いこー！」

「うん。あ、智宏さんも来て」

「わかった」

一行は選手が立つ櫓の後ろにあるスタッフ専用のモニタールームへ向かった。

ここでは選手の体調が見れるモニターとフィールド全体を見渡せるほどの窓が設置されている。

試合が終わると次の氷の柱が設置され、櫓から花音が姿を表した。達也は黙っているのは失礼だと思ったのか、五十里に話題を振る。

「千代田先輩の調子はどうです？」

「問題ないよ。少し気合いが入りすぎてるけど……」

「1回戦は短かったそうですね」

「うーん。僕としてはもう少し慎重にいつて欲しかったんだけどね」

「達也さん、五十里先輩、始まるよ」

雫に言われ、2人はフィールドに視線を向けた。

試合開始の合図と共に地鳴りが聞こえた。それは地震ではなく花音の魔法、『地雷原』だ。

千代田家は代々『地雷原』を得意魔法としている。土や岩、コンクリなど、材質はなんでも良く、地面という概念に強い振動を与える事ができるのだ。

花音の最初の攻撃で相手の氷柱が2本倒壊した。

「お、防御魔法か」

「でも先輩の方が早いよ」

相手も防御魔法で対抗するが花音の攻撃の方が早い。いくら防御魔法を氷柱にかけてもその上から塗りつぶすように花音の魔法が発動されている。

およそ半分が倒されると、相手は防御を捨て攻撃に切り替えた。

「ん？相手選手が防御を捨てたな……」

「花音も相手選手も思い切りが良いというかなんというか……花音ってやられる前にやっちゃえっていう性格なんだよね。多分向こうも同じようにしたんじゃないかな？」

「まあ確かに、戦術的には間違っていないですね」

達也と五十里が話している間にも両選手の氷柱はどんどん減って

いき、花音は自分の氷柱が残り6本となったところで敵陣の氷柱を全て倒し終えた。

「勝利！」

花音は笑顔とVサインをつくってこちらを見た。もちろんその相手は五十里。

五十里も少し困った様子だったが、その顔は笑顔だった。許嫁が勝利するのはやはり嬉しいのだろう。

智宏もこのお似合いの2人を見て本当に息が合っているんだなと改めて実感した。

花音の3回戦進出が決まり、花音と合流した智宏達は自校の天幕に引き上げる。

中に入ると少々重苦しい空気が流れていた。

五十里は近くいた鈴音に話しかける。

「何があつたんですか？」

「男子クラウド・ボールの成績がよろしくなかつたのでポイントの計算をやり直しているのです」

「え？」

「1回戦敗退、2回戦敗退、3回戦敗退です。まさかここまで敗退するとは・・・計算外です」

クラウド・ボールも充分戦えるレベルだったのだが、まさかの戦果は来年度のエントリー枠を確保できただけ。智宏達も予想外の展開に驚きを隠せないでいる。

「しかしあと4種目優勝すれば安全圏ですね」

鈴音が計算結果を報告すると天幕内はさらに重い空気が流れた。6種目の内4種目で優勝するのはハードルが高いのだろう。

2日目の競技が全て終了し、智宏達がラウンジに行くところには桐原と紗耶香が座っていた。

一同は気づかれないうちに行こうとしたが、桐原は智宏達に気づいて無理に笑ってみせた。ここまでされると無視するわけにもいかない。

智宏と達也は桐原の所に向かう。

「お疲れ様です」

「よお。四葉と司波じゃねーか」

「大丈夫ですか？」

「いや、3高のエースと当たったんだ。先輩はくじ運がなかったんでしょうね」

「大丈夫だ……にしても司波、お前はつきり言うんだな」

「慰め方を知らないもので」

「すいません、達也はこーいう奴なんで」

「いいさ。あの試合は次に活かせばいいんだしな」

「わかりました。では失礼します」

「ちよ、達也………ったく。あ、壬生先輩」

「何？」

「桐原先輩を慰めてやってください」

「え!？」

「なっ!」

「エリカが言っていましたよ。お似合いじゃないですか」

「あのアマ……!」

「あわわわ」

「失礼しまーす」

智宏の突然の発言に真っ赤になった紗耶香とエリカに怒りを抱きだした桐原を置いて、智宏は達也を追いかけていった。

多分紗耶香はこの後頑張って桐原を慰めるのだろう。

第19話

試作デバイス

部屋に戻る前、達也宛に届いた荷物をホテルのフロントで受け取ってから智宏と達也は部屋に戻った。

部屋に戻って達也が包みを開けるとハードケースが出てくる。智宏が不思議がっている、達也は中身を見せてくれた。

取り出したのは刃がついてなく、長方形みたいに平べったい片手剣。

ただの武器に見えるが、この剣は一応CADなのだ。

達也は今朝これを作って欲しいと牛山に依頼メールを出しており、それが本日中に届いてしまった。無理だったらゆづくりでもよかつたらしいのだが、今となってはもう遅い。達也は忙しい中作ってくれた牛山に感謝した。

智宏が「俺がテストするよ」と言おうと思った矢先、ドアがノックされる。

ドアを開けたのは窓際の椅子に座っている智宏よりも入口より近い所にいた達也だ。

「お兄様、こんばんは」

「深雪か。入っていいよ」

「おじやまします」

部屋に入ってきたのは深雪、雫、ほのか、エリカ、美月、幹比古、レオだ。いくらツインとはいえ機材もある程度置いてあるのでこの人数では部屋が狭く感じた。

雫が窓際にあつたもう1つの椅子を智宏の隣に寄せて座り、ほのかは達也のベッドに腰を下ろす。雫は2人用のソファーだったらびつたり智宏にくっついていたかもしれない。

この部屋は座る場所は少ない。なので近くにあつた机に座ったエリカはすぐ剣に気づいた。

「達也君。これってなに？剣？」

「違うな」

「・・・あ、もしかして武装一体型CAD？」

「正解だ。さすがはエリカだな」

達也はケースの蓋を閉めるとそれをレオに投げる。

「レオ」

「おっと。危ねえじゃねーか」

「それ、試したくないか？」

レオは武装一体型CADと聞き、触りたくてウズウズしていたが、エリカがいるので素直になれなかった。

達也な言葉を聞き、レオは待ってましたと言わんばかりに上手くキヤッチしたケースを開くとCADの柄を掴んで取り出した。

「いいのか？」

「ああ」

この時レオは笑っていたのだろう。

エリカは「わかりやすー！」と言いたげな顔をしていた。

レオは決してバカではない(多分)が、ポーカーフェイスは得意じゃないのかもしれない。

「いいぜ。実験台になってやる」

「じゃあ外にある訓練場に行こう」

「訓練場？」

「達也さん。そんなものがあるんですか？」

「ああ。ほら、ここから見える」

「ふーん」

達也とレオは訓練場に向かっていく。
それ以外は部屋に残ってテストが始まるまで適当に雑談していた。
エリカは興味があるのか机の上から窓際に移動した。
数分後、訓練場に達也とレオが姿を表した。

「あ、達也君とレオが来たわよ」

「どれどれ」

達也とレオは向かい合って何か話している。

おそらく使い方を教えてもらっているのだろう。

達也は周りを見渡す。誰もいないのを確認するためだ。智宏と深雪も周囲を監視しながら達也とレオを見ている。

そして達也がレオから数メートル離れると、レオがCADを構える。

レオが魔法を発動すると、半分の刀身が宙に浮いた。

「浮いた」

「あんな使い方なのね」

「あれを達也が作ったのかい？」

「お兄様が作ったわけではありませんよ、吉田君。あれはお兄様が設計したものを知り合いの工房に頼んで作ってもらったのよ」

「それでも達也が設計したんだ。凄いね・・・」

幹比古がポツリと呟いた。

確かにあれは見事なCADだ。

レオが柄の部分を持ち回すと、その動きに合わせて浮いた刀身も飛び回った。

30秒ほど振り回していると、レオが慌てて手を止める。何かと思ったら刀身が元に戻った。時間切れらしい。

智宏達の誰もが感心していると、雫が話しかけてきた。

「智宏さん」

「ん？」

「知ってはいたけど、硬化魔法って繋がってなくても機能するんだね」

「ああ。硬化魔法の定義は相対位置の固定だからかな。別に物同士が固定されてなくてもいいんだ」

「じゃああれは『飛ばす』って言うより『伸ばす』ね。大剣を振り回す使い方ならあいつにぴったりの武器よね」

「なんだ。エリカも触りたかったのか？」

「違う！」

「あら？ エリカの目はそんな事思っただけさそうよ？」

「深雪まで・・・」

「また実験が始まるようですよ？」

珍しくエリカがからかわれていると、智宏達が話している間も外の2人を見ていた美月が何か新しい動きに気がついた。

智宏は視線を戻すと、また達也とレオの距離が離れている。達也がリモコンを操作すると下から藁人形が三体飛び出してきた。

・・・にしても

「古いな」

「古いよ」

「古いですね」

智宏、雫、深雪がそうコメントした。

いったい誰の趣味なんだろう。

もしかしてこの基地にはああいう趣味の持ち主がいるのだろうか。

「いいんじゃない？ 家にもあーいうのあるし」

エリカは剣術の家だけあって藁人形ではなくてもダミーはあるらしい。

レオは次々に襲いかかる藁人形に向かって魔法を発動したCADを振り下ろす。すると藁人形は衝撃を受けて倒れ込む。

智宏達はテストを続けているレオから室内に視線を戻した。テストは終わったようなもので、もういいだろう。

「智宏さん。あのCADは何に使うのでしょうか」

「うーん・・・先端を刃に変えれば戦えそうだけどなあ」

「九校戦にはいらないかもね」

「し、雫！達也さんが作ったものならいつか使わないと！絶対役に立つよ！」

相変わらず達也に依存しているのを見て智宏は苦笑いをした。

その後満足そうな顔をしたレオをエリカがからかい、言い争いになりそうだった所を達也が止め、この後もしばらくおしゃべりが続いたのだった。

第20話 バトル・ボードの悲劇

九校戦3日目。

今日は男女のピラーズ・ブレイクとバトル・ボードの決勝が行われる。真由美はこれを九校戦前半の山場だと言っていた。

智宏達は試合会場に行こうとすると、後ろからその真由美から声がかかった。

「いたいた。達也君！」

「会長、なんですか？」

「手伝って欲しい事があるの！来て！」

真由美はあっという間に達也を引っ張って行ってしまった。

後ろから達也に向けられた冷たい視線を感じながら、智宏はそのまま会場に向かった。

そして達也が戻ってくる頃にはもう摩利はスタート位置についていた。

智宏は取つといた席を達也に譲り、スタートの合図を待った。

試合開始の合図が出ると摩利は一気に先頭に躍り出る、だがその後ろには七高の選手がびったりくっついてる。

「強いな」

「さすがは『海の七高』ですね」

「去年も同じ光景だったよ」

摩利と七高の選手はもつれ合うように走り、ほとんど差が出ないまま鋭角のカーブに差し掛かる。

この時、智宏と達也は大型スクリーンに目を奪われて小さな異常を見逃してしまった。

「あ！」

「何!？」

「オーバースピード!？」

会場の誰かが叫んでいた。

七高の選手は既に水面を飛ぶように滑っており、このままでは壁に激突してしまう。その先に誰もいなければ……

だが前方には摩利がいる。摩利は斜め後ろからくる気配に気が付き、七高選手を受け止めるために現在の魔法をキャンセルし、ボードを弾き飛ばす魔法と選手を受け止めた衝撃を無くす魔法を発動しようとした。

その瞬間、摩利のボードの先端がいきなり沈み込んだ。それにより魔法の発動が遅れ、ボードは弾いたが七高の選手を受け止めるタイミングが早く、摩利は衝撃を吸収できないまま自身もフェンスに突っ込んでしまう。

フェンスを突き破り、意識がない摩利を見た生徒達は悲鳴を上げ、審判は試合の中止を告げる旗を掲げる。おそらく摩利は受身が取れなかったはずだ。

智宏は自然と立っていたが、達也に止められた。

「達也！」

「智宏。お前はここでみんなを見てくれ。俺が行ってくる」

「……わかった。みんな落ち着いてくれ！深雪、会長は？」

「連絡がつかしました。もう会場に着くそうです」

達也は人混みで溢れるスタンドを誰にもぶつからずにすり抜け、急いで摩利の所に向かって行った。

しばらくして試合は再開し、他の競技も続けられたが、一高生徒と他校の摩利ファンはそれぞれではなくなってしまった。

夕方。3日目全ての試合が終わり、病室にも夕日が差し込んでいく。

摩利は意識に靄がかかったまま覚醒した。

「こ……こは？」

「摩利、摩利。気がついた？」

「……真由美……か」

「よかった。後遺症はないようね」

「あたしはどれくらい意識がなかったんだ？痛っ」

「まだ起きちゃだめよ。肋骨が折れているわ」

ベッドから起きようとする摩利を真由美は素早く押し戻す。摩利も身体の痛みでどれくらいかかっているのかを理解していたので、素直に従った。

「今は魔法で骨を繋いでいるわ」

「定着までどれくらいかかるんだ？」

「全治1週間」

「お、おい。それじゃあ……」

「競技は全て棄権ね」

「そうか……」

「レースなんだけどね。七高は失格、決勝は三高と九高よ。ウチは3位に入れたわ」

「……相手を助けてもあたしが重症を負うなんてな」

「いいえ。摩利の判断は間違っていないかったわよ。あそこで摩利が受け止めていなければ七高の選手は魔法師生命を絶たれていたと思うの。これは達也君も同意見ね」

「さて。なんでアイツの名前が出てくる？」

「摩利をここまで運んで治療に付き添ったのが彼だからよ」
「なっ」

摩利が驚いた顔をしたのを満足したのか、真由美はにんまりと笑っていた。

「着替えの時は廊下にいたわ。でもお礼は言つときなさい、摩利が骨折してるって見抜いたのは達也君なんだから」

「……何者なんだ？」

「怪我人に慣れてる感じだったけどね……じゃあ摩利」

「なんだ？」

「あの時第3者から魔法による妨害を受けなかった？七高の選手を受け止める時に摩利が体勢を崩したのは魔法による水面干渉のせいだと思うの」

「……確かにあの時は不自然な揺らぎを感じたな」

「これも達也君も同意見よ。彼がさつき大会委員からビデオを借りて解析してるところよ」

「高校1年生のスキルでできるものじゃないぞ……」

「五十里君も手伝うって言ってたし……じゃあ私そろそろ行くね。何か思い出したら連絡ちょうだい」

「……ああ」

真由美は病室を出ていく。

ひとりぼっちになった摩利は静かに天井を見つめていたのだった。達也と智宏、深雪が試合の映像を観ていると、ドアがノックされた。深雪がドアを開けると、そこには呼び出した男女の上級生がいた。

「お待ちしておりました。お兄様、五十里先輩と千代田先輩がお見えになりました」

達也は五十里と花音の姿を確認すると立ち上がった。

「先輩方、わざわざすみません」

「いいんだ。こっちから手伝うって言ったんだし。それで何かわかったかい？」

「やはり第3者の介入がありました。確認をお願いします」

「わかった」

「智宏、席を替わってくれ」

「はいよ。先輩、どうぞ」

「うん。ありがとね」

五十里は智宏に椅子を譲ってもらい、達也は解析した試合の映像を五十里に観せた。

シユミレーション映像には、摩利が七高の選手を受け止めようとした場面が映し出されており、水面が陥没した瞬間画面に unknown という文字が表示される。

これはありえない『力』が水中から掛かっている証拠だ。

画面を止め、振り返った五十里の顔は難しそうな表情をしている。

「これは難しいよ」

「啓、どーゆーこと?」

「花音も知ってると思うけど、九校戦は外部からの干渉を防止するために魔法師や機械を大量に設置してあるんだ。だから普通は無理。後は水中に作業員を潜ませれば………って思ったけどそれは有り得ないよ」

「司波君の解析が間違っているんじゃない?」

「それこそ有り得ない。彼の解析は完璧さ」

達也を除いた全員がうーんと考え込んでしまう。

時計の秒針が2週ほどすると、またしてもドアがノックされた。達也が深雪に開けさせると、そこには幹比古と美月が立っていた。

「お兄様、吉田君と美月が……」

「俺が呼んだ。入ってもらってくれ」

「先輩、2人は達也のクラスメイトの吉田と柴田です」

「うん、吉田君は知ってるよ。ところで……」

「2人には事件解決の謎を解くために来てもらいました」

智宏が五十里と花音に2人の紹介をしていると同時に、達也は幹比古と美月に事件の詳細を教えていた。美月がなんか落ち込んでいた。達也が何か言ったんだろうか？

互いに説明が済むと、達也は幹比古に視線を向けた。

「俺と智宏、五十里先輩は水中で何者かが妨害したと考えている。しかし警備が厳しい中では人間以外の何かを使った方がいい。これは智宏もわかってるだろ？」

「ああ。あの監視の中で水中に完璧に姿を隠す事はできないからな」

「……………達也は精霊魔法の可能性を考えてるんだね」

「そうだ」

現代魔法を行使している魔法師は、普通は想子の波動で魔法を感知している。

しかし精霊を使役する精霊魔法は活性を低くすれば現代魔法師は精霊を感知する事は難しい。

つまり遅延発動型の術式が仕掛けられていたとしたら、大会委員の目をすり抜けて妨害した可能性は充分に高い。

達也は全員の顔を見回し、もう一度幹比古に向き直った。

「幹比古。特定の条件で水面を陥没させる遅延発動魔法は精霊魔法で可能か？」

「可能だよ」

達也の問いに幹比古は即答だった。

「お前にもできるか？」

「できる。半月の期間があれば確実に」

次の問いにも即答だ。

精霊魔法を専門としている幹比古にとっては容易い事なのだろう。

「でも渡辺先輩がバランスを崩すほどの威力は出せないよ。七高の選手が突っ込む事故が重ならなければ、子供の悪戯にしかない」

「あれが普通の事故ならな」

「え？」

「智宏」

「おう。みんなこれを観てくれ」

智宏はディスプレイを胸辺りまで持ち上げ、全員に見えるようにした。

達也はリモコンでシュミレーション映像を再生し、衝突する手前で映像を止める。

ここからコマ送りで再生した。

「七高の選手は本来ならばここで減速しなければいけません。しかし、ここでは加速してしまっています」

「・・・不自然ね」

「花音も感じたかい？」

「ええ。こんなミスをする選手は九校戦に出ないわよ」

「俺は何者かがCADに細工したのだと思います」

「細工？」

「事故にあった2人は去年の決勝と同じです。俺が犯人なら2人を1度に潰すチャンスだと思います」

「達也、もしかして君は大会委員の中に作業員がいるって考えてるんだね」

「ああ」

達也が幹比古の言葉を肯定すると、部屋の中が驚愕の声でうまる。誰もが信じられないという顔をしていた。

「お兄様、CADに細工するのはいつなのでしょう?」

「CADは必ず1度大会委員にチェックされる」

「まさか!」

「そうだ。おそらくそのタイミングで細工したのだろうな」

「でも手口が見つかからないわよ?」

「そうだね花音。司波君、なんだかわかるかい?」

「今ところは何も。ただ警戒はした方がいいですね。証拠がないのでは訴えようがありませんし」

「そうか・・・じゃあ花音、会長にこの事を伝えといてくれないかい? 十文字会頭には僕が伝えておくから。司波君もそれでいいよね?」

「お願いします」

「任せて!」

ここで達也達は解散となり、五十里と花音は小走りで真由美達の所に向かつて行った。

それから2時間ほどした後、達也の携帯端末で真由美から呼び出しを受けた。

「達也?」

「会長から呼び出しだ」

「俺も行く。暇だし」

2人は部屋を出てミーティングルームに足を運ぶ。

するとそこで深雪と合流した。

智宏と達也は先程の妨害工作についての話と思っていた。しかしそれなら深雪を呼ぶ必要はない。

考えてもなにも始まらないので、達也はミーティングルームのドアを開けた。

「失礼します」

「ご苦労様……って智宏君も来たのね」

「すみません」

「いいのいいの！むしろ来て欲しかったわ！」

「え？」

「真由美」

「あ、摩利……ごめんなさい。3人とも座ってくれる？」

ミーティングルームには真由美、鈴音、克人、そして怪我人であるはずの摩利が座っている。

智宏達は真由美に勧められるがまま椅子に座る。すると真由美は改まった口調で話し出した。

「達也君と深雪さんに頼みがあります」

「なんででしょうか」

「深雪さん、貴女には摩利の代わりにミラージ・バットの本戦に出してもらいます。そして達也君はその担当エンジニアとして会場に入ってください」

「「え？」」

真由美からのお願いに智宏と深雪が同時に疑問の声を出してしまった。

ただ、達也は冷静だった。

「なぜでしょうか」

「実はな……ミラージ・バットには補欠がないんだ。その場合1年から抜擢する事になる」

達也の質問に答えたのは摩利。

選手として落ち込んでいると思ったが、そうではなかったらしい。風紀委員長として部下をまとめ上げているため、心身共に丈夫なのだろう。

そして摩利は畳み掛けるように達也にふっかけてきた。

「だが・・・君の妹なら優勝できるだろ？」

「もちろんです」

「だな」

「お兄様・・・智宏さん・・・」

摩利の問い智宏と達也は即答した。

深雪は自信をもって頷いた2人を見て顔を真っ赤にしている。

「深雪をそこまで評価してくれるなら兄としてありがたいです。深雪、やれるな」

「は、はい！」

深雪はただでさえ美しい背筋をさらにピンと伸ばし、達也に答えた。

その問いに満足した上級生はさっそく深雪を選手として登録したのだった。

そしてミーティングルームから退出する時・・・

「智宏君」

「なんです？」

「後で私の部屋来ない？同室の摩利が病室に戻るのよ」

「・・・何冗談言ってるんですか。夜更かしはいけませんよ」

「はい（冗談じゃないけどね。でも時間が悪いか・・・）」

真由美に小声で話しかけられたが、智宏は面倒な事になりそうだったので自然に断って部屋に戻った。

第21話 新人戦開始

九校戦4日目。

今日、8月6日から10日までの5日間は1年生のみで競う新人戦が行われる。

現在の総合順位は1位が1高、2位が3高、3位からは混戦状態だ。競技内容は本戦と同じで、その順番も似たような感じだ。

初日はスピード・シューティングとバトル・ボード。雫やほのかが出場する。

「ほのかは最終レースなんだな」

「はい！なので雫と重なりません！」

ほのかはニコニコと笑いながら、「調整しろ」と言いたげな圧力を達也に押し付けている。

達也が担当する競技は女子の3種目。

女子ばかりなのは偶然ではなく、男性陣が嫌がっていたのと1年女子達から強い要望があったからだ。

おそらく達也をチームメイトにアピールしたのは今達也の目の前にいるほのかとか、深雪とかだろうと智宏でも予想はついた。

ぐいぐい寄ってくるほのかになぜか深雪は何も言わない。珍しい事もあるもんだ……。ふと深雪の手を見ると達也に見えない角度でギョツと握っている。我慢しているのだろう。

「CADの調整はできないけど、作戦とかは確認できるから傍で観ているよ」

「ホントですか!?やった!」

この時深雪はクスリと笑い、智宏は笑いで吹きそうになったのをこらえていた。

この時智宏はこう思った。

(達也って意外と女誑しだな)

と。

もつとも、達也も雫と真由美に言い寄られている(?) 智宏には言われたくないと思うが……

雫の競技が始まる前、智宏と達也と雫はCADの調整に来ていた。達也は小銃形態のCADの最終チェックを終わらせて雫に持たせる。何か不具合があるといけないので、早めにバグなどを解決しなければいけない。

「うん。自分のより快適」

「よかった」

「達也さん。卒業したら雇われない?」

「ん?」

「お父さんに推薦しておくからさ。ウチの会社の技術開発部に入つてよ」

「冗談が言えるなら問題ないな」

「冗談じゃないよ」

「残念だが俺は卒業したら入りたい会社は決まってるんだ」

「……そう」

雫の家は十師族のような家柄ではないが、『大富豪』と名乗っているほどの金持ちだ。(周囲からは『北山財閥』なんて呼ばれている)

それに加えて国防軍の兵器のほとんどを北山家で生産しているの
で年間の収入もバカにできない。

雫は残念がっていたが、もし達也が北山家で本格的に動きだしたら
日本の軍事力は一気に高まり、世界から警戒されてしまうだろう。

達也の断りに雫も理解したのか、そこまでしつこく勧誘しなかつた。

そろそろ競技の時間になる。

「雫、時間だ。なにか違和感があったら言ってくれ」

「行ってこい。練習の成果を見せてやれ」

「うん。智宏さん、達也さん。頑張るよ」

雫が会場に向かい、智宏と達也も歩いて会場のベンチまで歩き始めた。

そして観客席には深雪が到着した。

「エリカ、隣いいかしら？」

「深雪じゃん。いーよ」

「ん？智宏はどこに行った？」

「智宏さんはお兄様と下にいるわ」

「……………」

深雪が観客席に座ろうとすると、なにやら緊張しているほのかが視界に入る。

カッチカチに固まっていた。

「ほのか。今から緊張しては身がもたないわよ」

「深雪……うん。そだね」

深雪がほのかの緊張を解いているその少し離れた観客席には真由美、摩利、鈴音が陣取っていた。

怪我人である摩利がここにいってもいいのか。

それは真由美も鈴音も同じ考えだ。

「摩利……寝てなくていいの？」

「あたしは大丈夫だ。もう元気さ」

「そうですね。渡辺さんは頑丈ですし」

「市原……まあいい。ところでアイツのエンジニアとしての腕を実戦で見るのは初めてか？」

「そうね。楽しみだわ」

「北山さん以外の女性選手からもかなり人気を得ているそうですよ」

「ほおー」

摩利の好奇心がむき出しのセリフに真由美と鈴音も頷くしかない。確かに達也の腕前を見るのは初めてなのだ。

そして鈴音の達也情報に真由美と摩利も顔のにやけが止まらなくなってしまう。本人が見たら少し引くかもしれない。

「それと、1年の女子生徒は自分のCADを持ち込んでいるそうですよ」

「あらあら。彼って地道にファンを増やしているのね」

「本人にその意思はないだろうがな」

3年生がこんな会話をしていると、準備が出来た雫がCADを構えた。

そして開始のランプが光る。

光った瞬間、クレーが飛び出してきた。

その瞬間、クレーはエリアの中央で碎け散った。次の2つのクレーも同じく碎け散る。

観客席からは嘆声が止まらない。

「うわ……豪快ね」

「もしかして、エリア全てを？」

エリカがぼつりと呟き、美月の質問にほのかは自信たっぷりに答える。

「そうですね。雫は領域内にある標的に振動波を与えて砕いているんです」

「なるほど・・・」

ほのかが雫の説明をしていると、同じような会話が真由美達のところでも話されていた。

解説役は達也から調整プランを受け取っている鈴音だ。

「——と、まあエリア内に震源を作っているわけです。スピード・シューティングの得点有効エリアは決まっていますから、魔法の範囲も決められます。司波君はそこに注目したのでしよう」

「・・・なんか余計に力を使つてないか？」

「いえ。この魔法は精度よりも速度を重視しています。スピード・シューティングは選手の立つ位置、クレーの強度、方向などが全て同じ。なので北山さんは座標に番号を入力し、それを発動時に指定して目標を破壊します。つまり、引き金を引くだけでクレーは碎けるのです」

解析をしている間にも競技は進んでいく。

撃ち漏らしはなく、ついにパーフェクトで競技が終わった。

「魔法の名称は『アクティブエアーマイン能動空中機雷』。司波君のオリジナルらしいですよ」

「よくもまあこんな魔法を思いつくわね」

真由美は驚きすぎて呆れた声が多く出ってしまった。

それを見た2人は同じような感想だったのだろう。摩利は苦笑し、鈴音は小さく頷いていた。

そして競技が終わった雫。

雫は智宏にまっすぐ駆け寄った。

「智宏さん」

「やったな」

「うん」

「雫」

「達也さん。なんだか拍子抜けだった」

スピード・シューティングの予選通過ラインは命中率80パーセント以上。

あつさりパーフェクトを取った雫には物足りないのだろう。

「どうやら意地悪な軌道設定はされてなかったみたいだな」

「達也さん気にしすぎだよ」

「そうだな。じゃあ別のCADの調整も済ませてあるから、雫も確かめてくれ」

「わかった」

本戦と同じく、予選と決勝トーナメントでは試合形式が違う。

決勝トーナメントは同じエリアに射出されるクレーをより多く破壊した方が勝ちとなる。

相手の魔法に邪魔されない干渉力を競う面もあるので、CADは変える必要があるのだ。

試合の準備に入るため、雫は急いでもう一つのCADが保管されている天幕に向かった。

そして1高の本部では、スピード・シューティングの結果が伝えられる。

「3人とも予選通過か・・・すごいわね」

「今年はレベルが高いのか?」

真由美と摩利が呟く。

予選から決勝トーナメントに出場できるのは24人の内8人。そ

の8人の中に1高選手3人全員が入っているのには驚かざるをえないだろう。

同じくバトル・ボードは男子が2人落ちるが、ほのかの予選突破は
確実だろう。

あずさにはもつと頑張ってもらわなければいけない。

「俺達も技術者の育成に力を入れた方がよさそうだな。このままだと来年は選手の力だけでは勝てまい」

克人の眩きは来年の戦力が減ることを意識した3年生の心境を代表して言ったものだった。

第22話 スピード・シューティング決着

「お、おい。達也、大丈夫か？」

「大丈夫だ」

達也は雫以外にもほとんど同時進行で他の2人のCADも調整している。

雫の試合前になって控え室に駆け込むように入ってきたのだ。さすがに智宏でも心配する。

達也は智宏の質問に短く答え、CADのチェックに入る。話すのは時間が勿体無い。それを智宏もわかっているのか、それ以上聞かなかった。

智宏と雫が見ている中で、達也は急いでかつ正確に調整を行い、変なところが無いのを確認してようやく2人の方を向いた。

「雫。今回のCADは全くの別物だ。何か不具合があったら言うてくれ」

「うん………大丈夫、異常は無いよ」

「そうか」

「達也、お前は休んでいていいぞ。雫の試合は俺が観ておくからさ」

「うん。無理させちゃったから……ごめん」

「雫が謝らなくていい。まあ、そうだな。休ませてもらうよ」

「じゃあ行こうか」

「わかった」

達也を控え室で休ませ、智宏と雫は試合会場に通じる通路を歩く。すると前を歩く雫がぐるりとこちらを向いた。

「雫？」

「智宏さん。2人は勝ったんだよね」

「そうだな」

「じゃあ・・・頭撫でて」

「え？」

「そうすれば優勝できる」

「・・・いいよ（優勝ってちよつと気が早いんじゃないかね？）」

智宏は雫のリクエスト通り頭を撫でた。

もしかすると初めての対戦で緊張しているのかもしれない。

小銃形態のCADを抱えた雫は顔を伏せていたが、普段無表情な彼女が微笑んでる。これは例えほのかであっても見せたくないものだった。

智宏が手を離すと、雫は力強い視線で智宏を見た。

「頑張るね」

「いつも通りにやればいい。行ってこい」

「うん。行ってきます」

こうして雫は試合会場に出ていった。

その頃、観客席では雫の登場を今か今かと待っているメンバーがいた。

なぜか美月が緊張しているが、それを深雪がちよつとだけからかっている。

すると雫が下から出てきた。

「お、雫が出てきた・・・ってあれは」

1番最初に雫を見たエリカはなにかに気がつく。

隣に座っていた幹比古はその視線を追って雫の抱えているCADを見る。

「あ、あれは汎用型？」

「マジか！」

「小銃形態ですか？」

幹比古の驚いた声にレオと美月もびつくりしている。

彼らが驚くのも無理はない。小銃形態の汎用型CADは聞いた事がないのだ。ましてや照準補助が搭載された物なんて。

啞然としている同級生に対し、深雪は得意げにニツコリしていた。

「よくわかったわね。アレは全てお兄様がお作りになったものよ」

「「ええ!」」

「み、深雪？一応聞いてくけど・・・何のために？」

「もちろん試合のためよ？エリカ、何を言ってるの？」

「そ、そうよね〜」

深雪が色々と答えていると、ついに雫の試合が始まろうとしていた。

そして試合開始の合図が鳴った。

同時に両側から紅白のクレールが複数発射され、有効エリアに向かって飛んでいく。雫の色である紅色のクレールは、中央に集まると衝突して砕け散った。

雫は自分のクレールの軌道を曲げるだけでなく、壊さないように相手の白いクレールも一緒に曲げて妨害している。スピード・シューティングは選手を直接攻撃しない限り妨害はありなのだ。

しかし妨害は難しく、自滅してしまうケースが過去にも多く存在している。

残り時間もわずかになってきた時、智宏は雫の勝利を確信した。

(残り・・・30秒)

雫もこの日のための練習で撃っている時に時間が体感で測れるよ

うになった。時間をしつかり確認する事で、『残り時間を気にする』という事が無くなった。現に今の雫には焦りはない。

雫はゴーグルの内側に写しだされた球体の内側に紅いクレーが入り込むと引き金を引く。その瞬間標的は砕け散った。

それと雫は魔法を行使する時のストレスを感じていなかった。

汎用型は処理スピードが遅いため、その分自分の処理能力で補う必要があるのだが、達也の組み上げた術式はそれを全く必要としていなかった。

(あと5秒)

クレーが飛び込む。

引き金を引く。

この2つ動作を雫はしているだけ。

もうカウントをする余裕も生まれる。

(4・・・3・・・2・・・1)

「・・・パーフェクト。やった」

試合は終わり、雫の圧倒的勝利に観客席は歓声に包まれた。

雫は会場を後にすると、試合会場の選手出入口に立っていた智宏のところへ小走りで向かう。

「智宏さん。勝ったよ」

「やったな」

「うん。智宏さんが頭撫でてくれたから」

「や、照れるじゃないか」

「じゃあ控え室に行こ」

「おう」

雫は智宏の前に立って歩き出す。

そして智宏のと比べて雫の小さい手はしっかりと智宏の手を握っていた。

午前12時。

スピード・シューティングの試合は全て終了し、1高の天幕には興奮した空気に包まれていた。

「達也君！快拳、これは快拳よ！」

「会長、落ち着いてください。少し痛いです」

「・・・あ、ごめんなさい」

1高の天幕では達也が真由美に背中をバシバシ叩かれていた。無論達也は痛くもなんともないのだが、さすがにしつこいと思ったのか真由美を落ち着かせた。

真由美もはしゃいでいた自分に気づいたのか、叩くのを止める。しかし達也は解放されなかった。

「でもすごいわ！まさか1位と2位と3位全て独占できるなんて！」

北山さん、明智さん、滝川さん、よくやってくれました！」

「「ありがとうございます」」

「もちろん達也君もね」

「そうだな。君の功績も確かだ」

真由美も摩利、そして雫達選手も達也を称賛した。

すると鈴音も会話に入ってきたが、その内容はとんでもない事を言い出した。

「ちなみに、北山さんの魔法は『インデックス』に採用するかもしれないらしいですよ」

インデックス。この正式名称は『国立魔法大学編纂・魔法大全・固有名称インデックス』と呼ばれている。

これは魔法の百科事典みたいなもので、新種の魔法はここに載る可能性もある。それは魔法を開発している者にとっては名誉な事だ。

しかし――

「そうですか。では開発者は北山さんの名前を入れといてください」

「え、ダメだよ！」

「俺はあの魔法を使用する時は長い時間を必要とする。これでは使えないのと同じだ」

「でも……」

「雫」

「智宏さん？」

「達也がそう言ってるんだからいいじゃないか。登録したのは雫、でも開発したのは達也。周りが知らなくても俺達が知っていればいいんじゃないか？」

「そうね。魔法が使えないレベルの達也君より実際に最初に使用した北山さんの名前を書いた方がいいかもしれないわ」

「会長………わかりました」

達也の言った通り、新種の魔法を開発したとなれば、その実演を求められる事が多い。しかしそれが『使えない』となれば他人の開発を横取りしたと疑惑を持たれてしまう。

達也はそれを回避したかったのだ。

雫も渋々納得し、この場は収まる。

そして午後の試合に向けて天幕の中は再び動き出したのだった。

一方、3高のミーティングルームでは緊急の会議が開かれていた。進行は一条将輝と吉祥寺真紅郎だ。

「じゃあ将輝は1高の優勝が彼女達の個人技能じゃないと思ってるのか？」

そう言った疑問に将輝に視線が集中する。
将輝はその全員に肯定するように頷いた。

「ああ。確かに北山って子の魔法力はずば抜けていた。だが他の2人は違う」

「他に要因があるって事？」

「そうだ。ジョージ、なんだと思う？」

「エンジンア・・・だね」

「正解。おそらく相当の腕前だったんだな。優勝選手のデバイスは汎用型だった」

将輝の言葉に吉祥寺以外の1年生に大きな衝撃が与えられる。
信じられなかったのか、反論も上がる。

「小銃形態の汎用型なんて見た事ないわ！」

「メーカーのカタログにもないぞ？」

「市販はないだろう・・・でも実例はある」

「そんな・・・」

「去年の夏にデュッセルドルフで発表があったよ。でも結果は惨敗。その試作品は実戦に耐えるほどのレベルじゃなかったんだ」

「そうだったのか・・・」

「さすが私達のブレーションだわ」

吉祥寺の説明に一同が重い空気に包まれると、将輝がまとめにはいった。

「今回の北山選手の使ったデバイスは汎用型。もしそれがエンジンアの腕で実現できているのなら・・・そいつは1種のバケモノだ。俺達はCADだけでも2、3世代分のハンデを負っていると考えてほしい」

「将輝がそこまで言うなんて」

「そうですね。気を引き締めていきましょう」

こうして達也は3高からバケモノ扱いされ、警戒の対象となる。

将輝達もこれから達也が担当するかもしれない競技には1層注意が必要だと考えさせられたのだった。

第23話 ほんかの予選

ほんかの出場する第6レースの時間が近くなってきている頃、智宏は達也を先頭に深雪と雫と会場の端っこにいるほんかを訪ねていた。すると、ほんかのエンジニアであるあずさが智宏達に気がついた。

「四葉君と司波君、どうかしたんですか？」

この時のあずさは小動物のような動作をしており、智宏だけでなく達也まで一瞬頬が緩んでしまった。あずさもからかわれてきた経験から何かを察したようだ。

「・・・2人共、今バカにしませんでした？」

「気のせいです」

「滅相ありませんよ」

「本当ですか？」

「「本当です」」

「・・・いいです。それより何をしに？」

「俺は特にありませんよ。暇だったんで達也の付き添いをしてます」

「用があるのは俺です。何かお手伝いする事がありますか？」
「えー！」

達也の「手伝いたい」というセリフをどこで聞いていたのか、ほんかが飛び出してきた。

ほんかは達也に抱きつかんばかりに詰め寄り、ほんかの立派なモノが達也にくつつきそうになっていた。

「CADの調整をお願いしますー！」

「こちら。中条先輩に失礼だろうか？」

「あ……すいません」

「気にしないで。そんなつもりはないのはわかってますし」

ほのかはあずさが気を悪くするのに気が付き、急いで頭を下げた。対するあずさはちよっとお姉さんっぽい喋り方で首を横に振っている。気にはしていないようだ。

一方、その姿を見て智宏は笑いをこらえるのに必死だった。達也も同じだろうが上手く隠せている。あずさには見つかриたくない。

そして試合時間の直前になったので、智宏達は急いで観客席に向かった。

観客席に座った時にはほのかは既にスタート位置についている。

今回達也はCADに関しては何もしていない。強いていえば、達也が指示したのは1点のみ。それさ濃い色のサングラスみたいなゴーグルを着けることだった。

「そう言えば光井さんって光学系の魔法が多いですけどなんででしょう？」

「バトル・ボードは魔法を水面に干渉させるのはルール違反ではありません。まあ、見てればわかりますよ」

「……どういうことでしょうか？」

あずさは達也にサングラスを渡され、すでにサングラスをかけている智宏達を見ながら自分も着用した。

そして、ついに予選第6レースのスタートが切られる。

その瞬間、ほのかは光学系魔法で水面に光を反射させた。

サングラスをかけていない観客や選手が一斉に目を背け、ほのかの隣にいた選手はバランスを崩して落水してしまう。

「よし」

「達也の作戦って……」

「これですか？」

嬉しそうな声を出した達也に智宏と深雪は少し呆れた声で問いかける。

ちなみに、もうサングラスは必要ないので全員外して達也に返した。

「確かに反則ではないけど・・・」

さすがに雫も非難じみた声で呟いている。

あずさは素直に感心しており、達也から色々説明を受けていた。

その間にもほのかは2位との差がどんどん離れていき、コースを半分回ったところで勝負の結果は決まったようなものだった。

1高本部でもその様子はモニターに映し出されており、そこで真由美達が観ていた。

「決まり・・・だな」

「もしかしてこの作戦考えたのって達也君？」

「そうですよ」

真由美の質問に鈴音が即答する。

が、すぐに訂正が入る。

「正確に言えば、作戦の内容を私に伝えてきたのは光井さんですが作戦自体を考えたのは司波君だと言っていました」

「まったく・・・」

「でも決勝トーナメントはどうするのかしら？同じ作戦という訳にはいかないわよ？」

「そこは司波君も考えているようですよ」

真由美達に色々言われているとは思ってもいない達也は、ゴールし

たほのかを見て少し眉を寄せて呟いていた。

「うーん……ちよつとほのかには悪かったか？」

「達也？」

「いや、あの目くらましが無くてもほのかはスピードで勝てたなつて」

「あー……」

「で、でもリードを奪えたんですからー！」

達也はあずさから励ましの言葉を受け取るが、相変わらず厳しい顔をしている。克人といい勝負なのではなからうか。

ちなみに達也が気にしているのは、これで他校からほのかが完全にマークされてしまう事だ。

しかしあずさは「そんな事ありませんよ」とフォローしてくれる。

その後、智宏達は下に降りていった。

するとほのかはウエットスーツのまま達也に駆け寄ってきた。勢いで抱きつきそうだったが、ウエットスーツを着ているのを自覚しているのなんとか抑えられた。

「達也さーん！勝ちましたよー！」

「そ、そうか。おめでとう」

「ありがとうございますー！」

達也がほのかを落ち着かせようと手を前に出したが、ほのかはそれを握手と勘違いして達也の両手をガツシリ握り、嬉し涙で潤んだ瞳が達也に向けられた。

こんな経験は達也はしていないので、どうすればいいかわからなくなってしまうた。

「私……私……いつも本場に弱くて……試合で勝ったことが無かったんです！」

「え・・・」

次のほのかセリフにまたしても固まってしまった達也は目だけ雫に向ける。

すると雫は小声で「小学校までの話だよ」と教えてくれた。

その間達也には智宏の「何やってんだこいつら」という視線と深雪の氷のような冷たい視線が突き刺さっているが、達也はなんとか耐えていた。

新人戦1日目終了し、1高の幹部3年生である真由美、摩利、鈴音、克人はミーティングルームで今日の結果について話し合っている。

真由美達は今日の結果にため息をついていた。

「男子は森崎君が準優勝・・・あとは予選落ちか」

「まずいな」

「ああ。だが女子でリードを取れたのだ。まずまずと言ったところだな」

「そうですね。悲観しすぎるのはよくありません」

「でも男子と女子で逆の成績になっちゃったのよ？」

ミーティングルームに再びため息でいっぱいになる。

真由美達は最後の九校戦のため、もう後がない。

しばらく沈黙が続いていたが、摩利が口を開いた。

「十文字、今年はまだ間に合わない。九校戦が終わったら男共をしごいてやってくれ」

「・・・仕方あるまい。わかった、多少厳しくしてでも指導をしよう」

「そうね。私達が後輩に残せるものは残しておかないとね」

「しかし明日は四葉君の試合です。男子の部は彼がなんとかしてくれるでしょう」

「十師族の一員としての実力を発揮してもらわなければな」

克人の言葉に真由美は頷く。同じ十師族として同感したのだろう。先輩にある意味重く期待されている智宏はそれに気づくことなく部屋で寝ていた。明日の試合に備えてしっかりと睡眠をとっておく必要がある。

作業を終えて作業車から戻ってきた達也は、部屋の前に深雪がいることに気がついた。

達也は少し小走りで深雪に近寄り、少し厳しめな声で叱りつける。

「こら、今何時だと思っている。明日は試合だろ？」

「申し訳ございませんー！」

深雪は達也に叱られると、肩をビクツとさせて恐る恐る達也の顔を見る。

そしてすぐに深々と謝る。

これだけならよかったが、この後の態度に達也は困惑していた。

「さあ、部屋に……深雪？」

「お兄様。少し……少しだけお時間をもらえませんか？」

「……………いいよ。ただし、智宏は寝ているから静かにな。お入り」

「はい」

深雪は達也に促され、部屋にはいる。

寝ている智宏の前を通り過ぎ、達也のベッドに腰掛ける。

達也はそのまま深雪の前に立った。

そして深雪は泣きそうな目で達也を見ながら小声でこう言った。

「お兄様。『インデックス』を断られたそうですね」

「……………そうだ」

「なぜですか？それが叔母様のご意思だからですか？」

「ああ。もし『インデックス』に載せられてしまったら身元を調べられてしまう。シルバーならともかく『司波』として調べられたら……俺と深雪が四葉と繋がっている事がバレる」

「……」

深雪は何も言わない。達也の言っている事は理解しているのだ。

もし四葉の人間と知られたら今まで通りの生活ができなくなる。ほのかやエリカ、レオ達だって事実を隠していた事で離れていつてしまいかもしれないし、本家に影響があるようなら東京から本家に戻らなければいけない可能性もある。前者は智宏がいるため回避できるかもしれないが。

「俺は四葉の『ガーディアン』だ。表舞台の人間じゃない。それに叔母上は俺が脚光を浴びる事を許すとは今のところ思えない」

「……」

「まだ、まだ俺には力がない。タイムンなら叔母上を倒せるかもしれない。分解は流星群に相性がいいからね。でもそれ以上に強大な相手がいる」

「智宏兄様……」

ここで深雪は口を開いた。

隣のベッドで寝ている智宏を見ながら。

「そうだ。智宏が俺の障害となるなら排除しなければいけない。今の状態の智宏ならなんとか勝てるはずだ」

「そんなー！お兄様と智宏兄様が……いえ、すみません」

深雪は「殺し合うなんて」と言いたかったが、言えなかった。いや、言いたくなかった。

彼女は智宏も1人の兄として慕っている。約3年とはいえ智宏は深雪を大事にしてくれた。達也の事も認めてくれた。

そんな兄達が本気の戦いをするなんて想像したくないのだ。もちろん深雪は達也の勝利を確信している。だが達也も無傷では済まないだろう。

深雪は我慢できなくなつて達也に抱きつく。

「今は従うしかない。もし、俺が叔母上と智宏を倒したとしても四葉は屈服できない。次々に障害が現れるだろう。だが、智宏が当主になれば話は別だ。智宏は母上からも信頼されているし逆に俺達の事も信頼してくれている」

「わかつております……時が来たら、私は智宏兄様をご支持いたします」

「ああ、そうしてくれ。全ては再来年の正月に決まる」

「はい……お兄様、深雪だけはお兄様の味方ですから。例えば世界を敵に回したとしても、深雪はずっとお兄様の傍におりますから……」

深雪は達也の背中に手を回し、少し力を込めて抱きつく。

すでに時計の針は0時を過ぎている。だが達也はもう少しだけ深雪の好きにさせてやろうと思った。

そして少し前から深雪の存在を感じ取っていた智宏も、半覚醒のまま今の話を聞いてこう決断する。

(達也と深雪だけは母上と敵対してでも守ってみせる)

と。

第24話

新人戦。ピラース・ブレイク

新人戦2日目。

この日は智宏や深雪達が出場するアイス・ピラース・ブレイクがある。会場には氷柱が次々と並べられていき、2面全ての設置が完了した。

男子の部は女子が終わってから。なので智宏は深雪と雫の試合を見ることができる。

智宏は達也と控え室に向かった。

「あ！おはようございます！」

「おはよう。エイミー、眠れた？」

「うん！でも緊張で早起きしちゃった」

「エイミー」

「何？達也君」

「調整するからヘッドセットを着けてくれ。眠れてないんだろ？」

「うげ・・・お母さんより鋭い」

元気いっぱいの英美に3人は挨拶をかえすが、智宏と達也は英美の目が無理矢理覚めているように感じた。

英美は達也に言われるがままヘッドセットを着け、達也は計測器の所に座る。

ディスプレイに映し出される計測結果に達也の顔は険しくなっていく、その顔を見た英美は縮こまってしまった。

慌てて深雪が達也の肩を軽く叩く。

「お兄様」

「・・・すまん。もしかしてエイミー、機械を使って寝ないタイプか？」

「そうなの！もしかして司波君も？」

「ああ。だが試合前は安眠導入機を使っても寝なきやだめだよ」

「はい」

英美は親に叱られている子供のようには返事をした。

「エイミーも寝不足で負けたって見られたくないだろ？」

「お、お願いします！もし負けたらみんなのオモチャにされちゃうよー！」

セリフだけならいい。

だが、そのセリフを胸と股の所を押しえながら言われると「ん？」と思ってしまう。

智宏と達也は数秒ほど固まってしまった。

智宏より早く回復した達也は深雪に引き気味に問いかけた。

「深雪・・・疑いたくないんだが、部屋で何してるんだ？」

「へ、変な事言わないでください。やましい事などしておりません！智宏さんもそんな目で見ないでください！」

「そうか、わかった」

「.....」

その後第1試合が始まり、英美は少々危なかったが、なんとか勝つことができた。今頃彼女はカプセルベッドで熟睡しているはずだ。

そして第5試合。

今智宏は雫の控え室にいる。達也はCADの調整を終わらせたらスタッフ専用のモニター室に行ってしまった。

智宏は英美の時に達也が第一声に言った言葉を飲み込もうと思っただが、結果的に無理だった。

「雫ちゃん」

「何？」

「その格好で出るの？」

「そうだよ」

アイス・ピラース・ブレイクにおいて、必要なのは遠隔魔法のみ。肉体は使用しないので、服装も公序良俗に違反しない限り自由なのだ。自分の気合いが入る服装をしてよいとは言え、アイス・ピラース・ブレイクは1種のファッションショーにもなってしまうている。

ちなみに、花音は私服と変わらないスポーツウエア。英美は黒と白を基調とした乗馬服スタイルだった。
で。

問題の雫なのだが、雫は振袖だった。

「それ動きづらくない？」

「遠隔魔法だけだし大丈夫。それに襷たすきも使うから」

「・・・わかったよ。気張って行ってこい」

「うん。じゃあ・・・もう一度頭撫でて？昨日みたいに」

「はいはい」

「あと予選を突破したらお願いがあるんだけど」

「どんな？」

「今は言わない。でも智宏さんに無理はさせないお願いだから安心して」

「・・・いいよ。できる範囲で叶えよう」

「約束だよ？」

「ああ」

こうして雫は会場に上がっていった。

何か約束させられてしまった智宏はひとまず急いでモニター室に向かう。

というか雫の決勝トーナメント行きは確実に言っているほどなので、お願いを聞くのは絶対だと思われる。

智宏がモニター室に到着すると、相手も待機しており、後は開始の合図を待つだけとなる。

会場の両サイドにあるポールに青い光が灯ると、両選手はCADを操作した。

雫がまず行ったのは、自分の氷柱を対象にした『情報強化』で、相手選手が1拍遅れで魔法を発動して襲いかかるも雫の氷柱は微動だにしない。

その隙を突き、雫は魔法を発動させると相手陣地の氷柱が3本粉々になった。

(なるほど、振動数の操作はお手の物か。やっぱ達也がアレンジしたらこうなるんだ)

智宏が無言で雫を見つめていると、既に敵の氷柱は4本まで減っていた。しかも雫の氷柱はまだ12本全て健在。

寝不足だった英美と違って雫は万全の状態で試合をしている。攻撃と防御の魔法を高いレベルで使いこなしていた。

攻撃に全力を注ぎ終わって相手選手の氷柱に攻撃を仕掛け、なんの抵抗もなく残った全ての氷柱も砕け散った。

対して深雪の試合は最終ゲーム。

智宏はこの後すぐに試合なので残念ながら上で観ることはできない。控え室のモニターで観ることになってしまった。

智宏が1人寂しく控え室に座っていると、後ろのドアが開いた。

「誰……って雫か。昼食はいいのか？」

「食べてきた」

「そうか。なんでここに？」

「智宏さんが1人だと思ったから。一緒に観よう」

「マジで？ありがとな」

「ううん。あ、深雪出てきたよ」

雫に言われてモニターを観ると、確かに深雪が出てきた。が、その格好は雫をも凌駕している。

深雪の衣装は白の単衣と紅色の袴。白い紐かりボンみたいなもので髪を後ろでまとめている。『巫女』と表現した方がいだろう。

その美貌からは神々しい光を放っているように見え、会場は騒然としている。可愛そうなことに相手選手も完全に吞まれてしまっている。

従妹にすっかり見とれていた智宏は脚をつねった雫によって現実
に引き戻された。

「痛っ………雫?」

「なんでもないよ。ところで智宏さんはどんな服装にするの?」

「それは見てのお楽しみ。お、始まるぞ」

深雪はライトが光り始めると敵陣をすつと見据えた。

そして試合が開始され、その直後フィールドに2つの減少が起こった。

深雪の方は極寒の吹雪、一方相手陣地は灼熱の熱波。その熱の暑さは尋常ではなく、相手の氷柱は溶け始めている。しかも全てだ。相手選手も冷却魔法を使用しているが追いついていない。

智宏の隣に座っている雫は信じられないと言いたげな顔をしている。

その頃モニター室でも似たような事が起こっていた。

「これってもしかして……」

「インフェルノ氷炎地獄なの?」

摩利と真由美が呟くのを達也は後ろで聞いていたが、その目はしっかりと深雪を観ていた。

この魔法は今のところ深雪しか使えない難易度Aの高等魔法。周りの人間には難しいようだが、深雪にとっては当たり前前に仕える魔法

なのだ。

既に敵陣地の気温は200℃を超えており、水溜りも出来ていた。すると深雪は魔法を切り替える。

その瞬間、敵陣の氷柱は1つ残らず爆散して崩れ落ちたのだった。

深雪の氷柱が無傷なまま・・・

第25話 智宏の予選

アイス・ピラーズ・ブレイク予選男子の部。

智宏は予選第1試合に出場するために控え室にいた雫を観客席に行かせて入れ替わりで入ってきた達也にCADを任せている間、智宏はいそいそと着替えていた。上級生のピラーズ・ブレイクを覗いているとやはり気合い入れに着替えている男子もいるのだ。

智宏が着替え終わるとちょうど達也も調整が終わったみたいだ。

達也は智宏の服装を見ると、少しだけ驚いていた（多分）。

とりあえず理由を話すと、納得した感じで観客席に戻っていく。

時間になり、智宏は係員に案内されて櫓の機械に乗った。

すると足元が上昇し、会場に両選手を持ち上げていく。至る所に設置されているモニターに智宏の名前が映り、会場に智宏が姿を表すと1高と他校の一部女子からは黄色い声、そしてほとんどの他校生からは動揺するようは声が上がっている。

達也達も智宏を見守っていた。

「あー！智宏君よー！」

「会長、落ち着いてください！」

「雫、智宏さんが来たよ！」

「うん」

「いやー、男も着替えるって言ってたけどありやスーツ・・・だよな？」

そう。レオが言った通り、智宏は黒の夏用スーツスタイルだ。ただしネクタイはしておらず、紫色のワイシャツのボタンも上から2つは外している。

ちなみに相手選手は花音と似たようなスポーツウエアだ。

観客席では、真由美がいつもと違う智宏を覗いてテンションが上がっている。

一方の雫は冷静そうに見えたが、実は雫も気持ちが高ぶっていた。

「あの紫色のワイシャツも似合ってるわね。写真写真・・・」

「会長、試合に集中できないです」

「あら？そんな事言っても説得力ないわよ。北山さんだって右手に持っている物は何かしら？」

「これは智宏さんの試合を録画して後で見直すため。ダメだった所を見つけて改善させます」

雫と真由美がカメラについて言い合い、雫が優勢だと思われたその時、隣に座っている親友から余計な横槍が入ってしまった。

「あれ？雫、智宏さんをアップしてちゃ試合全体が撮れないよ？」

「・・・」

「北山さん？どういう事かな？」

まさか親友に裏切られるとは思ってもみなかった。いや、ほのかの天然というのはわかっているのだが、めんどくさい事になってしまった。

すると達也が2人をなだめ始めた。

「2人落ち着いて。試合が始まりますよ」

「ふん。ところで達也君、なんで智宏がスーツなのか知らない？」

「俺が聞いたところによると、あのスーツと紫ワイシャツは四葉家の当主からのプレゼントらしいですよ」

「へえ・・・四葉真夜さんから」

「達也さん、あのワイシャツの色は？」

「確か・・・母親がよく着ている服があの色で、同じ色の服を着てもらいたかったらしいんだ・・・と言っていたな」

「そうなんだ」

「ずいぶんと愛されてるのね」

大会が始まる1週間前。智宏が真夜にアイス・ピラーズ・ブレイクに出場する事を言うと、その翌日にスーツとワイシャツが家に届いた。

真夜は智宏が着るものが自由な競技に出ると知って、大急ぎで服を用意させていた。もちろんあのワイシャツも真夜が特注で用意させた物。本当に親子で同じ色の服を着てみたかったらしい。

そしてその真夜がいる四葉家では・・・

「彩音さん！智宏さんよ！」

「は、はいご当主様」

「よかった・・・ちゃんと着てくれたのね」

大型テレビを真夜が彩音を隣に座らせて観ている。

彩音は真夜の隣に座るなど恐れ多くてしたくもなかったのだが、真夜の命令と葉山の無言の圧力により従わざるを得なかった。

真夜はともかく上司の葉山にも座らされたとは言え、逆らうなどもつてのほか。とりあえず大人しく従ったのだ。

そして場所を戻し九校戦試合会場。

智宏は腕を組んで試合の開始を待った。

騒がしかった会場も、赤い光が灯ると静かになる。

黄色、青色に光が順番に灯ると、試合開始のブザーが鳴り響く。

智宏は相手よりも早く魔法を発動できた。

発動した魔法はもちろん『流星群』。重力核でもいいのだが、一瞬で終わらせるなら流星群の方が効率が良いし、重力核を使わずにどこまでやれるかという実験でもあった。

自陣と敵陣を夜が包み込み、智宏の頭上から24個の光が敵陣の水柱に撃ち込まれる。相手は急いで攻撃魔法から防御魔法に切り替えて発動するも、流星群は障壁類が通じないので容易くすり抜けた。

氷柱には2発ずつの光球を撃ち込んである。1発目で完全に壊せなかった時の保険に0.1秒ほどタイミングをずらして2発目を発射したのだが、その必要はなかったみたいだ。

実際相手の陣地全域に光球のシャワーを降らせればそんな心配はないが、氷柱の位置が固定されている上に数も増えない。ならば的確に狙った方が早く決まるのだ。

相手陣地には崩れ落ちた氷柱の残骸が転がっており、相手選手は呆然としていた。

審判が慌てて試合終了の合図を出すと、会場は歓声が巻きおこった。

その頃、3高では智宏を改めて警戒している男達がいた。

「将輝、やっぱり使ってきたね」

「ああ・・・噂通り防御は通じないな。それ以前に流星群の威力は高かった」

「うん」

「対策はどうする?」

「そうだね・・・対策と言うよりも勝つには彼より先に魔法を発動するしかないね」

「難しいな。司波深雪みたいに全体を攻撃できればいいが、ウチにはそこまでの選手はいない。せいぜい1列まとめて破壊できる程度だ」

「それでも充分強いけど・・・」

「うーん」

3高のトップ2人が決勝トーナメントで当たるであろう智宏の対策を練っている時、警戒されている事を知らない智宏は次の試合に備えていた。

それも終わると、智宏は控え室で着替え始めた。

ズボンを履き、制服の方のワイシャツのボタンを留めているとドアがノックされる。

智宏は急いで残ったボタンを留め、裾をズボンの中に入れてからドアを空けた。

するとそこには雫と真由美、達也がいた。

「智宏さん。おめでどう」

「智宏君、とりあえず今日は圧勝ね」

「ありがとうございます。．．．なんでここに？」

「俺が行くと言ったら付いてきたんだ。智宏、CADはどうだ？」

「なるほどね．．．．．ん、CADか？問題なかったぞ」

「わかった。でも不具合が見つかったら言ってくれ」

「りよーかい」

智宏はこの日2試合行い、結果は両方共圧勝で試合時間も最長40秒だった。40秒になった理由は、2試合目の時だけ相手選手が予想以上の攻撃を仕掛けてきたので対処に時間がかかってしまったから。これでも相当早いですが、智宏は『防御』について少し考えを改めていた。

明日の試合は3回戦をやって決勝トーナメント。なんとしても勝たなくてはならない。なので智宏は着替えが終わると早々と部屋に戻り風呂で身体を癒した。

夕食までまだ時間がある。

智宏がベッドに寝っ転がりながら携帯端末をいじっていると、部屋に誰かが近づいてくる気配を察した。人数は2人。間違いなくこの部屋に向かってくる。

するとドアがノックされ、智宏は2人で行動する人達を予想しながらドアを空けた。

「はい．．．って会長と渡辺先輩」

「よかった、起きて．．．て」

「そうだな。やあ四葉．．．ん？」

「ども。どうかしましたか？」

「．．．．．」

ドアを開けたら真由美と摩利が立っていた。

2人は智宏を見ると数秒固まった。なぜなら、目の前にいる智宏はパンツの上からバスローブを着ただけの格好だったから。

「ん?」

「と、智宏君、ふふふ服は?」

「え・・・あ、すいません。着替えてきます」

「別にいいわよ!ちょうど近くを通っただけだし」

「え? (真由美の奴・・・初めから四葉が目的だったじゃないか)」

真由美の顔は年頃の女子らしく赤くなっていたが、その目はバスローブがはだけて見えている智宏の上半身をしっかりと視ている。

隣にいる摩利はそんな事は気にせず、心の中で真由美に突っ込んでいた。

真由美は1人でこの部屋に来てもよかったのだが、直接で1人だと緊張して行けないと言い始め、摩利が巻き添えをくらってしまったのだ。

「それで何か?」

「・・・あ、そうそう!今日の夕食の事なんだけど、場所はいつもと違う所だから」

「わかってますよ・・・あ、もうすぐでしたね」

「智宏君が起きてるか確かめに来たの。今日の主役がいなくちゃ何も始まらないもの」

「お手数をお掛けしました。このまま向かうのでしたらやっぱり着替えてきます」

「わかったわ」

「真由美も部屋に入れば?」

「摩利!?!な、何を言ってるの!?!」

「ははは、冗談さ」

真由美が摩利にからかわれているのを尻目に、智宏はドアを閉めて

着替え始めた。

そして数分後、制服に着替えた智宏は真由美と摩利と一緒に夕食会場へ向かったのだった。

第26話 宴会。そして新人戦3日目

九校戦の食事はあらかじめ決まっている。

朝食はバイキング、昼食は各校の天幕などで弁当、夕食は3つの食堂を学校別に利用している。学校別の理由は夕食時には作戦を話し合う場合でもあり、情報漏洩を防ぐためだ。

ちなみに今日は九校戦の中間。

とりあえず今日までおつかれ、明日からも頑張ろうという意味を込めて宴会等が開かれる。

現在1高の1部は明暗がはっきりしている所があった。

明るいのは1年女子、暗いのは1年男子だ。2年生と3年生は別々に分かれて食事をしている。彼らにも同じような経験があったのか、何も言っていない。ひとまず男子はそつとしいといてやるらしい。

そして明るい女子の中には智宏と達也が混じっている。達也は深雪に引つ張られて、智宏は単に暗い雰囲気の場合にいたくなかったからだ。

「深雪のアレ、すごかったよね！」

「うん！『インフェルノ』って言うすごい難しい魔法なんですよ？先輩達もびっくりしてたよ」

「エイミイもよかったね。服も似合ってたよ」

「雫も振袖姿素敵だったよ。相手をガンガン追い詰めてったのはかっこよかったなあ」

「四葉君は圧倒的だったよねー」

「うん！瞬殺だった！」

「『流星群』だっけ？私初めて見た！」

「もしかすると一生見られない魔法だったかもしれないし」

女子新人戦のクラウド・ボールはまあまあの成績だったのし対し、

今回のピラース・ブレイクは1高女子選手が全員3回戦進出、男子も智宏が3回戦進出だったので、女子達はお祭り騒ぎだった。

アイス・ピラース・ブレイクの3回戦はこれまで勝ち抜いてきた男女それぞれ6人がこれに当たる。よってこの半分を1高女子が占めているのはまさに快拳としか言いようがない。

男子は智宏だけ。ただし3回戦も余裕で通るだろうと各校から予測されている。

ちなみに他の男子共はお通夜状態で、どよーんとした空気が漂っている。

「ねえねえ、司波君。雫のやつって『共振破壊』のバリエーション？」

「正解」

達也にも他の1年女子が話しかけてきた。

いきなり話しかけられた達也は内心たじろぎながらも素っ気ないが柔らかい声で回答する。

「いいなあ雫は。私もやってもらえればよかったかも」

「それは問題発言よ。先輩に失礼ではないかしら？」

「・・・はっ！」

彼女は雫を羨ましがったが、深雪の言葉の意味を理解して慌てて上級生のエンジニアに顔を向ける。その上級生は笑っており、手を振っていた。

何もなかった事に安心し、上級生に大きく頭を下げるとまたこっちに帰ってきた。

「あーびっくりびっくり」

「CADのせいにするからだよ」

「だね。反省します」

「でもそれほど司波君の調整がよかつたって事だよね！」

「うん！四葉君のもそうだよね？」

「ああ。達也の調整は実家のエンジニアよりも腕がいい」

再び女子達は達也を褒めちぎっており、その様子を見て深雪は本当に嬉しそうな顔をしている。

智宏も数人の女子から質問を受けていると、後ろから裾を引っ張る感覚があった。

なんだ？と思つて振り向くと、それは飲み物を片手に持った雫だった。

「ん？雫、どした？」

「智宏さん、明日はお互い決勝に行けるといいね」

「そうだな。雫も頑張れよ」

「わかつてる。約束忘れないでね」

「予選突破したらな」

「うん」

こんな感じで各校盛り上がつてたりそうでなかったりしている頃、横浜の中華街では怪しげな男達が豪華な中華料理を囲みながら苛立しげな顔をしていた。

「新人戦は3高が有利ではなかったのか？このままでは1高が優勝してしまう」

「うむ。せっかく渡辺摩利を追い込んだのに・・・これでは意味がない」

「このままでは裏カジノで我々が大損してしまう」

「そうとも。その場合・・・ボスが我々を肅清するかもしれぬ」

「死、だけならいいがな」

恐怖に震えてろくに食事もとれていない謎の男達の頭上には、うねって渦をまく龍の掛け軸がぶらさがっていた。

新人戦3日目。

アイス・ピラース・ブレイクの会場には昨日よりも観客席が埋まっている。

その目的は智宏と深雪を初めとした1年生だろう。

「すごい人だな」

「そうねえ。やっぱり智宏君かしら?」

「それよりも司波じゃないか?」

「・・・そう?」

「そうだろ。それに何だか大学関係者が多いんじゃないか?」

「昨日の試合を映像だけじゃ満足できないのね」

今はピラース・ブレイク3回戦の第1試合。深雪の番だ。

智宏は深雪の試合と、重なっている女子バトル・ボード準決勝第1レースのほのかの試合どちらを観るか迷ったが、深雪が「どうぞ行ってください」と言ってくれたので、智宏は今バトル・ボードの観客席に座っている。達也はもちろん深雪についている。

深雪が圧倒的な力で相手陣地を蹂躪している時、ほのかもスタート位置についていた。

「・・・ん?」

「う、うーん」

「これはねえ」

「なに唸ってるんだ?」

後ろで唸っている智宏と美月、エリカに振り向いたレオが少々呆れた顔で問いかけてくる。

「いや選手全員黒メガネって変じゃない?」

「エリカちゃん・・・せめて『ゴーグル』って言わなきゃ」

そう。

智宏達は選手4人全員が黒いゴーグルを付けているのを観ていたのだ。

すると幹比古も話に入ってくる。

「当然だよ。光井さんの幻惑魔法対策なんだから」

「えー。ミキ、それって達也君の思うツボだよ？」

「それじゃあ次は水しぶき？」

「いや違うだろ」

「達也ならもつとすんごいの考えてるかもしれないぜ？」

達也の作戦を予想し始めたレオ達を智宏は苦笑しながら見ている。そして第1レースはスタートした。

観客の中にはサングラスを着用している人もいたが、それは意味がなかった。なぜなら今回、前回ののような閃光がなかったから。

その分ほのかはワントempo出遅れてしまった。

「あー！出遅れた!？」

「いや、追いついてる！」

ほのかは前にいた2人を最初の直線で抜かし、2位の状態で鋭角カーブに侵入した。

その時、ほのかの前にいた選手が妙な動きを見せる。なんとカーブ手前で大きく減速してコースの中央をターンしたのだ。

ほのかはその隙に前の選手を抜かし、カーブの内側を通過してトップに躍り出る。他の選手も慌ててほのかを追いかけた。

「な、何が起こったの？」

エリカが驚くのも無理はない。

本来ならば選手はコースを曲がる時、できるだけ減速を抑えて内側

を回らなければならぬ。しかしこのように中央を走るなどあつてはならない事だ。

「コースに影が落ちたような気がします」

「あ、まただぞ」

今度は緩やかなカーブ。

しかしそれもほか以外の選手はコースの中央を走っており、よく目を凝らしてみると、確かに美月の言う通りほか近づいた瞬間に影が落ちている。

このカーブでほかと2位の選手の差はさらに広がった。

「あ、なるほど」

「四葉君、何かわかったの?」

「つまりだな・・・」

智宏はエリカ達に達也の作戦を説明し始めた。

達也の作戦は簡単だ。水面に影を作るだけ。

前回のほかの試合で閃光対策をしてきた選手は黒のゴーグルを付けている。しかしそれは視界がいつもより暗くなっている事を意味しており、ほかほかカーブに影を落とさせることにより相手選手はカーブが影が落ちた所で終わっていると錯覚する。

本戦で摩利と7高選手が事故を起こしたため、その分余計にカーブを意識してぶつからないように大きく回ってしまうのだ。

説明を受けたエリカ達は納得したようにうなづいている。

その頃、1高の天幕でも鈴音が似たような説明をしていた。

「これは相手選手に本来の実力を出させない戦術でもありますね」

「光井さんに影響はでないのですか?」

「その練習はしたらしいですよ。司波君はコースを身体で覚えろと言っていましたし」

「なるほど？この戦術は正攻法ってわけかい。相変わらず変なことを考える奴だな」

桐原はここにいる全員の感想を口に出し、それをみた鈴音達は堪えられずに笑ったのだった。

その後、ピラース・ブレイクで深雪や雫、英美に続いて智宏も第3試合を行って圧勝。大きな歓声に包まれながら櫓から降りる。すると控え室には、達也ではなく雫が座っていた。

「あれ？達也は・・・？」

「達也さんなら深雪のところに行っちゃよ」

「そうか」

「智宏さん。私予選突破したよ」

「ああ、すっかり観てたぞ」

「約束・・・」

「おうよ。何を御所望ですか？」

「ん」

予選を突破した雫は智宏に向かって両腕を広げるようにして突き出した。

「え？」

「ぎゅーってして」

「え!？」

「抱きしめて」

「それでいいのか？」

「うん」

「わかった」

智宏は雫を望み通り（互いに一瞬抵抗したが）に抱きしめる。

雫は小柄なので智宏に抱きしめられると、すっぽり智宏の身体に収

まった。

1分くらいそのまましていると、雫は両手を智宏の背中に回した状態でポツリと話し出した。

「あのね。私この後試合があるんだ」

「え？残ったのは1高だけなんだろう？」

「うん。でも、もしかすると試合をするかもしれない」

「そうなのか？」

「この後試合をするかって聞かれたら絶対にやるよ」

「・・・深雪と当たるぞ」

「それが目的」

「なら俺は止めない。頑張れ」

「うん」

この後2分ほどこの体勢でいたが、智宏も雫もさすがに恥ずかしくなってきたので抱擁を解いた。

さて控え室を出ようとなった時、雫の携帯端末がメールが届いた着信音を発した。

内容は真由美からで、至急集まるようにとの事だ。

2人は控え室を出ると、智宏は1度部屋に、雫は真由美の所に向かったのだった。

第27話

アイス・ピラーズ・ブレイク決勝

新人戦の女子ピラーズ・ブレイクは、午後の決勝リーグ全てが1高の選手で埋まっていた。

そんな中、決勝に進出した1高女子、深雪と雫と英美、エンジニアの達也は、真由美によってホテルのミーティングルームに集められている。

「さてと、手短かに言うわね。まず3人共、決勝リーグの独占するのは初めてです。よくやってくれました。この件に関して大会委員会から提案があり、決勝リーグをやらなくていいので3人同率優勝にしてはどうかとの事です」

真由美の言葉を受けて深雪達は顔を見合わせる。

「これは貴方達に決定権があります。どうしますか？」

深雪、雫、英美の反応はそれぞれだ。

ここで2人が深雪と戦っても勝てるわけがない。それをここにいう誰もがわかっている。

その中でも英美が先に手を挙げた。

「あの・・・私体調があまりよろしくないんです。だから決勝リーグは棄権でお願いしたいです」

「そう。2人は？」

「私は戦います。深雪と戦う機会なんて滅多にありません」

「こう言っていますけど深雪さんは？」

「北山さんがそう言うなら、望むところですよ」

「わかりました。では大会委員の方には私が伝えておきます。達也君も頑張ってね」

「はい」

真由美が席を立ててミーティングルームを出ていくと、達也も2人のCADの調整のために作業車に向かった。

深雪と雫はそれぞれの控え室に向かい、英美も観客席を目指した。30分後。

ピラーズ・ブレイクの会場にはこの大会でも一番と言っているほどの観客が座っていた。ちなみに智宏は決勝のため、控え室で試合を観ている。

その中でも達也はどちら側でもない関係者席の一番前に座っている。心の中では2人共応援していたが、やはり深雪の所に行きたかったらしい。

「達也君。もしかして深雪さんの方に行きたかったの?」

「ええ」

「・・・はつきり言うんだな。シスターコンプレックスというのを知っているかい?」

「それがどうしましたか?」

「あら。開き直っちゃったわ」

「重症だな」

達也は真由美と摩利の下級生イジメ(?)に少し頭を悩ませながらも、その視線は深雪に向けられている。周りがなんと言おうが、この兄妹のシスコン、ブラコンっぷりに勝る人はいないだろう。

騒がしかった会場も、深雪と雫が櫓に上がってきたと同時に静まり返る。

巫女と振袖スタイルの2人から締め付けられるようなプレッシャーが出ており、会場にいる誰もが2人に注目しているのだ。

ライトが試合開始の合図を告げると、両者は同時に魔法を撃ち出した。

雫の陣地には熱波が、深雪の陣地には地鳴りが襲う。

だが、互いに防御する魔法を使って自分の氷柱を強化するなりガードするなりしており、一進一退の攻防に見える。

しかし――

(さすがは深雪・・・)

雫の『共振破壊』は完全に止められており、逆に深雪の熱波に対しての防御は完璧ではなかった。

このままでは氷柱が溶けてしまう。持久戦は不可能だ。

(だったらこれで！)

雫は振袖の右の袖口に手を突っ込み、あるものを引き抜いた。

それは短身の拳銃型CAD。試合前に達也が雫に持たせた切り札と言っているいい代物だ。

銃口は深雪の氷柱に向けられ、雫は狙いを付けて引き金を引いた。その様子にさすがの深雪も驚いている。

(雫!? 貴方2つのCADの同時操作を会得したの!?)

拳銃形態のCADからレーザーのような物が放たれ、深雪の氷柱に直撃した。

「フォノン・メーザー!?!」

真由美もこの高等魔法には驚いている様子。

深雪はこれまで1度も自分の氷柱にダメージを負わずに勝利してきた。

だが、ここでようやく深雪の氷柱に魔法が直撃した。その事実は変わらないだろう。

智宏も控え室でうっかり指から外していたCADをおっこどしそ

うになる。まさか深雪の防御を本当に突破するとは思ってなかったからだ。

氷柱に一撃を負わされたが、それでも深雪の動揺は一瞬だった。

(雫。残念だけど……………)

深雪は新しい魔法を発動し、雫の陣地に冷気の霧をぶつけた。

『『ニブルヘイム』だと？ここは魔界じゃないんだぞ？』

摩利の驚きを通り越した呆れ声には達也以外の誰もが同じ意見をもっており、深雪の次の手を待っていた。

冷気はやがて雫の陣地を通り過ぎ、その跡の氷柱には液体窒素の滴が付着している。

深雪はニブルヘイムを解除すると今度は再びインフェルノを放った。

雫の陣地にはまた熱波が押し寄せ、陣地は急激に温度が上昇。氷柱の周りに付いていた液体窒素は一気に気化し、その膨張率は700倍にも及んだ。

雫の氷柱は全て吹き飛び、深雪は決勝戦においてもその圧倒的な力を周りに見せつけたのだった。

会場は試合終了の合図を出し、深雪が優勝した事を継げるまでしんと静まっていた。

1高だけでなく他校からも歓声に包まれた深雪と雫を乗せた櫓は、ゆっくり下がっていく。

智宏は雫の所に行きたかったが、この後決勝戦のためどうしても行けない。控え室に呼び出しの放送がかかると、智宏は櫓の上に立った。決勝戦の相手は3高。あ的一条将輝ほどではないが警戒する必要がある。決して油断してはいけない。

だが、その警戒も杞憂に終わる。

今の智宏には防御魔法の技術が足りていない。そのため相手陣地

に2発ずつではなく、まんべんなく光球のシャワーを浴びせたのだが、3高選手の氷柱はなんの抵抗もないまま粉々になり、最後まで圧倒的な力を見せて試合は終了した。

もちろん智宏も無傷とは言えない。1本の氷柱が破壊されてしまった。

しかし勝利は勝利。智宏は新人戦男子アイス・ピラース・ブレイクで優勝した。

智宏が優勝した瞬間、1番彼の優勝を喜んでいたのは達也や深雪でもなく、四葉の本家にいる真夜と彩音だった。真夜は今にも飛び上がりそうな勢いで、彩音はホツとしながら智宏の優勝を祝ったのだった。

辺り一面紅く染まり、ホテルから夕焼けが綺麗に見える頃、智宏はホテルの1室に向かっていた。

目的地に着くと、そこにはほのかが立っている。そう。智宏が向かったのは雫とほのかの部屋だった。

「あ、智宏さん」

「ほのか、雫はいるか？」

「はい……あの……」

「ん？」

「私の代わりに雫を慰めてやってくれますか？」

「いいよ。もとよりそのつもりで来たんだ」

「じゃあ私はその辺にいますから」

ほのかは部屋の鍵を開けると智宏を中に入れ、どこかに歩いていった。

智宏が部屋の中に入ると雫はベッドの脇に座っており、近づくとこちらに振り向いた。

「智宏さん？」

「よっ」

「ほのかは？」

「どっかに行ったよ」

「そっか・・・智宏さん、優勝おめでとう」

「ありがとう。隣、いいか？」

「うん」

智宏は雫の許可を得ると隣に腰を下ろした。雫はほのかが自分に気を使ってくれたのに気が付き、どういった表情を出せばいいのかわからなくなっていた。

2人は黙っていたが、数分すると智宏が口を開いた。

「雫・・・残念だったな」

「悔しかった」

「・・・そうか」

雫は俯いて淡々と智宏と話していた。

が、いつもクールな雫にも限界があったのか、我慢できなくなり俯いたまま智宏に抱きついた。

雫は智宏の胸に頭を預け、手は軽く背中まわしている。智宏もポーンと預けられた頭をゆっくり撫でた。

「最初から勝てるなんて思ってたなかった」

「・・・深雪だからな」

「それでも戦いたかった。でも・・・でも、手も足もでなかった。少しくらいやれると思ってたのに」

「・・・」

「悔しい・・・悔しいよお」

「でも深雪に一撃入れたじゃないか。それだけでも凄いなと思うぞ」

「うん・・・」

雫は珍しく感情をもらい出して泣いている。

智宏は自分の服が涙で濡れてしまったが、涙が理由で制服が汚れるのが嫌になるほど変な奴ではない。後で魔法で乾かせばいい。なので雫の気が済むまでずっとそのままでいた。

しばらくすると、雫は身体を預けたまま顔を上げた。その顔にはもう涙はない。

「智宏さん」

「ん？」

「ありがとね」

「・・・おう」

智宏にお礼を言った雫の表情は外から入ってくる夕日に照らされてとても可愛らしく、その微笑んだ表情に智宏は少し見とれてしまった。

「もう大丈夫。皆の所に行こ」

「わかった。深雪も心配してるだろうし・・・ほのかとも後でゆっくり話すといい」

「そうする。ほのかに優勝おめでとうって言ってなかったし」

智宏と雫はベッドから立ち上がり、智宏は雫の着替えが終わるまで部屋の外で待ち、制服に着替えた雫とほのか達に会うためにラウンジへと向かったのだった。

その後、智宏が雫の部屋で色々やっていた事が何故か真由美にバレ、強制的に夕食の席を真由美の隣にさせられてしまった。

第28話

新人戦メイン競技

九校戦七日目にして新人戦四日目。

今日の競技は男子のみのモノリス・コードの予選と花形競技と言っているミラージ・バットが行われる。

九校戦の中ではメイン競技と評されているため、観客席はどちらの競技も多くの人が集まっていた。

智宏はミラージ・バットの会場に来ている。

観客の視線はコスチュームに身を包んだ選手向けられているが、一部の視線は別の方向を向いている。

その視線の先を追いかけると、そこには達也がいた。

「うわ・・・達也に刺々しい視線が・・・」

達也に敵意が籠った視線が送られるのも無理はない。スピード・シューティングとピラース・ブレイクで達也が担当した選手が上位を独占しているからだ。

調べればどんな人物がCADを調整しているのかはわかるし、他校のエンジニアだって興味を示すのは当然だろう。

今から始まる競技に出るのはスバルだ。

今彼女は自信たっぷりな顔で達也と話しており、準備が出来たのか達也に軽く合図してフィールドに向かった。

スバルも自分が予選を勝ち抜く事がわかっていているだろう。他校の選手が向ける警戒した視線に臆さず堂々していた。

試合の結果、スバルと第2試合に出場していたのは両者共に予選を勝ち抜いた。

この戦果に「よし、これで決勝に行けるぞ」と智宏も喜んでいた。

このまま第3試合も観ようと思っていた矢先、携帯端末にメールが入る。

それは真由美からだった。

今モノリス・コードでも試合をやっている。勝利の報告かもしれないが、それにしてはなぜメールで伝えたのか。後でもいいはずなのに。

智宏は少しだけ嫌な予感がし、メールを見た。

そこには衝撃的な内容が書いてあり、智宏は急いでミラージ・バットの会場から出て1高の天幕に走った。

天幕に着くと、慌てた様子の1高スタッフがそこらを走り回っている。

「智宏君！」

「智宏さん！」

智宏の到着に気がついたのは真由美と深雪だ。

雫もその声で天幕の中にあるパネルの前から智宏の所に歩いて来た。

智宏は真由美達の慌てように驚いた。

何があったのかを聞こうとしたが、智宏の後に天幕に入ってきた人物が先に事情を聞いた。

「何——」

「何があった？」

「——って達也。寝てたんじゃなかったのか？」

「いや、ついさつき起きた。それで何が？」

「実はモノリス・コードで事故があったのよ」

「会長、あれは事故じゃない。明らかなオーバーアタック、ルール違反だよ」

「雫・・・まだ故意のオーバーアタックだと決めつけるのは早いわ」「そうですよ北山さん、疑心暗鬼は口にはいけません。深雪さんの言う通り決めつけるのはだめよ」

智宏と達也は真由美の上級生らしい言い分に驚いた。もちろん表

情には出さない。

すると真由美は2人を半目で睨んだ。

「2人共・・・なんか失礼な事考えてない？」

「いいえ、全く」

2人はなんか似たようなことが前にもあったなと思いつながら真由美の鋭さに動揺した。

真由美はすぐ否定した2人を追求しなかったが、今はそれどころではない。

「とりあえず何があったのか説明するわね」

真由美の説明によると、森崎達が出場しているモノリス・コードで事故があったらしく、3人共重症を負い病院に運ばれたそうだ。

市街地フィールドの廃ビルの中にいた時に『破城槌』を受けて瓦礫の下敷きになってしまったらしい。

『破城槌』は室内で使用すると殺傷ランクAになる。特に今回のようなコンクリートでできた建物で使用すると、いくら防護服を着ていてもコンクリートの塊が落ちてきてはあまり意味がない。

森崎達の怪我は全治2週間はかかるそうだ。

しかしここで疑問が生じる。

なぜ大体はバラバラで行動するモノリス・コードで3人一緒にやられたのか。

智宏のこの質問には雫が答えてくれた。

「試合開始直後に奇襲されたんだよ」

「開始直後？」

「うん。『破城槌』はともかく索敵をしていたのは明らか。誰が観てもフライングだって断言できる」

「そうなのよ。大会委員は慌てていたわ」

「このままだとモノリス・コード自体が中止になりませんか？」

達也の推測に誰もが同意したが、真由美は首を横に振っている。

「いいえ。4高だけ棄権になるかもしれないわ」

「しかし1高にはもう選手はいないので？」

「だよな。補欠もないし・・・」

「その件に関しては十文字君がなんとかしてくれるそうよ」

現在克人は大会本部に詰めかけている。どうやら4高の不正行為と大会委員のスタート位置のミスを理由にして競技を続行させようと試みているらしいのだ。

だが、例えば競技が続行可能になっても選手がいらない。他の1年男子を出しても優勝する事はできないだろう。

智宏が出場する手もあるが、智宏は他の男子と話した事はあるけれどそれ以外の事は知らない。チーム戦であるモノリス・コードにおいて味方の事をよく知らないままの出場は危険なのだ。

「ねえ、智宏君と達也君。話したい事があるんだけどいいかしら？あつちのスペースで」

真由美は甘く誘惑するような声で智宏と達也を誘った。

おそらく大会関係の事だと彼らは思ったが、後ろから来る数人のきつーい視線で何とも反応しなかった。

ひとまず天幕の奥に通された智宏と達也は、そこにある椅子に座った。

真由美もCADをいじってから2人と対面して座る。

「遮音障壁ですか・・・」

「聞かれたくない話なんですかね？」

「そうよ。今回の1件も何者からの妨害工作だと私と十文字君は考

えているわ。2人はどう思う?」

真由美からの質問に智宏と達也は顔を見合わせ、頷いてその問いに智宏が答えた。

「俺達もそう思います」

「やっぱりね」

「手っ取り早く4高からCADを借りて達也に解析させる。というのもあるんですが・・・無理でしょうね」

「智宏の言う通りですね。バトル・ボードの時、7高がCADを見せてくれませんでしたし。そっちには期待していません」

「そう・・・」

2人からの意見を聞いて、真由美は少し落ち込んでしまった。CADを解析すれば詳しい事がわかるのだろうが、わざわざ敵に味方の武器を渡すような行為は絶対にしないだろう。

こめかみに指を当てて目を閉じている真由美だったが、しばらくすると再び問いかけた。

「じゃあ春の1件の報復かな?あの組織ならウチの生徒に手を出してきてもおかしくないわ」

1高は春に『ブランシユ』という組織から攻撃を受けた。

ブランシユはその拠点ごと潰され、身を隠すしかなかった。彼らが計画を潰した1高に恨みを持っていると思えてしまうのも無理はない。

その質問に対して今度は達也が答えた。

「春とは違います」

「なんで?」

「九校戦の開幕前夜に拳銃で武装した3人の男がいました。目的は

ホテルへの侵入でしょう」

「初めて聞いたわよ?」

「口止めされてましたし。一応奴らは俺と智宏が取り押さえました。素性について調べた所、どうやら香港系の犯罪シンジケートみたいです」

「え!?なんで!」

「それは俺にもわかりません」

「会長、とにかくこれは他言無用でお願いします」

「わかったわ。でも二人とも無茶な事はしないでね」

真由美に一応口止めしたが、正直期待はしていない。克人や摩利に喋ってしまふ可能性が高いのだ。

しかしその2人なら冷静に判断してくれるだろうと信じて何も言わなかった。

同時刻。

横浜の中華街ではまだ男達が会議を続けていた。

「1高はどうだね?」

「うむ。モノリス・コードは棄権だな」

「よかった。モノリス・コードを失うのは奴らに大きな影響を与えるだろう」

男達は笑顔で頷きあった。だが、その笑顔の裏にはまだ安心しきっていない自分達が存在している。

1高では全員に改めて森崎達が事故ったのを伝え、動揺しないように真由美が呼びかけた。

智宏と達也も普段通りに、何事もなかったかのように行動していたのだった。

第29話 達也の選手入り?

ミラージ・バットの会場では、ほのかとスバルは達也の適切な指示を受けてフィールドに立った。

2人の顔には緊張はなく、達也からアドバイスを与えられたおかげで自信たっぷりだった。

午前は青空だった空も今では星がみえるくらいに綺麗になり、フィールドの円柱の上には6人の少女が立っている。

ミラージ・バットには2つほど必要なスキルがある。1つは球体の投影位置まで素早く跳ぶ。1つは球体の位置を把握する。

これを満たせれば試合には勝てるのだ。

試合が始まり、ほのか達の頭上に赤い球体が投影される。1番早く動いたのはほのかだ。

次に先程より低い位置に球体が現れる。ほのか以外の5人が一斉に跳び上がるが、その中で最も早かったのはスバルだった。

「は、速い」

「なんであんな複雑な運動ができるんだ!」

「やっぱり奴が・・・」

他校のエンジニア達は達也と自分達との技術力の差を見せつけられ、すごく悔しがつている。他校の選手と違ってほのかとスバルの起動式は小さく負担も少ない。

拳句の果てに誰かがこう口走った。

「くそ・・・まるでトーラス・シルバーみたいじゃないか!」

その声に真っ先に反応したのはあずさだった。

「え?」

「あーちゃん?」

どうやらあずさはフリーズしていたらしい。

真由美が心配そうに声をかけてくれた。あずさが「何でもないです」と答えると、真由美は不思議そうな顔をして試合の観戦に戻った。あずさも試合に集中しようと思ったが、他の事で頭がいっぱいだっ

た。

(トールラス・シルバーみたい？そう言えば『インフェルノ』や『フォノンメーザー』の起動式を簡単に組み込めるなんて……トールラス・シルバー本人じゃなきや無理なんじゃ?)

ここまで考えつくと、不意にいつか達也が言った言葉を思い出した。

——もしかしたら俺達みたいな日本の青年かもしれないね——

この言葉が頭の中で再生されると、あずさは1つの考えに至る。しかしそれは信じ難い事だった。

(まさか……まさかまさか!)

そんなあずさをよそに試合の1ゲーム目が終わり、結果はほのかとスバルの圧勝となった。

結局この後の試合も勝ち進み、ほのかとスバルのワンツーフィニッシュで新人戦ミラージュ・バットの幕は降ろされた。

1高女子がミラージュ・バットの優勝を軽く祝っている頃、達也はミーティングルームに呼び出されていた。

中に入ると真由美と克人、摩利、鈴音などの幹部に桐原や五十里、それに智宏がいた。

「達也君、今日はよくやってくれました」

「ほのかとスバルが頑張ってくれたからですよ」

「現在私達の順位は1位。しかしモノリス・コードを棄権すれば2位になります」

「そういう事だ。司波」

「はい」

「森崎達の代わりにモノリス・コードに出ろ」

真由美達の用件は達也が予想した通りのものになった。

智宏も「やはり・・・」と思い3年生を見ると、その顔は冗談を言っているようには感じられない。彼らは本気だ。

達也は内心ため息をつきながら質問を真由美にふっかけた。

「質問しても?」

「いいわ」

「なぜ自分が選ばれたのですか?」

「達也君がふさわしいと思ったからよ」

「君は風紀委員の活動で色々戦果を上げてるし、実戦の腕は1年生の中でもトップクラスだろうな」

「モノリス・コードで肉体的な攻撃は禁止されていますよ?」

「魔法のみでも君は強いじゃないか」

話に入ってきた摩利は彼女なりに達也を説得し始める。

反論したが、それも上手く丸め込まれてしまい、達也には逃げ場はなかった。

しかも摩利はチラリと智宏の方を向いて「何か言え」という視線を浴びせた。

智宏も逆らう意思はないので、自分なりの意見を言った。

「俺から見ても達也の戦闘能力は高いですね。新人戦の対人戦闘程度なら勝機はあります。もちろん魔法のみで」

「ほら。あの四葉智宏だってこう言ってるじゃないか」

「しかし・・・」

「司波、甘えるな。弱者の地位に逃げる事は許さん。エンジニアだろうが何だろうがお前も九校戦チームの1員だ。メンバーとしての義務を果たせ」

克人は達也の目をしつかり見て言った。克人の言葉に反論する余地はなく、なおかつ達也の逃げ道を完全に絶った事を意味する。

簡単にまとめると、二科生を理由に逃げるなどということなんだろう。

さすがに達也もここまで言われるとやらざるを得なかった。

「わかりました。それでメンバーは？」

「お前が決めろ」

「・・・は？」

「ただし四葉はダメだ」

「わかっています。では俺と同じクラスの西城レオンハルトと吉田幹比古をメンバーにします」

幹部達はてっきり達也は九校戦メンバーの中から選ぶのだと思っていたが、予想外すぎる申告に過剰に驚いた。

「え!？」

「ちよつと達也君!」

「さて。達也君、理由はなんだ」

「簡単ですよ。彼らはクラスメイトですし実力もよく知っています。なので作戦が組みやすいんですよ」

「なるほどね・・・智宏君」

「はい」

「その2人と面識はあるか?」

「あります」

「君から見てもどうだ?」

「そうですね・・・2人は二科生の中でも高い実力を持っています。達也が指揮するなら問題はないはずです」

「よし、その2人を呼んでこい。ホテルにいるのだろうか?」

ミーティングルームでの話し合いの結果、モノリス・コードに達也、レオ、幹比古が参加した。大会委員の方は克人が何とかしてくれたいらしい。智宏もいざとなったら四葉の力を使うつもりでいた。

レオと幹比古が克人から正式にモノリス・コードの参加を要請されたのはこの話し合いが終わってから10分後の事だった。

今は智宏と達也の部屋にレオ達が集まっている。レオと幹比古ははまだ信じられないというような顔をしていた。

「なあ達也・・・まじ?」

「マジだ」

「智宏じゃダメだったのか?」

「俺が入ると作戦が組みにくいんだってさ」

「・・・ねえ、ミキ。大丈夫?」

「僕の名前は幹比古だ」

幹比古は少しそわそわした感じで座っている。

エリカとのいつものやり取りをすると気が楽になったのか、落ち着いた霧囲気を出していた。

今ここにいるのは達也とそのクラスメイトに加えて智宏がいた。深雪は他の女子達に捕まっているのでこっちは来ていない。

「でもよ、俺CAD持ってないぞ?」

「うん。レオの言う通りだ」

「安心しろ。必要な物は全てこちらで用意するから」

「CADの調整もかい?」

「ああ。1人1時間で終わらせる」

「……………」

「だ、大丈夫だよ、俺も手伝うから」

「智宏……助かる」

CADの何も無い状態からの調整には普通3時間ほどの時間が必要になる。

それを1時間で終わらせる達也のテクニックを誰も疑う人はこの中にはいない。それどころか「まあ……達也だし」といった言葉が頭の中に浮かぶほど。

しかし、そんな中でも美月が心配そうに達也に話しかけてきた。

「でも達也さんのCADはいいんですか？」

「大丈夫。俺のは10分で終わるから」

「そ、そうですね」

「10分ねえ。だんだん基準がわからなくなってきたわね」

「気にするな。それでフォーメーションなんだが……」

達也が試合の事を話し始めるとレオと幹比古は真剣な顔になり、エリカも静かになった。

「レオはディフェンスだ」

「ディフェンスって何すりゃいいんだ？」

「敵を10m以内に近づけないこと、モノリスに魔法を撃ち込まれたりコードを読み取られないように妨害することだ」

「なるほどお。了解したぜ」

「幹比古は遊撃を頼む」

「遊撃？」

「遊撃はオフフェンスとディフェンスの援護するんだ。でも基本は相手チームにもよるがこちらのモノリスに近づく選手を倒してくれ」

「わかったよ」

2人に説明を終えた達也は、ベッドの下からケースを取り出してそれをレオに渡した。それは数日前に実験した剣だった。

レオはこれが自分が使うCADだとすぐにわかったが、ふと疑問が浮かぶ。

「達也。これが俺のCADだよな？でも物理的な打撃は無理なんじゃないか？」

「大丈夫大丈夫。パンフには質量体を魔法で飛ばして相手にぶつけるのがいけないとは書いてないから」

「なるほど・・・まさにモノリス・コードのための武器ってか？まさか想定してつくったんじゃ？」

「まさか。偶然だ」

智宏はレオの疑問を解決し、持っていたパンフレットをベッドに放った。

達也は今度は幹比古の方を向いた。

「幹比古は雷撃以外にも遠隔魔法を使えるんだろう？」

「うん・・・でも達也。達也は僕の術式には無駄があるって言ったよね？」

「ああ」

「僕はどうすればいいんだい？」

「術式をアレンジするんだ。あれは『雷童子』の派生型だろ？俺の役目はその無駄を削ぎ落とす事だ」

「よくわかったね。確かにあれは『雷童子』の派生型だよ。僕には術の弱点をつかれないように偽装を施してあるんだ」

「昔なら有効だろうな。しかし今はCADによる魔法の高速化が進んでいる。もう偽装に意味はない」

「はは・・・なるほどね」

「俺が幹比古を推薦したのは古式魔法による隠密性を利用した奇襲力だ」

「達也……わかった。僕は達也に信じるよ」
「ありがとう」

エリカ達は達也が古くからある吉田家の術式をこんな真正面から否定するとは思ってもいなかったのだろう。心配するような目を幹比古に向けていたが、達也の答えに納得した幹比古を見て少しホツとした。

その後は達也がいくつか幹比古に質問をし、質問も答えを基に作戦を立案した。

作戦が決まると智宏達はそこで解散する。ただし、レオと幹比古は達也が調整したCADを受け取ってから帰った。

達也は2人のCADを本当に1時間で作業を終わらせ、明日の試合に備えて早めに寝たのだった。

第30話

モノリス・コードへ参戦

新人戦5日目。

各校は1高がまたモノリス・コードに出るとは予測しておらず、しかも登録していない生徒が出場するのを知って困惑した表情で試合の開始を見守った。

だがその困惑は1高の中にも広がっており、冷静に観ているのは幹部を含め数人だった。

また、達也達3人が姿を現すと、困惑した者達に拍車を掛けた。

「うわ・・・目立ってるな」

「智宏さん、あれでは目立たない方がおかしいですよ。しかしお兄様が出るのです。負けはしません」

「そ、そうだな」

「でも1番目立ってるのはアイツの剣よねえ」

そう。CADを3つを着けている達也よりも、腰に剣らしきものをぶら下げているレオの方が目立っているのだ。

それ以前に物理的な直接攻撃が禁止されているのを、強豪校である1高が知らない訳が無い。それほど『小通連』の存在がざわめきをさそっている。

そしてついに、第1高校対第8高校の試合が始まった。フィールドは森林ステージだ。

「始まったな」

「森林ステージ・・・8高の得意な場所だね」

「し、雫。達也さんなら大丈夫だよ！」

モノリス・コードで使用されるステージは5種類。岩場、平原、溪

谷、事故があつた市街地、そして今回の森林だ。

第8高校は最も野外実習が多く、森林で戦わせたら強いだろう。ちなみにフィールドはランダムで選ばれるのだが、今回8高に有利な場所が与えられた。

さすがにこれには大会委員の何かしらの介入があつたのだと思つても無理はない。

しかし達也が九重八雲の所で修行をしているの知っている1高生徒はあまり心配していない。なぜなら『忍術』は森林ステージのような場所において強い力を発揮する事を知っていたからだ。

互いのモノリスまでこのフィールドだと5分は必要とする。もちろん何も妨害がなければの話だ。

ところが5分も経たない内に、8高側で戦闘が発生した。

「早いな」

「お兄様にとってあの距離はなんの問題でもありません」

達也は素早く8高のディフェンスに魔法を使用してバランスを崩させた。

そのまま達也はモノリスに向かって疾走していく。

すると突然誰かが「あつ！」と声を上げた。

ディフェンスがCADを達也に向けたのだ。

しかし魔法が発動する瞬間、展開していた起動式が想子の爆発に消し飛ばされ、ディフェンスの手からCADが地面に落ちた。

今達也はいつの間にか右手にCADを握っており、いつ抜いたのかわからなかった。

「ぐ、グラムデモリッション術式解体!？」

吉祥寺は先程達也が使用した魔法がなんなのかわかったみたいだ。

驚きの声を上げているのは吉祥寺や将輝だけではない。1高の天幕にいる真由美達も驚いていた。

「今のは・・・」

「術式解体か・・・達也君やっぱり使えたのね」

「真由美？今のを知っているのか？」

「ええ。術式解体は圧縮した想粒子の塊をアイデアを経由せずに直接ぶつけて爆発させる対抗魔法よ。領域干渉にも影響されずに発動途中の魔法を吹き飛ばすのよ。射程が短い以外に欠点はないから『最強の対抗魔法』だなんて呼ばれてるわ」

「なるほどな」

「でも起動式を吹き飛ばすなんて力技なのよ？達也君って思ってたよりパワータイプなのね」

「じゃあバスの時に四葉のを吹き飛ばしたのもこれか・・・」

「私も今のを観るまで気が付かなかったわ。達也君ってどれ程の想子を持っているのかしら？」

各校でも知っている人が知らない人に今のを説明し終わった時には達也はモノリスに魔法を掛けていた。

モノリスは真つ二つに割れ、裏に文字が書いてある場所が出現した。

すると達也は向きを変えてどこかへ行ってしまう。

「やった！モノリスが開いた！」

「あれ？智宏さん、なんで達也さんは離脱したの？」

「達也が離脱した理由？そんなの簡単だ。な、深雪？」

「はい。いくらお兄様でも512文字を敵の妨害を前に打ち込むのは無理ですから」

モノリス・コードの勝利条件は、相手を全て戦闘不能にするか512文字のコードをキーボードに打ち込む事。1000文字程度なら達也はいけるかもしれないが、この状況では難しい。

消えた達也を追うように、8高のディフェンスが走り出した。

一方、1高のモノリス付近に8高選手がたどり着いていた。

木の影からオフエンスが姿を表すと、レオは反射的に自分に銃口を向けた相手選手に向かって小通連を横に一振りする。すると離れている刀身は木々にぶつかるともなく8高選手の横っ腹に命中した。

そして手元に刀身が戻ってきたのを確認したレオは間髪入れずに小通連を上に向け、空中に刀身を撃ち出す。雄叫びと共に振り下ろされた刀身は、倒れ込んだ8高選手にもものすごい勢いで殴りつけて戦闘不能にした。

1高3年生のエンジニア達は達也の作った武装一体化デバイスを観て「あれはなんだ」と問いかけ、あずさがそれに応じた。あずさはたまたま調整を手伝った時に『小通連』の存在を知ったのだ。

8高選手の3人目はフィールドの両モノリスの途中にある森でさまよっていた。

「どこだ！姿を見せて俺と戦え！」

軽い耳鳴りが響く中、8高選手は苛立ち気味に叫ぶが誰も出てこない。

彼はオフエンスの援護に向かうはずだったが、いつまで経っても森を抜けられていない。それは幹比古が作った罠『木霊迷路』だった。この魔法は三半規管を狂わせて方向感覚をおかしくする。なのでかかってしまえば術者の位置もわからずに同じ場所を何度もぐるぐる回ってしまうのだ。

(達也・・・後は任せたよ)

幹比古は木々の間から8高選手をこっそり見ながら術を発動しており、作戦通りに事が進んでいるのに満足している。

達也は追ってきたディフェンスを気配を消して回り込んで背中に魔法を撃って倒し、そのまま走って最後の選手の所に向かった。

達也は加重軽減の魔法を使用してそれに気づいた8高選手の後ろ

に木々を跳び移って回り込み、先程と同じように魔法を撃ち込んだ。よろめき崩れ落ちる8高選手を観て、観客達は1高の勝利を確信した。

試合終了のサイレンが鳴ると、1高の観客席は大騒ぎだった。

「やった！達也さん達勝ったよ！」

「おめでとう深雪」

「やったな」

「はい、ありがとうございます！」

ほのかと雫、智宏に祝われた深雪は嬉しそうに応えた。

1高勢が歓声を上げる中、3高の将輝と吉祥寺はパネルに映る達也の顔を観て話し込んでいた。

「最後のは『共鳴』だね」

「ああ・・・ジョージ、の試合をどう思う？」

「そうだね・・・彼は術式解体が使えるのには驚いたけど、最後の共鳴は意識を刈り取るほどの威力はなかった。もしかしたら彼はそんな強い魔法が使えないんじゃないかな」

「それとスペックの低いCADで本来の実力が出せないのかな」

「うん。とにかく彼の作戦に乗る必要はない。あとの2人も警戒はしないね」

「俺が正面から行けば勝てる・・・か？」

「そう。もし『草原』だったら、九分九厘僕達の勝ちだよ」

今の試合を観た吉祥寺は達也達が使っていた魔法や戦術を分析し、そう判断したのだった。

第31話 快進撃

「智宏君！」

智宏が達也達がいる控え室に向かう途中、後ろから声がかかった。振り向くと真由美とあずさが近づいてくるのが見える。

「あれ、会長と中条先輩。どーしたんすか？」

「これから達也君の所に向かうところよ。智宏も？」

「ええ。第2試合はすぐですから」

「まさかウチが勝つなんて大会委員も予想してなかったんじゃないかしら？」

「そうですね。でも休憩時間の短さを見ると少し大会委員の陰謀を感じてしまいます」

「あーちゃん・・・向こうもさすがにそこまでしらないと思うわ」

「で、ですよね？」

「安心してください中条先輩。もし本当だったら俺が許しませんから。来年の運営のメンバーを何人か変えましょう」

このセリフにはあずさはともかく真由美まで固まってしまう。確かに『四葉』の力を使ってしまえば事は簡単に済むだろう。しかし本当にそれだけで済むとは限らない。もっと恐ろしい事が起きるのでほと2人は思ってしまった。

固まっていた2人だが、真由美がなんとか復帰した。

「と、智宏君。大丈夫よ、大丈夫」

「・・・そうですか」

「さ。行きましょ」

真由美が無理矢理話を切り、智宏達は時間がないので控え室まで少

し早めに歩く。

控え室の中に入ると、深雪が顔を近づけながら椅子に座っている達也の肩を優しく揉み、その端では幹比古が思わずそうに座っている。

この光景を見た真由美とあずさは固まってしまい、おまけにあずさの顔は真つ赤に茹で上がった。なぜ赤くなるのだろうか？

真由美がコホンと咳払いをする。すると達也は深雪の手を優しくどけてスつと立った。その動作には無駄がなく、真由美は達也が軍人みたいだと思ってしまうた。

「達也君。次のステージが決まりました」

「どこですか？」

『『市街地』よ』

「・・・あんな事があったのにですか？」

「ええ」

「わかりました、では移動します。深雪、ありがとう。レオ、幹比古、行くぞ」

「行つてらっしゃいませ」

「おう」

「うん」

3人は市街地フィールドに向かっていった。

1高VS2高。

事故があつた市街地に決定したのには、あくまでも責任は自分達にはないという上層部の強情さが見えた。

しかし達也にとってこのステージは都合がよかった。彼は試合開始の合図が出た途端に屋上に向かって魔法を使わず隣のビルに飛び移り、3回ほどそれを繰り返して敵のモノリスがあるビルに到達した。魔法を使わなかったのでディフェンスには気づかれていない。

達也は建物の中に入り、物陰に隠れて通信機を使った。相手は幹比古だ。

「幹比古」

『何?』

「モノリスの位置を探ってくれ」

『わかった』

幹比古は作戦通り精霊を使ってモノリスの探索を始めた。

一方レオは小通連を構えながらモノリスのある通路をうろうろしている。しかし、ここでレオは2高のオフエンスと当たってしまう。

2人は2mほど距離を取った。2高選手はモノリスに気がつく銃口をそつちに向けた。

「やべー！Halt!」

「うわ汚え!」

「おらあ!」

「ぐっ」

レオは慌てて硬化魔法をモノリスに掛けて防御。そして小通連を突き出して相手を倒した。

ここまでの戦闘は結構ギリギリだ。

幹比古は達也から離れた精霊を操ってモノリスを探している。そして廊下の角を曲がった時、2高のモノリスを発見した。

「達也、見つけた。モノリスの位置は——」

幹比古は通信機を使い、達也に連絡を取る。もちろん周りの警戒も忘れない。

達也も幹比古からの連絡を受け、その場所が以外と近い事に気がついた。

「わかった」

『頼んだよ』

達也はモノリスのある位置の真上まで走り、CADを真下に向けて引き金を引く。モノリスを開くコードの射程は10mなのだが、真上で撃つため射程は全く問題ない。

するとわずかながら手応えがあり、モノリスが開いた事がわかる。幹比古は精霊をモノリスの裏側まで移動させた。視覚をリンクしている彼はモノリスのすぐ近くに立っているように見える。

幹比古がコードを打ち込んでいる間、達也は隠れている部屋に駆け込んできた相手のデイフェンスが発動した『鎌鼬』から逃げ回り、柱の影に隠れた。

しばらく耐えていると試合終了のブザーが鳴り響き、達也はホッとしたような顔をした。

「達也め・・・遊んでたな」

「智宏さん。お兄様があそこで相手を倒しても結果は変わりませんでしたよ? いいではありませんか」

「そ、そうですねよ! 相手に最後の抵抗をさせてあげたと思えば!」

「ほのか、その考えはちよつと怖いよ」

「そう?」

確かに観客席の中にはいくつかの不満が漏れていたが、似たような感想を言っている者が会場の個室に座っていた。

「全く・・・分解を使わないのはわかるがフラッシュ・キャストやエレメンタル・サイトを使わないとは手抜きがすぎるのではないか?」

「彼には秘密にしななければいけない事があるんですよ」

「しかしだなあ」

「でもフラッシュ・キャストは使うでしょうね。いくら達也君でも『プリンス』と『カーディナル』を相手にしては低スペックCADだけで戦えませんかから」

陸軍独立魔装大隊の山中軍医と藤林響子少尉は達也の行動について話していたが、達也がこれから使う魔法は機密と言っているほどの物。そう簡単に公衆の場で見せるわけにはいかないのだ。

そして観客席では達也や幹比古、レオの活躍に注目している観客が多く、3人の技術に舌を巻いている。

「なんだ・・・大丈夫じゃない」

「エリカちゃん？」

「なんでもないわ」

エリカは幼馴染の幹比古を誰よりも知っているつもりだ。昔から遊んできた友達として幹比古の動きには一段と敏感で、既に今の幹比古は1年前の事故以前の力を取り戻している事がわかっている。

しかし幹比古はまだ気づいておらず、何かきっかけがなければ自信を持ってないのだ。

ちなみに次の試合は8高だ。

時間は昼食を挟むのでさつきよりは休めそうなので、レオ達も少しゆっくりしている。

智宏と達也、深雪の3人は昼食を食べにホテルに移動していると、何気に初めて見る光景があった。

「ん？達也、あれって」

「渡辺先輩だな」

「まあ」

ロビーの1角で1組のカップルが話しており、その内の1人は摩利。摩利は珍しく頬を赤く染めて彼氏の前に立っている。

智宏と達也より身長は高く、ちよつとした動作と腕の筋肉などを見たところ、彼は武術をやっているとすぐにわかる。

遠くから見ようが近くから見ようが、2人はお似合いのカップルに違いない。

すると達也が摩利の前にいる男の正体に気がついたらしい。

「・・・ああ」

「達也？」

「あの人は千葉修次と言ってエリカの兄だ」

「エリカのお兄様でしたか」

「ほら。エリカだ」

智宏達は達也の説明を聞きながら、2人の時間を邪魔しないようにこの場を去ろうとした。

しかし、あえて2人の間に突入していくエリカがいた。

「次兄上！何故ここに!？」

ツカツカと兄に詰め寄っているエリカはいつもと違う雰囲気を出している。

「千葉修次は『千葉の麒麟児』と呼ばれていて、3メートル以内の間合いなら白兵戦は達人級らしい」

「強いのか・・・」

「智宏さん？戦ってみようなんて考えてませんか？」

「イイエ」

3人がこんな会話をしている間にもエリカはますますヒートアップしており、横にいる摩利には目もくれずに千葉修次に食ってかかった。

「兄上はタイに出張中のはずですよね!？」

「いやいや。別にサボってきたわけじゃないよ?」

「タイの王室魔法師に剣術を教えに行っていた件。それは嘘だったのですか?」

「うつ・・・ちゃんと許可は貰ったよ?」

「これは外交に関わる重要な仕事ですよ!? 許可を貰ったとはいえ、仕事を放り出して来るほどの事ではありません!」

「エ、エリカ? 外交だなんて言い過ぎじゃないか? そもそもあれ大学の部活の一環みたいな物だし」

「兄上!」

「は、はい!」

「たとえ学生でも国通しの交流を深める大切な任務です! これを疎かにしていいはずがありません!」

「仰るとおりです、はい。すみません」

本当に千葉修次は世界で10本の指にはいるほどの猛者なのか? と感じてしまうほどの光景を見せられ、智宏達は驚きを隠せないでいた。

千葉家は恐妻家ではなく恐妹家なのだろうか?

こんな事を感じてしまうほど3人の動揺は大きかった。

一方エリカもさらにスパートをかける。

「兄上とあろう方が・・・こんな女と付き合うなんて・・・兄上はこの女と付き合い始めてから墮落いたしました!」

「お、おいエリカ!」

エリカはこう吐き捨てて2人の前から姿を消した。

智宏達はエリカを追いかけると、エリカは自販機のスペースにある椅子に座っていた。

「あ・・・もしかして聞いたの?」

「すまん」

「いいわよ。別に」

「コーヒーを奢るから」

「マジ? サンキュー」

達也からコーヒーを受け取ったエリカは半分ほど一気に飲み干すと、座った目で缶を見つめた。

「つたく・・・バカ兄貴、あの女に誑かされちゃって」

「エリカ？世界的な剣術家を『バカ兄貴』なんて言っってはダメよ？それに、私達の前だからと言って言い方を変える必要はないはずよ？『次兄上』・・・だったかしら？」

「いつ!?忘れてー！そんなのあたしじゃない！」

エリカは元々いいところのお嬢様っぽい言葉は好きになれないのだろう。頭を抱えて大きいため息をついている。

「エリカはお兄さんが好きなのよね？」

「・・・・・・違う！」

「もう。エリカったら本当にブラザーコンプレックスなんだから」

「な、な、なっ！アンタだけには言われたくないわよ！この超絶ブラコン娘ー!!」

（あーバカ！）

数々の爆弾を投下した深雪に対し、エリカも必死に反撃をしたが、最後の1撃だけはいけなかった。

智宏が頭の中でエリカを叱責した時にはもう全てが遅く、自販機のスペースは氷点下の空気に包まれたのだった。

第32話 将輝の挑発

「あれ？智宏さん顔色が少し悪いよ。どうしたの？」

「いや・・・なんでもない」

雫が観客席に戻ってきた智宏の顔を見て問うが、智宏は先程の出来事を一切口に出さない・・・いや、出せないため、あえてなんでもないと言い張る。

雫もそれ以上深入りしたくなかったのか、何も聞いては来なかった。

これから始まるのは『岩場』ステージで始まる3高と8高の試合だ。会場は『岩場ステージ』。障害物が少なく足場が悪いが視界が広くなるステージでもある。

将輝は試合開始の合図が鳴ると真っ直ぐ、ただ真っ直ぐに8高のモノリスへ歩いていく。相手選手が大きめの岩を大量に将輝へぶつけるが、将輝はその全てを魔法で撃ち落としている。智宏には及ばないが、直接撃ち込まれた魔法は領域干渉で無効化していた。

まさに8高選手の妨害を嘲笑うように将輝はゆつくりと歩いていく。

そして将輝は前衛の2人を容易く蹴散らし、最後に怯んだ8高のライフエンスに圧縮された空気の塊を叩き込んだ。

3人全員が戦闘不能になったことにより試合は終了。結局この試合で働いたのは将輝だけだった。

1高の天幕では摩利を除いた幹部達がこの試合を観ていた。

「予想以上ね。試合スタイルは十文字君に似てるわ」

「意識しての事でしょう。本来ならば一条選手は中距離からの飽和攻撃を行うはず。これは司波君に対しての挑発ですね」

「挑発？なんともまあ・・・」

「俺も同意見だ。そして司波はこの挑発に乗るだろう」

「え!?!」

まさか克人が鈴音の意見に同意するとは真由美は思ってもいなかった。

確かに達也達が勝つには正面からの真つ向勝負に持ち込むしかないだろう。その事は控え室にいる達也や観客席に座っている智宏にもわかっていた。

「うーん……まいったな。一条の挑発に乗らなければいけないかった」

「お兄様達が勝つには真つ向勝負を挑むしかありませんもの」

「でも『草原』や『岩場』以外なら勝てるかもしれないよ?」

「ほのか、それはないな。大会委員の動向を見ると相手高に有利なステージが選ばれている。次の試合も3高と当たる時も達也達に不利なステージが選ばれる可能性が高い」

「そんな!」

「まだわからないわよ?」

智宏の意見にほのかが心配そうな声を上げ、深雪がほのかをなだめているが智宏達の心境は不安だった。

また、『プリンス』や『カーディナル・ジョージ』の相手をするのに一筋縄ではいかないと1高の全員が感じた。

その頃控え室では、達也達が座りながら会議をしていた。

「達也、警戒するのは一条将輝か?」

「いや……吉祥寺真紅郎もだ。吉祥寺は『カーディナル・ジョージ』と呼ばれている。油断はできない」

「マジか!」

「え?・彼があなの!?!」

「そうだ。2人共『不可視の弾丸』インビジブル・ブリッドに注意しろ。吉祥寺は一条を俺にぶつけてレオと幹比古を無力化するかもしれない」

「わかったぜ」

「わかったよ」

「さて。そろそろ次の試合だ。行くぞ」

3高に警戒心を強めた達也達は、気を取り直して9高との試合に望んだ。

フィールドは『渓谷ステージ』。

人工の谷間には川があり、それぞれのモノリスの近くには大きめな水溜りがある。

林もあるのであまり走り回れないが、ここは幹比古の独壇場だった。

試合開始直後にフィールドは霧に覆われた。もちろん幹比古の魔法。幹比古は味方には薄い霧を、敵には濃い霧を纏わせた。

9高選手は霧に阻まれて1高のモノリスにたどり着く事ができず、しかも魔法で霧を吹き飛ばしても霧が空いた空間を埋め尽くすように迫ってくる。これではいくら魔法を行使しても視界をクリアにする事ができないままだ。

霧を恐れて崖沿いに進んでいる相手選手とは違って達也は霧に紛れて9高の陣地に到着した。木の枝に隠れている達也の視線の先には、遊撃とデイフェンスがいた。

すると9高の遊撃担当の選手は霧で足元が良く見えず、足を滑らせて川に落下してしまう。その音に気を取られ、モノリスから3mほど離れてしまったデイフェンスの隙について達也はモノリスに魔法を撃ち込んだ。

モノリスが開いた音にデイフェンスは驚いて辺りを見回したが、達也は既に味方の陣地へ離脱している。

後は幹比古が精霊を使ってコードを打ち込み、戦闘が1度も行われることなく試合は終了したのだった。

次の試合は2時間後らしく、達也はCADの調整に、レオはホテルの部屋で休憩するようなので、幹比古は1人でホテルの最上階に向かう。

屋上に出ると、幹比古がよく知っている女子がそこにいた。

「あれ？エリカじゃないか」

屋上にいた先客は麦わら帽子を被ったエリカだった。

「何しに来たの？」

「僕は富士山を見にね。エリカは？」

「あたしは……ひとりになりたかったのよ」

エリカが珍しくこんな言葉を口に出すなんて幹比古は想像もできなかった。

返す言葉が見つからずにいると、エリカは富士山の方に振り向いてそのまま話しかけてくる。

「あんたさ……ちゃんと気吹を感じてる？」

「え……？あつ」

「なんだ。やっぱり治ってるじゃん。幹比古、もうあんたは事故に会う前の吉田幹比古よ？わかってる？」

「う、うん。確かに前より波動を感じるようになったかな」

「……良かったじゃん！」

「い、痛っ！」

エリカは本来の自分を取り戻した幹比古の背中をバシン！と叩く。

「ミキ、決勝戦もこの調子で頑張りなさい」

「僕の名前は幹比古だ！」

幹比古とのいつものやり取りに満足したのか、エリカはその返しに何も言わずに去っていく。

その頃、達也に合流した智宏はある人物と会っていた。まあ、用が

あるのは達也の方なのだが……。

「小野先生、わざわざすみません」

「本当よ。私はカウンセラーであって運び屋じゃないの……って隣の彼は四葉のぐ子息？」

「ええ」

「はじめまして。四葉智宏です。まさか公安の諜報員にお会いできるなんて思っていますでした」

「む……司波君？」

「俺は教えていません。もちろん師匠も」

「母上の方からです」

「なるほど。わかっていると思うけど内緒だからね」

「わかっています」

「じゃあこれ」

遙は達也に持ってきていたキャリアバッグを渡した。

「もういいかしら？」

「すみません。もうひとつ仕事をお願いしてもいいですか？」

「私パシリじゃないのよ」

「……税務申告がいらない臨時収入欲しくないんですか？」

この瞬間、遙の目に動揺が走つたのを智宏と達也は見逃さなかった。それは「マジ？臨時収入くれるの!？」といったような目だ。

はたしてこんなのが公安の諜報員を務めていいのか2人は不安になったが、ひとまず答えを待った。

しかし待ち時間はそう長くはなかった。

「……………仕方ないわね、何をすればいいのよ。どうせ裏の仕事なんでしょ？」

「香港系国際犯罪シンジゲートの無^ノ頭^{ヘッド・ドラゴン} 竜のアジトを調べてもら

えませんか?」

「っ!?!」

遙は周りに他に人がいないのを確認すると素早く達也に詰め寄った。その距離は10cmもない。深雪が見たらどうなってしまうのだろうか?

「なんであの組織を知ってるの!?!」

「自分達に危害を加えようとする輩の正体は既に調べがついています」

「何を企んでるの? 私達公安も今回の件で目をつけているわ」

「別に深い意図はありません。ところで、この体勢はいささかまずいではありませんか?」

「・・・はっ!」

遙は今自分がどのような状態に置かれているのかを理解し、詰め寄った時より早く達也から離れた。しかも顔を真っ赤にして。本格的に諜報員を辞めるよう進言した方がいいんじゃないかね?と智宏は思ってしまう。

しかし、すぐに落ち着いた遙は1回咳払いをして真剣な表情で智宏と達也を見た。

「保険よね?」

「保険です」

「もちろん」

「はあ・・・わかった。1日頂戴」

「へえ、1日ですか。達也、奮発してあげたら?」

「考えておくさ。さすがは先生ですね」

「もう。大人をからかっちゃダメよ」

自分の仕事(公安の方)を褒められた遙は、まんざらでもないよう

な顔をしていたのだった。

智宏とキャリーバッグを持った達也が天幕に入ると1高のスタッフはほぼ全員揃っており、興味津々な視線を達也に向けた。

達也はレオと幹比古が座っているテーブルまでキャリーバッグを持って行き、テーブルの上に乗せて鍵を開けた。

取り出されたのはマントとローブだった。

「達也、コレなんだ？」

「マントとローブだ。決勝戦で使うんだが：：間に合ってよかった」

「司波君、それはルール違反になりませんか？」

「市原先輩が心配するのわかります。しかしこの布に魔法陣を織り込んであるので問題はありません。それに、デバイスチェックには出しますから」

「なるほど・・・」

「お兄様、どのような魔法を織り込まれているのですか？」

「発動した者の魔法がかかりやすくなる補助魔法だよ」

「補助ね・・・リンちゃん、それなら問題ないかな？」

「そうですね、というかここまで運営側も想定していないのでは？」

「それもそっか。じゃ3人共、無理はしないでね」

「「はい」」

達也が持つてきたマントとローブを五十里がチェックしている頃、達也は身体をほぐしに外へ、レオと幹比古も軽く走りに行った。

身体をほぐすと言っても屈伸や伸脚などではなく、体術の型を行う。

一通り終わると、タイミング良く智宏とタオルを持った深雪が近づいてきた。

「お兄様、どうぞ」

「ありがとう」

「達也、次の相手は一条と吉祥寺だ。勝てるか？」

「なぜだ？」

「達也は力を制限されてるしなあ」

「問題ない。今の俺なら直接『爆裂』を使われない限り勝率は高い」

「そろそっか」

「お兄様、力を制限した者としては本当に心苦しいです。でも、必ずお兄様が勝つと深雪は信じていますから」

「深雪……」

「なんか今のセリフ、兄妹とは思えないぞ？」

「と、智宏さん。恋人みたいだなんて！」

智宏がからかうと、深雪は天幕の中にかけて行つた。盛大に言葉を自分のいいようにすり替えて。

残された智宏と達也は「やれやれ」と軽く笑った。

しかし、これで達也は負けられなくなった。

妹から絶対に勝つと信じられては、達也としても優勝を勝ち取らなければいけない。

そんな中、決勝戦のステージが『草原ステージ』に決まった。3高では歓声が上がリ、1高ではため息が続出している。

しかし達也はこれでいいと思っていた。先程の渓谷ステージでは水蒸気爆発に使う水がそこら中に流れている。ポジティブに考えれば渓谷ではなくて良かったと思うべきだろう。

しかしモノリス・コードでは格闘戦が禁止されているため、達也が得意としている体術は使用できない。

それをわかっている上級生は達也から説明を受けてもまだ顔は曇っていた。

そして新人戦モノリス・コード決勝戦。

歓声を受けて登場した将輝達に対し、達也達が登場すると戸惑いの声が多かった。

マントを着ているレオとローブを着ている幹比古は、好機的な視線から逃れるため顔を隠している。

「なあ、この格好やっぱりおかしくねえか？」

「なんで僕達だけ・・・」

「何言ってるんだ。前衛の俺がそんな走りずらい物を着るわけがないだろっ。」

「そりやそうだけどよお・・・あいつ今頃笑ってやがんだろっ。」

「僕もそう思うよ」

レオの推測に幹比古も同意する。その『あいつ』とは観客席にいた。

「アーツハハハハハ！何アレ何アレ！」

「え、エリカちゃん！」

エリカは爆笑しており、隣で美月が必死ににエリカをなだめていた。

爆笑していたエリカに周りからの視線が刺さり、美月は凄く恥ずかしそうに縮こまっている。

エリカはヒーヒー言いながらなんとか笑いを抑え、ようやく落ち着いた時には周りの生徒もフィールドに視線を戻していた。

「ごめんごめん、あー面白かった。ねえ美月、アレなんだと思う？」

「達也さんが作ったなら何もない訳ないし・・・あ」

「ん？」

「吉田君のローブに精霊がいつぱいまとわりついてる」

観客達は好機的な視線で達也達を覗いていたが、将輝達はそうはいかない。将輝と吉祥寺、もう一人のチームメイトは首を傾げていた。

「あれはジョージの『不可視の弾丸』インビジブル・プロジェクト対策か、またはハツタリか」

「彼は僕の魔法を知っていた。だからあの魔法は布一枚で防げるやつじゃないのも理解しているはず。だからアレは僕対策だと思うけ

ど……」

「そう思わせるためかもしれないぞ?」

「ああ。その可能性もある」

「わからないな……まさか隠し玉があったなんて」

将輝達の疑問は結局解消されず、頭の中にモヤを残したまま試合開始を待った。

一方、観客席の端っこにて別の意味でざわめいていた。なんと九島老人がVIPルームではなく、下の来賓席に現れたのである。

「九島先生!? いかがされました!」

「いやなに。たまにはここから観させてもらおうと思ったのでな。それと、面白そうな若者を1人見つけた」

「は、はあ……」

モノリス・コードは1番盛り上がる競技。しかもその決勝戦となれば絶対に見逃すわけにはいかないだろう。

そんな中、戦いの火蓋は切って落とされた。

まず試合開始の合図が鳴ると、3高の陣営から遠距離攻撃が炸裂する。

1高と3高のモノリスの距離はおよそ600m。達也と将輝は互いに歩み寄りながらただまっすぐに歩いていく。その間、2人共拳銃型のCADを突きつけ撃ち合っていた。

将輝の砲撃を達也が撃ち落とす。

この繰り返しだが2人の間で行われていた。

最初から見せつけるような試合をしている2人に対し、観客は驚きの声を出していた。

もちろんその中でも1番驚いていたのは1高天幕にいる幹部勢だろう。

「な、なんとという胆力なんだ」

「彼は本当に二科生なの？」

吉祥寺はまだ3高の陣地にいたが、別の意味で驚いている。それは実力ではなく、たった2時間で起動式の構成を変えた事であった。しかし迷ってる暇はない。

そう判断した吉祥寺は頭の中にある疑問を捨てた。

「じゃあ僕も行くよ」

「おう。ここは任せとけ」

吉祥寺は達也と将輝が戦っている場所を迂回しながら1高陣地向かって走り出す。

すると達也は吉祥寺が行動を開始したのを確認したのか、歩くのを止めて走り始めた。

将輝は慌てることなく達也に魔法を撃ち込む。

達也は走りながら自分の周りに張り巡らされた砲弾を撃ち落としているが、さすがに距離が短くなるほどキツくなってくる。その分照準はつけやすいが。

将輝まで残り50mを切ると、達也はついに将輝の攻撃をさばき切れなくなり、襲いかかる砲弾をなんとか避けた。

(やむを得ん・・・)

達也はついに『エレメンタル・サイト精霊の目』を使った。

これで死角はなくなつたに等しいが、本当にこれを使う事になるとは思っていなかった。それほど将輝が強いのだろう。今、達也の前には分厚い壁が立ちはだかっている。

エレメンタル・サイトを使用したのに気がついたのは智宏と深雪、風間や響子達独立魔装大隊の面子、それと九島老人だった。

現在観客席には響子と山中が座っていた。

「とうとう誤魔化しきれなくなったな」

「不謹慎ですよ。いくら達也君でも五感だけで一条の跡取りの攻撃をさばくのは無理があります」

「・・・だな。それにこの状態なら第六感と言いつくか？」

「はい。問題ないと思いますよ」

「だがそこらの目は誤魔化せてもあちらの御仁まで誤魔化せるとは思っていないぞ」

山中が視線を向けたのは興味深く試合を観戦している九島老人の姿があった。

響子はチラツとそちらに視線を向けたが、すぐに達也に視線を戻した。

さて。一方フィールドでは、吉祥寺が1高モノリスに到着するその100m手前でレオに行く手を遮られていた。

吉祥寺は不可視の弾丸を放とうとする。しかし――

「ツ!? (あの布にはあんな使い方が?これでは不可視の弾丸が使えない!)」

レオはマントを脱ぎ捨て、マントに硬化魔法をかけて地面に突き刺した。布は硬い壁となって吉祥寺からレオを守っている。これには吉祥寺も動揺していた。

さらにレオの数m後ろに現れた幹比古により、風で飛ばされた金属片が吉祥寺に襲いかかる。吉祥寺はなんとか回避し、追撃で放たれた突風にあえて飛ばされる事でダメージを緩和した。

吉祥寺は内心舌打ちをしたが、不可視の弾丸の目標をレオから防衛していない幹比古に変えた。

しかし、幹比古に照準を合わせた瞬間、吉祥寺の視界がぼやけた。

(ま、まさか幻術!?)

幹比古の幻術により吉祥寺の動きが止まってしまおう。

レオはこの瞬間小通連を吉祥寺にぶつけようとした。吉祥寺も迫り来る刃に気が付き、回避ができない事を理解すると目を閉じた。

だが――

「ぐわあー！」

突然レオを空気の砲弾が襲った。それは将輝による援護射撃。これによりレオの攻撃はずれて刃が落ちたのは吉祥寺の10cmほど横だった。

吉祥寺は視線で将輝に礼を言うと、幹比古に不可視の弾丸を発動させる。幹比古にあっけなく魔法が命中し、追加で発動させた加重増大魔法により幹比古は地面に叩きつけられた。

将輝は吉祥寺が幹比古を押しさえつけた光景を見ていた。しかしその間達也から視線を外していたのが仇となり、達也はその一瞬で将輝との距離を約5mまで詰めていた。

一瞬で距離を詰められた将輝の顔には動揺が走り、慌てて魔法を発動した。

それもレギュレーションを超えた高威力の空気弾16発を。

達也はそれでも分解ではなく術式解体を使い、アクロバティックな動きを見せながら迎撃した。しかし迎撃に成功したのは14発。残った2発は達也に直撃してしまう。

観客席では達也を心配する声上がる。

将輝も今自分がした事を理解していた。

ルールで決められた威力以上の魔法の行使。もしかすると殺してしまっただけかもしれないという危機感に駆られていた将輝は隙だらけだった。

審判は気が付かなかったかもしれないが、魔法を発動した将輝にとって、「しまったー！」と感じさせるほどの事だったのだ。

達也は地面に叩きつけられる直前。それは起こった。

(肋骨骨折、肝臓血管損傷、出血多量の可能性あり。戦闘力低下。結果『許容レベルを突破』)

(自己修復術式オートスタンバイ。魔法式ロード、コア・エイドス・データをバックアップよりリロード)

(修復開始……完了。全て異常なし)

達也は『再生』を発動。一瞬で達也の傷が治り、重傷だった彼の身体は何事もなかったかのように元通りになった。

将輝が固まっている理由を達也は知らなかったが、復活した今はそんな事を考えている余裕はない。

達也は身体をひねらせて無理矢理立ち、踏み込んで将輝のヘルメットの左側に右腕を突き出した。

間髪入れずに達也は指を鳴らす。それは「パチン」といった普通の音ではなく、スタングレネード並の破裂音が将輝の左耳を直撃した。

観客席にもその轟音が鳴り響く中、その場にいた全ての人間の動きが止まる。

そしてこの試合を観ている全ての人々が見守る中、将輝はゆっくり地面に崩れ落ち、達也は片膝をついたのだった。

第34話 第1高校VS第3高校 後編

「今の・・・何?」

真由美は狼狽した声で周りの幹部達に訊ねる。

最初誰も答えなかったが、1番最初に口を開いたのは克人だった。

「指を鳴らす時に音を増幅させたのだろう」

「ですね。大音響を一条選手の耳元で鳴らす事によって鼓膜の破裂の三半規管のダメージが発生したのでしよう」

「ああ。それにルール違反はしていない」

「そんな事は観れば解るわ!そうじゃなくて!何で達也君は一条選手の攻撃で倒されたはずなのに立ち上がっていたの!?!迎撃は間に合わなかった。しかも2発直撃していたのよ!」

「落ち着け七草」

若干ヒステリックになっている真由美を克人が落ち着いた声でなだめた。

このように混乱する人もいるのだが、それは真由美だけではない。観客席に座っている1高女性陣(特にほのか)が真由美と同じような症状が出ていた。智宏も自己修復術式を知っていたが、使わなければいけない状況に持ち込まれた事に少しだけ驚いていた。

「ほのか、落ち着いて」

「雫!だって達也さんは直撃をくらったのに立ったのよ!?!」

「ねえ深雪。達也君って体術やってるのよね?」

「そうよ」

「じゃあ衝撃を受け流す技とかあるのかなあ・・・」

「そうだよほのか。きつと達也さんは上手く躲したんだよ」

「・・・そ、そうだよね」

テンパっている人達がなんとか落ち着いてきている頃、その状況を楽しんでいる男が1人いた。

それは独立魔装大隊で軍医を務めている山中だった。

「いやあ。いつ見てもすごいな彼の自己修復術式は」

「本当に使っていたのですか？」

「なんせ彼の魔法発動スピードは我々が認知できる速度を超えているからねえ」

「せ・ん・せ・い？」

「・・・あ、いや、確かに見えなかった。私は司波達也君が使えないはずの魔法を使ってたなんて見てないぞ。なんとも頑丈な男だ」

「だからと言って実験台にはしないでくださいね。達也君は貴重な戦力なんですから」

「そんじよそこらの怪我で壊れる男ではあるまい」

「壊れなければいいという問題ではありません！」

藤林にピシヤリと怒られて山中は首をすくめる。しかしあまり反省していないようだ。

それどころか話を別の物に逸らしてきた。

「それはそうと・・・やはり使ったな」

「ええ。低スペックのCADでは仕方ないでしょう」

「ま、機密が守られただけよしとするか」

達也が入隊している独立魔装大隊において秘密にしなければいけないのは達也本来の魔法だ。

体術が禁止されているこの圧倒的不利な競技で達也は『分解』を使わなかったのに加えて自己修復術式を誰にも認識されずに発動できた。本当の殺し合いなら将輝など一瞬で消えていたはず。達也は自らの戦闘力を大幅に失いながらも彼なりに頑張っているのだ。

というかフラッシュ・キャストを秘匿しておきたいのは独立魔装大隊と言うより四葉の方だろう。

智宏も非人道的な技術を知って「これはダメだ」と思ったくらいだ。何にせよ、山中はそれなりにホツとしているのだった。

「相変わらずあのスピードは脅威だな。ウチで彼に匹敵するのは柳ぐらいか?」

「そうですね。ウチの隊では他に思いつきません」

もう2人は試合ではなく膝をついている達也を見つめているだけだった。

将輝が倒れるのを見た吉祥寺は軽いパニック状態になっていた。まさかあの将輝が倒されるなんて思ってもいなかったからだ。

(将輝が・・・負けた?)

「吉祥寺!」

「ッ!」

吉祥寺がフリーズしている隙を狙って幹比古が魔法を発動したが、3高のディフェンスが叫んだためかわされてしまう。

慌てて前を見ると先程押さえつけた幹比古がよろよろしながら立っている。

現在、幹比古の身体はボロボロだった。

長時間地面に押し付けられていたせいで軽い酸欠状態になっているかもしれないし、身体の至る所が悲鳴を上げていた。

しかし、ここで諦める訳にはいかなかった。

(やったんだね達也。達也が『プリンス』を倒したんなら僕だって!)

幹比古はキツと吉祥寺を睨みつけ、CADを操作した。

すると先程と同じように幻術で幹比古の姿はぼやけてくる。

しかしダメージは大きかったらしく長くは持ちそうにない。

そう思った幹比古は唇を噛みきって意識を吉祥寺に集中させ、コマンドをCADに打ち込み、右手を地面に叩きつけた。

すると地面が揺れ、吉祥寺に向かって地割れが走る。実際には土に圧力をかけているのだが、今の状況では現実的な考え方は失われている。

吉祥寺は空中へ逃れようとした。しかし吉祥寺の足は地面を離れない。草に絡みついていいるのだ。もちろんこれも気流を発生させただけだが。

地割れが吉祥寺の目前まで迫った時、吉祥寺は一気に跳躍して上へ逃げた。

だがそこには幹比古が仕掛けた最後の術式『雷童子』が発動し、吉祥寺を空中で撃ち落としたのだった。

「この野郎よくもー！」

達也と同じように膝をついた幹比古に、残った3高のディフェンスが魔法を放つ。

土砂の波が幹比古に迫ってくるが、今の幹比古に回避する力は残っていない。

幹比古が覚悟して目を閉じる。

するとどこからは薄い鉄の壁のような物が幹比古の前に突き刺さり、土砂を防いだ。

それはレオが使っていたマントだと幹比古はすぐに察する。横を見るとレオは立ちあがっており、小通連を横に薙ぎ払っているのが見えた。

小通連の刃は今度こそ相手選手に命中し、3高最後の選手も倒したのだった。

「勝ったか・・・」

「やった・・・やったよ雪ー！」

智宏がこう呟くと、ほのかは自分が大きい声で喜んでいるのを知らずに零に抱きついた。

それが引き金となり、観客席に大歓声が上がる。

1高の最前列では深雪が口を押さえ、ボロボロと涙を流しながら観客席に近づいてくる兄を覗いていた。

観客席から溢れていた歓声もやがて拍手に代わり、全員が決勝戦を戦った1高と3高の両選手を讃えていた。

今日で新人戦は終了し、結果は優勝だった。

新人戦優勝のパーティーはモノリス・コードの3人が負傷しているのと、明日のミラージ・バット本戦の下準備を行う予定があるのでお預けとなる。

レオと幹比古は部屋で寝ているのだが、達也はミラージ・バットの本戦に深雪が出場するので、医療用の耳当てを耳に着けながらCADの調整をしていた。

達也は五十里やあずさが休めと言っても中々休まず、結局真由美が追い立てるように達也を部屋に戻した。

一方で、とてつもなく追い詰められている者達もいた。

「第1高校の優勝はもはや確定していると言ってもいいだろう・・・」

「そんな馬鹿な！」

「ここで諦めては座して死を待つ事になるぞ」

「いや、楽には死ねまい。今回の損失は大きすぎる。良くて『ジェネレーター』、悪くて『ブースター』だろう」

男達はしばらく黙っていると、1人の男が意を決したように口を開く。

「もう我々に迷ってる時間はない。強硬手段に出る」

「そうとも。証拠さえ残さなければよいのだ」

「明日のミラージ・バットでは全員棄権してもらおう。死ぬことはな

いと思うが……まあ死んだら運が悪かったというだけだ」

この会話を聞いているのは数人の護衛。

辺りが寝静まった現在でも、男達の怪しげな会議は続いていた……。

第35話 工務員

九校戦九日目。この日は先日と違って空は雲に覆われており、少し薄暗かった。

しかしこの日の競技はミラージ・バット。選手達にとって好都合な天気なのだ。

深雪の試合は第2試合。

第1試合が終わるとすぐに次の試合が始まるので、達也と深雪はフィールド脇のスタッフ席に座っている。

智宏は雫やエリカ達と観客席にいる。

「いい天気だな」

「そうだね。このまま雲がなくならなきゃいいけど・・・」

「あれ？美月、大丈夫なの？」

試合の第1ピリオドが始まると、エリカは隣に座っている美月の手にメガネが握られているのに気が付いた。

美月の目は特別だ。周りの様々な感情が出ているこの試合会場では、美月の精神に大きな負担をかけているはず。それなのに美月はメガネを外していた。

しかしその手は少し震えている。

「ちよつと辛いかな。でも・・・いつまでもこの力から逃げちゃだめなんだって思ったの」

「あんまり無理をすると身体を壊すわよ。美月の場合はもっと酷くなるかもしれないだから」

「それでも私は頑張る。渡辺先輩が怪我をした時だって、私がきちんと視ていれば他に何かわかったかもしれない」

「だから今回は見張ってるって事？」

「そうだよ」

「まさか全部やるつもり？」

「ううん。深雪さんの試合は休憩するよ。深雪さんには達也さんがついでだから」

「それもそうね」

エリカは美月が全部の試合を監視しないと聞いて少し安心する。そこへ2人の話を聞いていた幹比古が話に入り込んできた。

「妨害工作に精霊が使われているなら柴田さんの目は1番頼りになるのは確かだ。一応、目にくる刺激を緩和する結界を張ってあるから後遺症は残らないと思うよ」

「へー。じゃあ美月に何かあったらミキが一生かけて責任とりなさいよっ。」

「なっ……！！」

話に入ってきた幹比古に、エリカは意地の悪い笑みを浮かべながらからかった。

幹比古はいつもの抗議を忘れるほど顔を真っ赤にし、美月も2人の間に挟まれながらすっかり茹で上がっていた。

そんな中、ようやく第2ピリオドがスタートする。

小早川ともう1人の選手は上に飛び上がり、1番近い光球に向かっていく。しかし、その光球は他校の選手に取られ、小早川は着地しようとしている柱の所に選手がいるのを確認すると別の場所に滑空しようとした。

そこで事故は起こる。

斜めに移動するはずだった小早川の身体は重力に引かれて水面に落ちていったのだ。

小早川の顔には驚愕と恐怖が現れており、観客も他の選手も落ちていく小早川をただ見ていることしかできない。

5mほど落下すると小早川に魔法がかかる。これはフィールド脇に待機していた大会委員が彼女の身体を受け止めたからだ。ミラー・バットは危険な競技なので、二重、三重の安全対策がとられてい

る。だがそれでも小早川の心を打ち砕くには十分な時間だっただろう。

試合は一時中断され、小早川は担架で運ばれ行く。

(先輩はもうダメかもしれない・・・)

智宏だけでなくこの場にいるほとんどの人間がこう思っただろう。魔法が使えなくなる原因のひとつとして魔法の発動に失敗し、その時にもたらされる魔法に対する不信感がある。

今の幹比古のように立ち直る者もいれば、二度と魔法を使わないと思う者がいるのだ。

達也は運ばれ行く小早川を見てみると、携帯端末に着信が入る。それは幹比古からだった。

「俺だ」

『あ、達也？幹比古だけど、今大丈夫？』

「ああ」

『僕が視たところ術が発動した形跡はなかった。でも柴田さんが・・・いや、変わるね』

「まさかメガネを外していたのか？」

『美月です。今の試合はメガネを外していました』

「そうか・・・何かわかったのか？」

『はい。小早川先輩の右腕につけているCADの周りにいた精霊がパチッて弾けて視えました』

「何？美月、もう一度聞くぞ？精霊は弾け散ったんだな？」

『そうです』

「そうだったのか・・・美月、ありがとう。とても役に立ったよ」

『そうですか！ありがとうございます！』

達也は美月から貴重な、そして決定的な証拠を受け取った。達也が

観客席を見ると、話を聞いていた智宏が席を立って達也を見ていた。智宏も原因が何かわかったようだ。

智宏は達也と視線を合わせると行動を開始する。

外に通じる階段に行こうとすると、エリカが不思議そうな顔で話しかけてきた。

「あれ？智宏君、どっかいくの？」

「ちよつとな」

「ふーん・・・深雪の試合までには帰ってきなさいよ」

「わかってる」

エリカは智宏の一言でこれから何が起こるのかをなんとなく察した。

智宏は会場を出ると隣接している建物に入っていく、目的の人物がいる部屋の前まで来た。部屋の前には4人のSPが立っており、近づいてくる智宏を確認すると警戒しながら立ち塞がる。

「ここは関係者以外立ち入り禁止だ。生徒は自分の学校の所に帰れ」

「自分は第1高校の四葉智宏です。九島閣下に緊急の用があつて来ました」

「四葉だと・・・？本物だな、少し待て」

SPの1人が携帯端末で智宏を本物と確認すると、部屋の中に入つて行った。

しばらくすると、呼びに行ったSPが「中に入れ」と智宏を促す。智宏が部屋の中に入ると、九島老人は数人の大会委員と一緒にパネルを観ていた。そう、ここはVIPルームなのだ。

「君が真夜の息子か。懇親会以来だな」

「はじめまして閣下。四葉家次期当主候補の四葉智宏です」

「うむ、それで何用かね？」

「はい。先程小早川先輩が落下した事故、あれが妨害工作だと判明いたしました」

「ほう」

「私の友人が犯人を取り押さえに向かっているはずですが。なので閣下にも念の為確認をしてもらいたく、ここへ来ました」

「・・・その友人とは司波達也君かね？」

「は、はい。そうです」

「なるほど。では行こうか」

「閣下!？」

九島老人が立ち上がると、大会委員も慌てて席を立つ。

SPは外にいる3人に動く事を知らせに行った。

「それで?どこに行くのかね?」

「CADのチェックを行っている大会委員のテントです」

智宏と九島老人達が部屋を出ると同時刻、達也は深雪のCADを持って大会委員のテントに入っていた。

深雪のCADを係員に渡し、検査をしてもらおうとした。

だが、CADが半分くらいまでスキャンされた時に達也は動いた。

係員をスキャンしている台から引きずり出し、床に叩きつける。外と中にいた警備員が達也に詰め寄るが、達也から出る殺気に怖気付いて拘束できない。

達也は係員の胸に膝を置きこう言った。

「舐められたものだな。深雪の身につける物に細工をするなんて・・・検査装置を使って何をCADに紛れ込ませた?ただのウイルスではないだろう?」

この言葉を聞いた警備員や他校の生徒はようやく何があったのか

を理解し、取り押さえられている係員を見る目が被害者から容疑者を見る目が変わった。

尋問は続けられたが、押さえつけられている係員は何も話さなかった。いや、恐怖で話せなかったのだろう。

「そうか・・・言いたくないか」

だがそんな事は達也には通用しない。

達也は右手で手刀を作り、ゆっくりと係員の喉に近づけていく。

この光景を見て誰もが思った。これからあの右手は容易く喉を抉り、床に血溜まりを作るのだろう、と。

すると外から全員の意識を遮るように声がかかった。

「達也！やめるんだ！」

「智宏と・・・九島閣下？」

達也は智宏と後ろにいる九島老人に気がつく、立ち上がって床に転がっている係員を威圧しながら九島老人に一礼した。さつきまでの殺気はまるでなかったかのように。

「見苦しいところをお見せしました」

「君は司波達也君だね。四葉君がいうにはここで不正工作が行われていたらしいが？」

「その通りです」

「ふむ・・・これが不正工作の被害にあつたCADかね」

九島老人は大会委員の1人が持ってきた深雪のCADを受け取るとしげしげと見つめ、納得したように頷いた。

「確かに異物が紛れ込んでおる。私がまだ現役だった頃、広東軍の魔法師が使っていた『電子金蚕』という物だ。これは電子機器に侵入

し、動作を狂わせる遅延発動術式。我々はこの魔法の正体がわかるまで随分と苦勞したが……司波君、君はこれを知っていたのかね？」

「いえ、電子金蚕という物は初めて聞きましたが、CADにウイルスに似た何かが入り込んだのはすぐにわかりました」

「そうかそうか」

九島老人は達也の言葉に笑みを浮かべながら頷き、次に腰を抜かして立っていないでいる係員に冷ややかな視線を向ける。それは歴戦の魔法師が持つ特有の殺気のこもった視線だった。

係員はその視線の圧力に耐えきれず、座ったまま後ずさる。

「では君。君はどこでこの術式を手に入れたのかね？」

「……」

係員は恐怖で何も話せなかった。

九島老人は彼を警備員に引渡し、智宏と達也に向き直る。

「さてと。四葉君、君が私を呼んでくれたおかげで司波君が拘束され、試合に支障が出る事はなくなった。司波君も犯人を見つけ出してくれた事に礼を言おう。後は我々に任して君達は戻りなさい。CADは予備のを使うといい」

「はい」

「うむ、このような事情だからな。そして大会委員長？運営委員の中にスタッフが紛れ込んでいたなどかつてない不祥事。後で私の部屋で君の言い分を聞こう」

「……は、はい」

「では行こうか。四葉君、司波君、いつかゆっくり話そう」

九島老人は小さくなった大会委員長以下数名を引き連れて自室に戻っていく。今後、彼らがどうなるのかはまだ誰も知らない。

智宏と達也は騒ぎを聞きつけた周りの生徒達にチラチラと見れながら1高の天幕へと戻って行ったのだった。

第36話 飛行魔法の晴れ舞台

智宏と達也が第1高校の天幕へ戻ると、達也に向けられている視線が変化しているのに智宏は気がつく。もしかすると先程の出来事がもう周りに広まっっているのかもしれない。

そんな中でただ1人、達也を心配して駆け寄ってきた少女がいた。

「お兄様！智宏さん！」

「深雪、心配かけたな」

「そんな！私のために怒ってくれたのでしょ？」

「そうだ。兄が妹のために怒るのは当たり前だからな」

「へえ、事情まで周りに広まっていたのか」

「いえ・・・まだ事情は聞いていませんが、私にはわかります。お兄様がお怒りになるのはいつも私のためですし・・・」

顔を伏せた深雪の声は段々と涙声になっていく。

智宏は2人の邪魔をしないように数歩下がり、達也は深雪の頬に手を添えてそつと自分の顔に向かせ、ポケットからハンカチを取り出して深雪に渡した。

「深雪？せつかくメイクしたのに泣いては台無しだ。これから深雪の晴れ舞台があるんだから」

「お兄様・・・」

この時深雪は既に泣き止んでおり、メイクが多少落ちてしまったが、それでも兄から励ましの言葉を貰った彼女の顔は美しく、誰よりも輝いていた。

この光景に智宏以外の生徒は甘ったるい空気にウンザリしながらも生暖かい視線を2人に向けている。

すると智宏の横に大会の本部から事情を聞いてきた真由美が現れた。

「会長？」

「智宏君、上から事情は聞いたわ」

「あ、本当ですか？（なんでこんなにくつつくんだ？）」

「ええ」

智宏にぴったりにくつついた真由美は、視線を智宏から場違いな雰囲気を出している兄妹に向け、からかうように2人に話しかけた。

「達也君、大会本部から『1高の選手が暴れた』って聞いた時は驚いたけど、とつてもシスコンな人が大事な大事な妹にちよつかいをかけられて怒ってただけなのね」

「……………」

真由美が達也をからかうと、達也は生暖かい視線に耐えきれずエンジンニアが使う作業室に逃げ込んで行った。

こうして達也が1高で孤立するという事はなくなったが、それがシスコンのおかげだと達也は思いたくはなかった。

2 試合目。

深雪が出場するこの試合の天気は曇っており、このまま晴れない事を願うばかりだ。

「いい天気だな」

「そうですね」

会場の端っここで会話をしている達也と深雪を近くの椅子から聞いていたあずさは、2人を「呑気だな」とは思わなかった。

なぜなら、あずさから見ても深雪が負ける要素がないから。

本戦に出場する1年生ははめったにいない。そして試合前だというのに緊張している素振りを深雪は見せていないのだ。

あずさには深雪が優勝を狙える実力がある事はわかっていたし、そ

これにあの達也がサポートとして入るなら「負ける」という言葉が見つからない。

あずさはこれまで達也と深雪は自分にとってライバルだと思っていた。

しかし、先程の出来事とその気持ちはどこかへ行ってしまった。

（ライバル・・・か。私には司波君みたいな実力はないのに・・・）

大会本部から達也がした行為を聞かされた時はなにより怖かった。

あずさは達也が理由もなしに人に暴力を振るう人ではないと理解している。しかし、それと同時に理由があれば徹底的に力を使う事も察していた。

きっと彼はその鋼のような心を持って相手を殺す事も厭わないだろう。

怖くて震えそうになったあずさの感情が「驚き」に変わったのはその経緯を聞いた時だった。

CADの不正工作を見抜き、その犯人を取り押さえたと聞かされた時は本当に驚いた。

小早川を担当していたエンジニアが悔しそうに表情を歪ませている光景が今でも瞼に焼き付いている。自分が調節したCADに不正工作が行われていた事がわからず、そのせいで小早川の魔法師生命が終わってしまうかもしれないのだ。

自分だったらその場から逃げ出してどこかで泣いていたかもしれない。

あずさはここで考えるのを止めた。

これ以上深く考えても自分が追い詰められるだけ。そう思ったあずさはフィールドに立った深雪に視線を合わせた。

選手がほぼ全員位置についたのを確認した智宏は、雫に「席には戻れないけど試合は観る」と連絡し、観客席の1番上に立って辺りを監視し始めた。

試合は予定通り開始され、少女達が一齐に舞い上がる。

フィールドを妖精が舞っている光景は誰が見ても綺麗な物だった。第1ピリオドが終わり、深雪は奮戦したおかげで1位をとれたが、2位との差がわずかしかない。さすがに本戦は厳しいらしい。第2ピリオドも同じ結果だった。

(深雪との差があんまりない。さすが本戦だな。でも達也が完成させたあの魔法なら)

智宏も深雪と2位の選手のポイントの差を見ていたが、不安はなかった。

それは実際に出場した深雪やそれをサポートした達也も同じ。

深雪は達也の所に戻ると、意を決したように真剣な眼差しを達也に向けながらこう言った。

「お兄様。アレを使ってもよろしいでしょうか？」

「わかった。全ては深雪の望むがままに」

第3ピリオドが始まる直前、深雪のCADが変わった事に智宏以外で最初に気がついたのはエリカだった。

「あれ？深雪のCAD、変わってない？」

「そうよ。アレは深雪と達也さんの秘密兵器」

「秘密兵器？」

「みんな驚くわよ」

ほのかは深雪がこれから何をするのかわかっていた。

事情を知っているほのか以外の雫やエリカ達は、第3ピリオドが始まった瞬間深雪を集中して観た。

深雪がCADのスイッチを押すとふわりと身体が浮き、上昇していく。行く手を他校の選手が阻むが深雪はそれを回避し、光球を打ち消した後そのばで静止した。

普通なら上昇した選手は下の足場に降りなければ次の目標に向かえない。しかし、深雪は下に降りることなく目標に定めた光球を打ち消すために滑走していた。

深雪が同じような行動を取っていると、観客も何が起こっているのかに気がついたようだ。

「ま、まさか飛行魔法?」

「そんな!先月発表されたばかりだぞ!」

「こんなに早く実装してくるなんて・・・」

「偽物か?」

「いや、あれは紛れもなく飛行魔法だ・・・」

この日。この場に居合わせた人、テレビで試合を観ていた人は性別関係なく空中を自在に舞う少女に視線が釘付けになっていた。

そして試合は終わり、深雪は2位との差を倍にして決勝へと進んだのだった。

一方、中華街のホテルでは――

「17号からだ。司波深雪が予選を突破した」

「まずいな・・・」

「向こうは電子金蚕を見抜いたどころか飛行魔法まで使う相手だぞ」

「くそ!もはや手段を選ぶ必要などないのでは!」

「・・・そうだな。100人ほど殺して騒ぎになれば大会は中止になるだろう」

「上が騒がないか?」

「問題ない。では『ジェネレーター17号』のリミッターを解除する」

男が操作したデバイスを通じ、ミラージ・バットの観客席入口の暗がりにはいたジェネレーターのリミッターが外され、同じに自己加速魔

法が発動された。

そして目の前を横切った男の背中に鉤爪のように曲げられた指を振り下ろす。

だがその瞬間、ジエネレーター腕は絡め取られ、その勢いを利用してジエネレーターは観客席の外に吹き飛ばされていった。

およそ20mの高さから落ちるとなると、恐怖で身体が動かせない。しかしジエネレーターはそのような感情は持ち合わせていない。素早く猫みたいに四足で衝撃を受け流しながら着地する。

ジエネレーターを外に放り投げた男、独立魔装大隊の柳連大尉はポケットに手をつ突っ込んだままジエネレーターの数m前に着地した。

大の男2人が観客席から突如消えた光景は、注意深く監視している智宏を除いて誰も気がついていない。智宏は誰にも気づかれないように観客席から出て行った。

柳は改めてジエネレーターを観察し、期待せずに問い掛けた。

「何者だ・・・いや、どうせ答えられないだろうしな。答えなくてもいい」

「問い掛けたのに答えなくていいなんて、おかしくないかい？」

ジエネレーターが柳に気を取られていると、退路を塞ぐかのように同じく独立魔装大隊の真田繁留大尉が後ろに回っていた。

普通ならここで逃げるのが賢明だろうが、ジエネレーターは組織の命令だけに従う人形。観客の殺戮が指令されたジエネレーターにとって、前後にいる2人は「観客」として殺戮対象に入っている。

グツと踏ん張り、バネのようにジエネレーターは再び柳に襲いかかった。

しかし、柳の突き出した手に触れるか触れないかの距離で元の位置に吹き飛ばされ、仰向けに地面へ叩きつけられた。

「いやー、いつ見ても見事だね。その『転』の応用は「違う。『転』だ」

「どっちでもいいじゃないか」

「なんだと?」

「あのー。どうでもいいんで取り押さえませんか?」

「ん?」

口喧嘩をしている2人は、後ろから来る智宏の存在に気づいていなかった。

独立魔装大隊の隊員なら察知してても良いはずだが、これは智宏が気配を消していたからでもある。

智宏は彼ら2人でジェネレーターを捕まえられるなら放っておこうかと思っていた。しかしこの状況では隙をつかれない。なので智宏は重力魔法でジェネレーターを地面に押し付けながら柱の影から表に出て行った。

智宏の接近に気がついた2人は、警戒しながらいきなり現れた智宏の服装と顔を見て誰だかわかったようだ。

「お前は四葉家の・・・」

「四葉智宏だね」

「そうです。お2人は独立魔装大隊の方ですね。達也が世話になっています」

「そうだ。だが君は九校戦のメンバーのはずだ。どうしてここに?」

「会場を警戒していたらその大男・・・ジェネレーターでしたっけ? そいつが外に吹っ飛んでいくのが視えたものですから」

「それで重力魔法で取り押さえたと。でももういいですよ。藤林君が被雷針で確保したから」

「・・・気付いていたなら声かけてください」

真田の言う通りジェネレーターを見ると、電気が流れている針のよ

うなものが刺さっている。

すると森の中から響子が出てきた。

響子は確実にジェネレーターを捕らえている智宏の重力魔法に舌を巻きながら針を飛ばしたのだ。

「私は藤林響子です。智宏君、よろしくね」

「はい」

「もう帰らないとチームメイトが心配するわ。ジェネレーターは私達に任せて。それとこれは外部に漏らさないように」

「わかりました。では」

智宏は重力魔法を解除して観客席に戻っていく。

重力魔法が解かれたジェネレーターは動き出そうとしたが、その瞬間自身に流れている電流が強くなり、完全に身体が麻痺していた。

「……全く。お2人は本当に仲がいいですね」

「何を言っている？お前の目は節穴か？」

「いいカウンセラーを紹介するよ」

「ほら、息ぴったりじゃないですか」

響子がさらっと言い返すと、柳と真田は互いの顔を見て顔をしかめたのだった。

第37話 本戦ミラージュ・バット決勝

智宏はミラージュ・バットの決勝戦が始まるまでまだ時間があるのを確認し、皆で昼食を食べに行っていた。

達也と深雪は部屋でCADの調整をしながら昼食を食べるらしい。CADと言えば、先程大会委員から飛行魔法に使用したCADの検査をさせると言ってきた。智宏もちょうどその場において、正直鬱陶しい彼らに家の名前を使おうかと思っただが達也はそれを止め、素直にCADを渡した。

その後2人は達也と智宏の部屋に行き、昼食を食べた終わった深雪はシャワーを浴びてベッドに座っていた。

「深雪」

「なんででしょうか？」

「俺にして欲しい事はあるか？」

「そうですね……会長からは身体をしつかり休めるように言われましたし……」

「なんでもいいよ」

「では私が寝ている間……そのお……隣に……いてくれませんか？」

さすがの深雪も恥ずかしかったらしく、顔を真っ赤にしながら『お願い』してきた。

もちろん達也に断る理由などない。

「深雪は甘えん坊だね」

「妹は兄に甘えるものです」

「わかった。手も握ってあげよう」

「ありがとうございます、お兄様ー」

達也は深雪が自分のベッドに寝っ転がると、手を握らせてもう片方

の手で深雪の頭を優しく撫でた。

すると深雪は1分もしない内にすやすやと寝息をたて始める。

それから何時間か経っても達也は深雪の側を離れず、ベッドの横に置いた椅子に座っていた。

深雪は安心しきった顔で寝ており、それが達也と深雪の絆を表しているのだと思うと達也は兄として嬉しく思った。

昔は深雪との過度な接触を禁じられていたために2人にはこのような経験は少ない。自分を本当に信頼してくれている深雪に感謝しなければいけないだろう。

達也は携帯端末につきさつき届いた2通のメールを確認する。

1つは響子から。

もう1つは遙からだった。

内容はジェネレーターによる観客席への襲撃未遂やCADへの不正工作の詳細、遙に頼んでいた仕事について。

深雪のCADに細工をした男は今どうしているだろうか。達也は深雪を地面に落とそうとした輩を生かしておくはずがないが、彼は刑務所で人生の半分を終えるだろう。まあこのこ出てきても消すだけなのだが……。

ここまで来たら深雪の優勝は確実だ。しかし、深雪に手を出した連中をそのままにしておくわけにはいかない。達也は感情を外に出していないだけで、ものすごく怒り狂っており、もし近くに主犯がいたら消していただろう。

そして達也は決意した事をメールで智宏に送る。智宏も深雪の兄だ。協力してくれるだろうと確信を持って。

決勝戦が始まる頃の天気は雲ひとつない綺麗な夜空。

正直曇っていてほしいのだが、ここまでできてしまったらしょうがない。

「深雪。体調は？」

「問題ありません。それと決勝なので最初から飛行魔法で挑みたいと思います」

「わかった。頑張れよ」
「はい！」

深雪は達也に見送られながら元気よくフィールドに走っていく。観客席に座っている智宏達は、柱の上に立つ深雪を観ながら決勝戦について話し合っていた。

「なんか深雪上機嫌じゃない？」

「そうだね」

「しつかり休んだんだろうな」

「それだけじゃない気がするけど……ところで決勝戦、智宏君はどう思う？あたしは深雪が少し苦戦するって考えてる」

「うーん……否定はできない」

「それでも深雪は勝つわよね！雫！」

「うん」

決勝戦ではさすがの深雪でも苦戦すると予想されるが、最終的には優勝すると結論が出る。

それと同時に試合が始まり、選手達は一齐に空へ飛び上がった。ここでさっきの試合と違うところが1つ。

他の選手も深雪のように足場に降りてこないのだ。

その理由は誰にでもわかるだろう。そう、飛行魔法を全ての選手が使っているのだ。

1 高の幹部達は驚きを隠せないでいる。

「そんな！飛行魔法!?!」

「やはり他校も使用してきましたか……」

「術式がリークしたのね……でも選手より優勝を優先するなんて……」

「会長落ち着いてください。司波くん、何か対策はあるの？」

「俺に聞かれても困ります。しかし、トールラス・シルバーの術式をそ

のまま使っているなら『安全装置』が作動するはずですね」

「安全装置？」

真由美やあずさが心配する中、達也の声にはどこか余裕があった。

6人の少女が舞う中、その中でも深雪だけが着々とポイントを重ねていく。実戦経験が少ない他校の選手らはいまだ飛行魔法を使いきなせていないのだ。

深雪が自分達より自在に動き回っている。この事が彼女達の中に『焦り』を生んだ。

そして、ついに最初の1人が体勢を崩してしまう。だが落ちる瞬間に安全装置が作動し、ゆっくりと選手を下に降ろした。

その後、第2ピリオドが終了した時点で3人が棄権してしまい、第3ピリオドは深雪を含めた3人だけになる。

だが、脱落していく選手がいる中でも深雪だけはペースを落とすことなく点数を取り続け、試合が終了した時には深雪だけがフィールドに立っていた。

深雪が一礼すると、観客席から歓声と拍手が会場全体を包む。それは深雪だけでなく、高等魔法を使って『ミラージ・バット』という競技で美しく舞ってくれた選手にも向けられており、他の選手達も疲れていたが満足そうな笑顔で立ち上がった。

そしてミラージ・バットの優勝は深雪が勝ち取ったのである。

その夜、ホテルのミーティングルームでは簡単なお茶会が開かれており、明日から再開される本戦に出ない人や手が空いている人は参加している。

さらに本来ならばこの場にいないはずのエリカ、美月、レオ、幹比古の姿があった。

しかしその中で主役とも言える2人の男子生徒がいなかった。智宏と達也である。その事に最初に気がついたのはエリカと雫だ。

「ねえ深雪」

「何かしら？」

「あたし達も参加させてもらったのはいいんだけどさ、智宏君と達也君はどうしたの?」

「お兄様は部屋でお休みになっているわよ」

「そっか。大活躍だったもんね」

「じゃあ智宏さんは?」

「実家の用事ですって」

「家の用事ね・・・そっか、残念」

深雪の説明を受け、エリカ達は「それもそうか」と思った。他の生徒から見ても達也は新人戦で最も活躍したと言ってもいいほどの功績を上げ、その分疲労も溜まっていると深雪以外に思わせる事ができた。

智宏については『四葉』^{実家}と言われると何もできない。それ以前に十師族の用事に口を挟むのは気が引ける。

がっかりした雫を慰めるようにほのかや深雪が別の話題を振っている中、当の本人達は軍基地の地下駐車場に足を運んでいた。

紫紺色の野戦服を着た智宏がコンクリートの柱によりかかって辺りを警戒し、達也は1台の車に乗り込んだ。

「もう、女性を待たせたらダメよ」

「すみません」

達也が乗った車の持ち主は遙。仕事のデータを達也に渡すためにここまで来てくれたのだ。

遙は車の中を真っ暗にし、ポケットから携帯端末を取り出して電源を付けた。達也もタブレットを取り出していた。

「はい、アジトの地図データと構成員のリスト」

「ありがとうございます(ぎ)ございます・・・それとこれは?」

「おまけ。無頭竜^彼の実行部隊が待機している場所よ」

「本当ですか?さすがですね・・・ではこれでどうですか?」

「……え？」

遥は自分の所に送られてきたバイト料を見て目を丸くした。理由は報酬が少ないのではなく、高校生が払える金額を超えているレベルだと言うこと。しかしトールラス・シルバーとして稼いでいる達也にとってこの程度の金額ははした金にすぎないだろう。

「足りませんか？」

「い、いいえ。十分よ」

「では失礼します」

「………保険なのよね」

遥は達也の懐が膨らんでいるのを見逃さなかった。中身についても何がしまわれているのか簡単に予想がつく。

達也も遥の問いに簡単に答えた。

「ええ」

「それと外にいるお友達は？」

「言えませんよ。これ以上は俺の口からは言えませんし、個人的にも公安である貴方に消えて欲しくない」

「はあ……わかったわ。夜遊びはほどほどにね」

「わかりました」

実を言うと遥は外にるのが智宏だと気がついていたが、あえて達也に聞いてみたのだ。

だが達也から帰ってきた解答にこれ以上の詮索はいけないと結論が出る。なので素直に『夜遊び』の警告だけして、これ以上何も聞かないことにした。

達也は車から降りると、遥はさっさと駐車場から出て行く。

車が完全に消えると同時にタイミング良く向かいに止まっていた車のライトがついた。

智宏と達也はその車まで行き、助手席の扉を開く。この車の扉は2つしかないが、前の椅子を前にずらせば後ろの座席に座れるのだ。

智宏は後ろに、達也は助手席に座った。運転手は響子だ。

「こんばんは、2人共」

「こんばんは」

「よろしくお願ひします」

「達也君、彼女は？」

「公安のオペレーターです」

「へえ」

達也は遥の事を説明しながら、カーナビに先程入手した地図データを送る。

響子も送られてきたデータを確認した。

「私もバイト代欲しいなあ」

「それは俺にはではなく上に言ってください」

「ウチは労働基準法の対象外よ？」

「それもそうですね」

「とういかなんで智宏君までいるのよ」

「智宏は敵のアジトから脱走した者を始末してもらおう予定でしたが、別の拠点を襲撃してもらいます」

「皆には家の用事って言ってありますから問題ないですよ」

「ふーん……ま、いいけどね。四葉にはお世話になってるわけだし。じゃあ行くわよ」

智宏がいる事に少し疑問を持った響子は理由を聞いて納得すると、カーナビに送信された目的地に向けて車を走らせた。

一方。響子の上官である風間は1人の客人を迎えていた。

「どうぞ閣下」

「失礼するよ」

風間に呼ばれたのは九島老人だ。

最強の魔法師と呼ばれただけあって、部屋に入る時や座る時の動きは一切無駄がなく、いつでも魔法を発動できるような体勢だった。

無論、風間は九島老人を攻撃する真似はしない。風間は飲み物を持ってきた部下を下がらせると、九島老人の目をしっかりと見た。

「それでなんのご要件でしょうか？」

「君相手に余計な事は言うまい。さっそく本題に入ろう。彼についてだ」

「彼・・・とは？」

「司波達也君だよ。彼は四葉深夜の息子だろう？」

「・・・」

「私が知らないと思ったかね？深夜と真夜は私の教え子なのだよ」

「閣下・・・それでしたら四葉が達也の保有権を捨てていない事はご存知のほうですが？」

「無論知っている。しかし・・・惜しいとは思わんかね？」

「惜しいとは？」

「昨日のモノリス・コードは見事だ。彼は私的なSPとしておくにはもったいないだろう？」

九島老人は昨日のモノリス・コード決勝で将輝を正面から倒した達也の事を思い浮かべながらそう述べた。

この言葉から導き出される答えに風間はすぐに気がつく。

「閣下は四葉の弱体化を望んでおられるのですか？」

「その通り。このままでは四葉は強くなりすぎる。いや、既に強い。将来真夜が健在のまま智宏君が真夜の跡を継ぎ、その下で司波達也と司波深雪が智宏君を支える事になれば四葉家は十師族の中でトップ

に君臨する事となるだろう。だから私は達也君を四葉から離し、国防に従事させたいのだよ」

「四葉智宏殿はそんなに実力がありますか」

「知らぬとは言わせんよ。私と直接会った時は驚いた。あの若さで一条将輝・・・いや、十文字克人以上の強さを持っている」

「閣下からご覧になられてもそんなに・・・」

「真夜の流星群を引き継がなかったらなんとかなったのだがな」

2人はしばらく黙り込む。

すると風間は少し強い口調で九島老人に話しかける。九島老人も遮るべきではないと判断し、そのままだった。

「閣下。1つよろしいでしょうか」

「・・・なんだね」

「司波達也は現時点で重要な戦力となっています。そして一条将輝と達也では格が違う事を承知していただきたいと思えます」

「ほう」

「一条将輝は拠点防衛において機甲連隊に匹敵します。しかし、達也は単身で弾道ミサイルに匹敵する戦力です。閣下、これは誇張であつても虚構ではないのです」

風間はそう宣言したのだった。

第38話

智宏VS実行部隊

「響子さん。ありがとうございます」

「気をつけてね」

「智宏、終わったら連絡してから横浜ベイヒルズタワーの前に来てくれ」

「わかった」

智宏はとある場所で降りた。

そこは中華街から少し離れた場所にある横浜の倉庫群。この中の1つに彼らの兵隊がいるらしい。構成員数（智宏にとって）はそんなに多くはなく、アサルトライフルを持った兵士約30人と精鋭部隊の魔法師が10名、計40名程度がそこにいるはずだ。

ジェネレーターもいる可能性も考えたが、おそらく達也が襲撃する場所に全員いると推測された。

静かな倉庫群を歩いていくと、目的の倉庫に近づいてきた。

智宏はCADが2つ共あるのを確認し、達也から渡されたデータを見ながら倉庫の中に入って行く。倉庫の中はひんやりとしており、夏なのにあまり暑くない。倉庫の中は大部屋が1つと数個の小部屋に分かれているらしく、気配を探ると何人かが小部屋で、他の全員は大部屋で待機している。

一瞬悩んだが、とりあえず智宏は大部屋に向かった。

気配からしても彼らは完全に油断している。武器の手入れはしっかりしているようだが、これでは敵の襲撃に耐えられないだろう。今みたいに。

智宏は学校の教室に入る感じで大部屋に入った。部屋のドアは分厚く、これから何をしようが中の音はほとんど外に漏れることはないだろう。

ドアを閉めて辺りを見渡すと、中にいた者達は智宏に対して全く警戒を示していなかった。

「よお。上からなんか来たか？」

「いやいや。多分まだ会議中じゃねーの？」

「そうかそうか……」

「……」

「って誰だ!？」

「誰だって言われてもねえ」

気安く話しかけられた智宏は呆れに呆れ、相手が智宏がこちらの人間ではないと気がついた時には自分が何者なのかを言う気も失せていた。

智宏が部屋を中心に進んで行くと、驚いた彼らは武器をとって銃口を智宏に向ける。

すると1人の魔法師が目の前にいる男が何者なのか気がついたようだ。

「お、お前は四葉の!」

「知ってるのか？」

「ああ、四葉家当主の息子だ。だが九校戦に出ているはずだぞ!なんでここにいる!」

「なんでってそりゃあ……」

なぜここにいると言うより、なぜこの場所を突き止めたと普通聞くだろうにと智宏は思っていたが、ひとまず質問に答えるため、見せしめとして1番近くにいた兵士にCADを持った右手を向けて重力核を放つ。

魔法が当たると、その兵士は身体を中心に押し込まれるかのように収縮し、グシャつと音を立てて潰れてしまった。残ったのはジュースのように搾られた血のみ。肉体はそのまま圧縮されて消えてしまっていた。この時智宏は初めて人を殺した。しかし人を殺めても何も感じない。普通の人ならば躊躇う所を智宏は躊躇なく実行したのだ。これも四葉の血かと納得してしまう。

見た目は結構エグいな、と達也がいればそう言っただろう。彼以外は多分嘔吐するかもしれない。

この出来事を隣にいた者はしばらく認識出来ていなかった。さっきまで飲み食いしていた仲間が肉体を残さずその血のみを残して殺られてしまったのだ。「え？」という風にもなるのかもしれない。

魔法を放ち終わった智宏は、止めておいたセリフを再開して言った。

「・・・お前らを殺すためだ」

このセリフを聞いた兵士達は智宏が何を言っているのかわからなかった。

「な、なぜ・・・」

「なぜ？お前達が無頭ノ・ヘッド・ドラゴンの兵隊だからだろ」

「なんだと!?!」

「くそ！撃て撃て！」

彼らはアサルトライフルとCADの引き金を引いて智宏を蜂の巣にしようとしたが、引き金に触れた指に力を入れるか入れないかぐらいのタイミングで、智宏以外の武器は魔法で碎けてしまった。

もう直せないぐらいにポロポロになったアサルトライフルとCADは持ち主の足元に散らばり、彼らを啞然とさせてしまう。

飛び道具を失った彼らにはまだコンバットナイフがある。だがとっさにナイフを手に来たのは精鋭と他数名だけ。他はアサルトライフルを構えたポーズのまま固まっていた。

「銃が！」

「ま、まて。近接戦闘なら数の多い我々が有利なはずだ」

「そうだな。おい！お前は反対側から部屋を出て他の連中を武装させて呼んでこい！」

「わかった！」

「よし、俺達は奴を殺るぞ！」

「「おう！」」

「士気は高い……か（まあそれでもお前らの処分は確定しているけどな）」

固まっていた兵士もナイフを抜き、じりじりと智宏に迫る。

1人は小部屋にいる兵士達を呼びに行ったが、智宏は別に逃げるのではないのなら今殺すつもりはなかった。

約30人が智宏を囲むように動き出し、智宏まであと5mに迫った時、智宏は再び重力核を発動させた。対象は目の前にいる全ての敵。

彼らはもう一步踏み出そうとするが、その足は動かない。いや、足だけでなく身体全体が動かないのだ。

そして先程と同じように仲間が潰れ、床に血溜まりが出来た。

次は2人。

その次は3人。

さらにその次は4人。

殺される人数は増えていき、残りの人数が10人になった時、智宏は一旦殺すのを止めた。

智宏は攻撃が止んだのを不思議に思っている兵士達から一旦視線を外し、CADを向けたままそこらへんにあった椅子に座る。

「そうそう。死ぬのは確定だから冥土の土産に聞いていくといい。俺は別にお前らがおとなしくしていればこんな事はしなかったんだ。でもな。身内に……従妹に手をだされて、黙ってる兄貴はいねーんだよ。もしかするとお前らを九校戦の会場に突撃させる可能性もあった。だからここに来たのさ。恨むんなら上の連中を恨みな……。さて、とりあえずお前ら全員……潰れろ」

残った兵士が最後に見たのは、智宏の顔だった。若干俯いていたのでよく見えなかったが、智宏の口元は笑っているように見えた。

それを最後に全員が潰され、その血だけが現世に留まった。

潰れた衝撃で血は辺りに飛び散り、返り血を避けていた智宏も方向が悪かったのか、顔や服に少しだけ血を付けてしまった。

肉体を一欠片も残していないのを確認した智宏は、後ろからバタバタと走ってくる気配に気が付き、椅子から立ち上がって扉に向き直り彼らを待つ。

扉が開かれると完全武装をした兵士が7人ほど立っており、血溜まりの中に立っている智宏を見て驚いている。

「・・・遅かったじゃないか」

「あ、あいつらはどこだ？」

「さあ？どこでしょうね〜」

「まさか！30人以上いたんだぞ！」

「やりやがったな！お前ら撃て！」

「学ばないねえ（お前らは人として死ぬるだけ有難く思えよな）」

「「ッ！」」

智宏は再び彼らの武器を壊し、身体にも魔法を放つ。

今度は別に長々と生かしておく必要はない。さっさと終わりにするため、智宏は残存兵を全て殺した。

その場に残ったのは40人分の血。それは排水溝のある場所まで川を作っていた。

血なまぐさくなってきた大部屋から出た智宏は、そのまま倉庫の外に向かう。入ってきた時の通路を辿って外に出る前に、ひとまず魔法で返り血を落とした。顔や服、靴にまでついた血をそのままにしておくわけにはいかない。そして外に出ると重力核を倉庫に発動して床ごと粉々に砕き、跡形もなくして無頭ノリ・ヘッド・ドラゴン 竜の施設を更地に変えてしまった。まあ最初から施設ごと潰せばよかったのだが、それではお楽しみが減ってしまうのだ。

全ての作業を終了した智宏は携帯端末を取り出して達也に電話をかけた。

3回目のコールで達也は応答する。

「おつす。取り込み中か？」

『そうだが問題ない。終わったのか？』

「ああ。全員消した」

『了解した。じゃあこっちにきてくれ』

「おう」

智宏は電話を切ると、達也と響子がいる横浜ベイヒルズタワーに向かった。

途中、四葉家にも電話をかける。一応報告するためだ。まさか智宏と真夜の回線をハッキングすることができる人間がいるとは思いたくないが、とりあえず達也にハッキング対策はしてもらっているので響子並の実力がないと侵入できないはずだ。

こちらは1回目のコールで出た。

「もしもし、母上？」

『私の所に直接かけてくるなんて少し驚いたわ』

「忙しかったですか？」

『いいえ、さつきまでミラーズ・バットを観ていたからまだ暇よ。要件はなにかしら？』

「今さつき患者の手足を消しました。その報告をと」

『射抜いたの？それとも潰したの？』

「潰しました」

『やっぱりそつちの方が処理が簡単なのね。怪我はしてない？』

「かすり傷ひとつ負ってません。返り血は浴びましたが・・・」

『ならいいわ。あとは達也さんね。九校戦を狙っていた無頭竜東日本総支部を壊滅させたのが四葉の関係者というのはいいいカードになるわ。ありがとうね』

「いえ」

真夜は智宏と達也が無頭竜の東日本総支部を消すのを四葉家のカードにするつもりだ。しかしなにかあった時のために手持ちのカードを増やすのはいい事だろう。

真夜は智宏に労いの言葉をかけると、隣に座っていた彩音に受話器を渡した。

『彩音さんに変わるわね』

「え?」

『・・・智宏様?』

「彩音か。どした?」

『私も大会を観ておりました。アイス・ピラーズ・ブレイクでの優勝おめでとうございます』

「ありがとう。九校戦が終わったらすぐに帰ってきてよ。久しぶりに彩音の作る飯が食べたいからさ」

『わ、わかりました!頑張ります!』

「じゃあそろそろ切るよ。・・・あ、そうだ。母上に伝えておいて欲しい事があるんだけど」

『はい』

「夏休み中少しの間だけそっちに帰れますって言っといてくれ。じゃな」

『あ、あの——』

彩音が何か言おうとしていたが、智宏はそれに気付かず通話を切ってしまった。

智宏はそのまま目的地まで向かって行った。

ちなみに四葉家では、いきなり電話を切られた彩音が受話器を持っただまま硬直している。理由は後ろに控えている葉山にもわかる。真夜が不機嫌になっているのだ。

「全く・・・なんで切っちゃうのよ」

「も、申し訳ございません」

「貴女は悪くないわ」

彩音はとりあえず謝ったが、真夜が不機嫌なのは四葉家当主としてではなく、1人の母親としてだという事に気が付き少しホツとしていたのだった。しかし、この後彩音が智宏からの伝言を伝えると真夜の機嫌が治ったのは言うまでもないだろう。

第39話 悪魔の降臨

智宏と別れた達也と響子は目立たない所に車を止め、横浜ベイヒルズタワーに侵入した。

響子のハッキングで監視カメラの映像をいじったり、屋上のロックを解除したりしたので2人は何事もなく屋上にたどり着いた。

一方、無頭竜の東日本総支部では撤退の準備が行われていた。

ジェネレーターが必要な資料を集めているのを尻目に、幹部達は呪詛を漏らしている。

「くそ……まさかジェネレーターが四葉と日帝軍の特殊部隊に押さえられるとは」

「このままでは済まさんぞ！」

「しかしその前にあの司波達也という餓鬼は何者だ？調べたのだから」

「ああ。だがわかったのは個人的な情報だけで奴以外の情報は出てこなかった」

「何者なんだ……？」

「……ッ！」

「どうした！」

荷造りしていた6体のジェネレーターは、3体ほど残して消滅してしまっただけだった。

彼らは啞然とし、今何が起こったのか認識できていない。だが、背後の壁に穴が空いているのに気が付く。そしてそれが物理的な攻撃でなく魔法による攻撃という事も。

すると不意に部屋に備え付けてある専用電話が鳴る。幹部の1人が全員の顔を見合わせ、恐る恐る通話ボタンを押した。

『Hello. 無頭竜東日本総支部の諸君』

スピーカーから聞こえたのは若い男の声。彼らはこの男が攻撃をしかけてきたのだとすぐに察した。

時は少しだけ遡り、達也は響子のハッキングが完了するまで目標のビルを見つめていた。

ハッキングが完了したと響子から聞いた達也は、後ろで「時間外労働云々」と呟いている上官を無視しながら、手に持った『トライデント』の銃口を壁に向けてなんの躊躇いもなく引き金を引いた。

するとビルの壁が分解され、達也がもう一度引き金を引くと今度はジェネレーターが数体消え去る。これが『分解』。この魔法を受けた者は生物として、人間として死ぬ事が許されない。最初から存在していなかったかのように認識できるような恐ろしい魔法だ。

達也は啞然とする幹部連中を確認し、彼らの部屋に電話をかけた。響子がハッキングしているため、なんの抵抗もない。

そして通話ボタンが押されたのを確認すると、達也は友達に話しかけるようにこう言った。

「Hello. 無頭竜東日本総支部の諸君」

『何者だ!』

「富士では世話になったな。その返礼に来た」

男達はなぜこの場所がバレたのかわからなかった。まあ独立魔装大隊と公安が動いているなら無頭竜のアジトを調べていてもおかしくない。彼らはさっさと退散しなかった自分達に怒りを抱く。

すると側にいたはずのジェネレーターが消え去り、その時の熱源に反応したスプリンクラーが消火のため水を噴き出した。

「なっ………14号!どこからだ!?!」

幹部の1人が慌ててジェネレーターに攻撃を仕掛けてきた者の場所を聞いた。

心を持たないジェネレーターは、気が動転している幹部達と違いパ

ニツクにならない。『14号』と呼ばれたジェネレーターは、ゆつくりとした動作で壁に空いた大きな穴の外に見える横浜ベイヒルズタワーを指さした。

幹部は慌てて部屋に持ち込んでいたスナイパーライフルを手に取り、ジェネレーターが示した方角にスコープの照準を合わせた。

倍率を上げていくと、少しずつだが横浜ベイヒルズタワーの屋上に人のシルエットが見える。そこに見えたのは黒い服を来た男の姿だった。

スナイパーライフルで覗いているのに気が付いたのか、達也の口には歪んだ笑みを浮かべられる。

すると突然達也を見ていた幹部が悲鳴を上げて仰向けに倒れた。達也がスコープを分解した事により、その破片が眼球に刺さったのだ。

「14号と16号！やれ！反撃するんだ！」

「不可能です」

「攻撃範囲外です」

「口答えするな！」

『やらせると思うか？反撃したいなら自分でやればいい』

幹部が14号と16号に命令するが、2体共動かない。いくら改造人間だからと言って達也がいる場所に攻撃をしかけるのは無理だと判断したのだろう。

だが回答した瞬間、2体のジェネレーターは仲良く消え去った。

「ならば・・・おい」

「なんだ」

「兵をホテルに向かわせろ」

「・・・わかった」

『無理だな』

「何!?!」

『そろそろなんだが……ん、来たか。俺だ……そうだが問題ない。終わったのか……?』

「奴は誰と話しているんだ?」

「さ、さあ?」

『了解した。じゃあこつちに来てくれ。さてと、お前らに残念な知らせだ。倉庫にいた兵士は全て死んだぞ』

「「なんだと!?!」」

『こちらも別働隊を用意していたのでな』

智宏が兵隊を壊滅させた報告が達也に入り、達也は隠すことなくそれを彼らに教えた。

すると何人かが有線電話に飛びつき、慌てて外に連絡に助けを求めようとする。

だが――

『やめておけ』

「ひいー!」

『その部屋から通信できるのは俺だけだ』

「くっ……」

「なぜだ……」

『では始めようか』

達也の処刑宣告とも言えるセリフに耐えられなくなった幹部の1人は扉に向かってはしりだす。その瞬間、男はジェネレーターと同じように消えた。

もはや自分達は逃れる事はできない。心臓にナイフを突き付けられているのだと察した。

仲間の消滅を見た無頭竜の支部長は慌てて受話器を他の仲間からひったくって叫んだ。

「ま、待てー!」

『ん?』

「我々はもう九校戦には手を出さない!この東日本総支部と西日本総支部を引き上げさせる!」

『日本から撤退すると?』

「そ、そうだ!」

『お前にそんな権限があるのか?ダグラス・黄^{ウオン}』

「私はボスの側近だ。それなりの権力を持っている(なぜ私の名が・・・)」

『ほう』

「拝謁も許されているし顔も知っている!」

『では聞こう。ボスの名前は?』

「・・・」

達也が無頭竜のボスの名前を聞くと、ダグラス・黄は固まってしまふ。ボスの名前は組織の最高機密となっている。

長年の忠誠はボスの名前を言うことを引き止めた。

だが、黙ってしまった故に――

「ジエームズ!」

仲間がまた1人消えた。

『今のがジエームズ・朱^{チュウ}か。次はお前だ。早く答えろ』

「・・・ボスの名前は・・・リチャード・孫^{スン}だ」

『表の名は?』

「孫・・・公明」

それからダグラス・黄は達也の質問に答え続けた。無頭竜の中でもほんの少数の人間しか知らない事まで。そこには必死さはなく、機械のように回答していた。

5分くらい経っただろうか。

ダグラス・黄は全てを話し終えた。

「これ以上は知らない。本当だ」

『そのようだな』

「で、では！」

『ああ。ご苦労だったな』

残った幹部達はホツとして顔を上げ、横浜ベイヒルズタワーに向けた。これで助かったと。

しかし現実はその甘くはなかった。

幹部がダグラス・黄を残して全て消されたのだ。

「なっ！お前達・・・!?見逃してくれるのではなかったのか!？」

『いつそんな約束をした?』

「九校戦で誰も死ななかつたではないか！」

『関係ない。正直お前達が何人殺そうが俺にはどうでもよかつた。ただ、お前達は俺の逆鱗に触れた。それがお前達が消える理由だ』

「・・・悪魔め」

『ダグラス・黄、その悪魔の力を目覚めさせてくれたのはお前達無頭竜のおかげだ』

「まさか貴様沖繩の時の・・・デーモンライト!？」

それがダグラス・黄の最後の言葉となった。

達也が分解を放つと断末魔を上げて消え去り、部屋に残ったのは転がったテーブルと備品だけ。人としての死を迎えられない惨劇があつたなど誰も思わないだろう。

響子も達也が無慈悲に幹部達を消しているのを見て、少しだけ悲しそうな目で達也を見た。

感情のほとんどがなくなっている達也はジェネレーターに近い人間兵器だ。しかし、達也は深雪のためだけに感情を解放する事ができる。その力の解放がどれだけ恐ろしい物か。響子は改めて思い知ら

された。

2人は行きと同じように横浜ベイヒルズタワーから外に出る。近くに止めている車には1人の男がよっかかっていた。智宏である。

智宏は2人と軽く会話をし、車に乗り込み、響子の運転でホテルに戻って行ったのだった。

第40話 九校戦最終日

九校戦10日目。

今日は九校戦の最終日。モノリス・コードには克人が出場する。智宏は克人の戦う所を見るのは初めてなので、少し興味深く画面を観ていた。

昨夜、夜遅く帰ってきた2人を迎えたのは事情を知っている深雪だった。

他の生徒達は皆眠っているらしく、ロビーには3人を除いて誰もいない。智宏達はそのまま誰にも見られないように素早く部屋に移動し、そこで深雪と別れたのだった。

さて、智宏は今モノリス・コードを観るため観客席に来ている。この試合には克人達上級生が出場するため、真由美や摩利が観客席に訪れていた。

ほぼ全員が試合が始まるのを待っているのだが、そこには達也の姿はない。達也はホテルの一室で風間達独立魔装大隊の面々と密談をしているのだ。

「智宏さん」

「深雪？」

「お兄様は・・・」

「大丈夫。始まるまでには来るだろう」

そう言って深雪を宥めた智宏は、じっと待った。

相手選手も入場して試合が始まるギリギリの時間になった時、智宏と深雪は上に達也の気配を感じ取った。

振り向くと達也は空席を探しているようだ。深雪が自分の席を取っておいてくれているのは知っているだろうに・・・

達也も智宏達に気がついていないと思うが、こちらを中々見ない。すると智宏の隣でむくれた深雪が小さい氷の礫を達也に放った。達也は下から飛んできた氷の礫を慌ててキャッチし、飛んできた方向に

座っている深雪と目が合った。

そしてようやく気が付かないフリを諦め、達也は智宏達が座っている最前列の席に向かった。

「深雪。少し荒いぞ」

「お兄様が中々来ないからです」

「そうそう。目立ちたくないのはわかるがせめて試合くらいはなあ」

智宏達が座っているのは最前列。座ると目立つのだ（智宏と深雪がいる時点でもう手遅れ）。というか達也の意思に反して深雪は自分の兄が目立って欲しいと思っている。

達也が席に座るとちょうど揃った両選手にカメラが向けられ、大きなパネルに映し出された。

モノリスの前に立っている3人は達也達とは違っていつも通り代わらぬ姿だった。

「さすがだな。俺達とは格が違う」

「やっぱ経験かねえ」

「お兄様は立派でした！負けてません！」

「そ、そうですね！とても堂々としていました！」

達也がさりげなく呟くと、同意するように智宏も反応した。

しかし、その後速攻で返ってきた深雪とほのかによる慰めには達也はいささか面食らってしまう。

これ以上何か言おうとまた反応してきそうなので、智宏も達也もパネルに集中した。

そして試合が始まった。

フィールドは新人戦の時に将輝が1人で無双していた『岩場ステージ』。試合開始のブザーが鳴ると服部が勢いよく陣地を飛び出し、跳躍の魔法を駆使して敵陣に突進して行く。

それに対して9高の反応は遅かった。

この時彼らの頭の中には2つの選択肢があった。

1つは全員で服部に集中砲火を浴びせる。

もう1つは服部の迎撃をディフェンスに任せて予定通りに自分達は進撃する。

この迷いで動きが鈍く、対応が遅れた。服部は作戦通りだと言いたげな顔で魔法を相手陣地に撃ち込む。発動した魔法は『ドライ・ブリザード』。真由美がスピード・シユーティングで使用した魔法の原型バージョンだ。

これが命中すると戦闘不能になる可能性がある。9高の選手もそれをわかっているのか、頭上にシールドを展開して防いだ。しかし、そのせいで周りに霧が発生して何も見えなくなる。

急いで霧を払おうとするが、それより先に服部が次の魔法を発動して2人をダウンさせた。

2人目は倒される前に魔法を服部に撃ち込んでいたが、それは当たる直前で見えない壁に阻まれる。それは服部の魔法ではなく、モノリスの前で仁王立ちしている克人が発動した『反射障壁』だ。

その後服部は最後の選手を倒し、結果1高の勝利となった。

「いやすごかったな」

「うん。僕達とはレベルが違うね」

「当たり前でしょー。経験の差よ」

レオ、幹比古、エリカが感想を言い、その近くで達也はこのレベルの高い試合を深雪にも見習わせたいと思っていた。

智宏がふと1高の生徒が座っている席を見るとほとんどがいなかった。どこかで買い食いでもしているのだろうか。

「次は決勝戦だね」

「ああ」

「お兄様、時間があるので冷たい物でも食べませんか？」

「それはいいね。確かアイスがどこかに売っていたはずだが・・・」
「智宏さんもどう？」

「・・・」

「智宏さん？」

「あ、雫ごめん。会長から呼び出しだ」

「・・・ふーん」

「じゃそゆことで」

「あっ」

試合まで時間があるので深雪や雫達はアイスを買いに席を立った。その際智宏も誘われたが、真由美からの呼び出しで行けなくなってしまう。とつとつと行ってしまった智宏に、雫は捨てられた子犬のような視線を向けた。

するとその場の空気を変えようと、深雪は達也の手を握ってアイスを買いに行く。ほのかやエリカも席を立ったので、雫も釣られるように深雪達について行った。

真由美とホテルのロビーで待ち合わせしている智宏は、ごった返している観客席の出入口で他校の生徒をかき分けながら目的の場所に向かう。

ロビーに到着すると真由美がソファアに座っており、智宏を見つけると手招きして呼び寄せた。

「智宏君こっちこっち！」

「会長、十師族に関する用事ってなんです？」

「うん。じゃあ歩きながら話そうか」

そう言つて真由美は席を立ってエレベーターがある方向に歩いていく。智宏も慌てて真由美の横に並んで歩いた。

「実は家からメールが来たのよ」

「はあ」

「智宏君も私と同じ十師族ならわかるでしょ？」

「……だいたいの予想はつきます。これから十文字先輩の所に行くんですか？」

「そうよ」

智宏がメールが来た時点で予想した通りだった。真由美がこの夕イミングで智宏を呼び出すとなるとその要件は限られてくる。

智宏と真由美はエレベーターで目的地の階まで上り、克人が待つているミーティングルームに向かう。

「十文字君。私よ」

真由美がミーティングルームの前に備え付けてあるインターホンみたいな機械を操作して中にいる克人に呼びかけた。

するとドアが開き、智宏と真由美は中に入る。克人は上半身タンクトップ、下半身はプロテクション・スーツ姿。そして制汗剤の香りがあった。おそらく真由美に会うため、汗の臭いを消すのに使用したのだろう。克人は無表情だが結構紳士なのだ。

克人は真由美の後ろにいた智宏に一瞬視線を向け、何かを察したかのように椅子に座った。

「用があるんだったな」

「ええ。父から暗号メールが来たわ」

「師族会議のだろうか？四葉がいる時点で察せる」

「でしょうね……コホン、それでね？一昨日の新人戦モノリス・コードで一条君が達也君に倒されたでしょ？」

「ああ。まさか勝つとは思わなかった」

「……『十師族の魔法師は常に最強の存在でなければならぬ』か」

「あら智宏君よく知ってるわね」

「勉強しましたし」

「そう……あ、それでなんだけど。高校生であつてもこれ以

上十師族に泥を塗る真似は許さないらしいわ」

「なるほど。力を示せという訳か」

「ごめんなさい。本当はこんな茶番はやらせたくないのよ」

「気にするな。これも宿命なのだろう」

「じゃあ頼んでいい?」

「任せろ」

克人は真由美から・・・いや、十師族からの要請を受けて感情を表に出さずにそう応えた。

それとこの話は克人だけに向けられた物ではない。智宏にも言っているのだ。智宏はあと2回の九校戦がある。絶対に手加減をせず、常に圧倒的な力で勝利しろとの事なんだろう。

モノリス・コードの決勝戦は第1高校VS第3高校。

ある意味宿命の対決となり、観客席は全て埋まっていた。ここで新人戦と違うのは、今回の試合は攻守が逆転している所だ。つまり、将輝がやっていた事を3高はやり返されているのだ。

克人の姿が見えた瞬間、3高の選手は氷の礫や岩を飛ばしたりしているが、それは全て克人の展開したシールドによって防がれている。これこそあらゆる攻撃を幾重にも展開した防壁で無効化する十文字家の多重移動防壁魔法『フアランクス』。

圧倒的防御力で一步一步進んでいく克人の姿はまるで古代ギリシャの重装歩兵のようだった。

攻撃を弾きながら前進し、3高の陣地まであと少しという所でその歩みを止めた。そして勢いよく地面を蹴り、克人の巨体が相手選手に向けて飛び出した。フアランクスを展開したままタツクルの体勢で突進したため、1人の選手が吹き飛ばす。

その後も克人の巨体は勢いを衰えることなく残りの2人も叩き潰した。

全ての3高選手が跳ね飛ばされ、モノリス・コードの決勝戦は1高の勝利。それと同時に九校戦の総合優勝に花を添えたのだ。

観客席が拍手に包まれる中、実力者達は克人の戦闘を観て素直に

「凄い」と思ってしまふ。今の試合は圧倒的では済まされない。まさに『蹂躪』だ。フアランクスがある限り攻撃は通用しないし近づいたら先程のように吹き飛ばされてしまふだろう。

智宏は流星群があるためまだ余裕があったが、それでも克人に対する警戒レベルを上げた。

観客が見守る中、克人は拳を突き上げて王者の如く声援に応えたのだった。

第41話 ダンスパーティー

九校戦が表彰式まで終わると、その夜は懇親会を開いた場所でダンスパーティーがある。

懇親会の時の牽制し合うような雰囲気とは違い、ホールには和やかな空気が流れている。それに加え、10日間に渡る激闘とも言っていない日々から解放された生徒達はその解放感からいささかフレンドリーな状態になり、他校の生徒と混じって今回の九校戦についてお互いに感想を言っている。

智宏も他校の女子生徒から話しかけられている。その隣では深雪が3重の人垣に囲まれていた。

先程深雪にまわりついていたCM制作会社や芸能プロダクションの関係者を蹴散らしたばかりなのだが、自分も囲まれて目を離れた隙にまた人垣が出来てしまった。しかし、今度は鈴音が深雪の隣に立って変な奴らを撃退しているのでありがたいかった。あまり深雪を庇うと変な噂が流れかねないだろうし。

深雪の兄貴である達也も妹よりは少なかったが、エンジニアとしての腕を観たビジネスマン達に話しかけられていた。

その後なぜか摩利が達也の所に歩いて行き、しばらく話した後達也の肩をポンポンと叩いてどこかに行ってしまう。どうやら達也はかわられただけのようだ。

智宏は「めんどくせー」と思いながら、作った笑顔（四葉の悪いイメージを軽減させるため）で話しかけてくる女子生徒達に対応し、タイミングを見計らって人垣を脱出して深雪の所に向かう。

それと同時に管弦の音が会場に流れ始める。この時間までになんとかパートナーを見つけられる事ができた男子生徒は女子生徒の手を取って中央に進んでいったが、それでも深雪の周りには少年達が群がっていた。深雪も笑顔で接しているが智宏にはわかる。あれは迷惑している顔だ、と。

深雪に群がる奴らの後ろに立つと、智宏に気がついた男子生徒がサッと智宏を避けた。智宏はゆっくり歩き、モーゼのように人垣が割

れたスペースを進んだ。

「あ、智宏さん」

「やあ深雪。大変そうじゃないか」

もう1人の兄の接近に気がついた深雪は少しホツとした雰囲気
で智宏に話しかけた。智宏が深雪をダンスに誘ったと勘違いした男子
もいたようで、半分の男子が深雪を諦め他の女子生徒の所に向か
った。

するとさらに人垣の中から2人の男子が進み出た。達也と将輝で
ある。

「司波達也と………四葉智宏か」

「一条、2日ぶりか？」

「どうも（あ、そっか。達也は一条と話した事あったんだっけな）」

堅苦しい挨拶をしている2人は周りから見ると見えないはずの火
花が散っているように見えたのだろう。深雪を囲んでいた残った男
子達は巻き込まれまいとどこかに行ってしまう。

達也を心配そうな視線を送っている深雪を見た将輝はここで1つ
の事に気がついた。

「も、もしかしてお前ら兄妹か!？」

「………今まで気がついていなかったのか？」

「マジで?..」

「あ、いや」

「一条さんは私とお兄様が兄妹に見えなかったようですね」

「……はい」

ガツクリ項垂れた将輝を見て深雪はニコニコ笑っている。達也は
このままではいけないな

と思いきう言った。

「深雪、ここにいるのはなんだから一条と踊ってきたらどうだい？」

「ッ！」

「一条さんはどういたしますか？」

「あ、その四葉は・・・」

「俺はいい。最初は一条に譲るよ」

「ありがとうございます。で、ででは1曲お相手願えませんか？」

「はい。こちらこそ」

深雪は差し出された将輝の手を取ってホールの中央に向かって行った。中央に向かう将輝の顔は少し得意げな顔をしており、周りから来る嫉妬の視線（男女両方）を気にせず見せつけるように歩いている。

ダンスを踊りに行く従妹を見送っていた智宏は、服の袖が引っ張られているに気がついた。

後ろを見ると雫が立っている。

「雫？」

「・・・」

（なんだジツと見つめて・・・あ、そうか！）

「コホン。雫、俺と踊らないか？」

「うん！」

雫の期待するような視線を理解した智宏は雫をダンスに誘う。すると雫は「ないか？」と言うタイミングと同時に食い気味だったがOKした。

中央に向かう途中、いつの間にか隣から消えていた達也を探すとはのかとウエトレス姿のエリカが達也と話している。どうやらエリカは達也がほのかにダンスを申し込むのを促しているみたいだ。エリカは苦笑しながら2人の前から姿を消し、ほのかはもう一步達也に

近づいた。

そして達也はほのかの前に手を差し出し、ほのかは笑顔でそれに応えて2人はホールの中央に向かう。

しばらくしてある程度の人数が集まると音楽が別の曲に変わる。

パートナーを見つけられた男女の生徒達はくるくると踊り、智宏も嬉しそうな顔をしている雫を見つめながら1曲を終えた。

すると智宏を待っていたのは女子生徒による誘いの嵐。知っている顔から全く知らない顔の女子生徒が智宏に押し寄せたが、その中でも圧倒的な存在を誇っていたのは深雪と真由美だった。

「会長？」

「智宏くん、いいわね？」

「アッハイ。こちらこそお願いしま—おとつとつと」

真由美は有無を言わず智宏を中央に引きずっていった。さっきの雫との踊りを見られていたらしく、なんで最初に選んでくれなかったんだと言いたげな視線を向けながら智宏の肩に手を添える。そして真由美のクセがあるダンスに智宏は巻き込まれていった。

それからというもの、智宏は押しかけてくる女子生徒と休むことなく踊っていた。深雪にほのか、英美、スバル達1高女子を初め、他校の見知らぬ女子とホールをくるくる回っていた。ちなみに将輝は深雪と踊り終わると各校の上級生のお姉様方の間で引っぱりだこ状態になっている。

途中達也の姿も見えたが、達也もそれなりに踊っているようだ。

智宏が3高の制服を来た女子生徒と踊っていると、壁際で休んでいた達也が克人についてどこかに行くのが見えた。

その中庭に連れてこられた達也はなぜここに来たのか疑問に思っていた。

「会長、なぜここに？」

「単刀直入に言う。司波、お前は十師族だな？」

「いいえ」

達也は克人の質問に危うく身構えそうになったが、冷静を装って答えた。

「そうか・・・では俺は十文字家次期当主として助言する。お前は十師族になるべきだ」

「十師族に？」

「一般の生徒はわかっていないだろうがお前はそれだけの実力を持っている」

「買いかぶりです」

「・・・どうだろうな」

達也はこの瞬間に克人に対して1つの戦慄を抱いた。

この先輩は間違いなく天敵だ、と。

この洞察力は尋常ではない。もちろん戦闘能力もだ。

本来達也の分解は克人のフランクスに対して相性は最悪と言っている。防壁を分解してもまた防壁が展開される。その繰り返しでは克人には勝てないだろう。

ただ、達也の知る限り3人の人物が克人に勝てると確信している。

1人目は智宏。

2人目は真夜。

3人目は師匠の九重八雲

九重は達也より魔法を工夫して使用し、克人に対しても何らかの方法で勝ってしまうだろう。智宏と真夜は流星群があるためフランクスは意味をなさないはずだ。

「司波。この件についてはあまり時間がない。十師族の次期当主を正面から倒してしまった事実はお前が考えているよりずっと重いぞ」
「それは理解しています」

「そうか・・・嫁を取るとしたら七草・・・いや、その妹か」

「会頭？」

「何でもない。そろそろ戻る、遅れるなよ」

何か怪しい事を呟いていた克人に達也が声をかけると、克人は何もなかったかのように去っていった。

その場で呆然と立っていた達也は、後から来る人の気配に気がついていなかった。

「お兄様？」

「深雪か」

「どうされたのですか？」

「何でもないよ」

「そろそろパーティーが終わります」

「部屋に戻りたいんだがそうはいかないか」

「お部屋に戻られてもほのか達の襲撃を受けますよ」

「そうだな。智宏はどうしてる？」

「智宏兄様なら雫と会長に挟まれて動けなくなっています。他校の生徒も智宏兄様に近づきたいようですけど」

「智宏も案外人気だな」

「そうですね・・・あら？お兄様、最後の曲ではありませんか？」

2人が黙るとパーティーホールの方から音楽が再び流れてきた。だが達也にはそれが最後なのかわからない。

「お兄様。ラストは私と踊っていただけませんか？」

「ここですかい？」

「はい。演奏でしたらここでも聞こえますし、靴も芝生の上なら問題ありません」

笑顔で誘ってくる妹に達也には断るという選択肢はない。もとよ

りあっても選ばないだろう。達也にとって深雪が全てなのだから。

「わかった。踊ろうか」

「はい！」

そして2人は踊る。

星空の下、誰もいない庭の噴水の前で2人の身体はくるくる回り、達也は深雪の、深雪は達也の顔だけを見ていた。

全てが回る中、自分達を誰かが見ている気にもしなかつただろう。この2人だけの空間は誰にも崩せないのだから。

その後の祝賀会でも、大会で活躍した智宏達は休む暇もなく先輩や友人と話した。

翌日のバスでは九校戦で溜まった疲労が一気に押し寄せ、ほとんどの生徒は帰り道で寝てしまう。ちなみに帰りのバスで智宏の隣に座っているのは行きで約束した雫だ。と言っても2人は寝ていたので隣に座っていた感覚はあんまりなかったが……。

夕方。

学校に到着すると1高の生徒達はその場で解散し、それぞれ久々の自宅に帰った。

智宏も自宅まで達也と深雪の3人で歩き、途中で2人に別れを告げて自宅のドアを開けた。

「ただいまー」

「おかえりなさいませー!」

玄関のドアを閉めるとリビングからエプロン姿の彩音がパタパタと出てくる。

「いつ帰ったんだ?」

「半日ほど前です」

「そっかそっか」

「夕食は出来ていますよ」

「じゃあいただこうかな。着替えてくるから先に用意しといて」

「かしこまりました」

嬉しそうな顔をした彩音は、夕食をテーブルに並べにリビングに戻る。智宏は部屋で着替えた後、彩音が用意してくれた美味しい夕食を九校戦の思い出話をしながら食べたのだった。

夏休み編

第42話 海へ！

「え、来週の金・土・日で海に？」

『ダメ？』

九校戦が終わり夏休みが中盤になった頃、智宏は四葉の本家に帰ってきて夏休みをのんびりと満喫していた。彩音もこれを機に四葉のメイド長に色々とおぼろげに教わっているらしい。

実家に帰ってきて数日後、智宏の部屋に設置されているテレビ電話に雫から着信が入ってきた。内容は「海にいかないか？」というもの。突然の事で聞き返してしまい、案の定雫は断られると思ってしまう。

「いやいやいや。大丈夫だよ」

『本当？』

「ああ。でも俺本家にいるんだよなあ」

『集合場所は葉山のマリーナだよ』

「葉山のマリーナ？ヘリポートってあったっけ？」

『ちよつと待って………うん、あるって』

「じゃあそつちまでへりで行くよ」

『よかった。じゃあまた来週』

「おう」

智宏がOKすると、雫は嬉しそうに電話を切った。

さて、なぜこのような事になったのか。時は昨日まで遡る。

昨日雫はほのかと深雪の3人でテレビ電話を使用して同時通話をしていた。

「ねえ、海行かない？」

『海？』

『海水浴にでも行くのかしら？』

「うん」

『あ、もしかして』

「そっだよ」

『？』

『あのね、雫はプライベートビーチを持っているんだよ』

『そうだったの』

「お父さんがお友達を連れて遊びに来なさいって言った」

北山家は小笠原の無人島を別荘地として所有している。もちろん四葉も何個かあるはずだ。

現在小笠原の周辺には荒れた無人島がいくつも存在し、太陽光発電を利用した高級リゾート地を作る事が盛んになっている。1部の無知者はそれを自然破壊だとほざいているが、これは荒れた国土を開拓しているのだから問題もない。と言うか国から「買ってこない？」と持ちかけられるほどだ。

『叔父様が？』

「あ、でも顔を見るのは最初だけだよ。仕事が溜まってらんだって」

『そうなの？』

『でもご挨拶はできるのね』

「うん」

『じゃあお兄様に聞いてみるわ』

『私はエリカに連絡するね！』

「よろしく。私は智宏さんに声をかけてみる」

と、まあこんな感じで海行きは決まり今に至る。四葉のビーチを使ってもよかったが、それだと達也と深雪が来られなくなってしまうだろう。

智宏は部屋を出ると真夜の執務室に向かう。

「母上」

『どうぞ』

「失礼します。お話ししたいことが・・・」

「何ですーんんっ！とりあえず座りなさいな」

真夜は先程まで四葉当主として仕事をしていたのだろう。書類の上にペンが置いてあり、電話も近くにある。敬語を使っているのは大體仕事をしていた時だ。

智宏はいつの間にか現れた葉山から紅茶をもらい、ソファ―に座った。

「それで?」

「クラスメイトの雫から海に行かないかと誘われまして」

「あら、北山さん?あの北山財閥の」

「はい」

「北山さんのお父様には私もお世話になってるわ。最近からだけど取引を始めたの。資金援助をする代わりに最新技術の合同研究と武器の個人売買をね」

「それって外にバレたらやばいやつじゃ……」

「大丈夫、情報操作が得意な人材がいるから。智宏さんにも高校卒業したら詳しい事は教えるわ」

四葉は戦争でも始める気なのだろうか。しかし数は少なくとも十師族の中でも戦闘力はトップクラス。戦略級レベルの魔法師を少なくとも2人も抱えているので、日本はもとより一国だけでは四葉にかなり傷を負わせるだけで勝てないだろう。と、智宏は思っている。

話が逸れてしまったので、真夜は一旦紅茶を口にしてから元の路線に話を戻した。

「それでいつ行くの?」

「来週の金・土・日です」

「いいわね、私も行こうかしら」

「いや勘弁してください。大変な事になります」

真夜が現地に行ったら騒ぎになるどころではない。何かあったと他の十師族達に思われてしまうだろう。と言うかのんびり過ごせない。

「冗談よ。ところで彩音さんは連れていくの?」

「母上のお許しがあれば。来年1高に入学させるおつもりでしたら皆と顔合わせをするのもいいかと思ひまして」

「なるほど……じゃあ連れて行っていいわ。入学に関しては私に任せなさい」

「ありがとうございます」

こうして彩音も海に連れていく事が決定する。最後にヘリで集場所まで行きたいから送ってくれない?と聞くと、真夜は快く承諾してくれた。

この後、智宏は部屋にいる彩音に2人で北山家のプライベートビーチに行く事を告げると、驚き半分喜び半分といった反応だった。彩音は相当嬉しかったのか、智宏が去った後に自分のベットの所でコロコロ転がっていた。

翌日。

彩音を従えた智宏はマリーナまでヘリで飛んで行く。ヘリポートに着くと、雫や達也達が出迎えてくれた。どうやら智宏達が最後だったようだ。

歩ってくる達也達を置いて小走りで智宏に近寄ってきた雫は、後ろにいる彩音の存在に気がついた。

「やあ雫」

「久しぶり。その人は?」

「俺の付き人。ほら彩音」

「はい、初めまして北山様。私は智宏様のメイドの香月彩音と申します」

「メイドさんなの?若いね」

「今年で15だからな。確か達也と深雪は会ったことあるよな」

「おひさしぶりです」

「ん・・・?ああ。1回な」

彩音には達也と深雪の接し方について注意してある。四葉の血筋としてではなく、智宏の友人として接しろ・・・と。

「あれ?智宏君その娘は?」

「うちのメイド。あ、実は来年から1高に入学する事になってるか皆よろしくな」

「後輩になるんですか?」

「智宏君のメイドがねえ」

「皆様よろしくお願います」

エリカや美月が来たところで来年彩音が1高に入学する事を発表した智宏はとある人物を探した。それは雫の父親である。行きだけ顔を見せると言っていたらしいがその姿は見えない。どこにいるのだろうか。

船着場まで歩きながら智宏が辺りを見渡していると、雫は智宏が何をしているのかに気がついた。

「お父さんなら船にいるよ」

「船？」

「あの船」

雫の指さす先には立派なクルーザーが浮かんでいた。近くまで来るとその豪華さはさらにわかるようになる。さすがは北山家と言うべきか、このクルーザーはそこらの物よりも外見が違う。外見だけで高そうだなあとわかってしまうのだ。

じーっとクルーザーを見ていると、中からラフな格好をした男が出てきた。

「やあ来たね」

「えーっと、あなたは？」

「初めまして四葉智宏君。私は雫の父親、北山潮だ」

「こちらこそお世話になります。四葉智宏です」

船長っぽい格好で出てきたのはなんと雫の父親だった。てつきり使用人かと思ってしまった。

「四葉家当主殿には本当に世話になっている。これからも御贔屓に」

「はい」

「ところで・・・どうやらウチの雫と仲がいいようなのだが？」

「え、まあ」

「ふう〜ん」

潮はジロジロと智宏を観察するように見た。まあ娘を心配する親なら別に変な行動でもないのだろう。

智宏は潮と握手をした時軽く握ったつもりだったが、潮はガツシリ手を掴んでいた。

「お父さん？」

「し、雫……いや、あはは。これは失礼」

雫に軽く睨まれた潮は慌てて智宏から距離を取る。雫からすれば自分の父親が智宏に何かしているのだと思ってしまったのだろう。

挨拶を終えると、智宏の近くに達也が寄ってきた。

「こんにちは、北山さん。司波達也です」

「おお、君が！いやーウチに来てくれなくて残念だよ」

「すみません」

「いやいや。私も無理強いはしないさ」

「ありがとうございます……深雪！」

「お呼びですか？」

「雫の父だ。挨拶なさい」

「はい！初めまして、司波深雪です。本日はお招きありがとうございます
います」

「こちらこそ来てくれて感謝するよ、レディ。北山潮です。とても
美しいお嬢さんを迎えられるとは当家の荣誉でございます」

芝居っ気たっぷり潮の行動に深雪は嫌がることなくニツコリ
笑って膝を軽く折って見せた。

深雪の誰もが振り返るその美貌と立ち振る舞いを目の前で見る事
ができる。これだけでもありがたいと思うだろう。

なので潮の顔がふにゃくと緩んでしまっても仕方の無い事だ。

「小父様、私の時はそんなこと仰らなかつたじゃないですか」

「お父さん！恥ずかしいから鼻の下伸ばさないで」

「むむ。私はそんなみつともない事はしていない……
おお！そちらの君達も雫のお友達だね！歓迎するよ！さあ乗ってく
れたまえ！はっはっはっ」

「……………」

ほのかと雫のダブルパンチに潮は否定しながらも1歩後ろに下
がった。

雫だけならなんとかなったのかもしれないが、さすがにもう1人の
娘のように可愛がっているほのかにも言われてしまつてはもうどう

しようもない。潮はとつさにエリカ達に話しかけたが、この状況では話を逸らした事は誤魔化せないだろう。

その後智宏達はクルーザーに乗せられ、「仕事だから」といそいそと黒い車に戻っていく潮を見ながら別荘へ出発したのであった。

第43話 眩しい女性陣

マリーナから別荘がある聳島列島まで約900キロ。智宏達が乗っているクルーザーでおよそ6時間の船旅だ。

現代では自家用飛行機を使うのが普通なのだが、わざわざ船で行く理由が達也には理解できなかった。

エリカとレオ曰く、

「これが旅の醍醐味」

だそうだ。

そんな答えを聞きながら、智宏は2人の相性はいいんじゃないかと思ってしまう。

今智宏達が乗っているクルーザーは予想以上に大きく、棧橋から乗る時にその大きさにみんな驚いていた。

10人ちよつとがこの船に乗り込んでいるのにまだまだスペースに余裕があり、北山家の財力を改めて思い知らされる。

ちなみにこのクルーザーを操舵しているのはハウスキーパーとして雇われている黒沢女史。いやメイドでいいじゃんと思つたが、事情を聞かない方がいいと悟つた。

智宏にくつついてきた彩音は操舵している黒沢の代わりに飲み物などを達也達に配っている。雫や深雪は「申し訳ないから休んで」と言っていたが、彩音は自分はメイドであると言ってキツパリ断つた。

適当に喋つたり飲んだりしていると時間はあつという間に過ぎ、嵐に巻き込まれることなく別荘があるなこうど媒島に到着した。

智宏はクルーザーから降りると島全体をちやつかりサテライトアイで見渡す。

(さすが北山家。立派な島だ)

媒島はしつかり整備されており、ヘリポートまで作つてある。

四葉にも別荘はある。行ったことはないが、智宏の頭の中では全ての施設は要塞化されていると思つてしまう。

それに比べてここは遊ぶために作られた別荘。本当にいい場所だ。

一行は別荘で水着に着替えてビーチに向かう。ヨットパーカーを

着た智宏は同じ物を着てパラソルの下で涼んでいる達也の前で準備運動をしていた。

「智宏」

「ん？」

「レオと幹比古はどうした？」

「2人なら・・・ほらあそこ」

「うおおおりやああああ！」

「レ、レオ！何すんだよ！」

「はっはっはっ！幹比古、あっちまで競争だ！」

「ええ・・・しょうがないなあ」

「・・・」

「幹比古も大変だな」

「あはは・・・」

レオと幹比古はいきなり競泳し始めた。幹比古は巻き込まれたみたいだが、楽しそうなのでこれ以上何も言うまい。

今日は本当にいい天気だ。

雲ひとつない空、白い砂浜、ジリジリと照りつける太陽。しかし、このビーチにはそれ以上に眩しい光景があった。

「智宏くん、達也くん。泳がないの？」

「お兄様ー！気持ちいですよー！」

「おう待ってる！今行く！・・・しっかし達也」

「なんだ」

「眩しいな」

「そうだな」

2人は何が眩しいとは言わない。いや、言わなくてもわかっている。何が眩しいかって？それはビーチで戯れる少女達の水着姿である。

派手な色のスポーツ水着を着たエリカは道場で鍛えているだけあって、水着は彼女のプロポーションを1層引き出させている。

その隣で手を振っている深雪は花デザインがプリントされた水色のワンピース。相変わらずその美貌は全ての人を振り向かせるような不思議な力がある。

セパレートながらワンショルダーにパレオを巻き、アシンメトリーなスタイルで大人っぽくキメているのか。プロポーシオンだけならこの中で1番だろう。

雫は少女達の中で唯一フリルがいっぱいいくつについている少女らしいワンピース。いつもクールな雫が着ると何やら妖しい魅力が……。

意外だったのが美月だ。プライベートビーチのためか、いつも大人しく縮こまっている彼女の水着は水玉模様で、ビキニほど露出はないが胸元のカットは深く豊かな胸がバーンと強調されていた。

智宏にくつついてきた彩音は今も智宏と達也の後ろに立っているが、彼女も水着姿だ。深雪が無理矢理着せたのはスカート付きの白いビキニ。智宏がチラリと彩音を見ると恥ずかしいのか、顔を赤くして俯いてしまう。

その光景に智宏はうんうんと頷き、達也はジツと見つめているのは失礼だと感じて視線を横にズラす。

智宏は達也を誘おうとしたが、後ろに人の気配を感じた。

「お兄様！智宏さん！」

「2人とも泳ごうよー」

「そうですねよ！パラソルの下じゃもつたいないです！」

「智宏さん。行く」

立っていた智宏にはわからなかったが、座っている達也にとって今の状況はいささか問題がある。

腰を屈めて達也を覗き込んでいる深雪とほのか、そして2人を囲んでいる雫、エリカ、美月が水着姿でこんなに近づいているのだ。この時達也は自分の精神的な問題に少しだけ感謝した。

「じゃあ泳ぎますかね」

「智宏様。お預かりします」

「サンキュ」

智宏がパーカーを脱ぐと無駄な肉が一切ない鋼の肉体が姿を現した。

「おお……」

「す、すごいですね」

「智宏さんって鍛えてるの?」

「まあな………って雫?なんで突っついてるの?」

「すごいなって」

「いや、照れるなあ」

「ウチの道場でも中々いないわよ。深雪はそんなに驚いてなさそうだけど知ってたの?」

「ええ。智宏さんとお兄様が鍛錬で手合わせした時に見たの」

智宏の腹筋を雫が突つつき、エリカも道場の娘として智宏の肉体をジロジロ観察していた。

一方、彩音は智宏から預かったパーカーを大事そうに胸に抱え、少しだが漂ってくる智宏の匂いに酔いしれている。もちろんその表情は表には出していない。

「達也も行くこうぜ」

「わかった」

「お兄様、パーカーを」

「ありがとう深雪」

達也も立ち上がってパーカーを脱ぐ。

その時、智宏の時とは違った空気が流れた。

「達也君それって……」

エリカの声には隠しきれないほどの同様がある。しかしそれはエリカだけではない。雫も、ほのかも、美月も達也の身体から目を離せなくなった。

達也の肉体は智宏と同じくらい鍛え上げられているが、それとは別に様々な傷跡が皮膚に刻まれていたのだ。

1番多いのが切り傷。

その次が刺し傷。

所々にある火傷の痕。

いたるところに傷跡があり、とてもじゃないが普通の生活をしてきたようには見えない。実際に斬られたり刺されたり焼かれたり、血を流しながらの拷問ではないとここまで酷くならないだろう。

「すまない。気持ち悪いか」

あまりこの傷跡に触れてほしくない達也は先程預けたパーカーを取ろうとして、深雪に手を伸ばしたがパーカーを取ることに叶わなかった。深雪がギューツと抱えているからだ。

妹とはいえ女性の胸に手を伸ばすわけにはいかず、達也の手は行くところをなくしてしまった。

しかし、空ぶった達也の腕は深雪によって右腕に抱え込まれた。

「わっ」

この行為に美月がうつかり驚きの声を上げしまった。

達也と深雪はピッタリ密着しており、深雪の胸は布一枚を隔てただけで達也の腕に押し付けられている。しかし深雪本人に恥ずかしがった様子はない。

「お兄様、私は気にしません。その傷跡はお兄様が誰よりも努力した証ですから」

「深雪・・・」

深雪の言葉に達也の顔は微かに緩む。

その直後、達也は右腕に柔らかい衝撃を覚えた。

達也は原因がなんなのか予想はついていたが、一応首を捻って自分の右腕を包み込んでいる正体を確かめた。

その予想は当たり、右腕に抱きついてきたのはほのかだった。

ほのかは深雪と張り合うように抱きついており、密着している胸が達也の腕に触れているかどうかわからないが、ほのかの顔は深雪以上に真っ赤になっている。

「わ、私も気にしませんよー」

ほのかは何故自分がこのような行動に出たのかさっぱりわからなかった。まあ勢いで抱きついてしまったのはわかる。

それ以前に恋人でもない異性に水着姿でくっつくなんて普通はないだろう。もちろんほのかは達也が好きなので嫌ではないはず。

それはともかく、ほのかの行動は謎だった。

そう。これはまるでー

「これって・・・妹と恋人の板挟みの図みたいですね」

「しっ！ダメよ美月、今いいところなんだから」

「妹と恋人ね。なるほど」

妹と恋人の板挟み。

この美月のセリフは、達也に抱きついている2人以外の人の頭の中に浮かんだ言葉だろう。智宏もほのかの勇姿に思わず「やるなあ」と思ってしまう。

真っ赤にした顔を下に向けたほのかと嬉しそうにくっついていて深雪を達也は交互に見ると、「仕方ないか」と言いたげな顔で海へ向かった。

智宏達も3人の後を追いかける。その時、智宏の隣にいた雫は俯いたままの親友を見て「よくやった」と心の中でグツジョブしていた。

第44話

ちよつとした事故

さすが真夏と言わべきか、雲ひとつ無い空の中で太陽が智宏達の頭上でキラキラと照っていた。

智宏は雫から貸してもらった安定感抜群のビニールボードの上に寝っ転がってのんびりすごしている。達也は智宏より数mほど沖でプカプカ浮いているし、レオと幹比古はどこまで泳ぎに行ったのか2人の姿は見えなくなっていた。

女性陣は智宏より砂浜側で遊んでおり、パラソルの下で休んでいる美月以外はボードに乗っている。実は先程まで皆で水を掛け合いながら遊んでいたのだが、途中からジェット水流並の水のぶっつけ合いが始まってしまい、危険なので止めようと達也が進言して今に至る。ぐでーっとしている智宏がふと女性陣を見ると、いつの間にか雫がいなくなっているのに気づく。降りたのかな？と思っていると、こちらに何か近づいてくる気配がした。

それは智宏が乗っているボードの真横まで来るとプカーと海面から顔を出した。

「雫」

「む・・・バレた？」

「バレバレ。でも一瞬消えたから驚いたぞ」

「潜ったからね・・・・・・えい」

「あ、ちよ、うわ！」

雫がボードを下から持ち上げると、身体を固定していなかった智宏はあっけなく海に落ちてしまった。

南の島に来てすっかり油断していたようだ。

「な、なにすんだ！（ん？あ、達也め笑ってるな）」

「寝てないで遊ぼうよ」

「えく・・・って近くない？」

「気の所為」

雫は誤魔化したがる、絶対に気の所為ではない。智宏と雫の距離は3

0cm・・・いや、20cmくらいなのだ。

正直言つてこの状態は健全な男子高校生にはキツイ。

「まあいいか・・・ってヤバい！」

「え？」

智宏が叫ぶと同時に、2人の隣を高速で疾走した達也は智宏の視線の先に向かう。

何が起きたのかと言うと、ほのかが乗っていたボートが転覆してしまったのだ。喫水の浅い不安定な物で沖に出たのが間違い。しかし、なんとなく事故が起きる予感がしていた達也は素早く動く事ができ、ボートのところまで来ると潜ろうとしていた深雪を制して海中にダイブした。

そして海中でもがいているほのかに手を回し、達也は水を勢いよく蹴ってなんとか海面に浮上した。

そしてどういう経緯でこのような事になったのかを聞く前に、ほのかを持ち上げる要員としてボートに乗ったエリカのところまで押し上げようとした。

「え・・・あ！ま、待ってください！」

「体力がなくなる。上がってくれ」

「わかりました！でもお願いですから少し待って！」

達也はなぜこんなにほのかが嫌がるのかわからなかったが、後から急いで泳いできた智宏と雪には、無理矢理押し上げられるほのかを見て事情を察してしまった。

元々ファッション性重視で泳ぐ事を考慮していないデザインの水着をほのかは着ていたのだろう。なんと、ほのかの水着はトップが捲れあがってしまったのだ。

智宏はまだ背中が見えてる時点で後ろにいた雪が両手で目を塞いだので見えなかった。

一方、達也はエリカが抱えるまでほのかに両手で触れていたのので、抱えられた途端にほのかが正面を向いた時自分の目を隠す事ができなかった。

目の前に現れた見事な果実を見てしまったのはしょうがない。そ

それでも達也は誤魔化すように目をつぶって海中に沈んだのだった。
そしてほのかは今更のように悲鳴を上げ、両手で胸を押さえてボ
トの上にうずくまった。

◇? ◇? ◇? ◇?

「うえっ……グスツ……」

「あの……ほのかさん?大丈夫ですか?一体何が……」

何とも言えない空気の中、砂浜に戻ってきた智宏達は泣き崩れてし
まったほのかに事情を知らない美月がオロオロと話しかけているの
を見て、決まり悪げに2人を取り巻いている。

「だ、だから……エグツ……待ってって……ヒック……言っ
たのに……」

「その……すまない」

ここまで来ると誰が悪いとは言えない。別にほのかに責任がある
わけでもないし、助けた達也もわざと見た訳では無いが知らん顔はで
きない。

達也は自身の責任を感じて頭を下げ謝った。

すると雫は智宏の横から離れてほのかの耳元に口を寄せ、ほのか以
外に聞こえないくらいの声で囁いた。

「ほのか」

「……ヒック。何?」

「達也さんだって悪気があったわけじゃないよ。分かるよね?」

「うん」

「予定とは違ったけど……ほのか、これはチャンスだよ。あ
のね……」

何やらきな臭い……というか陰謀めいたセリフだが、雫がもう二
言三言囁くとほのかはようやく顔を上げた。

「達也さん。本当に悪いと思ってます?」

「嘘偽りなく思ってる」

「じゃあ……今日1日私の言う事聞いてください」

「「え？」」

達也はもつと別の事を要求してくるのかと思っていたが、予想外のセリフに達也だけでなく智宏や深雪達も戸惑いが浮かんだ。

正直このような要求はほのかのイメージには合わない。

智宏が横に戻ってきた雫を見ると少しだけ口元が笑っていた。きっと雫の入れ知恵なのだろう。もはや確信犯だ。

「ダメですか？」

「いや、それでいいのなら・・・」

「約束ですよ！」

言う事を聞けという要求に達也が頷くと、ほのかは満面の笑みでスクツと立って達也の手を握った。

その時一瞬冷たい空気が流れたが、智宏が冷気の発生源をチラリと見ると深雪は「しようがないですね」と苦笑している。

それからしばらくすると、競泳に出ていたレオと幹比古が海から帰ってきた。

レオはまだ元気そうだったが、幹比古はレオに遠くまで付き合わせて疲れ果てている。2人が帰ってきた頃にはちようどバルコニーでおやつタイムが始まっており、テーブルの上には冷たいジュースとたくさんのお菓子が置かれていた。

これらの物は黒沢と彩音が用意したらしく、黒沢も「彩音さんのおかげで早く準備が出来ました」と喜んでいた。

智宏が雫から受け取ったジュースを飲んでみると、レオと幹比古が黒沢から渡されたタオルで身体を拭きながら近づいてきた。

「なあ智宏」

「どうした？」

「達也と光井はどうしたんだ？」

「あれ、そういえば、見ないね・・・」

「ああ、あの2人は・・・って幹比古大丈夫か？息切れしてるけど」

「う、うん。大丈夫だよ、それで？」

「達也とほのかは・・・あそこ。あのボート」

智宏が指さす方向には達也とほのかがレトロな手漕ぎボートで沖

へ向かつていた。

「なんだありや」

「何かあったのかい？」

「あったのよ。イロイロとね」

傍で聞いていたエリカも興味がありそうな感じで海上の2人に視線が行く。

麦わら帽子を被った達也の表情は麦わら帽子が作り出す影に隠れてしまつてよく見えない。ほのかも日傘を差して背中をこちらに向けているのでなおさら表情はわからない。だがそれでも沖へ向かうボートからは浮き浮きした雰囲気伝わってきた。

幹比古はうつかりしていたが、ここには深雪がいるのだ。眼前で堂々とイチヤイチャ(?)している兄とほのかの姿を見せつけられて平気でいられるはずはない。それを察せなかつた幹比古はここで1つやらかしてしまふ。

「中々いい雰囲気じゃないか」

「あつーコラッー」

エリカは急いで注意したが、既に幹比古のセリフは全員に聞こえてしまつていた。

智宏とエリカは焦つて幹比古を引きずつていこうとした。しかし2人は近くの席から夏とは思えないほどのヒンヤリとした空気で動けなかつた。

シヤリ、シヤリ、シヤリ、シヤリ

さらにその席に座っている少女から真冬に聞こえるような音が聞き取れる。

シヤリ、シヤリ、シヤリ、シヤリ

まあこんな事ができるのは1人しかいない。

「吉田君、冷えたオレンジはいかが？」

深雪から愛想よく(?)話しかけられた幹比古は、目の前に差し出されたオレンジをカクカク頷きながら受け取つた。

受け取つたオレンジはスーパで売つてる冷凍ミカンよりも冷たく、石のように硬かつた。しばらく放置して溶かす必要があるだろ

う。幹比古は黒沢からスプーンを受け取り、手のひらの上に置いたオレンジを突つつき大人しくなった。

すると再び、シヤリ、シヤリという音が聞こえる。深雪の手には2つのマンゴーが握られており、あつという間に余分な物を一切つかっていない純粋なマンゴーシャーベットが完成した。

「智宏さん、西城君、食べますか？」

「あ、ありがとう」

「ども……」

今度は智宏とレオに差し出された。2人は余計な事は言わない方がいいと判断し、大人しく受け取った。

3人がなんとかフルーツを溶かして食べている中、深雪はフルーツに八つ当たりするのが飽きたのか、立ち上がって雫に向き直る。

「雫、私疲れちゃったみたい。お部屋で休みたいのだけど」

「わかった。黒沢さん」

「かしこまりました。深雪様、こちらへ」

深雪と黒沢が別荘に入っていくと、バルコニーに漂っていた冷たい空気はどこかに消え、緊張感溢れる空気もなくなった。

これには一同

(怖かった)

と思っただった。

第45話 波打ち際にて

その日の夕食はバルコニーでバーベキューだった。

智宏達はテーブルとコンロを行ったり来たりしながら肉や野菜を食べている。ほのかが嬉しそうに達也の世話をしている姿を見て茶化しているエリカと雫がいたり、昼のティータイムが若干トラウマになっていた美月が女性陣から少し離れて幹比古と一緒に夕食をとっていた。

達也や智宏はいくつかの派閥に別れて食べる事はなく、ほのか達と食べたり、レオと3人でフードファイトを繰り広げたりしていた。

その間黒沢や彩音は智宏達の専属となり、空いた皿に次々と肉や野菜を乗せている。淡々と仕事をこなす彩音を見た智宏は、一旦食べるのを止めて体ごと彩音の方を向いた。

「彩音さ」

「なんででしょうか?」

「食べないの?」

「いえ、私はメイドですので」

なんとなくこの答えを予想していた智宏は、やれやれといった感じで皿の上に置いてある肉をフォークで刺して――

「しようがないなあ。ほら」

「えっ?」

――彩音の口に持って行った。

「あーん」

「え、あ! その、私は・・・」

「いいから食べなさい。あーん」

「・・・いただきます」

「どう?」

「ん・・・美味しいです!」

「それはよかった」

幸せそうに食べる彩音は実際『おいしい』と言うより『嬉しい』感情の方が大きかった。それに気がついていない智宏も智宏だが、その

後そんな彩音を目撃した雫から『あーん』をせがまれてしまった。

夕食を食べ終わり、男子は風呂、女子は部屋でカードゲームというふうに分かれた。

そして智宏は風呂から頭を拭きながら出てくると外に向かう深雪の姿を目撃し、気になって早足で深雪を追いかける。智宏が深雪に追いついたのは、浜辺に到着した時だった。

深雪は近づいてくる智宏に気がついた。

「智宏兄様……………」

「うら」

「あ、申し訳ございません。智宏さん」

「うん。それでどうした？何かあったのか？」

振り向いた深雪の表情はなんと言うか……………寂しそうな感じがした。声もいつもより数段階落ち込んでいる。

その理由は解らなくもない。しかし智宏は聞かずにはいられなかった。

「私は大丈夫ですよ？」

「誤魔化さなくてもいい。もしかして達也の事か？」

「……………はい」

「気にしなくてもいいんじゃないか？確かに今日のアレは深雪にとつて苦しいかもしれない。でも達也はどこにも行かないよ。ずっと深雪の傍にいるさ」

「智宏さん……………」

智宏は落ち込んでいた深雪の頭を撫でる。深雪も達也以外の男性に撫でられる経験などほぼないだろうが、特に嫌がる素振りは見せなかった。

手をどけると深雪はすっかり智宏の目を見た。その瞳は落ち込んだそれではなく、いつも通り美しい形を取り戻していた。

2人は戻ろうとしたが、振り向くと別荘から砂浜に1人の小柄な少女が早歩きで向かってくるのに気がついた。

「あれは……………？」

「ん？ああ、雫だな」

「2人共何やってたの？」

「俺はここに向かう深雪を追っかけてきたんだ。雫こそどうしてここへ？」

「砂浜にいる2人を見つけたから」

「どうやら雫は深雪探している途中、砂浜で話す智宏と深雪を見つけ、こちらに来たらしい。夜の砂浜で男女が二人つきりで会っているとなると誰が見ても何か怪しい。これに雫はどこか危機感を感じたのだ。」

「じゃあ何もなかったんだ」

「ええ」

「そうだな」

「ふーん、まあいいや。それで深雪」

「何かしら？」

「話があるの」

「私がかまわないわよ？」

「あー、俺は戻った方がいいか」

「ごめんなさい。そうしてくれると助かる」

「女の子同士の会話を聞くのはあまりおすすめしませんよ？」

「ははは。じゃあ部屋に戻ってるわ」

智宏がヒラヒラと手を振りながら砂浜を去り、雫は波の音を数回聞いたところで深雪の目を見てこう問いかけた。

「深雪」

「何？」

「達也さんの事どう思ってるの？」

「愛しているわ」

雫の問いに深雪はなんの躊躇も、動揺も、考える時間もなく一瞬で答えた。

「それは・・・男の人として？」

「いいえ。私はお兄様を誰よりも愛しているし尊敬もしている。でも今私がお兄様に抱いている想いは恋愛感情ではないわ。前にも言ったけど兄妹で恋愛は有り得ないもの」

「そうなの?」

「なぜ雫がこの質問をしたのかは分かっているわ。大丈夫よ。ほのかの邪魔をする気はないから。ヤキモチだけはするけど・・・」

深雪の答えには1分の揺らぎも見られなかった。それどころか、雫は親友のために深雪に対してお願いをするつもりだったが、先に答えを言われてしまった。

笑いながら答える深雪に雫は泣きそうな表情を浮かべた。

「なんで・・・なんで割り切れるの? 達也さんの事あんなに好きなのに」

「私達の関係を他人には説明できない。たくさんの事があつたから。でも私が抱いているお兄様への想いは・・・愛しているとしか表せないわ」

「もしかして本当の兄妹じゃないとか?」

「随分と深くまで聞くわね?」

「あつ、ごめん」

「別に責めてるわけじゃないのよ?」

深雪は1歩踏み出した。

その時雫は一瞬身体を強ばらせたが、深雪は雫の横を通り過ぎてこちらに振り返った。

その顔には屈託のない笑みを浮かべて。

「雫がほのかや私が傷つけ合わないか心配なんでしょう?」

「・・・うん」

「話は戻るけど、私を知る限りお兄様とはDNA検査で兄妹という関係が否定される結果は出なかった」

「・・・」

「言いたいことは分かる。私がお兄様に向けている感情が兄妹の域を超えているって自分でも思うもの」

口ごもった雫に対し、深雪は自分の事は理解していると言う。

しかし、その後と言った言葉が雫に衝撃を与えた。

「でもね? 私、実は3年前に死んでいたはずなのよ」

「えっ?」

「本当の事よ。詳しい事は言えないけど、あの時私は死んでいるはずだった。でもお兄様のおかげで私はこうして雫とお話ができるし、泣いたり笑ったりもできる。私の命はお兄様にいただいたもの。だからお兄様は私の全てであり、私の全てはお兄様のものなのよ」

「それって・・・？」

「恋愛感情じゃないわ。恋愛って相手を求めるでしょう？でも私はお兄様にこれ以上何も求めない。この気持ちを受け取って欲しいなんて思っていない・・・」

深雪の見事な告白に、雫は「参った」と白旗を掲げることしかできなかった。初めからわかっていた事だが、やはりどの面でも深雪には勝てそうにない。

「深雪って絶対大物になるよ」

「自分でも歪んでるって思うけどね。ところで雫」

「何？」

「貴女はいいのかしら？早くしないとライバルが増えるわよ？」

「なっ！」

雫は深雪からの反撃に近いセリフにビタッと身体が硬直した。

このまま部屋に戻ってほのかの発破をかけようと思っていたのだが、予想外の反撃だったので固まってしまふ。

さらりと質問した深雪は珍しくしてやったりといったような顔をしている。

「み、深雪？」

「会長・・・いえ、七草先輩は智宏さんに気があるみたいだけど？」

「それは・・・」

「あと彩音ちゃんも怪しいわね。雫もヤキモチ妬いていたでしょう？」

「うあ、バレてた？」

「当たり前よ。どうするつもり？」

今のところ真由美と彩音が雫の中でリストアップされている。

そしてこの別荘において、雫は2人より先に彼女なりにアタックをした。彩音はともかく真由美よりはアピールしていただろう。

雫は深雪の問いに対し、しばらく考えた後こう言った。

「……………負けない」

第46話 ほんのかの大勝負

部屋に戻って来た雫からGOサインを貰ったほんのかは、ドレッサーの前に座っている。

昼間の羞恥刑は完全なアクシデントだったが、その後達也を独り占めできたのはほんのかにとつて嬉しい事だった。

そして親友である雫は、なんと告白のために深雪と話を付けてきたらしい。潮風に当たった雫と深雪は現在風呂に入っている。つまりこの瞬間が勝負時なのだ。

少し迷ったほんのかは淡いルーージュを薄く引き、髪と服装を整えて気合を入れる。

準備ができたほんのかは、微かに震える足を落ち着かせるために深呼吸してから達也がいるリビングへと向かった。

数分後、「外に行きませんか？」と誘ったほんのかと、2つ返事で承諾した達也は砂浜を歩いていった。

しばらく2人は波が寄せ来る砂浜を黙って歩く。自分の方から踏み出さなければ呼び出した意味がない、という危機感が緊張していたほんのかの背中を押した。

「達也さん」

ほんのかの振り絞った声に呼び止められた達也は足を止めて振り向いた。

既にここは別荘の明かりが届かない場所。波の音と月や星の光の中、ほんのかは達也と正面から向かい合う。

しかし、そこから先に行くには少し時間がかかった。

「あの……」

「なんだい？」

さつきから「あの」とか「その」しかほんのかの口から出なかったが、いつもより柔らかい達也の声に勇気づけられ、ほんのかは達也の目をしっかりと見つめてこう言った。

「私……達也さんの事が好きです！」

以外に大きな声だったので、もしかすると別荘に届いたかもしれない。

しかしそんな事を考える余裕は今のほのかにはなかった。今、ほのかの世界は達也と自分だけで作られているのだ。

「達也さんは・・・私の事どう思っていますか？それともご迷惑でしたか？」

涙声で恐る恐る問いかけたほのかに達也は笑って答えた。

「迷惑じゃないよ。まあ告白されるかもしれないって気づいたのは今日の昼だからね。でも——」

ここまでできてほのかは「振られるかも・・・」と思い、自然と押し寄せてくる悲しみに耐えるべく、ギュッと手を握った。

だが達也から返ってきたのは予想外の返答だった。

「——実は・・・俺は精神に欠落を抱えた人間なんだ」

「え？」

「小さい頃に事故に遭ってね・・・その時に精神のいろんな機能が消えたんだよ」

「そんな・・・」

「その時に恋愛感情もなくなったんだろう。壊れたり閉ざされたりしたわけじゃないから治す事もできていない。俺には【恋愛】という感情はわからないから人を好きにはなれても恋をすることができないんだ」

ほのかは口を押さえたまま何も言わなかった。まさに文字通り絶句状態。

「こんなのは卑怯かもしれないが・・・俺はほのかのことも好きだ。でもそれは友達としてであって、1人の特別な女性とは想えない。傷つけたくはないけど、俺はほのかの気持ちには答えられない」この言葉を最後に達也は黙ってしまう。

ほのかも何も喋らない。

2人の足元に近づいてくる波の音だけがこの空間を満たしていた。しばらくして、ついに足元に波が届こうかという時にほのかは顔を上げた。

「実は・・・私、達也さんは深雪が好きなんだって思っていました」
「誤解だよ」

「みたいです。私は達也さんの事信じてますから。だから精神の事も信じます。でもですよ？達也さんは私以外を恋人にする気はないということですよ？」

「そうだが・・・」

「ならいいです」

「？」

「そうなら達也さんにはこれからも好きな人はできない。なら・・・私はずっと達也さんの事好きでいます！他に好きな人ができるまでですけどね」

「ほのか・・・全く、適わないな」

他に好きな人ができるまで。

それはつまり、ほのかは絶対に達也の事を諦めないというほのかの意思だ。

そしてその意思を読み取れないほど達也も鈍くはなかった。

◇？

◇？

◇？

◇？

翌日。

この日も朝から強い日差しがジリジリと地面を熱していた。

しかもただでさえ暑いのに、素足で歩いたら立ってられないほどに熱せられた砂浜の上で、熱い、とても熱い闘いが繰り広げられていた。

「お兄様！お背中に日焼け止めを塗ります！」

「達也さん、ジューズをどうぞ！」

とか

「ジェットスキーに乗りましょう」

「沖の方にダイビングスポットがあるみたいですよ？」

とか

「砂浜が熱いので抱き抱えてくれませんか？」

「また2人でボートに乗りたいです！」

などと、第三者から見れば3人のいる場所からは熱気が発散されていた。

「深雪・・・昨日相当我慢してたのね」

「ほのかさんも随分吹っ切れてませんか？」

やや呆れ気味のエリカと美月に、

「・・・・・・・・」

ちよつと困った顔をした雫、

「大変だな」

「・・・・(いいなあ)」

「あの2人喧嘩しなきゃいいけど・・・」

しみじみと反応したレオ、幹比古、智宏の男性陣は3人を見つめていた。

達也は絡んでくる深雪とほのかのリクエストを順番にさばきながら対応しており、誰から見てもすごいと思うはず。

日焼け止めを塗ったり塗られたり、左右から海の幸を「あーん」されたり、本当にお熱い空間が展開されていた。

その後、親友の行動に勇気づけられたのか、雫も智宏に次々とリクエストを出してあっちへ行ったりこっちへ行ったりし、全員で遊んで帰る頃には皆クタクタになっていた。

しかし徐々に全力で遊んだからか、ボートの中で疲れて眠っている智宏達の顔には、疲労より幸せそうな笑みが浮かんでいたのだった。

第47話 予期せぬお誘い

智宏達が雫の別荘から帰ってきて数日後。

七草邸にて――

(あーあ。進展ないわねえ……。あらメール？誰？)

広い屋敷の一室に彼女、七草真由美はいる。

真由美が珍しく自室のベッドの上でゴロゴロしていると、隣に置いてあった携帯端末にメールが届いた。

メールを開くと、そこには少量の文章に数枚の写真が添付されていた。

初めは「ふーん」とばかりに見ていたが、1枚の写真を見た瞬間真由美の身体はベッドから跳ね起きる。

(こ、これって！)

真由美が凝視した写真には、智宏が船の中らしき場所で寝ている写真。しかもその隣には智宏の腕にひつつくようにして寝ている雫がいた。そう。これは先日、智宏達が北山家の別荘から帰ってきた時の物だ。

このメールアドレスは知らない物だったが、メールの要件の所に差出人の名前が書いてある。まあこんな事をするのは1人しかいない。もちろんエリカである。勘のいいエリカは真由美の気持ちにも少しずつだが気づいていたのだろう。それを知って送ってくるとは、もはや挑発行為だ。

そして写真を見ていると、ふつつつと真由美の中から何かが出てきそうになる。

真由美は送ってきたエリカに文句を言うより、雫に対して嫉妬の感情が大きくなって返信をすることを忘れてしまった。

(北山さん……。やるわね。わ、私だって)

何かを決意した真由美は智宏宛にメールを送った。

一方、智宏と彩音は一旦東京の家に戻ってきており、明後日にはもう一度実家に帰る予定でいた。

リビングでCADを磨いていた智宏は、自分の携帯端末に着信が来

ているのに気がつく。差出人は真由美だ。

「珍しい、会長からだ。なになに……?はあ?」

智宏の所に来たメールを要約すると、

明日暇なら私の買い物に付き合いなさい。これは会長命令よ。
との事だ。

他にも集合場所や時間も書いてある。

幸い明日は暇なので行けないこともないが、なぜ急に誘われたのだろうか。『暇だったら』という文章を付けてくれただけでもありがたい。まあ会長命令なら仕方ないので、とりあえずOKのメールを返信した。

まさかここで会長の権力を使ってくるとは思わなかったが、それだけ何か大切な事があるのだろうと智宏は無理矢理納得する。

そして智宏は彩音に（誰と行くとは言っていない）明日出かけてくる事を伝え、真由美は上機嫌にさっそく着ていく服を選んでいた。

翌日。

智宏は集合場所である駅前に10分前には到着しており、真由美を待っていた。

すると――

「智宏くん」

九校戦の時とは別のサマーワンピースを着た真由美がパタパタと智宏の所へかけてきた。

「お久しぶりです」

「そうね。今日は大丈夫だったの?」

「はい。でも明日は実家に帰る予定だったのでギリギリでしたね」

「よかった。それで……どう?」

この場合の「どう?」は服の事だろう。さすがに智宏でもわかった。

「綺麗ですよ。似合ってます」

「そ、そう!（よし。つかみはオツケー）」

「じゃあ行きますか?」

「ええ」

2人は電車に乗って都心へと向かう。

この時2人は以外と多くの人に目撃されている。まあ十師族である智宏と真由美は九校戦で注目度が高まり、魔法師だけでなく一般の国民でも知っている者が増えているのだ。

そして1番騒いでいるのが一高生（主に女子）。七草会長が男と一緒に出かけてる！という目撃情報が友人に渡り、さらにその男が四葉智宏だと知れるとそれまた騒ぎになった。

電車に揺られること数十分。

智宏と真由美は目的地のある駅に到着した。

「よし着いた」

「会長、そういえば今日はどこへ？」

「できたばかりのショッピングモールで買い物よ」

「ショッピングモールなら地元にもありませんでしたっけ？」

「い、いいのよここで！」

「まあいいですけど」

真由美は誤魔化したがる、理由として新しいショッピングモールに行ってみたかった事もあるが、本当は地元で2人つきりできて同級生と鉢合わせるのが嫌なのだ。

できれば知ってる人が誰もいない場所で買い物デパートしたいというのが真由美の本音。もっとも何人かには集合場所でバレているのだが・・・。

駅から少し歩くと、目的地のショッピングモールが見えてきた。この建物は元々あった古い団地を壊しその上に建てたらしい。

中に入ると予想以上の人が歩いている。開店してから数日は混むというのはどこの店でも同じなのだろう。

「最初はどうします？」

「安心して。ルートは決めてるから」

「さすがですね」

「まずは服よ！もちろん私と智宏君の！」

2人は手は繋がらなかったが、肩が触れ合うほど距離は近い。これも真由美が写真を見せられたからか、智宏が少し横にズレても真由美はその分智宏の方に移動した。何度かこれを繰り返したが、智宏もさす

がにあきらめたのか、店につく頃には大人しくなった。

「さあ着いたわよ」

「まずは会長からですね」

「どれにしようかしら……」

今回真由美が欲しかったのは秋と冬どちらも着れる上着だった。ちなみに智宏も似たような買い物をする予定だ。そろそろ9月なので秋の上着は出ているはず。

この店は割と有名な所で、智宏もテレビで何度か他の場所にあるこの店を見たことがある。特に若い女性に人気があるこの店は、服の値段は高いがそれでも買ってくれる人が大勢いるため結構儲かっているそう。

店内に入ると既に秋用の上着が店頭近くや真ん中に置いてあった。夏の終わりを実感できる。

「見て見て！どっちがいいかしら？」

真由美が持ってきたのは2種類の上着。智宏の前に持ってくると目の前で着たり脱いだりしてくれた。その時智宏は荷物係で、真由美のバッグを持たされた。

「そうですね……こっちの方が可愛らしいですよ。でも冬も着るならこっちですかね」

「そう？じゃあ、こっちにする」

「いいんですか？」

「いいのよ」

可愛らしさを選ぶか実用性を選ぶか。

結局真由美は智宏が「可愛らしい」と言ってくれた上着を選んだ。別に暖かくななくてもいい。智宏に褒められた事が真由美は嬉しかったのだ。

会計を済ませ、次に向かったのは男性服売り場。この店も有名な所で、智宏も分家の人が店の服を着ていたのを覚えていた。

真由美は店に入るなり智宏を置いて店員に話しかけ、何度かこっちを見てから店員は店の奥に消えて行った。

しばらくすると、店員は4着ほど持って戻って来た。

「こちらはいかがですか？」

「智宏君はどれとどれがいい？」

「俺は……これと……これで」

「じゃあ後の2着は戻して来てください。ありがとうございます。ありがとうございました」

「かしこまりました」

店員は選ばれなかった服を持って奥へ消えていく。智宏は真由美に鏡の前までグイグイ引っ張られた。

「よし。じゃあ着てみて」

「両方とも？」

「当たり前よ」

智宏は2着の服を順番に着た。

そして何かの審査員になったかのように真由美は上着を着た智宏を前後左右から観察し、挙句の果てには縦鏡に映った智宏をじーっと見ていた。

おそらく智宏が買う服は真由美が選んでくれるのだろう。智宏は真由美は多少変なのでも選ぶんじやないかと思ったが、ここは彼女のセンスを信じた。

そして智宏がマネキン状態になってから数分後――

「これがいいわ」

――と、真由美が選んだのは長身の智宏が着ると結構似合うやつ。

結果自分がいいなーと思っていた服が選ばれたので、智宏は少しホッとした。ただ、さつき真由美が買った服と色が少し似ているのは気の所為だと信じたい。

「じゃあ会計行ってきます」

「私は店の外で待つてるわね」

会計を済ませた智宏は店の前にいた真由美と合流し、真由美があらかじめ予約してあった店で昼食を食べた。

その後は敷地内にある噴水を見たり、開店のイベントを見たりして楽しみ（主に真由美が）、あつという間に夕方となる。

この日は2人共明日は予定があつたので、早めの16時の電車に乗つて八王子へと戻つた。

「帰つてきましたね」

「そうね。智宏君、今日はありがとう」

「いえこちらこそ」

「あ、私車待たせてるから」

「お疲れ様です」

「じゃあねー。また今度どこかに行きましょ」

使用人に運転させている車に乗つて真由美は自宅へと帰つて行く。智宏も明日の支度をするため早足で戻つた。

その夜、真由美はにやけながらベッドの上を転がり、何かと部屋に入つてきた妹達に気持ち悪いと言われてしまう。まあ昼食の時に「あーん」を（無理矢理）してもらつたり、それを見た店員にカップルと間違えられたりしたので、真由美はとても嬉しかったのだ。

そして智宏は自宅に帰ると、出迎えてくれた彩音に「お風呂へどうぞ。女性の匂いがしますよ」と若干尖つた声で言われてしまったのだった。

第48話 新しい魔法

夏休みも終盤を迎えた頃、智宏は再び四葉の実家へ帰っていた。別に真夜に「早く帰ってきて」とか、葉山に「真夜様を落ち着かせて欲しい」などと言われたからでは断じてない。そう。断じて。

本家に帰ってきてからというもの、朝昼夕の食事は真夜と食べたり、録画していた九校戦を真夜と観たり、親子にしてはベタベタしすぎなのでは？と思ってしまうほどスキンシップが多かった。

そしてある日の夕方。

智宏は達也に電話をかけていた。

『はい』

「俺だ」

『智宏か。どうかしたのか？』

「実はさ。新しい魔法を作りたいって思ってるのよ」

『ああ』

「で、達也になんかアドバイスでも貰えればと」

『そうだな……智宏は強力な防御魔法がないだろう？作るならそれだな』

「防御魔法ねえ」

『まさか攻撃魔法だけ覚えてればいいなんて思ってたんだろうな？』

「ま、まさか。わかった。防御魔法だな？それならいける。ありがとうな」

『何かあったら連絡してくれ』

「おう」

達也との話し合いで決まったのは防御魔法。

新学期が始まるまで時間は多くはないが、できれば完成させたいと智宏は思った。この日の夜は達也から参考に送ってもらった起動式に、智宏がオリジナル要素を加えてCADに打ち込む作業をやったせいで寝る時間が半分以上削れてしまった。

翌日。

智宏は彩音を引き連れて魔法の屋外実験場へ来ていた。その足元にはスーツケースがあつたが、彩音は何かあるのだろうと思つてあえて聞かなかつた。

「さて。今日は新魔法のためにアシスタントとして彩音を連れてきた。異論は？」

「ごいません。お役にたてるなら本望です」

「ならばよし。今回俺が習得したいのは防御魔法だ。昨日考えたが、流星群の応用にしたいと思つている」

「私は何をすればよろしいですか？」

「彩音には俺に向けて魔法で石を飛ばして欲しい」

「そんな！智宏様に石をだなんて！」

「いいから。これは実験でもあるんだ。やってくれ」

「……かしこまりました。ところでそのスーツケースは？」

「ああ、これは後で使うんだ。とりあえず始めようか」

2人は50mほど離れると、周りに何も無いのを確認してからCADを構えた。

「いいぞー！」

「はいーいきますー！」

彩音が石を飛ばす直前、智宏はCADに昨晚打ち込んだ魔法を発動し、人には見えない半径10mの空間を自分を中心にして展開する。そして石が飛んでくると、空間の中心、つまり智宏のいる場所から光条が高速で飛び出して石を迎撃した。

光条に触れた石は接触した瞬間に飲み込まれて消失し、光条自体も迎撃した瞬間に消えてしまった。流星群が物体に穴を開ける魔法なら、対象より大きな光で飲み込めばいいのだ。

初めはゆっくりだったのでマニュアルで迎撃していたが、次はどうだろうか。

「次だ！スピードを上げろ！」

「はいー！」

智宏は先程より2、3倍スピードを上げた石を、今度はオートで迎撃しようとした。

マニュアルでは飛んでくる物体を認識して、それらが迎撃空間に入った瞬間に迎撃している。そしてオートはあらかじめ展開してある空間に智宏を対象とした攻撃のみを自動迎撃する。例えば狙撃される時などには役立つはずだ。

スピードを上げた石はまっすぐ智宏に突っ込んで行き、空間の中に入ると先程と同じように迎撃された。

「よしよし。オートもオツケーっと。じゃあ彩音！」

「はい！」

「今度は好きな場所に撃ち込んでくれ！もちろん俺に言わなくていい！」

「わかりました！」

次、彩音は智宏のどこに石を撃ち込むか少し考え、結果死角に撃ち込む事にした。

しかし、智宏は飛んできた方向に振り向きもせず石を迎撃。これで不意打ちにも対応できる事が証明されただろう。

満足した智宏は彩音を呼び寄せ、持ってきたスーツケースに鍵を挿した。さらにパスワードを入力すると、ガチャツとロックが解除されたような音がする。

その中に入っていたのは……

「彩音、これを」

「拳銃ですか？」

「ああ。使った事はあるだろう？」

「は、はい」

中には1丁の小さな拳銃。それと1着の防弾アーマーが収められている。防弾アーマーはチョッキより上半身を覆う面が多く、防御力を増した物だ。

「最後は実弾のテストだ」

「え!? 本当に危険ですよ！」

「大丈夫大丈夫。俺防弾アーマー着るから。その拳銃だって威力は低いやつだし、彩音はこの防弾アーマーを狙ってくればいいんだ」
「し、しかし……」

「なあに。失敗したら俺が未熟だったって事。責めはしない」

「本当に問題ないのですね？」

「ああ」

「………わかりました」

最後は実弾を使用したテスト。

先程の魔法より速く、危険で、当たりどころが悪ければ死ぬ可能性だつてある。魔法が実用化された今でもまだ銃器は軍や警察の武器だ。しかも対魔法師のハイパワーライフルも実装されている。

もちろん拳銃と防弾アーマーは真夜の許可をもらつて持ち出した物。最初は真夜にも反対されたが、防弾アーマーを着るし急所に当たらないようにさせると説得したら渋々了承してくれた。しかし真夜の事だ。万が一の時は救護班……もとい達也にいつでも連絡をとれるようにしているのだろう。

さて、防弾アーマーを着た智宏と拳銃を持った彩音は先程より離れた位置についた。

智宏が手をサツと挙げると、彩音は拳銃を慣れた動作で構える。その銃口は主である智宏に向けて。

そして彩音は狙いを定めて引き金を引く。

拳銃から飛び出した銃弾はまっすぐ智宏の肩へ………。

智宏も迎撃空間を限界の20mに広げ、発砲する前に目を瞑つた。

結果、迎撃空間に入った銃弾は先程の石と同じように光に阻まれ、智宏に命中する事はなかった。目を開けて身体を確認しても外傷は見つからなかった。彩音も拳銃から弾倉を抜き、銃身をスライドさせて弾が無いのを確認し、安全装置をかけてからこちらに小走りで近づいてきた。

「智宏様！」

「………やったのか？」

「お怪我はされていませんか!？」

「ああ。上手く魔法が発動した感覚もあった………成功だ」

「おめでとうございます！」

これで全ての実験が終了し、無事智宏の新魔法が完成した。

防弾アーマーと拳銃をスーツケースに戻して嚴重に鍵をかけ、智宏は水筒からコップに紅茶を注いだ彩音からそのコップを受け取った。

「うん、ありがとう」

「魔法の名前はどうかされますか？」

「そうだな・・・」【ラム】「なんてどうかな？」

【ラム】。

それは決して酒ではなく、昔アメリカ軍や自衛隊が使用していた近接防空ミサイルRAMの事。光球から出る光条がそれっぽいのでこの名前にしたのだ。フランクスは既にあるし、近接防空兵器のCIWSのように弾をばら撒くのではない。残るのは誘導兵器だけなのでこうなった。

「ラムですか。素晴らしいですね！」

「ありがとう。じゃあ、帰ろうか」

「はいー」

こうして智宏は新しい魔法を会得し、家に帰って真夜に報告すると真夜は大変喜んでいた。

後々深雪に頼んで遠距離から自動小銃並の連射速度で攻撃してもらったが、それを全て迎撃した事により達也と深雪から賞賛を貰う事ができた。

まだ実戦で使った事のない魔法なので、克人のフランクスより優れてるとも劣っているとも言えない。だが、智宏は防御面において克人に勝る者はいないだろうと思っていた。それとキャスト・ジャミングは通じない・・・はずだ。通じるならそれは智宏より干渉力が高い事を意味する。あとナイフなどの近接武器で攻撃された場合は、その攻撃を弾けるようにした方が良いのだろうか？まあそこまで接近されても体術でなんとかかなりそうだが。

また、この魔法はフランクスと違って発動時はサイオンを常に供給しているため、強い攻撃になるほどサイオンの消費と疲労が溜まるのが早くなる。使い方には気をつけなければならない。また、瓦礫などの巨大な物体はさすがに迎撃できないので、それは重力魔法を使うなり流星群のシャワーを浴びせるなどして無力化すればよい。

数日後、智宏と彩音は7月の時みたいに真夜や葉山に送り出されて東京に戻ったのだった。

第49話 会長選挙・前編

「そっかあ・・・私達も今月で引退なのね」

夏休みの話題で盛り上がっていた生徒会室の空気を変えたのはそんな真由美の一言だった。

長いのか短いのかわからない夏休みが終わり、各クラスでは女性が自慢話をしたりいろんな体験談を話したりしている。また一部の女子生徒から、「パーカーを無理矢理・・・」とか「ベッドに押し倒された」などというセリフがクラスを飛び交い、健全な男子高校生の居心地を悪くしていた。

もちろん智宏の周りでそんな人間はいないが・・・

「そう言えば今月には会長選挙がありますよね？」

と、達也は「女子のお話」を変えるために問いかけた。

「そうよ。今年はあるちゃんとはんぞーくんの一騎打ちね」

「じゃあ身内同士の争いですね」

「だな」

智宏と達也は真由美の意見に納得したが、納得できなかったのは有力候補として指名されたあずさだった。

「待ってください！わたしには生徒会長なんて無理ですよ！」

「えー。じゃあ今度の生徒会長ははんぞーくん？」

「6年ぶりに首席以外の生徒会長か・・・」

「去年の首席は中条先輩だったんですね」

そう。確かにあずさは首席で入学した。

ちなみに理論は五十里が首席であずさが次席、服部が三席。実技は服部が首席であずさが次席。つまりあずさと服部はほとんど差がないのだ。

逆にあずさが花音より実技が上だと言う事に智宏は驚かされたりしている。見た目と性格からは全く分らない。

この後、達也は摩利から頼まれて花音に風紀委員の巡回コースを教えるために一緒に出て行った。また、一応智宏も風紀委員であるため、パトロールはやらなければいけないのでいつものコースに向かう

(何故か真由美も一緒に)。

智宏と達也のパトロールが終わり、生徒会の仕事が終わった深雪。クラブ活動が終わったレオ、エリカ、美月、雫、ほのか。実験室での自主トレが終わった幹比古は校門前で合流すると駅までの途中にある喫茶店でテーブルを囲んでいた。

「中条先輩か・・・ちよーつと頼りねえかな」

というレオの意見に

「実力は高いよ」

「生徒会長は優しい人がいいです」

といった雫とほのかの意見

「服部先輩は立候補しないんでしょ？なら中条先輩しかいないわよ」

というエリカの消去法の選択など、話題はやはり生徒会選挙に持ちきりだ。

実際、服部は克人の跡を継ぐらしく、さすがにそこから引き抜く訳にもいかないそうなの。

「このままだと会長候補がいなくなるんじゃないか？」

「しかし中条先輩を無理には会長にさせたくはないな」

智宏と達也も意見が並行して中々話が進まない。

「あ、じゃあ深雪がなればいいじゃない。生徒会長に」

「「え？」」

エリカの予想外のセリフにここにいる全員が固まった。

そんな様子を見て笑ってしまったエリカ曰く、1年生が生徒会長になつてはいけないというルールはない。深雪は九校戦で活躍し、その実力や知名度は問題ない。というらしい。

「ねえ深雪。生徒会長になったら達也くん。引き抜けるんだよお？」

と、いう悪魔^{エリカ}の囁きに、深雪は思いつきり動揺した。

「そ、それはっ」

「じゃあ達也がやれば？面白そうじゃん」

「いいなあ。俺投票するぜ」

「僕も」

一方智宏達男性陣は達也に1票を入れだした。

「無理だ。俺に票は集まらないよ」

「そんな事ありません！私は達也さんに投票します！」

「だってさ」

「智宏、じゃあお前がやればいいだろ？」

「勘弁してくれ。俺が生徒会長になったら大変だぞ？」

達也が言った通り智宏が生徒会長になる選択肢もある。十師族の跡継ぎ候補で九校戦でも大いに活躍した。深雪並に実力と知名度はあるだろうが、智宏の言う通りもし生徒会長になったら大変だ。

四葉というだけで恐ろしいのに、その直系が生徒会長というのはいささか不安を覚える人は少なからず存在するだろう。十師族でも七草を筆頭にうるさいのが出てくるかもしれない。

達也も理由を悟ったのか、追撃をしてこなかった。

翌日、なんと昼休みの時に智宏のクラスに真由美が入ってきた。

いくら年下とはいえ、1年生のクラスに堂々と入られると止められる者も止められない。もちろん真由美が立ち止まったのは本を読んでいた智宏の目の前。

「ねえ智宏君」

「はい？（俺かよ）」

「ちよーつと来てくれないかしら？」

パンツと音を立てて手を合わせて言ったため、このセリフは周りにも聞こえていただろうが、大きくざわつかなかったのは真由美の後ろに鈴音がいたからだろう。

勘違いをしないクラスメイトがいて有難いと思う智宏だった。実際は夏休みに真由美とデートしていたことがバレ、とつくのとうに手遅れなのだ。

「なんでですか？授業始まりますよ？」

「生徒会の公務って事じゃダメ？減点されないから。ね？ね？」

真由美のお願いにはどこか嫌な予感が付き物。智宏はこの時点で

断ろうとしたが、真由美の手を見てそれを止めた。

なぜなら合わせた手が徐々に下がってきており、【合掌】から【祈り】に手が変化しそうな兆候が見て取れたからだ。

胸の前で手を組み、瞳を潤ませ、キラキラした視線でお願いをする。もはやお願いではなく命令や脅迫に近い形になるが、真由美ならやりかねない。否、やるだろう。

「……わかりました」

「じゃ、行きましょ」

真由美は生徒会長権限のIDカードを智宏の机に置いてある端末にかざし、3人は教室を出て行こうとした。

教室の出入口まで来ると、そこには――

「智宏さん、授業始ま……る、会長？」

「うふふ。北山さん、智宏君借りてくわね」

「すみません」

雫がトイレから帰ってきていた。

しかし何かある前に真由美はグイグイと智宏を引っ張っていったので、鈴音が謝罪をする程度しかできなかった。

その後智宏は真由美に頼まれて達也を呼びに行き、4人に増えた一行……というか真由美に連行された智宏と達也は生徒会室に入られた。

「俺達に何か？」

「実は……あーちゃんの説得をして欲しいの。このままじゃ強引に誰かを生徒会長にしなくちゃいけないかもしれないわ」

「しかしどうやって……」

「うーん……あ」

「智宏君？」

「ちよつと失礼。達也、こつちこつち」

智宏は頭に浮かんだアイデアを伝えるために、達也を呼んで生徒会室の端っこで携帯端末に文字を打ち込んだ。口で言わなかったのは真由美に悟られないためだ。

そのアイデアを見た達也はしばらく考え込み、10秒ほどで決心

したように真由美に向き直った。

「会長。俺がやります」

「ホント!?是非、是非頼むわ!」

真由美が智宏と達也の手を握ってブンブン振り回してこの話は終わり、各々の教室へ戻って行った。

放課後、智宏は「達也の分まで見回りやっどくわ!」と言ってさつさと行ってしまい、達也は深雪と2人であずさの教室に行かなくなっただけでなくなった。

しかし兄と一緒にならどんな大犯罪でも引き起こしそうな深雪は可愛げに手を振って智宏を見送る。達也と2人で仕事ができる事が嬉しかったようだ。

あずさのいる教室に2人が入ると、クラス中から視線が突き刺さる。ちなみにあずさはいそいそと帰り支度をしている真つ最中。真由美達に捕まらないように逃げようとしていたのだろう。

だが達也と深雪はあずさの机の前まで来ると、逃げられないように2人で脱出路を塞いだ。

「中条先輩」

「司波君?何ですか?」

「お話があります。来てください」

克人ほどではないが、低く落ち着いた声でこう言われたあずさはついに来たかと固まってしまう。

さらに有無を言わせない圧力に、クラスの女子は「あら強引」とか「ちよつといいかも」といった声も上がる。もちろん達也と深雪にも聞こえている訳で、深雪は少し不機嫌モードになっていた。

これ以上深雪を教室に置けなくなった達也は話を終わらせる事にした。

「5分でいいので」

「5分なら・・・」

「では行きましょう」

「はい。さ、先輩」

「ちよ、ちよつと深雪さん!」

深雪に引きずられるようにして、あずさは近くにある空き部屋に連れて来られた。

3人はそこにあつたテーブルに座る。傍から見れば取り調べを受けている人だ。

「それで・・・なんですか?」

「単刀直入に言います。生徒会長になってください」

「私はならないですよ!」

やはりあずさは断った。

まあ断わられる前提で来ているのでさほど驚きはしなかったが.....

ここで達也は智宏から提案された案をあずさに話してみる事にした。

「そう言えば.....再来週に発売する飛行デバイス。あれが昨日2つほど手に入りました」

この言葉を聞いたあずさの目は爛々と輝き出し、自然とテーブルに身を乗り出して来た。

「もしかしてシルバー・モデルの?シルバー・モデルの新作ですか!?!」

「まあ。しかもモニター品なのでシリアルナンバーが刻まれている非売品です」

「うっ」

「生徒会長の就任祝いにと用意したのですが.....」

「や.....や.....や.....やります!」

「本当ですか?」

「中条先輩なら上手くやれますよ!」

「私頑張ります!どんな人が相手でも負けません!」

あずさはまだ見ぬ相手の幻影を睨みつけて力強く断言した。

そもそも他に立候補する人がいないからあずさに頼んだのだ。このまま行くと選挙ではなく確実に生徒会長に就任するだろう。

結果的にあずさは智宏の案により物で釣られたわけだが、これ達也と深雪の目的は達せられた。

教室を出たあずさは、やる気半分CAD欲しさ半分といった感情で家に帰って行った。

ついに生徒会長に立候補したのはあずさだけだった。立候補者が少ないのは珍しい訳ではない。

今回の理由としては、生徒会長の座にそれほど魅力を感じない人がいるから……という訳ではない。魔法科高校も社会的に見れば普通の生徒会組織のトップにしか見えない。権力も影響力もあまりない名誉職。

しかし、その名誉のレベルが普通の高校と違うのだ。

知つての通り魔法科高校は全国に9つしか存在しない学校。増やそうにも、教師が足りなくて魔法の高等教育ができる高校が作れないのだ。

日本にたった9名しかいない魔法科高校の生徒会長。その肩書きは魔法師として生きていく限り永久的にくつついてくる。三等勲章にすら匹敵する名誉なのだ。

ではなぜ今回は1人なのか。

それは人為的な力が働いていたからだ。

生徒会長の座を狙っている者は多い。しかし智宏は生徒会室で目の前にいる現生徒会長が何かしたとしか思えなかった。

どうやってかは知らないが、立候補を断念させるために説得(?)して回ったのだろう。もしかするとあの笑顔でうまーく丸め込んだのだろうか？智宏は少し怖くなり、考えるのを止めた。

第50話 会長選挙・後編

演説会の前日、智宏達は再び生徒会室に集まっていた。

「明日はあーちゃん演説かあ」

「ですね（1人しかないのに・・・）」

演説に出るあずさは原稿用紙と睨めっこしながらなんとかセリフを覚えていく真つ最中。

一応あずさには既にCADは渡しており、先に餌付けしておけば就任するまでやる気は無くならないという達也の考えだった。いや全くその通りで、何度も何度も演説用紙を読み直している。

その達也は深雪と2人でどこかへ行っており、智宏は真由美の相手をしなくてはならなくなってしまった。

「結果的に中条さんが当選するはずですが・・・春の1件もありますし、まだ油断はできませんね」

「暴走する奴がいるかもしれない、か？いやくないだろう？この女を襲う愚か者は」

「し、失礼ね。私女の子よ？ねえ？」

真由美はいきなり智宏に話を振ってきた。

鈴音と摩利にからかわれて逃げ場がないのはわかっていたが、自分の所には来て欲しくはなかった。

まあ真由美に襲いかかる阿呆はまずいない。返り討ちにあうだけだろう。

それを本人もわかっているのか、智宏に助けを求めてきた顔には明らかに笑みが浮かんでいた。

「全くです。でも会長は美少女ですから気を付けた方がいいですよ」

「そ、そそそそうかしら？」

「おつ、真由美を口説くか。やるねえ」

智宏の反撃に年上の余裕を持って受け流そうとした真由美だったが、本当にいきなりきたので上手くいってなかった。摩利も智宏がいつものお返しで言ってるのはわかっていたので、合いの手を入れた。

昼休みも終わりに近づき、智宏は生徒会室から出ていくと、後ろか

ら摩利に声をかけられた。

「四葉」

「なんですか?」

「実はだな……真由美のボディガードをして欲しいんだ」
「会長の?」

「そうだ。真由美に闇討ちを喰らわせる輩が本当に出るかもしれないんだ。頼む、駅まででいいんだ」

摩利のお願いに智宏は少し面食らった。

さつきは冗談で真由美を襲う奴なんか言って言っていたのに、今はこれだ。

「いいですよ。お任せください」

親友を守ってやりたいという願いは智宏に十分伝わっている。

なので智宏はすんなりOKした。

が、摩利は智宏がニヤニヤと自分を見ているのに気がついた。

「た、他意はないぞ? アイツに怪我されたら困るし……見てて危なかつかしいというか、別に心配ってわけじゃないぞ? じ、じゃあ頼む! 司波兄妹も誘っていいから!」

摩利は一生懸命言い訳をして、智宏が何か言う前にさつきと教室に戻ってしまった。智宏も一言言おうかなあと思っていたらあつという間にいなくなってしまったので、ヤレヤレと肩を竦めて教室に戻った。

達也と深雪に今の事を連絡すると、「わかった」と返ってきた。

放課後、智宏と達也、深雪の3人は校門で真由美を待ち伏せ、4人で一緒に帰る事に成功する。真由美の隣りに智宏が立ち、その後ろを達也と深雪が歩く。余程のことがない限りこの防御は突破できないはずだ。

普通の生徒なら楽しい帰宅路。しかしこのメンバーだけ雰囲気がいりりしているのはほんの数人しか気づけない。真由美も珍しく大人しくなり、鞆を両手で体の前に持って歩いている。また、真由美は身長が低いためすっぽりと隠れてしまっていた。

しかもいつもとは違い辺りを警戒しながら歩いていたので、駅に行

くまでの道程の7割は4人に会話はなかった。

駅舎が見えてくると、ついに真由美が口を開いた。

「ねえ智宏君」

「なんででしょう?」

「この護衛つて摩利に頼まれたからでしょ?」

「まあそうですね」

相変わらず鋭い。この鋭さを警戒心にも使って欲しいものだが、それができないから摩利も智宏達に頼んだのだろう。

「渡辺先輩は会長が心配なんですよ」

「そうですよ。いい友情じゃないですか」

「でも私ボディーガードいるのよ?」

「え?どこですか?」

深雪が辺りをキョロキョロ見回したが、それらしき人影は発見できなかった。智宏と達也もその気配を感知できていない。

「駅で待たせてるの」

「なるほど」

「だって通学路をボディーガード連れて歩くなんて……恥ずかしいわよ」

「それなら納得ですね、お兄様」

「そうだな」

「でもありがと。あなた達3人は私の1番素敵な後輩よ」

真由美に笑顔でこんな事を言われるときさすがに智宏も照れる。後ろにいる達也や深雪も絶句していた。

しかし真由美が言ったことは間違いではないはずだ。その証拠に、彼女は清々しい顔をしていた。

駅に着くと真由美の黒服ボディーガードが車の前で待っており、智宏達の姿を見つけると一礼してくれた。

しかし、智宏と達也が気になったのはボディーガードである初老の紳士が只者ではないということ。一瞬見ただけではボディーガードというより【執事】が当てはまる。ただ、それにしては背筋はピンと伸びているし身体も細身ながらもガツシリとした体格と身のこなし

から、軍務経験者だというのは直ぐにわかった。

そこから家に帰った真由美は豪華な浴槽にゆったり身を沈め、自分の身体を見てため息をついていた。

(貧弱なプロポーションではないわ)

(エステの時にも手足が長いですぬって言われるし)

手足を見つめて湯船に戻し、胸や腰手をやる。

(胸も身長割りには大きい。ウエストも問題ないわ)

(正直イケてる方だと思う)

(でも深雪さんを前にするとなあ)

真由美の中で深雪の存在は大きくなっていった。

深雪に会うまで真由美はあんな美少女を見た事が無かったし、腕も足も腰もあんないいバランスで保っている。正直その秘訣を教わりたくらいだ。周りの男子生徒が自分より深雪を見てしまう事もわかってる。

唯一真由美が有利なのは、智宏に対しての思いだけだ。

(智宏君は深雪さんの事をどう思ってるのかは知らないけど、多分友達とか……親友って感じよね)

(だから警戒すべきは北山さんね。別荘でグイグイアタックするなんて計算外だった。千葉さんには感謝しなくちゃ)

湯船の中でブクブク泡を立て、雫への警戒を怠らないように決意した。

「よし。頑張って距離を縮めよう！」

真由美は小声だが浴室に軽く響く音量で呟いた。

演説会当日。

風紀委員として智宏と達也達は摩利に集められている。理由は簡単。風紀委員として会場の警備配置の再確認をするためだ。

「揃ったな？では再確認をするぞ」

「はー」

「我々の持ち場は講堂内だ。大扉に私と千代田。通用口に辰巳と森崎。演壇の上手が沢木、下手が司波。四葉はステージに座っている生徒会メンバーの警護につけ」

智宏の持ち場はステージにいる生徒会メンバーの警護。達也と沢木の2人が最終防衛ラインを務める。もし壇上に上がって襲いかかる輩が出た場合、上がってくる場所に近い誰かが先に動く。

しかし智宏と達也はあまりその心配はしていない。なぜなら、生徒会メンバーは一高でも高い戦闘能力を持っている。タイムマンだとまず勝てないはずだ。

さて、演説会が始まり、まずは真由美が生徒会役員の選任資格に関する制度の撤廃を提案していた。

「建前としては正論です。しかし現実問題として制度の変更は必要ないと思います」

「いいえ。必要ですよ?」

「では傍に困っておきたい二科生がいるからでね?」

毒の込められた言葉に会場がザワつく。

騒がしくなると、「お静かに」と進行役の服部を補佐する深雪が注意を呼びかけた。

「それも否です。それ以前に、現状の制度であると二科生は生徒会に入る権利はないという生徒会の意思表示です。そんな事は認められません」

「き、詭弁です!」

真由美の言葉に会場は拍手に包まれた。もちろんそれは二科生だけではないはずだ。

どんなに鈍感な人間でも形成が不利になってきたのを自覚しているが、真由美と対立している浅野の口調はだんだんとヒステリックになっただけで行く。

「会長はこの二科生を引き入れたいだけでしょ!私知ってるのよ!この前、そのの彼らと駅まで一緒だったじゃない!」

破れかぶれの発言に浅野達に発せられていたブーイングの嵐がシンと静まり、会場の目が智宏と達也、真由美の間を往復していた。

智宏からは見えなかったが、達也や沢木の顔を見て真由美がどんな表情をしているのかが想像できた。実際、この時真由美はポッと頬を染めていた。

しかし会場はその事実ではなく、一個人が四葉の次期当主候補の智宏を利用した発言をした事に固まってしまったのだ。これは個人というより、四葉に対する侮辱として受け入れられてもおかしくはない。まさに「やってしまった」状態である。

すると――

「言いたい事はそれだけですか？」

と、深雪が冷ややかな視線を浅野に向けて言い放った。それにプラスで智宏も先程から辺りを警戒しながら浅野をじっと見ているので、彼女は鷹に睨まれた獲物のように何もできなくなってしまう。

ついに浅野は個人に対する中傷で強制的に席へ戻された。

智宏と深雪のプレッシャーが効いたのか、その後の資格制限撤廃の議案は可決となり、あずさの演説も順調に進んでいた。進んでいたのだが……

「あずさちゃんは年下が好きなの？」

「その二科生よね？」

という野次に対し

「誰が言った！」

「つるし上げろ！」

「やっちまえ！」

熱烈なあずさファンがキレて乱闘が始まってしまった。

生徒会メンバーが落ち着くように呼びかけるが逆上した彼らには聞こえていない。達也達風紀委員もいつでも飛び込めるようにしていた。

(ちっ、黙って聞きやあいいのに)

智宏は内心で舌打ちをしていたが、この状況に怒りを覚えている者が智宏の他にもう1人いた。

「静まりなさい!!」

深雪の叱責は全ての生徒の動きを止め、壇上に目を向けさせる。舞台の上では想子光の吹雪が荒れ狂っており、激しい怒りが世界を飲み込もうとしていた。

それともう一つ。構造上なんの不具合もないはずの会場がミシミシと音を立てている。無意識に発動していた智宏の重力核はステージや演説台の木材にヒビを作り、天井からはほこりなどがパラパラと落ちてきている。今のところ人には影響はなさそうだが、このままでは座っていられないほどの圧力が生徒達を襲うだろう。

重力核をよく知っている真由美は智宏を、達也は深雪を止めに入り、その他の生徒会と風紀委員のメンバーはCADに手を伸ばした。既に深雪の足元からは霜が発生し、智宏の近くにいる生徒会や風紀委員メンバーは自分にかかる圧力に耐え始めていた。

「智宏君、智宏君！」

「……………あつ、会長。大丈夫ですよ。攻撃はしませんから、ええ」「よ、よかった」

智宏は潰れる前に魔法を停止させ、深雪も達也に想子を体内に押し戻されていた。

あれほど騒がしかった講堂も今では静まり返っている。ヤジを送っていた生徒達も大人しくなった。

その後すぐに投票が行われ、あずさは見事生徒会長に就任する事ができた。

しかし、集計中に投票用紙に智宏や達也、深雪（女王様、氷の女王等々）の名前が書かれていた事で、深雪が半泣きしてしまうのは放課後の事だった。

横浜騒乱編

第51話

論文コンペと不審な影

『5号物揚場から不法入国者が上陸しました。総員急行してください』

「やれやれ。やっぱあそこか」

「何言ってるんですか警部。行きますよ」

ここは24時間体制で稼働している港湾諸施設。警備も厳重に行われているが、それをすり抜けて不法入国する者もいた。

千葉寿和警部は部下の稲垣警部と軽口を交わしながら、5号物揚場700mという距離を30秒で踏破した。

普通ではできない芸当。彼らは魔法師だった。

2人は船を制圧しにかかる、10人以上の外人から拳銃やサブマシンガンを使った抵抗を受ける。しかしそれをものともせずにはバツタバツタとなぎ倒していった。

そして千葉寿和は扉を斬って船の中に突貫したが中には誰もいない。船底のハッチが開かれているところを見ると、どうやら逃げられてしまったらしい。

脱出した彼らが向かったのは、横浜の中華街。そのとある飲食店の裏庭にある大きな井戸の横に見た目麗しい青年が立っていた。

しばらくすると井戸の石が崩れ、内側から男達が這い出てきた。

「皆様お疲れでしょう。まずは着替えてお寛ぎください」

「周先生、^{チヨウ}ご協力感謝します」

中年の男はあまりありがたいと思っていない口調で答えるが、青年はそれを気にせず男達を先導して建物の中に入った。

◇? ◇? ◇? ◇? ◇?

生徒会長選挙も終わり、新生徒会が誕生してから1週間が経った。

しかし、生徒会のメンバーが変わっても智宏達が別々になる事はな

い。今は食堂で昼食をとっており、そのメンバーは智宏、達也、深雪、雫、ほのか、エリカ、美月、レオ、幹比古だ。

と言っても半々でクラスが違うので、どちらかのクラスが席取りをする必要がある。今日は達也達Eクラスが席を取っていた。

「おつすお待たせ」

「お待たせしました」

「すみません達也さん。私のせいで遅くなっちゃって」

別荘での告白以来、ほのかは達也の言動により敏感になりネガティブな思考を見せる時もあった。

達也としては自分が虐めているみたいで居心地は良くなかった。まあ原因は自分にあるので、ほのかの症状は少しずつ直していくしかない。

「気にするな。最初は誰でも戸惑うよ」

「そーそー。気にしない気にしない」

「だな」

エリカとレオが意外にもフォローしてくれたので、ほのかはやつと腰を下ろした。

実際今日はほのかの所為ではなく、職員室からの依頼で生徒会室のデータベースを漁っていたのだ。

ほのかは生徒会役員になったばかり。わからないこともあるのだろう。色々間違ったりするが、これは深雪と雫が慰めていた。

ところで今の説明でほのかが生徒会に入った事がわかっただろう。

新生徒会のメンバーは

会長・・・中条あずさ

副会長・・・司波深雪

書記・・・光井ほのか

会計・・・五十里啓

である。

あずさは最初達也を副会長に誘ったが、無論断られた。もちろん達也が断ったのもあるが、1番抵抗したのは花音だった。

花音は「司波君に抜けられると事務が回らない」と言った。達也は

実働部隊だが、事務が苦手な花音はほぼ全ての事務を達也に丸投げするらしい。智宏はそのまま実働部隊に配備され、必要に応じて事務を手伝う予定だ。

しかしあずさも珍しく譲らず、本人を無視して話し合った結果、達也は今年風紀委員、新年度は生徒会に移籍させることで合意した。それまでに花音は達也の後任（事務）を見つけなければならぬ。

午後の授業も終わり、放課後の図書館にある地下資料庫に達也はいた。

「お兄様」

「深雪か。どうかしたのかい？」

「市原先輩が探しておられましたよ。何でも論文コンペで相談したい事があるそうです」

「どこで？」

「魔法幾何学準備室です」

「わかった。すまないがこの鍵を返しておいてくれないか？」

「かしこまりました」

達也は深雪に鍵を預ける。その時カードキーを嬉しそうに受け取った深雪は構ってもらえて嬉しい子犬のようだった。

準備室に到着し、中に入ると甘楽と鈴音、五十里の3人が待っていた。

「お呼びですか？」

「今月末に魔法協会主催の論文コンペがある事は知っていますね？」

「名前だけは」

「まあいいでしょう。本題ですが、司波君。第一高校の代表としてこの市原、五十里両名と共にコンペに参加してもらえませんか」

「自分ですか？」

聞き逃したわけではないが、いきなりの事に達也はそう反応せざるを得なかった。

日本魔法協会主催【全国高校生魔法論文コンペティション】。

全国といっても魔法科高校は9つしかないのです、【文】の九校戦と言っても過言ではない。夏の九校戦で勝てなくてもこっちで自校の

評価を上げる事ができるのだ。

「君がです」

「何故です」

「本来ならば平河君に出場してもらはずでしたが、急に退学届けを持ってきましてね。なんとか思い留まらせましたがコンペには出れそうにないので」

平河と言えば九校戦で不正工作をされて精神に大きな傷を負った生徒だ。

「はぁ・・・」

「でも君しか適任がいらないらしいですよ。ね、市原君？」

「司波君を推薦したのは私です。他は拒否しました」

「なっ・・・しかし他の人を押しつけてまで自分が？」

「今回の論文コンペは私のテーマに合わせてもらいます。でも他の人は私と方向性が違うのです」

論文の作成とプレゼンの準備は3人が共同で取り組む。なので代表が1人、サブが2人という役割分担がされる。もちろん誰でもいいわけではない。

「つまり自分に先輩のテーマが適していると」

「私のテーマは『重力制御魔法式熱核融合炉』です」

「なるほど。自分の研究テーマと同じなのですか」

「なのでお願いできませんか？」

「・・・わかりました。何をすればいいのですか？」

「これから説明します。まず――」

鈴音は柵から携帯黒板を取って達也と五十里に渡した。この携帯黒板は通信機能を供えた電子ペーパーで、小学校から一般企業まで幅広く採用されている。半世紀以上も前にタブレット端末は開発されていたが、これはその性能を大きく上回る代物だ。

そして自分の携帯端末に入っているデータを携帯黒板に移した。達也が画面を見るとそこには論文コンペの案内所が出ていた。

論文コンペとは高校生が魔法学や魔法工学の研究成果を発表する場である。しかし、それは学習結果ではなく、優秀な代表が魔法研究

機関にスカウトされたり、論文がそのまま魔法大全に収録されて大学や企業などに利用されたりする。

開催日は10月の最終日。会場は日本魔法協会の本部と京都と副本部の横浜で行われ、今年の開催地は横浜国際会議場らしい。

「参加資格は論文の予備選考を突破した者や高校の推薦を受けた者です。でも非推薦から取ってはダメというルールはありません」

「ふむ」

「テーマは自由です。しかし過去に大量破壊兵器の開発をテーマにした生徒がいました。もちろんはねられました」

「すごい人もいるんですね」

「ちなみに三代前の生徒会長だよ」

「魔法協会へ提出する論文は再来週の日曜。でも私がチエツクするから来週の水曜日には仕上げてください」

論文の提出期限はあと10日もない。結構キツキツだ。達也は何故甘楽に？と思った。

そんな達也の内心を五十里は悟ったのか、察し良く答えた。

「先生は選考責任者なんだよ」

「ああ・・・」

達也が納得するとその日は解散となり、鈴音からいくつかの注意事項を聞いて達也は準備室を出た。

校門に到着すると、智宏や深雪達が待っていた。

「よー達也。おつかれ」

「お兄様！」

「じゃあ行こうぜ」

「あつ、ねーねー。喫茶店寄ってかない？」

エリカの進言により、一同は駅までの道のりにある割と本格的な喫茶店に向かった。

「この喫茶店は生徒や教員に人気があり、常連として扱ってもらえる人もいる。」

席に座ると、幹比古が達也が幾何学準備室に呼び出された訳を訪ねた。

達也がさっきの事を説明すると全員が驚いていた。

「え、達也論文コンペに選ばれたのかい？」

「すごいじゃん」

「さすがはお兄様ですね」

幹比古は素直に驚き、智宏と深雪は褒めたたえた。

「まあな」

「え、反応薄すぎ」

「達也さんからしてみれば当然なんですよ」

呆れているエリカ。その反対側の席ではほのかが頷いている。

「1年生がコンペなんてほとんどないよ」

「でも達也さんの知識と実力は無視できませんよ？」

雫の反論に美月が返した。

まあ1番目を爛々とさせていたのは幹比古だった。

「でも本当にすごいよ！あのコンペの優勝論文は『スーパーネイチャー』で毎年取り上げられるし、そうでなくても学会誌に掲載される事もあるんだから！」

スーパーネイチャーとは現代魔法学関係の中で最も権威があると
言われているイギリスの雑誌だ。

しばらく腰を浮かして力説していた幹比古だったが、自分だけ盛り
上がっているのに気がついて椅子に座った。

「でも大丈夫かい？期限近いんだろ？」

「あと10日もないな」

「そんな！大丈夫なんですか？」

「俺はサブだから大丈夫さ。論文は夏休みから書き始めていたらし
い」

「そ、そうですね。よかった」

「お兄様。何について書くのですか？」

「重力制御魔法式熱核融合炉の技術的な問題点とその解決策だ」

「わあお」

「・・・？」

智宏は加重系魔法の三大難問の1つがテーマである事を知って驚

き、レオははてなマークを頭の上に浮かべていた。

和気あいあいとなる中、深雪だけは真剣だった。顔は笑っていたがその目は笑っていない。彼女は兄がこの研究に本気であると知っていたのだから。

第52話

勾玉

智宏と達也、深雪は駅で友人達と別れ、それぞれの自宅まで歩いて行った。

達也と深雪は智宏とも別れて自宅まで来ると、駐車場にシティコミューターが停まっているのが見える。

達也は深雪の肩を抱いてドアを開けた。
すると――

「おかえりなさい。やっぱり仲いいわね」

「お久しぶりですね。小百合さん」

からかいまじりにかけられた言葉に達也は冷たい眼差しと冷却された声で応える。

玄関で待っていたこの女性は達也の義理の母、司波小百合。達也と深雪にとつて、「父親の後妻」という存在だ。深雪から話を聞いている智宏もいい顔はしていない。

「お兄様。深雪は夕食の支度をいたします。何かリクエストはありませんか？」

「深雪の作るものならなんでも」

「わかりました。それでは普段作らない物に挑戦したいと思います」

「ああ。ケガはしないようにね」

深雪がいなくなると、達也と小百合はリビングのソファに腰を下ろした。

「要件はなんですか？」

「相変わらず私の事が嫌いなのね」

「深雪はそうですね」

司波小百合。旧姓古葉小百合は司波龍郎と深夜と結婚する前に司波龍郎と付き合っていた。

しかし良質な遺伝子を欲した四葉によって強引に別れさせられた過去がある。向こうもこつちも良好な関係ではないのだ。

「まあいいわ。本題よ。貴方に本社で手伝って欲しいことがあるの

よ。高校を中退して」

「無理です」

「貴方が進学しない場合は別のガーディアンが手配されるはずよ？」

「いくら四葉でもガーディアンの代わりは見つかりません」

「自分を上回る護衛はいないと？」

「深雪に限れば」

小百合の遠慮のない要求に、達也も遠慮なく返答した。普通に考えればNOだろう。

「当主様のご息がいるじゃない」

「……本気で言ってます？次期当主の最有力をガーディアンとするなど。そんな事を提案した瞬間貴女の所に叔母上が乗り込んできますよ」

「冗談よ」

もちろん阿呆な提案も即答で返す。

まあ智宏は深雪の護りくらい引き受けてくれだろう。だが事情が事情だ。智宏と深雪は達也が研究所に持ってかれるとなると絶対に怒るだろうし、本家の方でも智宏をガーディアンとするなどと聞いた真夜は本気で怒るはずだ。

その場合、司波龍郎や小百合は完全に四葉から追放されかねないし、最悪消される可能性がある。

さすがに小百合でもそれをわかっているので冗談で済ませた。

しかし彼女は今回「はいそうですか」と引き返せない理由があった。FLTは元々CADのメーカーではなく、魔法工学の部品を作っていた場所なのだ。CADの完成品を売りに出して世間に知られるようになったのはシルバー・モデル、つまり達也の功績だ。さらに先の飛行デバイスはFLTをより有名にしている。目立った成果を上げていない小百合は嫉妬せざるを得ない。

小百合は研究職の人間。ハンドバッグから小さな箱を取り出すとそつと蓋を開けた。

「じゃあこのサンプルの解析だけでもしてちょうだい」

「これは……にのまがたま瓊勾玉系統レリックの聖遺物ですか」

箱の中には赤い勾玉が入っていた。

レリックとはオーパーツの事を示している。キャスト・ジャミングを引き起こすアンティナイト等の人工的とも自然に作られたものとも言えない物。それがレリック。

「どこで？見つかったのですか？」

「・・・わからないわ」

「なるほど。軍絡みですか。まさかこの複製を作れと言うのではないでしょうね？」

「この仕事は軍からの強い要請があるの。断れないわ」

「しかし国防軍とてレリックの事は知っているはずです。いったいなぜ？」

達也の言葉に小百合は一瞬黙ったが、ため息をついてから話し出した。

「これには魔法式を保存する機能があるそうよ」

この言葉に達也は少し驚いた。

魔法式を保存する機能が普及されれば、魔法の自動化や半永遠的な魔法装置も必要なくなる。魔法師のいない部隊にも魔法兵器を配備することだって可能となる。

勾玉が量産されれば強力な兵器を製造可能なのだ。

「火中の栗を拾う必要はなかったのでは？」

「既に賽は投げられたわ」

「俺の魔法でも成功するとは限りません。どうしてもと言うならば開発第三課へ回してください」

正直達也もこれでいいと考えていた。なぜなら達也も魔法式の保存に興味があったからだ。

しかし小百合はそうはいかない。

FLTにおいてこれ以上第三課に手柄を立ててほしくはない。また、社内でのトールラスⅡシルバーもとい達也の発言力をこれ以上持たせたくなかった。

手柄を横取りすることができているが、いかんせん達也のシンパが第三課を初め、それ以外にもたくさんいる。そちらもあまり刺激したくな

い。というか第三課で今回の解析が成功したら達也の成果になりかねない、と小百合は考えている。

「それとも俺が直接預かりましようか？」

「け、結構よー！」

助け舟を出したつもりの達也だったが、結果は決裂してしまった。

小百合はハンドバッグに勾玉を入れた箱を押し込んで廊下に出ていってしまふ。

「駅まで送りますよ」

「必要ありません！」

刺々しい返事にまるで気を悪くした様子を見せない達也は、小百合が玄関を出る時に一礼した。

そして階段の上に隠れているような妹の気配を感じた。

「深雪」

「は、はい」

達也が玄関から声をかけると、深雪がオールインワンのキャミソールワンピースに着替えて2階から降りてきた。

むき出しの腕に肩。ほんのり口紅を塗っているあたり少しだけ気合いが入っているよう。

達也はちよつとはしたくない格好をしている妹の頬を撫で、顎の下に指を滑らせた。そのまま深雪の顎をクイツと持ち上げる。

「あ、あの・・・お兄様？」

深雪の白い肌が赤く染まり、綺麗な髪はサラリと流れた。まるでキスでも迫られているかのようだった。

でもその視線は達也の目からそらしてはいない。

顎に当てられた指が頬を伝って這い上がると深雪は覚悟を決めて目を閉じた。

そして――

「うにゃっ!?!」

くぐもった悲鳴を上げた。

「な、何をするのですか！」

「隠れていたお仕置き」

「お兄様の意地悪」

「少し出てくるよ。戸締りをしといてくれ」

「わかりました。行ってらっしゃいませ」

達也は深雪の頭を撫でると、2輪用のブーツを履き、ヘルメットを持って外へ出た。

駐車場にある大型電動二輪で家を出てからしばらくすると、黒い自動車の小百合の車に突進しているのが見えた。

2台の車が衝突防止の緊急停止システムによって止められると、黒い車から2人の男が出てきて小百合のコミュニターのドアをこじ開けようとしている。

それを見た達也はライトを強めて速度を上げ、懐からCADを抜いた。

男達も達也に気づき、拳銃と真鍮の指輪を達也に向けた。

指輪からキャスト・ジャミングが発動し、魔法の妨害を試みる。もう1人も拳銃を向けてが撃つ事はなかった。引き金を引くより達也が拳銃を分解してしまったのだ。

達也はすぐに2人に魔法を放って無力化し、黒い車に目を向けた。こういう車には爆弾などがある可能性がある今はわからない。だが住宅が近くにあるこの場所ではそんな目立った事はしないだろうと判断してしまう。それが油断を生んでしまった。

突っ立っていると突然殺意の塊がある方向から飛んできた。達也がそれを認識した頃にはひだり左胸に熱い感覚と強い衝撃を感じていた。

これが狙撃だとわかった時には、小百合のコミュニターの影に隠れて狙撃場所を探していた。傷は既に魔法によって完治している。

殺意の見えた方向と飛んできた銃弾の角度と周辺の地形や建物などを頭の中に展開し、発砲から命中までの弾道を計算した。

(あそこからか・・・よし)

狙撃手がいるはずのビルに怪しい人影が視えると、達也はコミュニターから飛び出してそのビルの屋上にCADを向けた。

そして達也を狙撃した狙撃手はスコープから襲撃現場を見ていた。

撃ったはずの達也が倒れずにコンピューターに隠れてしまったのでしばらく様子を伺っていた。肩に当たったのなら出てきた時にもう一度撃てばいいと。

だが、達也が出てきたので照準を合わせると、CADがこちらを向いているのに気がついた。

(ば、バカな！こちらに気がついただと?)

最後に狙撃手が見たのはスコープの中で達也が自分に魔法を放った瞬間だった。

残ったのはライフルと薬莢。誰もいなくなった屋上にそれらは転がっていた。

その後達也は小百合を駅まで送った後、家の電話機で上司である風間に連絡をとった。

『なるほど。こちらで監視カメラの処理は済ませている。ライフルもこちらで回収しよう』

「ありがとうございます」

『うむ。お、車が見つかったらしい。こちらで処理するか?』

「お願いします」

ちなみにあの黒い車は達也が撃たれた時に倒した2人も一緒に逃げられており、行方が知れずにいた。しかし日本の監視網をくぐり抜けられる事はできなかつたらしく、すぐに見つかってしまったのだ。

その後、達也は風間から今回の犯人は世界の組織の中でも有名な奴らで、脅威となりうる可能性がある事を知らされて警戒心を強めたのだった。

第53話 閲覧室にて

予想外の出来事で無駄な時間を過ごしてしまった達也は家に戻ると、遅くなったにも関わらず深雪は笑顔で出迎えてくれた。

「ん？そのエプロンは？」

「気が付きましたか？」

今深雪が身につけているのは可愛らしいエプロンだった。

可愛い妹の姿に達也が感想を言おうとすると、いきなりインターホンが鳴った。

ドアを開けるとそこには――

「やあ」

「達也様、深雪様、こんばんわ」

鍋を抱えた智宏と彩音が立っていた。

「智宏か」

「智宏兄様！」

「おう……って深雪。そのエプロン可愛くて似合ってるぞ。なあ達也？」

「そうだな。自分だけのガラスケースに飾っておきたいくらいだ」

「まあお兄様方ったら……そんなに言われると照れてしまいません」

エプロンの丈は今深雪が着ているワンピースと同じで、まるでワンセットのエプロンのようだ。それもミニのドレス。

肩をぐるりと回って背中クロスするフリルと、腰の後ろでリボンの形に結ばれている紐が可愛く、裾から見える素足の太ももが艶かしかった。

正直達也はできるだけ他人には見せたくないなと思っていた。

深雪は2人の兄に褒められ、顔を赤く染めて照れてしまう。それがまた可愛く、智宏の後ろにいた彩音も見とれてしまった。そして彩音は深雪と智宏に視線を往復させ、最終的に智宏をじっと見つめる。

「それでどうしたんだ？こんな夜に」

「いやなに。この家からコミュニーターとバイクが出ていくのが見えて

な？達也がこんな時間に外出は珍しいし……ちよつと気になつたんだ」

「俺の帰りを待っていたのか」

「その事について聞きたい事があってね」

「3人とも上がったらどうですか？・彩音ちゃんもどうぞ」

「は、はい！お邪魔します」

深雪に促されて智宏達はリビングに向かった。

リビングには既に料理を出す準備は出来ており、キッチンでは鍋がコトコト音を立てている。

「智宏兄様は夕食はお召し上がりになりましたか？」

「まだだよ。事情を聞きたかったから4人で食べようと思ってたんだ。彩音」

「深雪様、実は智宏様と私でおかずを作ってきました」

「あら……煮物？美味しそうですね。これは智宏兄様が？」

「2人で分担したんだ。な？」

「はい」

その後智宏達はテーブルに座って夕食を食べた。さすがに彩音も大人しく同じテーブルを囲んでいたが、自宅より少しいづらそうなのは達也と深雪がいるからだろう。

夕食を食べ終わるとソファーに移動し、彩音がいれてくれたお茶を飲みながら智宏と深雪は何があったのかを達也から聞いた。

ちなみに彩音は智宏の隣にちよこんと座っている。

「それでその仕事を手伝えと……なるほど」

「お兄様、お引き受けになられるのですか？」

「ああ。物が物だからやってみようかと思う。サンプルとしてコレを預かったしな」

そう言つて達也は小百合が達也に無理矢理預けた勾玉をテーブルの上に置いた。

一応第3課で解析すると言つてあるので問題はない。

「サンプルですか」

「これが魔法式を保存する機能を……」

「なぜあの人はこんな物を？」

「軍から依頼されたそうだ」

「え……」

「無茶な依頼ですね」

「それなりの価値があるのだろうか」

魔法式は魔法を発動するのに必要な道具だが、保存するだけでは魔法にならない。だが自分自身のエイドスを上書きした状態で、上書きに使われた魔法式を保存できるなら掛けられた魔法の効果を永続させる事ができる。

つまり魔法式を保存できる物質は魔法の効果を保存できる物質となり得るのだ。

理屈の上では擬似的な永久機関を実現できるらしい。

「この研究には俺個人としても興味はある。魔法式が保存できる機能があるなら是非ともその機能を解き明かしたい」

「お兄様ならできますよ」

「そうだな。達也ならできるさ」

険しい顔で呟く達也に、智宏と深雪は励ますように声をかけたのだった。

一息つくくと、達也は研究室にこもってしまい、リビングには智宏と深雪、彩音が残った。

智宏と深雪は学生なので宿題がある。宿題をやるためのディスプレイを智宏は持ってきていたのでそのままリビングで2人は宿題に取り組み、彩音は食器洗いに勤しんでいた。もちろん智宏が頼んだわけではなく自分からやると言い出したのだ。

今やっているのは数学の課題。

どうやら深雪は数学が少し苦手らしく、何回か手を止めて考えこんでしまう。まあその時は智宏が教えているのだが。

最悪2人共わからなければ達也に聞けばいいが、今達也は解析中なので邪魔はできない。

それに達也も課題があるはずだ。

天才的頭脳を持つ達也は本来学校へ行かなくてもいいはずなのだ

が、国立魔法大学へ進学するためには魔法科高校の卒業資格が必要なのだ。

達也の目指しているものが魔法大学のような高等研究機関にしかない事やこの高校生活が回り道でしかない事は智宏も深雪も理解している。

その理由は達也がガーディアンだから。

四葉のガーディアンは特定の人物を自身の命を犠牲にしても守る役目だ。

彼らは、かつて一人の少女が誘拐されて暴行を受け、子供が産めなくなつた悲劇を繰り返さないために、四葉の血を守るために選び出された者達なのだ。

ガーディアンを務めている間は他の用事を言いつけられることはない。汚れ役の仕事をしなくてもいいし、小百合からも強くは言われない。

そうした事情を考慮した上で同じ高校に通ってもらっているのか、その根底には兄離れできない自分の依存心がある事を深雪は自覚していた。

この日智宏は宿題が終わると、深雪に見送られて彩音と一緒に自宅へ戻った。

翌日。

調べ物をしに図書館へやってきた智宏と達也は、そこである人物に捕まってしまう。

「あら？ 智宏君と達也君じゃない」

「あ、会ちよ・・・じゃなくて七草先輩」

「こんにちは」

「どうしたの？ こんな所に」

「達也が調べ物もするつてんでついでに俺も調べ物しようかなーと」

「会長は読書の秋ですか？」

智宏はここへ来た目的を言ったが、一方当たり障りのない挨拶を返したつもりの達也に真由美は不服そうに口を尖らせた。

「あのね達也君。私、3年生よ？」

「存じてますが」

「普通は受験勉強って発想じゃない？」

「先輩は推薦が決まっているのでは？」

成績優秀、元生徒会長、九校戦のアスリート、大量の優勝トロフィー。

これで推薦がつかなかったら誰も推薦されないだろう。

しかし真由美は達也の予想の斜め上を行った。

「知らないの？生徒会役員経験者は推薦を辞退するの。つまり私も推薦を辞退したわ」

「初耳です」

「俺も」

「魔法大学の推薦枠は各校10人までって決まってるのよ。だからその枠は有効に使うんだって」

確かに魔法科高校から魔法大学へ入るのに余裕な生徒は、推薦で入れる生徒を増やすのが案としては合理的だ。

本当にそれでいいのかはわからないが。

「それで達也君は何しに来たの？」

「コンペの資料集めですよ」

「ああ、なるほどね」

「では失礼します」

「うん。あ、智宏君」

「はい？」

「少し話があるの。中で話さない？」

そう言つて真由美は今さっき自分が出てきたコンパートメントを指さした。

今は使う人はいないので又貸しは問題なさそうだが、少し嫌な予感がした智宏は達也に視線を送る。だが、達也はとつと中へ入ってしまったので、逃げ道はない。

智宏は「はい」と言つて頷いた。

3人入れば身動きがとれなくなる1人用の閲覧室は2人でもかなり狭く感じられ、特に2人で椅子に座っているとそう感じた。

真由美は小柄な方だが、智宏は高校生にして体格の平均を上回っている。それに克人ほど大柄ではないが、肩幅で場所が取られるので今は真由美と肩を寄せあつて座る形となった。

狭い部屋で美少女と2人つきり。

こういうシチュエーションで同様なのは達也くらいではないだろうか。

智宏は年上の女性から漂ってくるいい香りに脳が刺激されそうだったが、無理矢理思考を調べ物に移して耐えていた。

「ねえ」

「なんですか？」

「何調べるんだっけ」

「十師族の歴史です。四葉に入ったのは数年前なので、まだ知らない部分があるんです。実家の資料とこつちの資料の読み比べもしたいですしね」

「ふーん」

智宏がディスプレイに映し出される十師族の歴史に目を向けていても真由美は嫌がる事なく接してくれている。

しばらく無言の状態が続くと、智宏は思い出したように口を開いた。

「先輩。そう言えば話があるのではありませんか？」

「え、あ！そうだった。あのね、今回のコンペなんだけど……絶対に成功させたいの。だから何があつても達也君やリンちゃんをサポートして欲しいの」

「まあ俺にできることなら」

「ホント！」

「先輩は市原先輩のテーマに思い入れでもあるんですか？」

智宏がこんなことを聞いたのは好奇心からではなく、やけに真由美が鈴音に対する激励を超えた力の入り方が気になったからだ。

「リンちゃんの夢を実現させるためだからね。リンちゃんは経済的必要性によって魔法師の地位を向上させようとしているの。そうすれば魔法師は兵器として産み出された宿命から解放される。そのための

重力制御魔法式熱核融合炉は有力な手段となるって言うてるわ」

「魔法師を兵器から解放・・・ですか」

「そうよ」

現在、魔法師の開発は軍事利用を目的とするものが9割ほどあるらしい。

それは現状では仕方がなく、民生に転用可能な魔法は全て機械で代替できてしまう。温度をコントロールしたり物体を加減速させる技術もわざわざ魔法で代用するまでもないのだ。

達也達が考えている重力制御魔法式熱核融合炉も50年以上前から研究されてきているのだが、加重系魔法の三大難問に数えられているほど高等な技術だと判明しているために研究活動は下火となっている。

智宏の実家は魔法師を兵器として扱っている面が多く、智宏は複雑な気持ちだった。

「それにしても」

またしばらく調べ物を続けていると、不意に真由美が話しかけてきた。

「智宏君って女の子に興味って無いの？それとももっと大人っぽい人が好み？」

「は？」

「だってこーんな美少女が近くににいるのになんの反応もないんだもの。ごめんねえくお姉さん子供体型で」

一体何を言い始めたのやら。

子供体型？違うだろう。真由美は身長が低いだけでグラマーな身体をしている。足も腕も長く、スリーサイズも同年齢の女性より大きかったり小さかったりするはずだ。

1人でくねくねする真由美に智宏は1回ため息をついてから返答した。

「あのですね。俺に露出性癖とかそういうのはないんで、監視カメラがあるこんな場所で女性に手は出しませんよ」

「え？」

真由美が後ろを振り向くと入口付近の天井には監視カメラがついており、常時室内を監視している。

このような場所をセキュリティ強化するのは突然だろう。カメラを確認した真由美はストンと腰を下ろした。

「じゃ、じゃあ誰もいなかったら？例えはそうね……ホテルの一室とか別荘で2人つきりとかだったら？」

ここで智宏は「んー」と一旦手を止めて考え込み、いい感じの結論が出ると真由美に近寄り、彼女の手を優しく握りながら耳元で囁いた。

「もちろん、先輩の据え膳なら遠慮なくいただきますよ」

「ふえ……？ええええええ！」

「春休みうちの別荘来ます？冬は忙しいでしょうし」

「あ、いや……そのお」

「冗談です」

「えっ！」

「ん？」

智宏の言葉に身の危険を感じた真由美は限界まで壁に身を寄せて逃げたが、何せ一人用の閲覧室だ。動けても20cmくらいだろう。

その後も2人は閲覧室にいたが、身の危険を感じたはずの真由美は部屋から出ていこうとせず、顔を真っ赤にしながら座っていたのだった。

第54話 小さな監視者

論文提出を3日後に控えた夜。

達也は自分のホームサーバーが攻撃を受けているのに気がついた。何度撃退してもしつこくアタックを続けており、相当な執念だと達也は感じている。

アドレスの変更をしなくてはならなくなった状況に、達也はため息をついて逆探知プログラムを立ち上げたのだった。

翌日。

達也からメールを受け取った智宏は昼休みに2人でカウンセリング・ルームを訪れていた。

もちろん相手は遥。

「途中で接続を切られてしまいましたね。どこから攻撃されたのかはわかりませんでした」

「それで。私は何をすればいいのよ」

嫌がっていることを隠そうともしない。というか達也と智宏が姿を見せた瞬間に「げっ」という顔を遥がしていたのを智宏は覚えていた。

まあ3人の過去の経緯を考慮すれば遥を責めることはできないだろう。

遥は不貞腐れながらも依頼を聞いた。

「達也も先生にそんなに手間を取らせませんよ。な?」

「その通りです。先生、最近魔法関係の秘密情報売買に手を出している組織について教えてくださいませんか?」

「あのね? 私にも守秘義務があるんだけど……」

「無論です」

「むっ……はあ。先月末から横須賀で密入国事件が起こっているわ。あとマクシミリアンやローゼンの部品メーカーが盗難にあっている」

1度受けてしまうと中々縁を切れないもの。

諜報に携わる者としてまさか自分が仕掛けられるなんて思ってもみなかっただろう。

ちなみにマクシミリアンとローゼンはCADの世界トップメーカーだ。

「魔法機器の製造メーカーがですか」

「無関係じゃなさそうだな」

「決まったわけじゃないわよ。でも論文はメディアに入れて持ち歩きなさい」

これ以上話すことはない、という風に遥はディスクに向かう。引き際は心得ていたので、智宏と達也は礼を言っておカウンスリングルームを出ていった。

そして放課後の風紀委員会本部にて、達也は五十里相手に昨日の不正アクセスの顛末を説明していた。

「本当かい？被害は？」

「こっちは大丈夫でした」

「先輩のお宅こそ大丈夫でしたか？」

「うん。何もなかったよ。じゃあクラッカーの狙いは・・・」

「ええ、論文ですね」

「心当たりはないけど・・・この話は市原先輩にもしとくよ」

「ありがとうございます」

五十里は冷静に現状を理解して提案を立てた。智宏と達也もそれに賛成し、対策を考え始めた。

するとそこへ・・・

「やつほー。啓お待たせ！」

顔を見なくても声色でわかる機嫌の良さで花音が部屋に入ってくる。

返事を待たずにドスンと音を立てて五十里の横に座った花音は彼の腕を抱え込んでじゃれ付き始めた。

そして一緒に入ってきたのは摩利だった。

達也は立ち上がって席を譲る。

「二人とも久しぶりだね。達也君、花音の仕事ぶりはどうだい？」

「え!? 摩利さん!」

「そうですね……整理整頓はきちんとやっています。捨てるのは上手なんです。が思い切りすぎる時もありますよ」

「うっ!」

達也は抑揚の無い口調で告げると、摩利と花音はそろって居心地悪そうに顔を背けた。

摩利は自分は整理整頓が苦手なのだと言うことを自覚していたし、花音は必要な物までポイポイ捨ててしまう事が多々あった。

「花音はもう少し事務をやらなきやダメだよ? 司波君に押し付けじゃないか」

「だ、だつてえ〜」

五十里と一緒にいる時としない時の態度が大きく変わるこの瞬間、他の風紀委員が見たらどう思うだろうか。

そんな事を考えながらも、智宏は摩利にこう言った。

「ところで先輩はなぜここへ? もしかして警備の話ですか?」

「おっと、そうだな。我々が行うのは会場ではなくプレゼンメンバーと資料や機材の警護だ」

「会場はやらないのですか?」

「そっちはプロを手配する」

「なるほど」

「了解です」

やはりコンペの会場にはプロの魔法師が警備を担当するらしい。学生よりも実戦経験がある彼らの方がよいのだろう。

だが問題は生徒の護衛だった。

4年前に会場へ向かう生徒が襲われる事件があり、その時から各校は護衛を付けるようになったらしい。

「啓を守るのはあたし!」

と、花音が自信たっぷりといった顔で摩利を見る。それに対し五十里と花音以外は彼女を苦笑するのではなく温かい目で見るだけで済ませた。

「市原には服部と桐原が付くそうだ。問題は君なんだが……」

「そうよねえ。司波君に護衛って言ってもね」

「俺がやりますよ」

「智宏・・・？」

「まあ四葉なら達也君と同等くらいの實力はあるし・・・大丈夫か。頼めるか？」

「任せてください」

こんな感じで達也には智宏が護衛に付くことになった。

確かに、達也を護衛できる生徒はほほいらないと言ってもいい。逆に足でまといになるだけだ。1高で達也の護衛が務まるのは智宏や克人ぐらいなのだろう。

その日の放課後、智宏と達也、五十里、花音の4人は高校の近くにある商店街に來ている。なぜここにいるのかというと、学校の購買にある3Dプロジェクター用の記録フィルムが在庫切れを起こしていた為に、わざわざ文具店まで足を運んだというわけだ。

ちなみに護衛をするはずの花音は五十里にベタベタくっついていたので、店内にいる間は智宏が監視を行っていた。

会計が終わると周囲の監視をしていた智宏は外に出る。そしてさつきからわかりやすい敵意の視線を感じていたのでその方向に意識を向けていた。

店から出てきた達也も同じ視線に気がついていたのだろう。智宏と目を合わせると「ふう」とため息をつく。そんな2人の様子に何かを察した五十里は小声で智宏に話しかけた。

「どうかしたのかい？」

「先程からこちらを監視している者がいます・・・」

「えーそれってスパイ!？」

智宏の後に「どうします？」達也は聞こうとしたが、花音が割り込んできてしまう。しかも大声で。

その声量は近くで監視している者に対して逃げろと言っているようなもの。その証拠にこちらを見ていた視線は外れて気配も遠ざかっていた。

しかし、普段から鍛えている花音は智宏と達也が見ている方向に向

かつて走り出す。

「私が！」

「花音！気をつけて！」

「わかつてるって！」

同世代でもトップスクラスの実力を持っている花音はアスリート並の脚力は持つていないが、一般の高校生になら余裕で追いつける。

追いかけるとすぐに逃げていく小柄な人影を視界に捉え、それが少女であることや自分と同じ制服を着ている事に驚きながらもぐんぐん距離を詰めて行つた。

その時、追いかけている少女は走りながら後ろにカプセルを放つた。

まずいと思つた花音は目を腕で庇おうとしたが間に合わず、カプセルは凄まじい閃光を放つて周囲の人間の目にダメージを与えた。

ダメージを回避できた五十里は花音の前に庇うように立ち、

【ロード・エクスステンション伸地迷路】を発動させる。

すると少女がいつの間にか乗っていたスクーターのタイヤが空回りを始め、前に進まなくなつてしまつた。

もう詰んだ。

誰もがそう思つた時、焦つた少女はグリップの脇にあるボタンを押した。

その瞬間、スクーターの後部座席が吹き飛び連装のロケットブースターが姿を現した。ブースターは噴煙を吐き出しスクーターを急発進させ、智宏達が啞然としている内に少女の姿はみるみる小さくなつて行く。

「ま、まじか」

「何考えてるのよ・・・」

液体燃料をシートの下に仕込んでまで逃げた少女に対し、4人はしばらく硬直していたのだった。下手したらあの少女はバイクごと吹っ飛んでいたかもしれないからだ。

◇？

◇？

◇？

◇？

智宏達から逃げた少女は協力者が用意してくれたボックスワゴンに乗り込み、先程まで背中を襲っていた熱に恐れを抱き始めた。まさかこれほどまで恐ろしいとは思っていなかったのだろうか。

少女は壊れ始めていた。

しかし、誰も彼女を止める者はいなかった。

東京の池袋にあるビルの一室。ここにはがっしりとした体型の男達が旧式のモニターを眺めていた。

「小娘はまだ使えるか？」

「大丈夫でしょう」

「ふん。まあいい」

「そう言えば監視対象・司波小百合は魔法科高校に通っている子供に会っています」

「魔法大学の付属高校です。作戦に好都合ではありませんか？」

「確かに。第1高校も活動対象にするか……ならば小娘に対する支援を強化しろ」

男は部下に指示を出し、そのまま後ろに立っている1番大柄な男に對して続けざまに命令を下した。

「呂上尉。現地で指揮をとり、我々を嗅ぎ回っている犬がいるなら排

除しろ」

「是」

そして大柄な男は命令を受けると部屋を出ていった。

第55話 通り魔

今日は珍しく智宏、達也、レオ、エリカの4人で昼食をとることになった。

その時勘のいいエリカは智宏と達也に何かあった事を察する。

「昨日何かあったの？」

「・・・勘がいいってレベルじゃなくね？」

「ああ」

「ん？智宏も達也も、どうかしたのか？」

「なんでもないよ」

「・・・そうか」

「あ、美月が言ってたんだけどさ。なんか最近視線を感じるらしいのよ」

「なんだそれ。ストーカー？」

「ううん。違うの」

2人の雰囲気から深く聞けないのを読み取ったエリカは別の話題に切り替えた。

エリカ曰く、美月はここ数日1高全体に網のようなものを張られているような感じがするらしいのだ。

誰か1人を狙うのではなく、全てを監視しているのなら事態は重くなる。それに加えて幹比古の情報によれば、校内の精霊が妙に騒いでいるとのこと。その理由として、外で誰かが術を打つていていると言っていた。

そしてそれが日本の術式では無いことも幹比古はわかっていた。

「——つまり他国のスパイが関与してるんじゃないかって」

「なるほどなあ」

「随分と派手に動いてるな。達也はどう思う？」

「こつちを誘っているのかそうでないのか、まだわからないな」

「そうよねえ。全く・・・警察は何やってるのかしら」

エリカの警察への不満は公権力というより、どこか身内に対して言っている気がした。

同時刻。

出向中の寿和は背中に悪寒を感じてついキョロキョロと辺りを見渡してしまった。

「どうかしたんですか？」

「い、いやなんか寒気が……」

「仮病ですか？それより聞き込みどうしますか？なんか目撃者いないんですけど」

「だな。こうなったら蛇の巣穴を訪ねてみないかね？」

寿和の言葉を聞いた部下の稲垣警部補は嫌そうに顔を顰める。

「……違法捜査ですよ」

「大丈夫大丈夫。そんな事言ってる場合じゃないんだし」

「まあそうですけど」

ぐちぐち言ってる稲垣を覆面パトカーに載せた寿和はとある喫茶店に向かって車を進めた。

今日は平日なので客は少ないと予想されていたが、以外にも客の人数は多かった。

しかし皆静かに飲んでるので観光客ではなく常連客ということがわかる。そして寿和はこのマスターが表の仕事も裏の仕事も手を抜かない事をよく知っていた。

ブレンドを2つ注文して寿和と稲垣がカウンターの席に座ると、隣に飲みかけのカップが置いてあった。

冷めるじゃないかと千葉が思っていると、若い女性がその席に戻って来た。

そして――

「こんにちは」

「……へ？」

その女性にいきなり挨拶されたので、寿和は自分でもわかるほどマヌケな声を出してしまった事に気が付く。もちろん小声で。

「いきなりごめんなさい。もしかして女性は苦手でしたか？千葉の御曹司さん？」

「あ、貴女は？」

「はじめまして。私は藤林響子と申します」

まさか自分の素性がバレるとは思っていなかった。弟とは違って公式P Rしていない寿和が何者かと気づくのは、それこそ警察関係者か実戦魔法に生きる者だけ。寿和はつい身構えてしまう。

古式魔法の名門、藤林家の令嬢はそんな彼に屈託のない笑みを浮かべて挨拶をした。

◇? ◇? ◇? ◇?

放課後、智宏達9人が全員で一緒に校門を出るのは本当に久しぶりのことだった。

「達也さんは論文コンペの準備は終わつたんですか?」

「まあひと段落といった所かな。これから模型作りとかデモ用の術式調整があるし」

「達也は何をするんだ?」

「あんたねえ、達也君は術式でしょー」

自然な流れでレオが質問すると、達也より先に今日は髪型をポニーテールにしているエリカが呆れた顔で答えた。

「そうだ。模型は五十里先輩の方が得意なはずなんだ」

「確かにねえ。五十里先輩は『錬金術師』のイメージがあるかな」

「・・・RPG?」

エリカの返しに雫がポツリと呟く。もちろんこのRPGはロケットランチャーではなく、ロールプレイングゲームの略である。

そして美月もこの話に乗ってきた。(一斉に喋り出すので1部台本形式とする)

(美月)

「その流れでいくと達也さんはなんだろう?」

(エリカ)

「マッドサイエンティストでしょ」

(雫)

「そんな役職ないよ」

(エリカ)

「それじゃあ……山奥にいる世捨ての賢者」

(智宏)

「いやいや。達也武闘派じゃん」

(レオ)

「だったら世界征服を狙ってる悪の魔法使い」

(幹比古)

「魔王でいいんじゃないかい？」

(エリカ)

「いっそ魔王を倒した後に出てくるラスボスでいいわよ」

(智宏)

「あー、実は俺がくってやつか」

(ほのか)

「皆はなんで勇者様の発想がないの？」

(達也)

「いいんだ。俺はそんな柄じゃない」

(深雪)

「何をおっしゃいますかお兄様。力こそ正義です！」

(エリカ)

「うわっ、さすが魔王の妹。魔王の隣で勇者を嘲笑ってるのが目に浮かぶわ」

(深雪)

「エリカ？」

(エリカ)

「なんでもないです。はい」

などなど、帰り道は大いに盛り上がった。

話がいい所で終わると、達也はどこかによって行かないか？と意見具申をし、全会一致でカフェに向かった。

全員コーヒを頼み、コーヒが注がれるまで智宏達はマスターと世間話をしながら待っていた。

飲み始めたコーヒが4割ほど無くなると、突然エリカが席を立つ

た。

「ちよつとお花摘みに行つてくる」

「ん？電話だ………出てくるわ」

「あいよ。あれ？幹比古何やってるんだ？」

「思い出したことがあつてね。メモってるんだ」

「………ふーん」

「程々にな」

エリカに続き、レオと幹比古も変な動きを取り始めた。

それに気がついたのは智宏と達也だけ。達也は目を鋭くしながら警告をした。

カフェから少し離れた路地。

ここで智宏達の方を見ていた男は背後から何者かに話しかけられて手に持っていたコーヒーを落としそうになる。

「ねえねえ」

「ッ！」

「あたしとイイ事しない？」

「大人をからかうんじゃない。それより早く帰りなさい。通り魔に襲われたら大変だ」

「それって俺みたいなのか？」

「知らないの？通り魔っていうのは『通りすがりの魔法師』の事よ」

エリカに話しかけられた男は話しかけてきた子供を追い払うように返答したが、エリカに背を向けるとその先にはレオがいた。

黒い手袋をはめたレオに警棒を構えたエリカ。あつという間に戦闘態勢に移った2人に、男は逃げられないと悟ったのかこう叫んだ。

「助けてくれ！強盗だ！」

「うわ情けねえー」

「あつ、そうそう。ここは結界の中だから助けは来ないわよ。抜け出すこともね」

男は助けを呼んだが、あつさり無理だと言われてしまう。

となれば残った選択肢は1つ。

2人を倒すだけだ。

持っていたコーヒーを投げ捨てて近接戦の構えをとった。

3人の間に静寂が訪れる。しかし最初にそれを破ったのは男の方。男はレオに突進し鞭のようなパンチを浴びせた。

何回かパンチを浴びせている内にレオのガードか崩れ、男はレオの顔面に一撃を入れる。

次に後ろから襲いかかってきたエリカの1太刀をガードし、左腕のパンチを繰り出す。

が、パンチはガードされたので男は後ろに飛び退る。その時男は背中に重い一撃を喰らって俯せに倒れた。

「なっ！」

「痛ってえく。コイツ人間じゃねーだろ」

「あんたも似たようなもんじゃない」

男に強烈なタツクルを喰らわせたのはさつき吹き飛ばされたレオだった。

レオは殴られた顎を撫でながら男に近づき、もう1発腹に蹴りをいれる。逃げられないようにするためだ。

「グアッ！」

「どうする？別に殺しはしないわ」

自分の右にはレオ、左にはエリカが立っているのを確認し、変な動きをしたら意識を持っていかれると悟った男は諦めたように両手を上げ――

「降参だ」

――と、大人しくなったのだった。

第56話 男の後処理

「よし。じゃ、いろいろと話してもらおうぜ」

「そうね。名前は？」

「……ジロー・マーシャル」

男は2人の質問に本名か偽名かもわからない名を告げた。

そして遠回しに自分がどの国の機関にも所属していない非合法工
作員だということも。自分をここまで追い詰めるのだ。それくらい
はわかるだろう。実際その通りだった。

それからいくつかの質問を受けたが、もちろんその答えは全てYE
SでもなければNOでもない。後を付けていたとは言え、この男が何
者かもわからない状態ではこれ以上疑っても意味はない。尋問は終
わった。

「とにかく、私はスパイではない。逆にそれを防ぐ立場の人間だ」

そう言つて男はズボンの埃を払う仕草をする振りをして拳銃を取
り出し、その銃口をエリカに向けた。

「っ！」

「てめえ！」

「さて、結界を解いてもらおうか」

魔法の存在とCADの発達により、現代魔法は銃器と渡り合うくら
いのスピードを手に入れている。しかし、それは銃より魔法の発動が
速いと言うわけではない。どちらかというと銃の方が速い。

現代魔法は起動式を読み込んでから魔法式を構築し魔法を発動す
るプロセスがあるので、攻撃魔法や防御魔法は発動するスピードが速
くないと銃器には勝てないのだ。

同時に、固まる2人を術式で見っていたのか幹比古は自分が張った結
界を解除した。

「では失礼するよ。そうそう、学校の中だからと言って安心しない方
がいい」

男は自分とエリカ・レオの間にスモーク・グレネードを投げ、煙幕

が2人の視界を封じている間に逃げた。

エリカやレオが毒の煙ではないと判断して目を開けた時には既に男の姿はなかった。

残った2人はその場に立ち尽くし、この一部始終は監視システムが見ていた。もちろん幹比古のおかげでカメラには映っていないが、幹比古の術式は記録に残ってしまっていた。

そして彼らを見ていたのはカメラだけではない。藤林響子が魔改造してある自分のパソコンで見っていたのだ。

「全く……吉田家の神童も詰めが甘いのよねえ」

そう言つて響子は魔法の不正使用の映像と記録を消去した。

電子の魔女と呼ばれる彼女ならこの程度のシステムに入り込むことなど造作もない。単身で電子戦ができる実力を持っている響子は、今のような証拠隠滅が任務ではないのだが、達也が余計に目立つのを防ぎたかったのだ。

そしてエリカとレオから逃げたマーシャルは後ろから迫ってくる何者かに気づき、通りから十分に離れた場所で立ち止まり、その者を迎え撃つ準備をする。

背後にいるのが先程の男女ではなく、別の存在。しかも力も2人より上だということもわかっていた。

(どっかにいるー)

マーシャルは全神経を集中させ、追ってくる者の気配を探した。このご時世、気配というものは訓練すればだいたいのはそれを察知することができる。

まだ自分を付けている相手はまだこちらを窺っているはず。ならばそれを突き止め制圧するというのが彼の判断だった。

しかし、彼の予想は外れた。

ゾツとするような気配を感じてその方向に目を向けると1人の男が立っていた。

大柄なアジア人で至つてその辺にいそうな人ではあるが、その全身から人間を捕食する猛獣のような雰囲気が出ている。

マーシャルは目の前の男に見覚えがあった。

「人喰い虎……リユウカンフウ 呂剛虎だと！」
呂剛虎。

その名はマーシャルが今回の作戦に当たって配布された要注意人物リストのトップを飾っていた。

白兵戦において人を殺すことに関しては大亜連合随一と噂されており、また大亜連合特殊工作部隊のエースでもある。

目の前の人物が誰なのかを意識した時にはマーシャルは戦闘態勢に移っていた。

右手に構えた拳銃で呂剛虎を撃とうとしたが、マーシャルが引き金を引くことはなかった。

引き金を引くより速く呂剛虎の指が手首に突き刺さっていたのだ。

いつこんな至近距離まで接近されていたのか、いつ手首を貫かれたのか。マーシャルは呂剛虎の動きが全く見えなかった。

そしてマーシャルが痛みを認識する前に、彼の意識は永遠に閉ざされた。

マーシャルの喉に刺さった右手をズルリと引き抜いた呂剛虎は、懐から取り出した紙で血を綺麗に拭う。拭き終わるとその紙は死体の上に放り投げられ、ペタツと張り付いた。

すると紙は炎となって燃え上がり、マーシャルの死体を燃やし尽くす。

死体が完全に燃え尽きたのを確認した呂剛虎は、踵を返して通りに戻って行った。

◇? ◇? ◇? ◇?

翌日、学食で待ち合わせをしていた智宏と深雪は、待ち合わせの相手であるエリカが難しい顔をしているのを見て意外に思っていた

「まだ昨日の事を気にしているのかしら?」

「別に逃げられた事を気にしてるんじゃないよ」

エリカは昨日駅に行くまで悔しがっていたが、まだ引きずっているとは思ってもいなかった。

しかし帰ってきた返答は半分正解で半分否定。別の事を気にしているようだ。」

「あいつが言ってた言葉が気になったのよ」

「確か『学校の中だからと言って安心しない方がいい』ってやつか？」

「うん。考えたくないけど生徒の中に・・・」

「可能性はあるかもな。春の事件の時は俺はいなかったけどある程度は聞いている。エリカが気になるのもわかるよ」

ブランシユの事件当時、紗耶香がテロリストもとい海外の工作人員に利用されていた。

自身の記憶を塗り替えられ、それに気づかず周囲に迷惑をかけてしまった事を彼女は今でも吹っ切れていない。

智宏はこの事件の詳細は実家でしか見ていない。だが何人かの二科生がブランシユに加担し、風紀委員に拘束された記録は頭の中に残っている。

ただ騙されて利用されていた生徒も何人かいたらしく、事件後のメンタルケアが大変だったという。一高の保険医やカウンセラーは毎日来る生徒達の対応で、疲労の色が隠せなかったという。

「別にデータを持ち歩いているわけじゃないから物理的に盗む事はできなはずだ」

「だよなあ。でも相手が誰だかわからない以上警戒はする必要があるだろう」

「ま、それもそうね」

あんまり納得していなさそうなエリカだったが、得ている情報が少なすぎる上に生徒が裏切ってくる可能性もにわかには信じ難い。

ひとまずこの場合は警戒を強化する、という結論しか出なかった。

コンペの護衛も、今より一層頑張る必要もあるだろう。

第57話 タツクルで確保

論文コンペは九校戦の代表チーム25名と比べれば遥かに少ないたったの3名。しかし、人数は少ないが毎年論文コンペは九校戦以上の重要行事とみなされている。

なぜなら、それはこのコンペ自体が全国に9つある魔法科高校の優劣を付ける場でもあるからだ。九校戦で成績が良くなかった学校は雪辱戦という事で、生徒の士気は高い。

もう1つの理由として、論文コンペには代表に選ばれた生徒だけでなく他の生徒も関わる事ができるのだ。

論文の発表には装置を使ったプレゼンテーションを壇上で行い、実際に作動するかシミュレーションをしなければならぬ。

その為、装置の設計や術式補助のシステム製作、制御ソフト、装置のボディ、テスト要員などなど、学校によっては九校戦より参加人数が多い所もあるだろう。

コンペの1週間前にもなると、授業に割り当てられている時間も【自主製作】という名目で工作機械の音や魔法による騒音がどの学校でも見れる。

「えーっと・・・あ、いたいた」

その喧騒の中、エリカはある人物を探していた。

「おーい、達也くん。智宏くん」

「エ、エリカちゃん。邪魔しちゃだめだよ……………」

大声でブンブン手を振るエリカの隣では、レオが明後日の方向を向いているし、後方にいた幹比古も同様に別の場所を見ていた。

美月はエリカの袖を引っばって注意したが、当然のごとく効果はなかった。

一方、達也を護衛している智宏は大声で近づいてくるエリカに半分呆れながらも軽く手を振り返した。

後ろにいた深雪は、智宏の動きに気づいてエリカをこちらへ呼び寄

せる。

「エリカ、こつちよ」

「全く・・・声デカいぞ」

「ごめんごめん。それで、今はなんの実験をしてるの・・・？（電球？）」

やはり反省の色なしのエリカ。

まあそれは置いておくとして、現在校庭には台座と4本の腕(?)で支えられている直径120cmほどの透明な球体が置かれている。

傍から見ればデカイ電球のように見えるだろう。

この時代、電球というものは一般家庭からも姿を消しつつあり、隣にいた美月はこれが電球だとはわからなかった。

「プレゼンに使う常温プラズマ発生装置よ」

と、深雪はエリカの質問に答える。

「常温ですか？熱核融合炉なのに？」

深雪の返答にいち早く反応したのは他人のフリをしていた幹比古。同い年なのに深雪に敬語を使っているのには事情がありそうだ。怖いのだろうか？

幹比古の深雪に対しての敬語使いはもう誰も突っ込まなくなったが、幹比古の言葉を聞いたエリカ達（智宏と深雪を除く）は化学の知識を頭の中で掘り出して数秒遅れてはてなマークを出した。

「熱核融合は反応のタイプ。超高温である必要は必ずしもない・・・らし」

「・・・」

「すまん。これ以上は聞かされてないんだ」

「私も知らないの。ごめんなさい」

理解していなさそうな顔をしている幹比古達に智宏と深雪が申し訳なさそうに謝ると、幹比古だけが深雪の謝罪に過剰に反応して「めめめ滅相もない！」と首を振っていた。

そんな幹比古を見てエリカが美月とヒソヒソ話している。智宏は軽く耳を傾けると、部分的ではあるがこんな声が聞こえた。

（・・・は・・・が怖い・・・）

(自分より……から……?)

(怒ら……と……し)

まあ深雪が怖いからだの、深雪の方が強いからだの、そんな感じだろう。

深雪も2人の会話に気づいてニツコリ笑いかけると慌てて口を噤んだ。

周りが静かになると五十里が鈴音に合図を送り、達也の操作しているモニターが着いている大型CADに鈴音はサイオンを注ぎ込む。

すると複雑な工程が幾重にも積み重なった魔法式が発動し、高圧の水素ガスがプラズマ化して分離した電子が発光ガラスにぶつかって光を放った。

ここでエリカが「電球じゃん」と漏らした少々失礼な発言は、幸運にも周りの歓声に掻き消されてしまった。

しかし、成功した事には変わりないので、深雪や紗耶香、レオ達は実験の成功に喜んでいいる。光が消えると同時に周囲の興奮も収まり始め、野次馬や協力してくれた生徒達が帰ったり持ち場に戻ったりした。

智宏も実験の成功に喜んでいたが、解散し始める生徒達の中に妙な端末を持って実験の機械をじっと見ている生徒を見つける。周りが浮いた雰囲気なのにその生徒だけ大人しく、憎悪の感情さえも感じられた。

しばらく見ているとその生徒は智宏の視線に気が付き、智宏がニヤリと笑うと慌てて逃げ出した。

逃げ出した生徒を追いかけようとしたが、智宏の任務は達也の護衛。捕まえたくても捕まえられない。

するとほんの少し前から智宏の視線を不思議そうに見ていた紗耶香も走り出した。

「あの子……!」

「ヤーや?」

「壬生!」

紗耶香の後に桐原とエリカ、レオが追いかけるようにスタートを

切った。

突然の行動に深雪は驚いたが、紗耶香達が追いかける先にお下げ髪の女子生徒が走っているのに気がついた。

すぐ後ろで自分を呼び止める声が聞こえると足の速さでは敵わないと悟った女子生徒は、他の生徒がいない中庭で立ち止まる。

「なんですか」

「あなた1年生よね」

「はい。先輩は2年の壬生先輩でした・・・よね？」

「そうよ。あなたは？」

「私は1年G組の平河千秋です」

千秋の声は硬く、警戒しているようだった。

上級生から自己紹介を要求されたのでしぶしぶ答える。

「平河？」

追いついた桐原達はその苗字に聞き覚えがあった。

しかし紗耶香はそんな事を気にしている余裕はない。

「手に持っているのはパスワードブレイカーでしょ？私も同じ機種を使ったことがあるから」

紗耶香の指摘に顔を青くした千秋は慌てて端末を背中に隠した。

パスワードブレイカーとは、パスワードが設定されている物からパスワードを盗み出すハードとして開発された機械。しかもパスワードだけでなく様々な認証システムを突破し、中のファイルを盗み出す事を可能とした。

つまり、この機械を使うのは犯罪目的意外ありえないのだ。

「先輩も？」

「ええ。私もスパイの手先になったことがあるから。忠告するわ。今すぐ手を切りなさい！後で苦しむのはあなたなのよ!？」

「先輩達には関係ないです」

千秋は紗耶香の説得に対して、拒絶という形で返答する。

だがそんな事で紗耶香は止められなかった。

それは自分が経験したからこそ言えることだった。

「放置なんかできないわよ！あの事件から半年が過ぎた今でも身体が

震える時があるし、気付いたら身体を傷つけていた時もある。どんな連中かなんて知らないわ。でもあなたは使い捨ての駒にされるだけなのよ！」

「……そんなの……そんなのわかってますよ！連中が私の事なんてどうとも思っていないことなんて。先輩はそんなことも知らなかったんですか？」

この生徒は自分とは違う。

そう紗耶香は思い知らされた。

ブランシユの時はどうしたら良いかわからない所に付け込まれ、利用された。

でも目の前の1年生は目的を達成した後の自分を考えていない。未来から目を背けているのを紗耶香は感じた。

だから紗耶香は千秋をなんとしても止めなくてはならなかった。

「先輩にはわかりませんよね。だからほつといてください」

返ってくるのは再度の拒絶。

さすがの紗耶香もこの結果になる事はわかっていた。

しかし、ここで千秋を逃がしたら二度と戻ってこないだろう。今説得するのは無理だと察した紗耶香は桐原に目線で合図を送る。目の前の1年生は格闘術の心得もない。そう見た2人はジリジリと千秋に寄っていく。

ここで誤算だったのが紗耶香と桐原が千秋が武器を所持していないと思っていた事だ。

千秋の後ろにいるのはそんじょそらのテロリストよりタチの悪い連中。自己防衛のための武器を渡していないはずがない。

紗耶香と桐原が飛びかかろうとした瞬間、千秋はカップセルを投げ付けた。

「伏せてー！」

「「ッー！」」

いち早く反応したエリカはそう叫んだ。

カップセルが地面に当たった途端、強烈な光がエリカ達の目を塞ぐ。そして千秋は袖の下に仕込んであった小型のボウガンで紗耶香に向

け、ダーツのような物を発射した。

先に視力が回復したエリカは、近くに転がっていた棒を使ってダーツを撃ち落とす。

ただのダーツならよかったのだが、棒が命中した途端ガスのような煙が周囲に広がった。

(これは神経ガス!?)

煙を吸ってガツクリ膝をついた桐原を見てエリカはそう判断した。まだ暗器を隠し持っている可能性を否定できないこの状況。エリカや紗耶香は動けなかった。

しかし、そんな状況にも関わらず芝生に伏せていたレオは千秋に向けて突進した。

「うおおおおお！」

「ヒッ！」

同年代でも自分より遥かに大きな体格のレオの迫力にビビった千秋は慌てて右手をレオに向ける。袖の中にあるダーツが連装なのはわからないが、武器が発射されることはなかった。

千秋の視界からレオが消えたからだ。

レオを見失って動きが止まった千秋は次の瞬間強烈なタックルを受け、そのまま後頭部を打って気を失ってしまった。

「・・・や、やりすぎた」

「そうね。あとあんた離れなさい。襲ってるように見えるわよ。やーい変態」

「なっ！そんなんじゃねーよ！」

こうして、少し危ない状況だったが千秋はエリカ達に確保されたのであった。

騒ぎを聞いて保健室に駆けつけた花音は紗耶香から事情を聞き、気を失っている千秋を見てため息をついた。

「全く・・・やりすぎよ。で？彼女が何やったの？違法行為もしていないのに拘束することはできないわよ」

この指摘に対し、生真面目な紗耶香や桐原は反論できなかったが、その隣にいるエリカだけはそんな指摘に黙る人間ではない。

「ハッキングツールを持っているだけでも十分な理由だと思えますけど」

「だからやりすぎだって言ってるの」

「隠し武器まで出されちゃこっちもそれ相応の対応はしますよ。それとも、先輩は相手が武器を使ってきたとしても私達は無抵抗でいると?」

一触即発なエリカと花音。この状況に紗耶香は焦りを覚えた。

だが止める立場にいるはずの保健医が止める素振りも見せないの
で、口を挟めないでいた。

その間にも2人はますますヒートアップしていく。

「そういう訳じゃないわ!取り押さええるのにも加減があるって言うてるのー!」

「へー。でも先輩は尾行した生徒にいきなり魔法を打ち込もうとしたらしいじゃないですか」

「うっ・・・で、でもそれとこれとは話が違うわ!」

危なげな雰囲気の中、2人の仲介に入ったのは意外な人物だった。

「じゃあ委員長。後はよろしくお願いします」

「ちよ、ちよっと!」

「ほら行こうぜ」

レオはエリカの腕を掴んで保健室から出て行った。

廊下から2人のギャーギャー騒ぐ声（主にエリカ）が聞こえなくなると花音は落ち着きを取り戻し、ベッドで寝ている千秋の顔を見る。見覚えのある顔だったが本人の意識がないので確認はできない。

花音は視線を保健医である安宿怜美に移した。安宿は医療系に特化した魔法師で、千秋の様態もすぐに見抜く実力がある。

「先生。彼女が目を覚ましたら連絡してくれませんか?」

「良いわよ。でも逃げられたらごめんなさいね」

おっとりした雰囲気で答える安宿だが、花音はそうは思わなかった。

「先生が怪我人を逃がしたことはありませんか?」

花音は苦笑ながら紗耶香と桐原を引き連れて保健室を出て行った。

第58話

保健室での事情聴取

風紀委員長である花音は五十里の護衛も務めている。今は別の風紀委員に五十里を任せているが、やっぱり自分で守りたいのだ。

なので千秋が起きるまで五十里の所で護衛をするため、花音は中庭に戻って行った。

するとそこでもあの癩に障る1年生を見つけた。

花音の視界には1人の男子生徒がエリカに何か注意している様子が目に入ったが、何か言われているはずのエリカは「しまったこっちはねーよ」という雰囲気を出して話を聞き流していた。

何があったかを確かめるため、花音は近くにいた智宏に話しかけた。

「ちよつと四葉君。これどういう事？」

「なんかあの2人がうろついているのが関本先輩は気に入らないみたいですね」

「はぁ・・・」

花音はうんざりしたようなため息をつきながら智宏から離れ、エリカと関本に近づいた。

「関本さん。何かありましたか？」

「ああ。なんの権限もないのにうろちよろしているのが邪魔だったから注意していたところだ」

事情を聞いた花音は柄ではないが頭を抱えなくなった。

なぜ目の前の男はわざわざ波風を立てようとしているのか。今は自分が風紀委員長なので、何かあったら面倒な事は全てこちらにくるのだ。

関本は3年。正直花音はとつと風紀委員を辞めて欲しいと思っている。(摩利や他の3年は全て引退している)

イライラする衝動に駆られながらも花音は2人に向き直った。

「関本さん。過剰すぎる迷惑行為なら私達に任せてください。貴女達

も帰って。さっきの行為も暴力行為に見えるのよ」

とつと事態を収めようとした花音に対し、エリカは冷笑を浮かべる。

自分でも姑息な手段だと思っているのだが、それを見てさらに頭に血が上った。

花音がこれ以上事態が悪化しないように奥歯を噛み締めていると、驚くべきことにエリカはあつさり背を向けた。

「じゃあ深雪、智宏君、達也君。またね〜」

「俺も帰ろうかな」

エリカとレオが帰ったのを確認した花音はホツとため息をついた。

すると携帯端末に着信が入り、中身を確認した花音は保健室へと引き返す。

五十里も慌てて花音の後を追って持ち場を離れたが、それを誰も咎めなかった。

早足で校門を出たレオは、数歩先を歩くエリカの後を黙々と歩いていた。

いつもなら世間話でもして帰るはずの帰り道もエリカが何か考え事をしているため、2人の間には会話がない。

「ねえレオ」

「ん?」

「この後暇?」

いきなり名前を呼ばれてレオは思わず立ち止まってしまった。もちろん振り返ったエリカも立ち止まっている。

質問の意味がわからず絶句してしまいうレオだったが、一方のエリカは真剣な表情でじつとレオを見た。

「どうなのよ」

「・・・いいぜ」

「じゃ、来なさい」

エリカから発する雰囲気を感じたレオは、先程までの呪縛を解き、再び歩き出したエリカの後に続いた。

保健室についた花音と五十里は扉を開けて中に入ろうと1歩前に

踏み出したが、中では予想外の光景が広がっていた。

「失礼しまー……」

花音と五十里の視線の先には、おっとりした声で出迎えてくれた安宿がもがいている千秋を取り押さえつけている光景があった。

おそらくこれを見た誰もが安宿から【おっとり】という印象を消し去るだろう。

「先生は戦闘力無いのでは？」

「やあねえ。これは看護、看護よ」

「……」

「えっと、ひとまず話がしたいんで放して……じゃなくて座らせてくれませんか？」

「いいわよ」

とつさに言い換えた花音を褒めるように安宿はニコニコしながら千秋をベッドに座らせた。

あのまま言葉を続けていたらどうなっていたことか……。花音と五十里はこれ以上考えないようにした。

頭の中から余計な事を振り払った花音は、改めて千秋に視線を移した。

「一昨日は大丈夫だった？」

「……あ」

「無茶するわねえ。よく大怪我しなかったものね。でもこれ以上はこちらも黙ってるわけにはいかないの」

花音に問われて千秋は一昨日自分を追いかけてきたのが花音だと気が付き、ハツとなって目を逸らした。

風紀委員長という立場を与えられたからこそ、下級生を更生させようという義務感が花音にはあった。

もしこの地位にいなければこんな事さっさと忘れていただろう。

「壬生さんに聞いたわ。あなた何をしようとしていたの？」

「……プレゼンの魔法装置プログラムを書き換えて使えなくすることです」

「プレゼンの失敗を狙ったの？」

「違いますー！」

見た感じ花音は落ち着いていたが、内心は一瞬のうちに煮えくり返っていた。

よりにもよって五十里の晴れ舞台を邪魔しようとしたからだ。しかし、いつものように怒鳴ることはない。今日の彼女はよく我慢していた。

そして千秋から返ってきたのは予想とは違うものだった。

プレゼンの失敗を狙ってはいない。千秋のその言葉や態度には嘘は見受けられなかった。

「悔しいけど・・・あの男はプログラムを書き換えてもすぐに直してしまう。でも！でも私はアイツが困った顔が見たかったです！」

「下手したら退学になるかもしれないわよ？」

「それくらい覚悟がなきゃ・・・やってませんよ・・・！」

千秋はベッドの上で嗚咽を漏らし始めた。

途方に暮れていた花音は、自分の肩に五十里の手が乗せられているのに気が付き、その意図を察して自分は1歩後ろに下がった。

「君は平河小春先輩の妹だね？」

「はい」

「先輩がああなったのは司波君のせいだって思ってるの？」

「・・・だってそうじゃないですか！アイツは小早川先輩の事故を防げたのにそうしなかった！アイツのせい・・・お姉ちゃんは責任を感じて・・・！」

五十里の思った通り、千秋は達也を目の敵にしている。しかもその原因は九校戦で小早川の事故。あの時1高のCADにウィルスを仕込んだのを見抜けたのは達也だけ。しかも小早川を担当していた千秋の姉、平河小春は自分に責任があると感じて退学まで思い詰めていたのだ。

もはや八つ当たりと言っていいくらいだが、花音と五十里はこの場に深雪がいなくてよかったと思っていた。

深雪がいたらこの保健室は文字通り凍りついていただろう。

原因を聞いた五十里は苦々しさを混じえた声で再び話しかける。

「あの事故なら僕達エンジニア全員に責任がある。司波君だけの責任じゃないよ」

「笑わせないでください」

そう。小早川の落下事故に関してはあの時のスタッフ全員が悔やんでいるのだ。

しかし千秋は五十里の思いを嘲笑った。

花音がカツとなって前に出たが、五十里が手で制した。

「姉さんにもわからなかったんですよ？五十里先輩が分かるはずないじゃないですか。アイツは何でもできるのに自分からは動かない。そうやって無能の人を笑ってるんだわ」

「平河さん、それは違——」

「違くない！魔法だって使えるくせに才能を隠して……あの男は影で他人のプライドを踏み躪ってるに決まってるわ！」

五十里は千秋の気持ちが少しだけわかった。

信じていたものが裏切られた時、人は争い続けてきた敵に対して深い憎しみを覚えるものだ。身内や自らに近い者が被害にあつたならその感情はさらに増加する。

憎悪と妄念に塗れた叫びに花音と五十里が言葉を見失う中、見守っていた安宿が3人の間に割り込んだ。

「そこまでよ。ドクターストップ」

「先生……」

「これ以上は明日にしてちょうだい……ね？」

「……わかりました」

◇? ◇? ◇? ◇?

道路を走る2人乗りのキャビネット。その中にはエリカとレオが座っている。

同級生と2人きりで車に乗っているわけだが、2人の間にはなにもなく、レオだけ内心そわそわしていた。

相手がエリカだとわかっててもなんとなく居心地が悪い。

このまま黙つてるともつと居心地が悪くなりそうだったが、幸運なことに車内の沈黙は長くは続かなかつた。

「簡単すぎない?」

「何がだよ」

「スパイよ。あんなお粗末にハッキングツールを持たせとくなんて」

「素人だったんだろ?」

「もしかしたら。もしかしたらあの子は罠かもしれない」

「それって本命は別にいるとか?」

「ありえるわ」

エリカのやけに真剣な態度に、レオは冗談や軽口でエリカが話している訳ではないのだと察する。

「でも変にうろつくより反撃メインの用心棒をやればいいと思う」

レオは脳筋なのでこういう時の対策が上手く浮かばない。

しかしエリカの言葉にピンとくるあたり、2人の思考回路は似ているのだろう。もちろん本人達に言ったら全力で否定するだろうが……。

どう出ているかわからない。

なら待ってればいいのだ。

相手の狙いは論文コンペ。わざわざリスクを負って炙りださなくてもコンペの本番に近づけば向こうからのこのこ出てくる。そこを狙うのだ。

「なるほどな……。ん?てことは達也を罠にすんのか?」

「達也君なら殺しても死なないでしょ?それに智宏君が護衛についてるんだから」

「ハッ。確かにあの2人が相手だと近づく前にやられそうだ」

キャビネットの中の空気はエリカの冗談(本人曰くけっこう本気)によって明るくなり、2人はある場所に向かって行った。

第59話 突然の欠席

すっかり日も落ちて街灯に照らされた帰り道。今日は先に帰ったレオとエリカの変わりに花音と五十里がいた。

なぜ2人がいるのかというと、保健室で聞いた事情を達也に話すためだ。千秋の狙いが達也であるならば本人に話しておく必要がある。

事情を聞いた達也達の反応はそれぞれだった。

「なるほど。そういう理由でしたか」

「それって逆恨みじゃないですか!」

「ていうか八つ当たり?」

ほのかは憤慨し、雫は理解しがたいのか首を捻っている。

「まあ・・・八つ当たりせずにはいられなっただね」

「そうですね。平河さんはお姉さんが大好きなようですし」

対象的に同情混じりの言葉を発したのは幹比古と美月。

ここでも一科生と二科生で意見が割れた。千秋も二科生なので、2人はその気持ちが少ないだけわかるのかもしれない。

「ま、そんならいならほつといっても大丈夫かな?」

「そうだな」

「え・・・狙われてるの君なんだけど」

早々と結論を出した智宏と達也。

五十里は首を傾げ、花音は呆れた声で問いかけてきた。

その問いに対し、達也は何故か申し訳なさそうに頭を下げた。

「俺が狙われたから巻き込んでしまったようですね。申し訳ありません」

「ううん、大丈夫さ。それより平河先輩に妹を説得させてたらどうか
な?」

「いえ。その必要はないでしょう。それに無理に説得したら余計に暴走するかもしれません。2人に責任はないのですから」

「へえ、優しいのね」

達也は五十里に解決案を出されたが、首を横に振ってその案を拒否した。

確かに平河（姉）は妹の暴走に関与していないわけではない。むしろその原因だ。だが、それを関係ないと達也は言い切る。

その返答に花音は素で驚き、深雪はそれにムツとしていた。もちろん達也が深雪を上級生の目に入らないようしている。

「それに最近1高の周りをウロチョロしてるのは平河千秋だけではありませんし」

智宏の言葉にハツとなった花音と五十里、幹比古は一行の周辺に目を光らせた。

不審な影は発見できたが、微かに意図しないサイオンの波動を五十里と幹比古は感じ取れた。

「護衛・・・足そうか？」

「七草先輩並の探知能力がなければ無理ですよ。それに、智宏でも十分すぎます」

五十里は達也の護衛を増やそうとしたが、護衛対象から真由美以上の探知能力者ではないときっぱり言われた。

「五十里先輩。智宏さんの実力に不満でもあるんですか？」

雫は不満そうな視線を浴びせる。

「あつ、いや、別に疑ってるわけじゃないよ？」

もちろんわざと言ったわけでも智宏の実力を低く見ていたわけでもないの、五十里は慌てて謝った。

智宏も五十里が自分に低評価を付けていたわけではないのを知っていたので、ここは笑って済ませた。

翌日。

あれからは何事もなかった。

ほんの1部の生徒しかスパイの存在を知らないの、昼時の今でも学生食堂は賑やかだ。

ざわざわと喧騒が重なり合っているが、ある集団が姿を表すとその近くがシン・・・と静まり返る。

その一行はまっすぐ目的の場所まで向かった。

「よ、達也」

「お兄様、お待たせしました」

そう。学生食堂に入ってきたのは智宏と深雪、ほのか、雫だ。

特に、最近になってますますその美貌に磨きがかかつてきた深雪はすれ違いに通り過ぎる人の注目を浴びまくっている。智宏も智宏で、九校戦が終わってから一気にファンが増えたらしく、食べるのを止めてまで彼を見る女子生徒も見えた。

智宏達がいさつをする達也は笑って手を振った。

達也達が席取りをして智宏達が後から合流する、というのはお決まりのパターンだ。逆のパターンもあるが、6割くらい達也の方が先に来ている。ちなみに深雪が達也のいない所で昼食を食べるパターンは絶対に存在しない。

「あつ、四葉君も来たんですね」

「今来たところだよ」

「じゃあ美月と幹比古が来たから、俺達も行こうか」

そこへ昼食を持って戻って来た幹比古と美月がやって来た。

腰を下ろした2人と入れ替わりに席を立った達也は、深雪を手で促して配膳台に向かう。その後ろをほのか、トコトコについて行き、智宏と雫は並んで3人の後ろを歩いた。

その光景を見ていた男子生徒達はさぞかし羨ましがっていただろう。

いつものメンバーならあと2人いるはずなのだが、結局トレーを持った智宏達5人を迎えてくれたのは幹比古と美月だけだった。

「ところでエリカと西城君はまだ授業ですか？」

姿が見えない2人についてほのか、何気なく達也に訊ねる。

「あの2人は休みだ」

最近は何文コンペで昼食を皆で食べる事が少なくなってきたため、逆に誰かが欠けたり遅れたりする事が増えてきた。

しかし、予想外の達也の回答にほのかの目がキラリと光る。

「え！2人一緒にですか!？」

「ああ。2人一緒に、だ」

「意外でもない・・・よね?」

「確かに」

達也はほのかが何を誤解しているかを直ぐに察知し、人の悪い笑みを浮かべながらあえてほのかに肯定するように答えた。

また、智宏の隣に座っている雫も興味津々の目付きをしながら小首を傾げ、独り言を呟いた。智宏もだんだん面白くなってきたので雫に同調した。

「そ、そうなんですか?」

「私達に聞いてどうするの」

目を丸くして訊ねてくる美月に深雪が苦笑しながら言う。

休んでいる2人と同じクラスなのは達也と幹比古と美月だけ。他のクラスである智宏達に聞かれてもわからない。

となると美月の視線は自然と幹比古の方を向いた。

「えっ? 僕? うーん・・・そんな素振りはないかと思ったと思うけど」

「そっか? いや昨日2人で帰ってたな」

幹比古が慌てて答えを返したところに智宏は爆弾を投下。

そして、わっ、とか、キヤツとかはしゃいでいる女子達。普通の学

校の女子も魔法科高校の女子も恋愛に関してはどこも変わらない。

「でもエリカちゃんとレオ君はどうして休んだんでしょう?」

「病気ってわけじゃないよね」

「同感だ。昨日の2人の体調は悪そうじゃなかった」

一旦は鎮火した話題だが、全員のトレーから食べるものが無くなる
と再びエリカとレオの話に戻った。

幹比古と達也は揃って病欠ではないと判断した。

「偶然という可能性もありますよね?」

「ほのか、偶然じゃないっていう可能性もあるよ」

「うーん・・・そもそも偶然じゃないっていうほど仲良かったっけ?」

「何か起こってても不思議じゃないよ。ね?」

「えっ、あの、そうですね」

雫からいきなり問いかけられた美月は慌てて同意した。

「でも今2人は一緒にいるとして・・・一体どこで何をしているのかしら?。」

首を傾げながら深雪が呟くと、幹比古と美月は「レオと」「エリカちゃんか」と反応し、何を思ったのか時間差で顔を赤くした。

「2人とも何を想像したの?。」

「な、なんでもないです!。」

「ほんとにかあく幹比古?。」

「ホントだよ!。」

「まあ、何の根拠もないが案外レオがエリカにしごかれてるんじゃないか?。」

「ありそうですね、それ」

幹比古と美月のわかりやすい反応に智宏はつい追い討ちをかけ、幹比古は顔を赤くしたまま反論した。

その後、昼休みが終わるまで過程の上に想像を重ねた意見が飛び交い、結局うやむやになってその日の昼休みは終わったのだった。

第60話 レオの修行

昼休みに智宏達が話した内容は偶然にも当たっていた。

別に智宏や達也が千里眼を持っていてるわけではないが、情報の世界で対象を特定できればどれだけ物理的に距離が離れていてもそれを視る事が出来る。

ただ、今回の場合は覗き見していたのではなく全くの偶然だったのだ。

「こら！また皺ができてる」

「つてえなあ。手を出す前に口を動かせよ！」

「あんたができないからでしょー」

達也の読み通り、レオは千葉家の道場にてエリカに頭を叩かれて彼女の足元に蹲っていた。

なぜレオが道場にいるのか。

それは昨日の放課後に遡る。

昨日道場に向かう前、キャビネットの中でこんな話をしていた。

「でも反撃するためには、アンタに足りないものがある」

「それは？」

「アンタの歩兵としての戦闘能力は1級品よ。でも決め手がない」

「決め手？」

「確実に相手を殺す技よ」

「おめえにはあるのか？」

「ええ」

レオはいきなり高評価をもらったが、喜ぶより呆気にとられていた。

確かにレオには戦った相手を殺す技がない。

九校戦で使った小通連はチューニング次第で殺傷武器になるが、決め手とするには斬れ味が足りないのだ。

もちろんレオもそれを納得している。

「確かに俺は殺し技は持っていないな」

「で。それを身につける覚悟はある？自分の手を血で汚す覚悟はある？これから戦う相手はそういう連中よ」

「愚問だぜ」

エリカの覚悟を問われる質問に、レオは目を逸らすことなく、簡潔に答えた。

「だったら私が教えるわ。秘剣・薄羽蜉蝣^{うすばかげろう}。アンタにぴったりの技よ」と、言うわけで今は千葉家の道場にいる。

しかし、中々上手くいかず、教わってる立場ために強く出れない。それと何回もやって成功しない自分に不甲斐なさを感じていた。

「少し休憩しよっか」

「おう」

板張りの床に胡座をかいて座ったレオにコップを差し出したエリカは、その隣に正座した。

「マントのアレは上手くいったのにねえ」

「アレか……あの時は生地自体に展伸を補助する術式が組み込まれていたし、多少の皺があっても盾として機能していたからな」

「補助はこっちにもあるはずなんだけどね。達也君に相談してみる？」

「ダメだ。今回達也を頼るのは止めようぜ？向こうだってやる事があるんだからよ。それに、術式が組み込まれてるならそれを俺が発動すればいい」

エリカの漏らした独り言にレオは横に首を振った。

九校戦の時は達也が用意してくれた物を使ったが、今回の場合は違う。作ってくれ、とは絶対に言えない。

達也には達也の仕事がある。それを邪魔するわけにはいかないのだ。

それに自分から動くなら自分で何とかするべきだとレオは思っていた。

「オトコノコだね」

そんなレオにエリカは含み笑いをこぼす。

少し恥ずかしくなったレオは目を逸らして立ち上がり、再び特訓を始めた。

◇? ◇? ◇? ◇?

次の日は土曜日だったが、学校は休みではない。魔法科高校は週休二日制を採用していないのだ。

もちろん授業はあるのだが、この日の朝、達也と深雪は八雲の寺に訪れていた。

実は昨晚八雲から遠当ての練武場を改装したから来ないか?と誘われのだ。

達也が本当の力で練習できる場所は少ない。人の目に付く学校の練習場は論外だ。

いい機会だと思った達也は深雪を連れて寺へ向かった。智宏も達也の護衛としてついて行く。

3人は寺につくとさっそく訓練を開始し、智宏は【ラム】で、達也は【雲散霧消】でボール状のターゲットを迎撃した。深雪も頑張っていたが、限界が来て途中でリタイアしてしまった。

「おつかれ」

「深雪、大丈夫だったかい?」

「は、はい。大丈夫です」

達也は怪我をしていないか深雪の全身を見回して笑いかけた。

この時深雪の顔が赤く上気していたが、その原因が激しい運動だけではないと智宏は悟った。

それに薄手のシャツに膝上のスパッツ姿の深雪を身内であっても長く見つめるのは良くないと思った智宏はスッと目を背けた。

訓練が終わった3人は、八雲の私的な居住空間にある縁側に座っていた。

「さて、学校があるから手短かに」

お茶を持ってきた八雲は座るなりそう切り出す。

「君、珍しい物を持ってるね」

「預かり物です」

八雲の言う珍しい物とは、この前小百合が無理やり置いて行った勾玉の事だろう。

達也はあっさり八雲の指摘を認めた。

八雲相手にしらを切るのは無意味だし、彼に隠していても意味はない。

「だったら家ではなく、然るべき場所に移した方がいいよ」

「やっぱり狙われていたんですね」

「ただし慎重にね。かなりの手練だ」

警告を受けること自体は予想の範囲内だったが、その声色はやけに真剣味を帯びていた。

智宏達は意外感と緊張感が呼び起こされ、ただ事ではないと体を八雲の方へ向けた。

千秋による工作や不審な視線があることはわかっていたが、八雲が気にかけるほどの事だとは思っていなかった。

また、警告には八雲が相手の正体を掴んでいるとほのめかすような物だった。

「何者なん……教えてくれませんよね」

「まあね。でも忠告しておこう。方位には気をつけるように」

「方位？」

「方位ですか？」

「ふふ、これ以上は高いよ」

智宏と深雪の最後の質問に八雲は答えない。後は自分達で見つけろということなんだろう。

なので八雲の邪な笑みを見た智宏達は、それ以上の詮索をやめることにした。

第61話 警備隊模擬戦

論文コンペまであと1週間と1日。

プレゼンテーションのバックアップは全校一体となって取り組んでいた。

発表に使う機械は完成しているが、より効率的で確実な成果を出すため、改良や調整が行われている。

装置の製作や舞台の演出プラン、移動手段、弁当の配布などに関わっている生徒達はその才を存分に発揮させている。

もちろん体育会も例外ではない。

彼らは意外な大物が率先して訓練に励んでいた。

学校に隣接する丘にはそこを改造して作られた野外演習場がある。

ここはモノリス・コードなどの訓練場所にも使われており、他にも防衛大や警察へ行く生徒のための練習場にもなっているのだ。

野外演習場にいるのは論文コンペで会場の警備を行う1高の警備隊員。もちろん全員生徒だ。

今回の論文コンペでは9つの魔法科高校が共同で組織する会場警備隊が組織され、その総隊長に十文字克人が選ばれた。

十文字家次期当主である克人本人が先頭に立ち、模擬戦をしながら指導することで警備隊の士気を高めるのが狙いだ。

が、しかし――

「十文字君……味方の士気を高めるつもりなんだろうけど、返って皆の自信を無くしちゃわないかしら？」

「今のうちに後輩を絞っておきたいんだろ。なんたって今回十文字は警備隊総隊長だからな」

『ぐあっ！』

「……もう7人やられたか」

「あと残っているのは……？」

「えっと……お！あいつは」

魔法を使用した模擬戦は事故防止と救護活動を目的としたモニター要員が必ずいる。

今回は真由美と摩利がモニターの前に座って克人の前にバタバタと倒れていく生徒を見ていた。

そして7人目がやられた時、摩利の目には1人の生徒が映っていた。

(早まったかも)

木陰に身を潜め、克人から見つかからないようにしているのは幹比古だった。

幹比古は自分に模擬戦の誘いが来た時には物凄く喜んで話に乗った。しかし、開始30分で10人いた仲間が3人まで減らされてしまっている。幹比古は力の差を思い知った。

十師族の十文字家次期当主の練習相手などめつたにないはずなのだ、その強さを実感してからはまだ攻撃を受けていないにもかかわらず背中に汗がびっしりだった。

到底適う相手ではないのはわかってる。精々いい勉強をさせてもらえれば十分だ。

幹比古はさつきからそう自分に言い聞かせている。そして自分の息が段々荒くなっている事に気が付き、慌てて息を潜めた。

ところが克人は進行方向を変えて真っ直ぐこちらに向かってきている。やはり漏れた息で存在がバレてしまったようだ。

こちらを狙う猛獣のような気配。

隠れている場所がバレていないとしても自分のいる方向はわかっているのだろう。

だが標的がこちらに向いたのなら仕方ない。幹比古は聴覚と触覚に精神を集中させた。

片膝をつけてズボンの生地を通して地面を伝わる微かな振動や気流の乱れ等を五感全て使い、情報を集めデータを構築していく。

克人は1歩、また1歩と着実な足取りで幹比古の方へ近づく。

(3...2...1...今だ！)

カウントをとって幹比古は右手を地面に叩きつけた。

地中の導火線を通してサイオンはあらかじめ用意してあった呪陣へ送り込まれ、魔法が発動する。克人を取り囲むように4つの土柱が吹き上がり、地面がすり鉢状に勢いよく陥没した。

これは古式魔法【土遁陷穽^{どとんかんせい}】。相手に土砂を浴びせるだけでなく目くらましや足止めをして逃げる時間を稼ぐ魔法だ。

弱い相手ならそのまま動きを封じて捕まえる事ができるが、今回は克人を相手にしているので魔法の効果が発揮されたかどうかはわからない。

幹比古は結果を確認することなく全力で逃げ出した。魔法の効果はあったのか。

それはモニターを見ていた人にしかわからない。ただし、この時の幹比古の逃げるといふ判断は間違っていないと言えよう。

土砂が晴れた後には土埃1つ被っていない克人の姿があったのだ。彼の防壁は攻撃を完全にシャットアウトしていた。

(ほう)
克人はニヤリと笑って足元に展開していた防壁から、再び地面に足を踏み出した。

一方、真由美達も今の攻撃をモニターで見っていた。

「おー」
「達也君とは違った種類の上手さがあるわね。今年の1年生は面白いわ」

1年生で二科生でありながらここまで生き残っているだけで幹比古は優秀だという事を示している。

今の映像を見て摩利は感嘆を漏らしていた。

真由美の話では、先生方曰く幹比古は九校戦を終えてから急激に伸びたと言っていたらしい。

「こんにちは」

「あら智宏君」

幹比古が苦戦している時、智宏は真由美と摩利のいるテントにやって来た。

「四葉じゃないか。どうしたんだ？」

「自分も警備隊ですよ。先輩方の模擬戦はいい勉強になります」

そう。実は智宏はこの間、摩利から警備隊に入らないかと連絡を受けたのだ。

もちろん答えはOK。

断る理由もないし実戦経験を積むにはちょうどいい機会だ。それに有事の際には実力を発揮できる可能性がある。

だが、誘いに乗ったはいいものの、達也の護衛でこういった訓練はできなくなっている。

今だってたまたま空いてる時間を見つけてこっちに来ているのだ。

「なあ四葉。お前は模擬戦に参加しないのか？」

「したいのはやまやまなんですけど、達也の護衛がありますから」

「でも智宏君はそこまで訓練する必要はないんじゃないかしら？」

「それもそうか」

「買いかぶりすぎですよ。それにあと10分くらいしかここにいません」

「だったら模擬戦を観てかない？私の隣、空いてるわよ」

「…….では失礼して」

真由美の誘いに智宏は少しだけためらってから座った。

ためらった理由は、真由美が用意したパイプ椅子を自分の椅子にぴったり寄せて置いたから。あきらかに狙っている光景だが、智宏はやれやれといった感じで座った。

奥で摩利がニヤついていているのを尻目に、なおかつ真由美にぴったり寄られているのを無視して智宏はモニターを見つめる。

「開始30分で7人やられたの」

「さすがですね.あ、幹比古がやばい」

モニターの中では幹比古が繰り出す攻撃をやすやすと止める克人の姿があった。

体力的にも克人の方が有利。少しずつだが2人の距離は狭まって来ている。

数分後、ついに幹比古はやられてしまった。善戦した方だろう。

残りの2人もその後すぐに倒されてしまう。

「終わりましたね」

「十文字のやつまだ余裕そうだなあ。四葉、やっぱり飛び入り参加しないか？」

「ダメよ摩利。智宏君はまだ仕事があるんだから」

「そういうことです。ではそろそろ失礼します」

「ああ。またな」

「じゃあね〜」

こうして智宏は達也の所へ戻っていく。

今日の模擬戦はあと何回かあるので、真由美と摩利もいそいそと再スタートの準備に入った。

この日結局克人に一撃入れる者は現れなかったが、誰がどのくらいの実力なのかはつきりわかる模擬戦であった。

特に幹比古の成長ぶりはモニターで見てもわかるほど。

そして模擬戦に参加した警備隊一同は、より一層の訓練に励もうという意識が出てきたのだった。

第62話 ラツキーかアンラツキーか

夕方でも1高は忙しそうに走り回る生徒で活気にあふれていた。魔法科高校に学園祭はない。だが、この活気は学園祭の前日に近いものを感じる。

資材を運び込んだり、文化系クラブの女子生徒が主戦力となって差し入れをしていたり、今学校にいる全員がフル稼働していた。

普段では下校している時間を帰る生徒はほとんどいない。その中には美術部に所属する美月の姿もあった。

10月中旬の秋の空。

秋、といってもそろそろ日が沈む時間は早くなってきている。さっきまで空は赤かったのに今では紺青色になってきており、椅子に座っていた幹比古は「早いなあ」と思った。

先程まで模擬戦をやっており、5回も模擬戦は繰り広げられた。

もちろん幹比古は5回全て克人に叩きのめされ、地面に寝っ転がった。

今は全体の休憩時間のため、動いているのは文化系クラブの女子生徒だけ。

そろそろ帰る準備でもしようかと幹比古が立ち上がった時、ちょうど「休憩終わり！」と号令がかかった。

「休憩が終わったか。僕は帰ろうかな」

「おい吉田君！君もご馳走になっていきたまえ！」

帰ろうとした幹比古はタイミング悪く沢木に捕まってしまった。

どうやら弁当の差し入れを分けてもらえららしい。確かに幹比古は腹が減っている。しかし今ここにいるのは初対面が多く、ほとんどが2年生だ。

この中で食事をしたら味がわからないどころか胃にも悪そうだ。

なんとか断わってやろうと思っていた幹比古は、自分を見つめる女子生徒を見つける。

すぐに美月だとわかるが、妙な視線を感じ、結局断ろうにも断れなかった。

柔道場の中に入り、幹比古が座るとその隣に美月がちよこんと腰を下ろした。

すると彼女から弁当の包みが手渡された。

「ありがとう柴田さん」

「い、いえ……」

幹比古が律儀に礼を言うと、美月は大袈裟に照れた表情を浮かべる。

その様子を楽しそうに見ながら口の両端を釣り上げた上級生（主に女子）が何人もいた。

普通の学校なら口を出すところだが、ここは名門の魔法科高校。皆節度をわきまえている……という名目だが、本当は面白い見せ物が終わってしまうのを嫌ったからだ。

下級生2人が互いに話しかける度胸もなく座っている風景。結果として初々しい初恋カップルを見せている。

さらに2人を温かい目で見ているのは女子生徒だけではない。武闘派の男子生徒もさすがに気づき始めた。

幹比古と美月の指がふと触れて慌てて手を遠ざけるといってお約束のシチュエーションが演じられた瞬間、男子生徒からは殺意と無言の喝采が武道場全体から飛び交っていた。

自分達が肴になっていながらも気づいていない幹比古と美月だが、段々と「あれ？なんか変だな」と思い始めた。

そして居心地が悪くなったのか、美月はいきなり立ち上がろうとした。逃げる気だろう。

ちなみに、今の日本で畳の文化はほぼ無くなっていると云ってもいい。

つまり、今の若者は畳には慣れていないわけであるからして――

「ぎゃっ！」

「あ、危ない！」

慣れない座り方をしていた事を忘れていたのか、美月は自分の足が

痺れていた事にも気が付かないでいた。

そして立ち上がった直後見事に足をもつれさせ、悲鳴を上げて倒れる美月。幹比古はとっさに手を伸ばしたが間に合わない。なので膝を立てた状態でなんとか美月を受け止める事に成功した。

成功したが、幹比古は今自分が触っている柔らかでボリユームのある感触がなんであるかを数秒後に悟ってしまう。

当然触られている方も気がついた。

「っ!？」

「(ぎんぎん)めんー!」

美月は声にならない悲鳴を上げ、女の子座りに体勢を変えた。

さつきから恥ずかしさで赤くなっていた顔はさらに真っ赤になり、じんわりと涙を浮かべると靴を履くことなく外へ飛び出した。

「何ボケっとしてるの! 追いかけなさい!」

「は、はいいいいい!」

走り去る美月の後ろ姿を呆然と見ていた幹比古は、名前も知らない上級生からの叱責で慌てて立ち上がり、美月の靴を持ってうつすらと星が見える空の下へ飛び出した。

◇? ◇? ◇?

◇? ◇? ◇?

◇? ◇? ◇?

◇? ◇? ◇?

万が一に備えた訓練を行っているのは幹比古達だけではない。

百家である「千葉家」の道場でも、レオは連日ここに来て6時間ぶつ続けで木刀を振っていた。

太い鉄芯入りの木刀は上級者でも3時間振っていれば音を上げる代物だ。エリカはここまで続けたレオのスタミナと精神力に舌を巻いていた。

「はい、止め」

「ふう」

「にしてもタフね〜」

「山岳部でピッケルとかツルハシ振ってるしな。こういうのには慣れてんだ」

「ふうん。あたしが使ってるのは軽いやつだからあんたのそれは振れないわ」

「軽すぎて使いにくくねーか?」

「そこは技よ」

レオはエリカから投げられた木刀をキャッチすると、予想以上の軽さに驚いた。

しかしエリカは謙遜も外連味もなくそう言っただ道着の中の汗を拭いた。

その時道着の前襟を少し持ち上げて扇ぐような仕草をし、下着や肌が見えてしまった訳では無いが、レオはつい目を背けてしまう。

「……………どこ見てんのよ」

「べ、別に何にも?」

「あつそ。じゃあ次の段階に行くわよ」

不自然な同様にエリカは少しだけ呆れてしまう。一瞬気まずい空気が流れたが、エリカとレオはどこかの2人の様にいつまでもモジモジする質ではない。

エリカがレオを連れていったのは格子に囲まれた巻藁がある部屋だ。

ここでは刃を振った時の刀身の軌跡が真つ平らになるように訓練する。薄羽蜉蝣に絶対必要な技術である。

「真剣だから気を付けなさい。やる事は覚えてるわね?」

「おうよ」

「じゃああたしは奥で少し休んでるから、終わったら呼びに来て」

そう言っただエリカは部屋から出ていった。

準備が出来たレオは、気合いと共に白刃を振り下ろした。

最初は刃を食い込ませていたが、あつという間に慣れてしまい、エリカから与えられた課題は10分で終わってしまった。

刀を鞘にしまって片付け、部屋を出てエリカを探しに廊下を歩いていると、着物を着た女性に会った。

「あら、あなたがエリカのクラスメイト?」

「西条レオンハルトと言います。エリカ…さんに課題が終わったら呼

びに来るように言われたのですが」

「なら休憩室ね。じゃあこの端末貸してあげるから、この通りに進めば着くわ。ドアもこれで開くから」

「あ、ありがとうございます」

レオはエリカの姉らしき女性から携帯端末を預かった。家の扉を開ける権限を持つ携帯端末を他人に渡しても良いものなのか？とレオは思ったが、エリカを探しているのは事実なので、これでなんとなるのは確かだろう。

別れ際に言われた「ごゆつくり」というよくわからない言葉を頭の隅っこに追いやってレオはずんずん目的地まで歩いて行った。

休憩室の前に到着すると、レオはまず扉をノックと同時に声をかけた。

クラスメイトとはいえ他人の家の扉を開けるのには遠慮がある。

「おーい。いるのか？」

返事はない。

もう1回やっても応答はなかった。

「入るぞ」

本当にここなんだろうかと疑問を抱きながら、貸してもらった携帯端末を扉の脇にあるリーダーに押し付けた。

すると電子的な音がしてロックが外れた。

それと同時に中で急に物音がし、何か慌ててるような感じだった。

レオは取っ手のない引き戸をエリカの制止する声（聞こえてない）があつたにも関わらず、ガラツと扉を開けた。

「え？」

「あ・・・あ・・・」

開けた瞬間レオの視界にとんでもない光景が入ってきた。

なんと中にいたエリカはバスタオル1枚というあられもない格好だったのである。

互いに固まってしまったが、最初に硬直が溶けたのはエリカのほうだった。

「す、すけば変態覗き魔！さつきとしめるバカー！」

エリカから早口で罵倒を浴びせられたレオは急いで扉を閉めた。
数分後――

「まったくあの陰険女・・・」

「・・・」

ドストドス音を立てながらエリカは廊下を歩き、その後ろをレオが歩いていた。

レオの頬には赤い紅葉が刻まれている。これはエリカが部屋から出てきた時、彼女に引っぱたかれた跡だ。

わざとではなかったが、レオはあえてそれを受けた。今回の件は全面的に自分が悪いと思っっているからだ。

「レオ。さつきの事は忘れなさい」

突然エリカから無茶な要求が出た。

忘れようとして忘れられるならぜひそうしたいのだが、先程の光景が中々頭から離れない。

「って言っても無理でしょ？だったらそれを忘れられるくらい色々叩き込んであげる」

「まさか泊まりでか？」

「あつたりまえでしょ」

幸か不幸か、レオはエリカからの追求を逃れた代わりに泊まり込みでの修行が決定してしまった。

着替えを持ってきていない、とレオが言うと、エリカは経費で落とすと言っていた。

もうレオに選択肢は1つしか残されていないのだった。

第63話

FLT社への襲撃

今日は日曜日だが、論文コンペに参加する人に休みはない。なので智宏も学校へ行く準備をしていた。

しかし、昨日達也からFLTの開発第三課へ行くから先に学校へ行ってくれと言われたので、達也が来るまでは暇になる。

準備が終わり、リビングへ行くと彩音が朝食を用意してくれていた。

「智宏様、おはようございます」

「おはよ」

「朝食出来てますよ」

「おー、サンキュ」

いつもより少し遅めの朝食だが、それでも余裕があるだろう。

あつという間に食べ終わり、彩音がいれてくれたお茶を飲んでると、智宏は携帯端末にメールが来たのに気がついた。

「ん、深雪から？何かあったのかな」

差出人は深雪。

バイクに乗っているはずなのでメールは打てないはず。どこかで止まったのだろうか。

内容はただ1文。

自分達が今いる喫茶店に来て欲しいとのことだ。

場所は添付されているファイルの中に入っていた地図に書いてあった。

「何かありましたか？」

「なんか来て欲しいんだと」

「行かれるのですか？」

「ああ、気になるから行くよ。でも少し遠いな……バイクで行くか。彩音、着替えてくるからヘルメットとブーツ、グローブを玄関に出しておいてくれ」

「かしこまりました」

智宏は急いで自室に戻り、クローゼットの中から全然使わなかったライダーズジャケットを取り出した。

制服を脱いでベッドの上に放り投げ、私服とジャケットを着込む。2つのCAD持って玄関に向かうと、グローブとブーツが既に置かれていた。

それとヘルメットは彩音が持っていた。

「ありがとう。じゃあ行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

彩音からヘルメットを受け取った智宏は扉を開けてガレージに向かう。

この家には車はないが、大型の乗用車が入るくらいのがレージがある。車は持っていないが、今は大型電動二輪の駐輪場となっていた。

大型電動二輪に近づきエンジンをかける。

CADが2つともあるのを確認した智宏はゆっくりガレージから出て安全を確認し、行き先をナビにセットしてからその喫茶店へと走り出した。

しばらく走っていると、それらしき店が見えてきた。

深雪から送られてきた地図とこの場所を確認し、あっていたので大型電動二輪を停めて店内に入る。

「いらっしやいませ」

「連れがいるんですが」

「お連れ様ですか？お席は……」

「知っているので大丈夫です。あ、紅茶をください」

「かしこまりました」

店員に紅茶を頼んだ智宏は、ライダーズスーツを着た男女の席へ向かう。その途中店員からあの席に行くのか？と言いたげな目を向けられたが、あえて無視した。

まあ確かに達也と深雪は日曜日にバイクで遠くに出かけようとしているカップルにしか見えない。

智宏が近づくと、まっさきに達也が気が付いた。

「来たか」

「おはようございます」

「おう、おはよう」

「突然お呼び立てして申し訳ありません」

「いやいや大丈夫さ。理由は外の奴だろ？」

「なんだわかっていたのか」

「まあな」

そう。達也と深雪が智宏を呼んだのは自分達を付けている複数の影があつたからだ。

頼んでいた紅茶が来ると、3人は小声で話し始めた。

「いやだったら深雪にやらせればよかったじゃん」

「まあそうなのだが・・・」

「智宏さん、実は先程まで化成体のカラスもいたのですが」

「まさか消されたのを見られたのか？」

「わからない。だが監視の数が多くなってきている」

深雪の言う通り、ついさつき化成体のカラスを撃ち落としたばかりなのだ。

化成体とは、霊的エネルギーを実体化させたもの。サイオン粒子の塊を土台とし、光の反射をコントロールする幻影でその姿を作る。動きも加重魔法、加速魔法、移動魔法で肉体を持っているように見せている。今の日本で化成体の使い魔を使用する術式は過去のものである。なので術者は国外の人間と予想がつく。

ところが、それを撃ち落としたはいいものの、化成体の数は多くなってきている。もちろん全て撃ち落とせば問題ないが、深雪にやらせるには座標を教えなければならぬ。その方法は手を握る、だ。

しかしさつきそれをやったら周りの人が2人を誤解するような視線で見えるのだ。まあ深雪が顔にとろける様な表情を浮かべていては勘違いもするだろう。

それに深雪も恥ずかしさで悶え死にそうになっていたため、これ以上は無理だと達也は判断した。

「でっ・俺にやれと」

「すまない」

「いや、今は達也の護衛だからなんの問題もないよ。それに少しの間でも達也から俺に注意をそらせればいいしな」

「ありがとうございます」

「術者は消す?」

「放っておいていいだろう。まだな」

「わかった」

智宏はテーブルの下でCADをバレないように操作し、重力核で全ての化成体を攻撃した。

魔法が命中すると生き物の身体を構成していた術式が砕け散り、サイオン粒子は散り散りになっていった。

その後智宏は一旦家へ、達也と深雪はFLTへ向かって行った。

FLTについた達也を出迎えてくれたのはハッキング攻撃に対応している職員の姿だった。

どうやら達也と深雪がここへ来る直前に攻撃が始まったらしく、達也はタイミングの良さに違和感を感じていた。

10分間におよぶ謎のハッキング攻撃はFLT側もその意図がわからずに終わった。

一応カウンタープログラムを起動したが、効果は期待できないだろう。

「FLTのカウンター攻撃!」

「回線を遮断しろ」

チェン陣の命令でハッキングに使用した回線は物理的に遮断される。

その様子を見ながら陣は隣にいる呂剛虎リュウカンフウに話しかけた。

「どう出ると思うか?」

「不明です」

「そうだろうな。だが司波達也があそこの関係者だとしても聖遺物をセキュリティの不確かな研究室に預けるとは思わん」

「論理的に考えるならば・・・ですね」

「言いたいことはわかる。そうそう、チヨウ周が小娘の様子を見に行くらしい。その前に小娘を消せ」

陣の声は好意的な物ではなかった。むしろ小馬鹿にしているよう

な感じだ。

それでも感情を抑制しているらしいが、呂も陣が周にどんな感情を抱いているのかすぐにわかる。

それに今の命令は周の面子は丸つぶれ。

さらに貴重な協力者を失いかねない。その事は陣も理解しているはずだ。

「是^シ」

しかし、呂はそんな事は気にせずただ受命の答えを返した。

第64話 睡眠ガス

達也と深雪は着替えるため、家を經由して学校へ向かった。到着と同時に雨が降り出し、2人を濡らした。

しかし、そこは深雪の生徒会権限でもあるCADの常時携行を使用して服を乾かした。

これから達也は作業に入る。

ところが――

「雨では野外作業ができませんね」

「ああ。でもしようがない。行ってくる」

「頑張ってください、お兄様」

ここまでの作業は順調に進んでいるが、雨のため屋内作業を強いられる。それでも間に合わないという事はないだろう。

もっとも、達也自身に限って言えば今日はロボ研のガレージでのバックアップ作業なので天気は関係ないのだ。

一方達也と別れた深雪は生徒会室へ向かう。

仕事はまだ残っているためだ。おそらくあずさも先に来て始めているだろう。

その途中、深雪は廊下に智宏が窓の外を見ているのに気が付いた。

「智宏さん」

「やあ深雪」

「いつこちらへ？」

「15分くらい前かな」

「そうでしたか。あ、先程はありがとうございます」

「いやいや、あの後俺を付けるやつはいなかったから問題はないよ。それよりそつちは大丈夫だったか？」

「いえ、その――」

深雪は智宏にFLTで起きた出来事を話した。

なんの理由でハッキングしてきたかわからない事も全て。

「――という訳なんです」

「なるほどな。今達也はどこだ？」

「ロボ研のガレージです。お一人にしたいくはないのですが」

「わかった。じゃあ深雪は自分の仕事を終わらせるんだ。達也は俺が見てるから」

「よろしくお願いします」

ロボ研は知つての通り【ロボット研究部】の略で、ガレージには部員達が大小様々なロボットやパワードスーツを制作したりする場所だ。

そこには大型計算機も備わっており、論文コンペの準備期間では起動式のデバックや術式シミュレーションに提供されている。

深雪を見送った智宏はガレージには行かず、室内からガレージがよく見える場所に移動した。達也を囮に使うようになってしまったが、智宏がいたら作業の邪魔になるかもしれないし、こうして全体を見張っておけばどこから襲撃者が来るかわかるのだ。

ガレージの中をみると達也が何事もなくいるのが見える。今のところ問題ないようだ。

そして達也も椅子に座りながら順調に作業を進めていた。

「コーヒー・を・どうぞ」

キーボードを叩いていると、後ろから電子的な声がする。達也が後ろを振り向くと一体のメイドロボットがいた。

彼女の名前は人型家事手伝いロボット【3HタイプP94】。ロボ研では型番通り「ピクシー」と呼んでいる。どうやらロボ研の部員にこのロボットの大手メーカーの関係者がいるらしく、モニター用に貸し出されているのだ。

完成度は高く、黙って座っていれば無表情な女子生徒でも通りそうな見た目だ。もちろんメイド服ではなく制服だが。

P94、ピクシーは達也にコーヒーを渡すと元の椅子のある場所に戻って腰を下ろした。

コーヒーを飲みながら作業を続けていると時間が進むのが早く感じる。その証拠にもう作業開始から1時間が経過していた。

すると達也は身体に不調を感じ、外の空気を吸おうとして立ち上が

ろうとした瞬間、ぐらつと不自然に達也の身体は揺れた。

今睡魔が襲ってきているが、自分の意思で制御できない。これは明らかに異常だ。

(身体機能異常低下)

(強制的な睡眠。戦闘能力を阻害すると判断)

(自己修復術式、スタート)

(魔法式、ロード。コア・エイドス・データ、バックアップよりリード)

(修復開始・・・完了)

再生により達也の身体は眠気に襲われる前の状態に戻る。

だが問題はまだ解決していない。

(コーヒーは違う・・・ガスか！)

事前にコーヒーに薬物が入っていないのは確認済み。達也は空調システムに細工をされたのだろうと気が付いた。

自分の分解は使えない。

今の彼にできる事は外に逃げる事だけ。

達也は出入口に向かおうとしたが、ピクシーが目の前に立った。

「空調システムに・異常が・発生しました。マスクをどうぞ」

「・・・ピクシー、強制換気装置を作動。俺はここに残る。監視

モードで待機し、救助のための入室に備え排除行動は禁止だ」

「かしこまりました。強制換気装置を・作動します」

災害時対応の換気システムが作動し、室内の空気を外へ排出し始める。

それと同時に空調システムの復旧も行われているはずなので、達也はある事を思いつき、端末の前に座り直して目を閉じ身体力を抜いた。

この後ここへ来るのはガスを仕掛けた犯人か、この様子を感じした智宏か、空調システムの異常を知った風紀委員のはずだ。

待ち人はすぐにやって来た。

神経を研ぎ澄ませてじっと待っていた達也は足音を忍ばせて近づいてくるのに即気が付いた。

あらかじめピクシーに入室チェックを行わないようにさせたのは、

忍び込みやすいようにしたからだ。

「司波？」

聞き覚えのある声。

達也が寝ているか確かめるために話しかけたらしいが、もうタイミング的にも言い訳はできないだろう。

「寝ているのか？」

こう聞かれても達也は狸寝入りを続けた。

もう一度確認をとった侵入者は何かを探す素振りをし、デモ機へと視線を向けた。

そして達也やピクシーが見ているのにもかかわらず、侵入者はサブモニター用のコネクタからハッキングツールを使って起動式を吸いあげようとしている。

そこで侵入者に入口から声がかけられた。

「関本さん。何をしてるんですか？」

「千代田に四葉！なぜここに！」

「そりゃ見張ってたらガレージの中で異変があったからですよ」

「私は空調装置の異常警報を受け取ったからですよ。四葉君とはこの入口で会ったんです」

「バカな！警報は切ったはず！」

余程同様しているのか極端に予想外の出来事に弱いのかわからな
いが、関本は不用意すぎる一言を漏らしてしまう。

警報を送ったのは達也ではなくピクシー。強制換気装置を作動さ
せたと同時に行ったのだろう。

花音は関本の失言を聞いて鋭く睨みつけた。

「警報を切った？どういうことですか？黙っているのは犯人だと自白
しているのと同じですよ」

黙っている関本に花音は稼働状態にあるCADを見せつけるよう
に掲げた。

起動式を即座に展開できるだけのサイオンがチャージされている

のがわかる。

「千代田、冗談がキツイぞ。僕がなんの犯人なんだと言うんだ？」

「ここに睡眠ガスを流し込んだ犯人です」

「失礼だぞ！僕はバックアップをとっていただけだ！」

「千代田先輩は失礼ではありません。それに、ハッキングツールでバックアップとるんですか？ありえないですよ……なあ達也」

智宏の言葉にハツとなった関本は振り返るを

愕然と振り返った関本の視線の先には達也が苦笑しながら立っていた。

さすがに花音も達也の狸寝入りを見破っていたらしく、驚いた様子はなかった。

「ガスが効いていないのか!？」

「彼はそんなものでやられるほど可愛くありませんよ」

「可愛げがないのは認めますよ。まあ智宏の言う通りバックアップは必要ありません」

「くっ」

「関本勲！CADを外して床に置きなさい！」

さすがにもう逃げられないだろう。

後ろに達也、前に智宏と花音。どう足掻いても未来は1つだ。

しかしハッキングなんぞする輩に普通の考えは通じない。花音の警告は意外な答えを出させてしまった。

「ち、千代——ガバッ！」

「……攻撃対象者の名前を言うなんてアホですか？」

花音の名前を叫んでCADを操作しようとした関本。

しかし魔法は発動しなかった。なぜなら叫んだ瞬間智宏の拳が関本の腹に刺さっていたからだ。

2年生後半からとはいえ、関本は風紀委員に選ばれる実力があつた。

魔法の発動手順や魔法式の構築までのスピードだって九校戦代表選手と比べても遜色がない。ただ、現代魔法は一瞬の勝負。標的の名前を言う必要など全くないのだ。

「四葉君、できれば魔法で無力化したかったんだけど」

「こっちの方が早いですよ」

「はぁ……まあいいわ」

気絶した関本は風紀委員の取調室へと連れていかれる。もちろん智宏も花音もついて行った。

3人がいなくなった後、達也はピクシーから今までの映像を複製・コピーし、ピクシーの中にある記録は消去した。

第65話 人食い虎VS幻影刀

ここは国立魔法大学付属立川病院。

現在の時刻は午後4時過ぎなので、立派な花束を持ったスーツ姿の青年が廊下を歩いていてもおかしくはない時間帯だ。

しかし、こんな目立つ格好で歩いていてるのにすれ違う看護師や見舞い客達は少しも気にかけて素振りを見せていない。

青年は迷いのない足取りで音もなく歩き、4階の廊下に出ると見覚えのある男が立っていたので急いで曲がり角の壁に隠れた。

視線の先にあるのは呂剛虎リュウカンフウの巨大な背中。周はここへ来るのは陣に話しているが、あの男がここに入院する少女・平河千秋の見舞いに呂を寄越すなどありえない。

事態を察した周はなんの躊躇いもなく非常ベルを押した。

ここで時間は周が階段を登っている頃に遡る。

病院の1階ロビーにおそろいの赤いコート（ペアルック）を着たカップルが訪れていた。天才剣士で千葉家の次男、千葉修次と魔法大学付属第一高校の前風紀委員長であった摩利だ。

「シユウ、すまない。こんな事に付き合わせて」

いつもは1高だけでなく他校の下級生からも絶大な人気を集めている摩利だが、今日に至っては恋人の前という事もあって女性的な柔らかい空気を纏っている。

ファンが見たら卒倒するかもしれない。

「水臭いなあ。気にしなくてもいいのに」

「明日は早朝に出航するんだろう？」

「そうだね。でも僕達がやるのはグアムでの合同上陸演習だし、10日程度の短期研修だから気を使わなくても大丈夫さ」

そう言って修次は摩利に笑いかける。

だが摩利はあまり納得したような表情を浮かべてはいない。

「摩利？」

「……これまでではエリカに稽古をつけてたじゃないか。今回は

いいのか？」

「ああ、エリカだったらクラスメイトと稽古してるよ。中々見所のありそうな奴だった」

「クラスメイト？男か？」

「違う。ただのクラスメイトだ。間違いない」

摩利はエリカの事を気にしていた。

帰ってくる兄から稽古をつけてもらうのをエリカは楽しみにしていたはず。そう思っていたが、どうやら彼女は別の稽古相手を見つけたらしい。

修次がいう見所のある奴というのがレオだと摩利はなんとなく察したが、その後の何気なく口にした質問は予想外に強い口調で返された。

その理由が大事な妹を思っただけなのか、男（レオ）を警戒しての発言なのか、これまたその両方なのか。もちろん摩利はわかっていた。

目の前の彼女からじーっと見つめられた修次はわざとらしく咳ばらいをした。

「と、とにかくエリカの事は気にしなくていい。それよりも僕は摩利と一緒にいたかったんだ」

「ああ……そんな恥ずかしいことは口にしないでくれ」

まさかの攻守逆転。

風紀委員長の引退まで達也を動揺させてやろうと頑張ってきた摩利は修次の露骨な口説き文句にあっけなく撃沈された。

顔を真っ赤にして黙り込んでしまった摩利を修次が微笑んで見つめていると、突然病院内に非常ベルが鳴り響いた。

これには撃沈していた摩利もパツと表情を真剣なものにした。

「シューウ。火事か？」

「いや、これは暴対警報だ」

暴力行為対策警報、略して暴対警報。

これは暴力や犯罪に第三者が巻き込まれないようにするための警報と、治安回復のための協力者を集める合図でもある。

「場所は……4階だっけ!？」

「もしかして摩利の後輩がいるのも？」

「うん！」

「なら行こう！」

修次は摩利の後輩がいる階からの警報で、他人事ではすまされない事態だと理解する。

そして2人は魔法を使ってロビーから4階の廊下まで跳ねるように向かって行った。

突然鳴り響いた警報だったが、その対象者である呂は全く動じずに病室のノブに手をかけた。

しかし、ノブを引張ってもドアは開かない。呂は知らなかったのだが、この病院のドアは暴対警報が鳴ると患者の安全確保のためロックされる事になっているのだ。

些細な文化の違いだったが、呂はすぐさま腕に力を入れてノブを無理矢理引っ張った。

元々鍵を壊して入室するつもりだったので、多少のタイムラグがあつたがさほど問題はない。

ところがその多少のタイムラグは予想外の介入者を許してしまう。

呂はドアノブを派手な音を立てて引き抜いた直後、横から強い気配を感じた。

「お前は・・・人食い虎、呂剛虎！」

イリユージョン・ブレイド
「幻影 刀、千葉修次か」

千葉家の十八番である自己加速術式によって、摩利よりも先に階段を駆け上がった修次は大柄な男がドアノブを壊している場面に遭遇した。

近接魔法戦技の権威として知られる千葉家の人間として修次は呂の顔と名前をよく知っていた。

対人近接戦闘において世界で十指に入ると言われている大亜連合の白兵戦魔法師。歳が近いこともあり、たまに修次とどちらが強いか話題に上がっている。

そして呂の口からも微かな声が漏れた。

幻影刀という異名を持つ修次は呂のターゲットが自分に向いたの

を感じ取り、2人の視線が交錯した直後、強者達の戦いの火蓋が切られた。

修次は懐から20センチほどの棒を取り出し、ボタンを押すとその先端から15センチの刃が飛び出した。

一方、呂は無手の構え。修次の手に握られている刃に恐れる色を見せずに突進した。

2人の距離が縮まると先に攻撃を仕掛けたのは修次だった。

「はあっ！」

短刀が振り下ろされた瞬間、呂は頭上に左手をかざした。

まだ刃の攻撃範囲内に入っていないのだが、刃の延長線と左手が重なった瞬間「ガンツ」と重い音がする。これは加重系魔法〔圧切り〕。極小の斥力場を作りだして接触したものを切断する魔法だ。

まさに幻影刀。しかし、それを素手で受け止める呂も驚異的だ。

呂が使ったのは鋼気功^{ガシゴン}。体術の1種である気功術を元にし、皮膚の上に鋼よりも硬い鎧を纏わせることができる。

刃を受け止められた修次は魔法をキャンセルし、そのまま右手を振り下ろした。

そして素早く斜めに切り上げる。

呂も防御のため右手を叩きつけたが、また修次が魔法をキャンセルさせたので結果は互いに空振り。ところが斬撃に備えた呂の身体は右にそれる。

その瞬間を見逃さなかった修次は先程よりも早いスピードで刃を振り下ろした。

再び重い音が鳴るが、血しぶきは舞わずに仰向けで刃を受け止める呂がいた。

その体勢から呂は背中を軸にして回転蹴りを放つが、修次はそれを後ろに飛んで躲す。

大きく離れた2人。この隙に呂は立ち上がった。

今度は呂が大きく踏み込み腕を突き出す。

その腕に修次が短刀を振り下ろしたが、腕に巻き付く螺旋の力場によって弾かれた。

弾かれた衝撃で修次の体勢は崩れ、呂はその隙を逃さず体勢を立て直す時間を与えない。

拳、掌、熊手と手の形を変化させながら肘、肩、体当たりを混ぜて修次を攻めまくる。ただ、修次はこれを後退しながらギリギリのところで躲し、未だ直撃を避けていた。

後退を繰り返す内に、とうとう逃げ場を失った修次は背中に壁が当たる感触がした。

呂も風車の如く腕を回転させて打ちかかる。振り下ろされた右腕に修次は自らの右手を呂の腕に当てて起動をずらし抑え込む。呂はその右手に短刀が握られていない事に気付き初めて動揺した。修次は右手でガードする前に短刀を左手に持ち替えていたのだ。

結果、修次の右腕が切り刻まれるだけで済み、下がろうとした呂の脇腹を短刀が切り裂く。血が吹き出して床を汚し、呂は初めて膝をついた。

そして脇腹を押さえながら修次を見た呂は、背後に気配を感じて反射的に振り向いた。

振り向いた先には、修次の後を追いかけてようやく現場に辿りついた摩利が立っていた。

摩利はCADを操作し、陽炎の刃を2本作って呂を攻撃する。刃の隙間に身体をねじ込むようにして避けようとした呂だが、刃から解き放たれた空気が衝撃波となって左右から呂を挟み撃った。

苦悶の呻き声を上げた呂。

彼はとっさの判断で天井からぶら下がっていた照明に飛びついた。

「待てー！」

「ぐおおおおお!!」

修次の制止する声を聞きながら呂は下に降下する。しかも無理矢理落ちたもんだから照明から感電して電流が呂の身体を走った。

切り傷に衝撃波、さらに感電といったダメージが呂を立て続けに襲って行動不能になると思われたが、修次と摩利が廊下の下を覗き込んだ時にはロビーから出入口まで呂の物と思われる血痕が続いているだけだった。

摩利はロビーから修次に視線を戻し、怪我をしているのを見るとき急いで駆け寄った。

「シユウ！大丈夫か？」

「摩利、助かったよ」

「怪我は？」

「問題ないよ。幸いここは病院だからすぐに治療できる」

結局、修次と呂の勝負は痛み分けだった。

互いに負傷したのは右手と脇腹。長期戦なら修次に勝機はあったかもしれないが、短期決戦だったならわからない。

「あの男は何者だ？あれだけの傷を負って逃げれるなんて」

「奴は呂剛虎。大亜連合の特殊工作部隊の魔法師だ」

「他国の工作員!?!なぜ日本に……」

考え込んだ摩利の肩に修次は手を置き、自分の方を向かせた。

「摩利」

「な、なんだシユウ」

「奴は摩利の顔を覚えている。もしかすると君の所に来るかもしれない。だから1人で行動しないでくれ」

「わかった」

「大事な摩利を危険な目に合わせたくはないんだ」

「そ、そんな事言わないでくれよう……」

修次の言葉に摩利は照れながらも頷いた。

今の勝負で修次の相手、呂剛虎がどれだけの相手なのか理解したよ
うだ。

翌日の朝。無事に出航した修次だったが、短期研修の間摩利の事をずっと心配していたのと言うまでもない。

第66話 狐の巣穴探し

智宏と達也は帰宅してからすぐにテレビフォンである番号へかけた。深雪はまだ仕事が終わらないらしく、帰ってきていない。

『もしもし?』

「司波ですが」

『達也君ね……あら、智宏君まで。どうしたの?』

電話に出たのは響子だ。

実は彼女に電話するのは本日2回目らしく、本人は珍しがっていた。

智宏と達也は響子がやけに着飾っているのに気がついた。

「……忙しかったですか?」

「もしかしてデートで?」

『ざんねーん、お・し・ご・と。あーあ、どつかにいい男いないかしら』
口調からするとアルコールが入っているのだろう。しかし2人はわざわざ「飲んでます?」なんて聞かない。

響子がいるのは背景からすると車の中。自動運転があるこのご時世でも飲酒運転は禁止されている。にもかかわらず響子が車に乗っているのは他に誰かいるからだろう。

「……相談したいことがあるんですが」

『相談したいこと?』

「智宏は信用していますので大丈夫ですが……そちらは?」

『こつちも大丈夫。今は1人よ』

「では。実は本日学校で強盗に遭いまして」

『あら』

画面に映る響子の目は丸くなっており、酔いも覚めたようだ。

「俺が達也を護衛しているのですが……油断しました」

「未遂だったのが幸いですね」

『随分強力な護衛ね。でもそう……実力行使に出たと』

「その際に現場の映像を入手しました」

『で、その詳しい中身は?』

「ツールとハッキングを仕掛けられたCADのログです」

『なるほど。達也君は狐を私に仕留めろと言うのね?』

達也から送られてきたデータを確認した響子はジト目で達也と智宏を見た。

実際に達也は朝早くからいろいろ被害にあっている。実行前に犯人を割出せていなかった響子は少しだけ罪悪感を感じていた。

『まあいいわ。隊長からもケリをつけるように言われてるから』

「ではお願いします」

引き受けてくれた響子に達也は礼をを述べて電話を切った。

データを受け取った響子は車の外に追い出していた千葉寿和を助手席に招き入れた。

「すみません。プライベートなものでしたから」

「大丈夫ですよ。それで、どんなネタが?」

「狐の手がかりと、その狐に利用された鼠の映像です」
「なるほど」

「これを警部さんにお渡しします」

「我々にアジトを探せと」

「映像の中にある高校生の立ち回り先を調べてもらえれば結構です」

「ここで寿和は黙ってしまった。

捜査令状もなく捜査をすることはできない。

しかも対象者がら高校生となれば簡単に令状はとれない。

ところが寿和が指摘したのは別の問題だ。

「場所はどくなってるのです?」

そう。場所だ。

1人の人間が行動する範囲は1ヶ月でも無数にある。その中から怪しい場所を特定するとなると至難の業だ。

しかし響子は涼しい顔で答えた。

「既に32箇所にしぼってあります。これでどうですか?」

「も、もうそこまで・・・」

「別の協力者がいまして」

「なぜそれを？」

「女の子だからです。未来ある女性をブラックリストに載せたくないのです」

「男だったら？」

「自己責任です」

こう言い切った響子に寿和は啞然とした。

◇？ ◇？ ◇？ ◇？

その狐の1匹が巢穴に帰ったのは日付が変わった後だった。

負傷した呂を見た陣は愕然としたが、その経緯は聞かなかった。

任務は続行可能だったが、呂の主張を却下してアジトに呼び戻した。状況が変わったからだ。

「第1高校の協力者である関本勲が捕まった。場所は八王子特殊鑑別場らしい」

「では？」

「あの娘は後回しだ。先に奴を始末せよ」
「是」

普通の病院ならともかく、関本が收容されているのは魔法技能を持つ者を拘留する特殊な施設。素人は論外だが、並大抵の技量では手が出せない。

負傷した上任務のランクが上がったにもかかわらず、呂は平然とした表情で応えた。

明けて月曜日。

停車した電車から智宏と深雪が出てくるのを待っていた達也は、後ろの車両にクラスメイトが乗っているのを発見した。

向こうも気がついたらしく、「あ」とか「げっ」とう形に口を空けている。

「ん？どうかし……あ」

「お兄様……？まあ！」

達也の視線の方向に目を向けた智宏と深雪。2人共達也が見つけ

たクラスメイトを発見すると、同じような反応をした。

3人の視界には、ぎこちない愛想笑いを浮べたレオとエリカがいた。

下校時とはかく登校時にいつものメンバーで全員で通学路を歩くのは数少ない。

だいたい誰か1人か2人いない程度だが、今日は朝早く家を出たため、学校へ向かう生徒はまだ少数だ。

「な、なあ。なんで達也達はこんなに早いんだ？」

少々不機嫌な声でレオが達也に尋ねる。

「あと1週間だからな。色々あるんだ」

「レオとエリカも早いじゃん。どした？」

達也には日曜日の論文コンペを控えているという理由がある。

いつもならエリカとレオはまだこの時間はここにいないはずだ。

逆に智宏が質問したが、見事にスルーされてしまう。しかし、その

後の深雪の独り言でエリカの足はピタリと止まってしまった。

「じゃあ今日は西城君が早起きだったのかしら・・・」

「っ！違うわよ！まるであたしが毎朝コイツを起こしにいつてるみたいじゃん！」

「そうだけ。今日は俺の方が早かったんだ！」

「・・・」

「・・・」

エリカは必死の反撃を繰り出したが、レオの余計な一言で台無しになっ

てしまった。

自分が何を言ってしまったのかをわかっていないレオをエリカは

睨みつける。

「どうやらレオはまだ状況が理解出来ていないようだ。」

「え？何？」

「・・・」

「痛つてえー！」

そんなレオにエリカは蹴りを入れ、とつとと校舎の中に入っていった。

◇? ◇? ◇? ◇?

昨日呂剛虎による襲撃があつた病院の一室にて、千秋はベッドの上でため息をついていた。暇で暇でしかたないのだ。

せめて書籍でも持ってきてくれてもいいのに、この病室には何も無い。

今朝入ってきた看護師が今日丸一日面会禁止だと言っていたので、話す人も来ないだろう。昨日の騒ぎは知っている。自分を利用して来た連中が自分を消しに来たのだろう、と。ただ、もう千秋は何もかもどうでもよくなっていたため、再び暗殺者が来ようとも抵抗はしないと決めていた。

そんな事を考えていると、病室のドアがノックされた。

「どうぞ」

「お加減はいかがですか?」

「え、周さん?」

医者や看護師かと思つていたが、入ってきたのはなんと昨日と同じ花束を持つて現れた周だった。

彼は千秋にとつた恩人だ。

姉を見るのが辛くて家を飛び出した彼女に優しい声をかけてくれた。

自分の想いを肯定してくれた。

達也に復讐するためのお膳立てをしてくれた。

そんな人が面会できないはずなのに病室に立っていた。

「面会はできないんですよ?」

「ふふ。とつておきを使いました」

「魔法?」

「まあ少し違いますね」

周は持つてきた花束を花瓶に移し替えながら千秋の質問に応えた。

「ごめんなさい。上手くできなくて・・・」

「気にしないでください」

「.....」

「でももし。私が貴女の悔いになるのなら。重荷になるのなら……」
花束を移し終えた周はベッドの横に膝をつき、千秋の手を優しく握る。

しかしその目は千秋の顔をじっと見つめている。千秋もその目を見つめ、声に耳を傾けた。

この時点で千秋の意識は周に支配されていた。

「なるのなら?」

「私の事は忘れてください」

「忘れるの?」

「ええ。忘れなさい」

「……わかった」

自分が何を言っているのかを千秋は理解していない。それどころか自分の言葉を脳に焼き付けるように聞いている。

周に誘導され、千秋は彼の事を強制的に脳内から、心の中から忘却した。

そして、千秋から自分の事を完全に消した周は、視線を外すと再び千秋を見ることもなく病室を出ていったのだった。

第67話 鑑別所への侵入者

放課後の風紀委員会本部にて。

「ダメ」

「理由を教えてくださいませんか」

「ダメなものはダメ」

達也は花音に関本へと面会を申請していたが、答えはNO。

シンプルな答えだったが、議論になったら達也に丸め込まれてしまうのを恐れているのだう。

「ですから何故です。門前払いは納得いきません」

「……面倒な事になるからよ」

「何を根拠に……？」

詰め寄った達也に花音は眉を顰めた。

本当に嫌そうな顔をしているのが智宏にもわかる。

達也の反論も当然なもののだが、花音から返ってきたのは理不尽な逆ギレだった。

「じゃあ何も起こらないっての!?!はつきり言うけどね! 司波君はトラブルに愛されてるの! 仕事増やさないでよ!」

このセリフは抗弁許さない勢いがある。

彼女の言うことも間違っていない。達也は入学してかはいろいろとトラブルに巻き込まれてきている。

智宏はそう考えながら2人を眺めていると、意外にもこちらに飛び火してきた。

「四葉君もなんとか言ってよ!」

「俺は達也の護衛ですが、その行動にあれこれ言う資格はありませんよ」

「そうだと花音。まあわからなくはないが……」

「摩利さん!」

助け舟は引退したにも関わらず本部にいる摩利からもたらされた。

実際今の1高で最も安全なのはここだ。1人になるなどという修次の言葉を摩利は守っている。

智宏と達也は摩利が弁護してくれているのがわかったので、そこに口を挟むような真似はしない。

「明日関本のところに行くんだ。その時でいいだろ?」

「・・・まあ摩利さんが言うなら」

「達也君もいいね。もちろん四葉も来るだろ?」

「ええ」

何があるかわからないので智宏が行くのは当然だ。

達也は少し不服だったが、せっかく摩利が手伝ってくれたので、文句は言わずに大人しく頷いた。

翌日。

智宏は達也と真由美、摩利の4人で関本が拘留されている八王子特殊鑑別所に来ていた。

入り口で色々面倒な手続きがあったが、中に入ってしまうと案外フリーな状態だった。

本来ならば職員が同行するのだろうが、真由美が「七草」の名を使ったらしく、4人だけで関本の所へ行くことができた。

関本の部屋は牢屋ではなく、普通の病室のようだった。ただし、横には部屋を監視できる隠し部屋が設置されている。

隠し部屋には智宏と達也と真由美が入る。摩利は尋問のため関本の部屋に入った。

これで一対一の状況だが、智宏達は摩利が関本に魔法で負けるとは思えないし、近接戦でもそうは思わない。なので摩利1人を行かせるのに誰も反対しなかった。

「渡辺。なんの用だ」

「事情を聞きにな」

「いくらお前でもここでは魔法は・・・はっ!」

関本の指摘は正しい。

ここでは魔法を使うとガスなりゴム弾なりが使用者を無力化し、アンテナイトを身につけた職員がすつとんでくる仕組みになってい

る。もちろん摩利もその事を承知しているはずだ。

元風紀委員長である摩利のやり方はよく知っている関本。魔法を使えないと言ったすぐ後、何かに気が付き口元を押さえた。

しかし、その時には手遅れで関本の意識に霞がかかってしまう。摩利の術中に落ちた彼は淡々と質問に答え始めた。

その様子は隠し部屋でもしつかり見られた。

「なるほど。匂いですか」

目の前の部屋で摩利が何をしたのか、智宏と達也はすぐにわかった。

摩利は気流を操作して複数の香料を関本の鼻に送り込んで強制的に自白剤と同じような効果を生み出させたのだ。

「2人共見るのは初めてだっけ？」

「初めてですね」

「俺もです」

真由美は智宏と達也が術式を見抜いたことに意外感覚えなかった。

むしろ当然だと思ってる。

3人は会話をしながらも関本の自白を聞き逃してはいない。しっかりと頭の中にはいつている。どうやら関本の目的はデモ機のデータと宝玉のレリックだったらしい。

この時真由美は達也に「そんなものを持っていたのか？」と聞くと達也は「いいえ」と答えた。

持っていたのだが、それを答えられるかとなると難しくなっている。結局達也はレリックの調べ物をしていたからだとそれらしい理由を付けた。嘘は言っていない。

これ以上の追求は無意味だと思った真由美は、これ以上聞いてこなかった。

そして3人が再び関本の方へ視線を向けた瞬間、館内の非常警報が鳴り響いた。

警報を聞いた智宏達は廊下に飛び出すと、ちょうど摩利も部屋から出てきたところだった。智宏は摩利がドアを閉める時に中をチラツ

と見たが、警報が鳴つたのに関本は寝ていた。いや、寝かされた方が正しいのかもしれない。

「どうしたー!」

「侵入者のようね」

「俺達も行きませんか?」

「待て智宏。どうやらここが本命のようだ」

ここの施設は警察官が巡回している。しかもここは通常の倍の警戒態勢をしているのです、そう簡単には忍び込めない。

屋上から来たと推測される。

彼ら4人は学生だが、魔法師として侵入者を迎撃する義務がある。

智宏が動こうとすると、達也が肩を掴んで止めた。

その理由はすぐにわかった。

廊下の曲がり角から大柄な男が姿を現したのだ。

巨大な野獣のようなオーラを放ち、巨体ながらも引き締まった身体からは強者の雰囲気が見て取れる。

摩利はその男に見覚えがあった。

「呂・・・剛虎」

「え? 誰?」

摩利の呟きを智宏と真由美は聞き逃さなかった。達也は目の前の男を知っているようだが、智宏と真由美は知らない。しかし摩利の表情から相手がどれだけの実力者なのかを理解した。

こちらに歩いていた呂は歩みを止め、智宏達・・・いや、摩利に視線を向けた。そりやそうだ。この前戦った相手の1人なのだから。

「ここは逃げるべきでしたね」

そう言いながら達也は前に出ようとする。

「まてまて。俺は達也の護衛だから前に出られちゃ困る。俺がやる。室内戦なら任せとけ」

智宏はさつき達也にやられた様に達也の肩を掴んで止め、前へ出た。

室内戦なら流星群の本領を發揮できるからだ。

ところが――

「いや、あたしにやらせてくれ。2人は真由美のガードを」

「・・・わかりました」

「摩利、気をつけて」

今度は摩利が智宏を止めた。

智宏も達也も本当は摩利を前に立たせたくなかった。摩利の戦闘技術は高校生にして一流といえるだろう。しかし、呂剛虎は近接戦において超一流であり、勝ち目は低い。

だが意外な事に真由美は摩利を止めなかった。今は内輪もめして場合ではないので、2人は真由美の前まで引き下がった。

陣形は先頭に摩利、その後ろに智宏と達也、1番後ろは2人の後輩に守られている真由美だ。

「ああ。油断はしないさ」

呂をしつかり見たまま、摩利は自分のスカートをずらし、綺麗な太腿に巻いたホルスターから獲物を取り出した。

それは20cmくらいの角棒だった。

それまで呂は何もしていない。もちろん摩利の太腿に見とれていたわけではあるまい。獲物を摩利が構えると、ようやく戦闘態勢をとったからだ。やはり摩利の準備を待っていたのだろう。

呂は両手を身体の前に垂らし、前傾姿勢のまま摩利に突進した。

最初に攻撃を仕掛けたのは真由美だった。

智宏と達也の影からCADを操作してドライアイスの弾丸を呂に撃ち込むが、効果は見られない。

速度を変えずに近づくと、今度は摩利が40cmの刃で迎えた。

鈍い金属音でその攻撃が防がれたのがわかったが、呂の顔の横を鋭い短冊が通り過ぎる。なんと摩利の獲物は鋭い短冊3つをワイヤーで繋いだ3節構造の剣だったのだ。

呂は再び自分に放たれたドライアイスの弾丸を今度は避ける。

ここで初めて呂に人間らしい表情が浮かぶ。

確かに真由美の援護射撃は鬱陶しい。呂は標的を摩利から真由美に変えた。

呂は再度の突進をし、摩利とぶつかる直前で姿を消した。

「なに・・・！」

摩利は呂の姿が消えたのに驚き、反射的に右を見る。その判断は正しかった。

次に呂が現れたのは摩利と智宏達の間。呂は標的の真由美に突進するが、それは2人の男に阻まれた。

まず達也が術式グラム・デモリッション解体で呂の対物障壁を吹き飛ばし、次に智宏が流星群で呂の両足を撃ち抜いた。

呂の両眼が驚愕に染まる。

すかさず真由美は先程より巨大なドライアイスを呂に放ち、両肩と腹に命中させた。

治癒魔法も吹き飛ばされた呂は、脇腹と新たに追加された両足の傷の痛みを耐えながら3人を睨みつける。

その背後から摩利が近づき、右手から黒い粉を呂に飛ばした。

その粉をまともにくらってしまった呂は粉を払い除けようとしたが、摩利が粉を燃焼させて呂の顔付近に低酸素空間を瞬間的に作り出し、獲物を大きく振り上げた。

そして呂は摩利が振り下ろした獲物を避けた。避けたが、その刃は1本では無いのだ。摩利は振り上げた瞬間に呂の頭上に2枚の短冊を展開しており、避けた呂の両肩に短冊が突き刺さる。

智宏と真由美の攻撃に加え、達也の術式解体と瞬間的な低酸素で防御ができていない呂は骨は砕けなかったが直撃をくらって肉が裂け、そのショックでようやく崩れ落ちた。

「終わったか」

「ああ」

「すまん真由美。標的を変えられるとは・・・」

「私は大丈夫よ」

「そうか・・・しかし2人はよくこいつを殺さなかったな」

「何者かわからない以上殺すわけにはいかないでしょう。達也は知っているみたいですけど」

そう。

相手がたとえ工作人員でも智宏と真由美は呂が何者なのかわからな
い。

日本人なのか、外国人なのか、いずれにせよ後は警察の仕事なので
殺す必要はないのだ。

その後、警察官が来て血まみれの呂を見て驚いていたが、すぐに呂
の拘束に取り掛かった。

通常戦闘に参加した智宏も事情聴取を受けるのだが、あっさりス
ルーされる。これも「七草」の名前の威力だ。しかも智宏もいるので
下手な事はできない。「四葉」がいかにも恐れられているのかがわかる。

4人は警察官にここを出る事を伝えると、鑑別所の外へ出た。

しかし襲撃は終わったがまだ油断はできない。智宏と達也は家に
到着するまで周囲を警戒していた。

第68話　コンペまであと2日

鑑別所の呂による襲撃からは特に事件も無く、安心してそれぞれの作業に打ち込むことができた。

動きがあったのはコンペの2日前の金曜日。

司波家では夕食も入浴と済ませてあとは寝るだけの状態の達也がいた。

リビングでくつろいでいると、テレビフォンに響子からの着信が来た。もちろん要件はわかっているの、すぐに出た。

「こんばんわ」

『こんばんわ達也君。もう寝るところだったかしら？』

「いえ、問題ありません」

『よかった。要件はわかっていると思うけど、スパイの実働部隊はほぼ全て拘束したわ』

「ほぼ、ですか？」

『隊長の陳^{チエン}祥^{シャンシエン}山は逃しちゃったの。でも呂剛虎は確保できたから満足できる結果です』

響子の言う通り、この数日でスパイはそのほとんどが抑えられており、陣は逃してしまっただが、これで当日までは大丈夫だろうと予想された。

実際、これまで魔法科高校やFLTだけでなく他の専門メーカーなどは産業スパイに悩まされてきたので、無駄足というわけではない。元々捕まえる予定だったのだ。

それと驚くべきことに、レリックの情報が漏れていたのはなんと国防軍の經理データからだったらしい。

「データが漏れていたのですか・・・しかし嬉しそうですね」

『もちろんよ。情報漏れは恥ずかしいけど大量のスパイを確保できたもの。またお願いするかもしれないから、よろしくね』

「了解しました」

『じゃ、頑張ってるね。応援してるわ』

上司とは思えないフレンドリーな激励で響子の電話は切れた。

この時、達也も響子も今回のスパイ騒動がそれほど深刻なものとは考えていなかった。その考えは早計だったのを知らずに……。

電話が切れると達也はソファにどっかり腰を下ろした。いつもより疲労が溜まっているのだろう。頭の中を空っぽにしたらあつという間に寝てしまった。

数分後、入浴を終えた深雪は兄がソファで寝ているのに気がついた。

(まあお兄様ったら)

たまに達也は自分の世界に閉じこもってしまうこともあったが、深雪は不満を覚えなかった。むしろ無防備な姿を見せてくれるのが嬉しかった。

深雪は達也に「たまには私ではなく自分の事を考えてほしい」と思っていた。こうして側にいてくれるだけで十分満足しているし、少しだけ構ってもらえればいいと思っている。

自分だけを見て欲しい。

自分だけを構って欲しい。

そんな感情がないわけではない。しかしそれはいつまでも自分に達也を縛り付ける事になってしまう。それは深雪自身が嫌だった。

音を立てないようにそつと達也に近づき、ソファの肘掛に右手を置いて身体に触れないようにゆつくりと、正面から達也の顔を覗いた。

達也の顔色は心配したほど悪くはなかった。それに安堵した深雪だったが、じつと兄の顔を覗いている内に深雪の意識に霞がかかってくる。心音が加速して頭に血が上り、自分が何をしようとしているのかがわからない。

ただ、ゆつくりと深雪の顔は達也の顔に近づいて行った。

互いの顔の距離が息のかかる距離まで近づくと、達也はいきなり目を開いた。さすがにここまで近いと気づかない方がおかしい。

2人の目が重なり合う。

いきなり目を覚ました達也に深雪は驚き、バランスを崩して前へ倒れ込んだ。

「きゃっ」

「深雪！」

兄妹として超えてはいけない一線は、達也が深雪の肩を掴んで無事（？）止められる。

キスをする直前の距離で2人は見つめ合う。

達也はそらせていた首を元の位置に戻したが、その時自然に深雪の身体を上から下に眺めることになった。深雪も兄の視線につられて己の状態を確認する。深雪のミニスカートは倒れ込んだ時に大きく広がっており、かろうじて下着を隠しているだけの状態だった。

「も、申し訳ございませんっ！」

凄いい勢いで後ろに下がって頭を下げた深雪は、これまた凄い速さでリビングを飛び出して自室に籠ってしまった。

部屋に入った深雪は大急ぎで鍵をかけ、背中をドアに預けてズルズルとへたりこんでしまう。ペタンと座り込んでしばらくブーツとしていたが、どこかに行っていた思考力も時間が経つと戻ってくる。そして自分の顔を両手で覆って俯いた。鏡を見なくても自分の顔が真っ赤に茹で上がっているのがわかる。

（お兄様になんてことを・・・もう少してキ、キ、キ・・・）
自分があの時何をしようとしていたのか、今の深雪にはわからない。

しかしやろうとしていたのは事実。このままでは深雪は朝までフリーズと再起動を繰り返してしまうだろう。

だが、この状況を達也が放っておくはずがない。

「深雪」

「はい！」

ドアの向こうに兄が来て自分を呼んでいる。

いつもなら直ぐにドアを開けるところだが、この状況ではそうはいかない。

深雪は潤んだ両目から涙を拭い、ゆっくり立ち上がった。

今の自分を見られるのは恥ずかしかったが、兄の呼び出しに逆らう選択肢はない。

震えた手でドアを開けた。

「どうぞ」

深雪は達也が入れるくらいのスペースを作ったが、達也は入ってこない。

しかも深雪は達也に見られているのに気がついた。

さつきより身体が熱い。

目を合わせることができなかったが、達也に見られているのに耐えられなくなった深雪は目を達也に向けた。

2人の目はまた重なった。

その拍子に深雪の目にはさつき拭ったにも関わらず、再び涙が溜まってくる。

慌てて涙を拭おうとすると達也はその手をそつと押さえ、もう一方の手の親指で涙を拭った。

「まあ、その・・・俺は大丈夫だぞ。だから深雪も気にするな」

声を失っている深雪に達也は不器用な笑顔でそう告げる。

「もうおやすみ。下は俺が片付けるから」

そう言つて達也は深雪から手を離し、リビングに戻って行った。

兄の姿が見えなくなるまで見送った深雪はさつきより優しくドアを閉める。

ふらふらとベッドに向かい、またブーツとしながら服を脱ぐとベッドに背中から倒れ込む。そこでやっと我に帰ったのか、深雪は思い出したように左右に転がりながら全身で悶えていた。

その顔は涙を浮かべていた表情とは違い、幸せそうなものだった。

一方、司波兄妹の間でそんなやり取りがあつたなど知る由もない智宏は、風呂から上がるとソファに寝転んだ。

（ついに明後日か・・・何もなければいいんだが）

「あの・・・」

考え事をしていると、後ろから彩音に声をかけられた。

身体を起こして彩音を見ると、なぜか申し訳なさそうな顔をしている。

「どうした？」

「明日はお休みをいただきたいのです」

「なにかあったのか？」

「実は御当主様からお呼び出しがありました。四葉家の本家に行かなければいけないのです」

詳しく話を聞くと、真夜が直々に彩音を呼び寄せたらしい。まあ智宏の世話をしている彩音を本家まで引つ張ってくるにはそれなりの地位が必要なので、命令したのが誰かは予想がつく。

用事は智宏あつたらしいのだが、達也の護衛がある事を知っていた真夜は智宏が家にいない間、彩音を本家に呼ぶ事にした。しかしその用事は智宏も彩音も知らない。

「なるほどな。じゃあいいよ」

「え？よろしいのですか？」

「俺の代わりに行ってくれるんだろう？なら大丈夫だ」

「あ、ありがとうございます！18時までには戻れると思いますので！」

もちろん智宏に彩音を止める権利はない。それに真夜が来るように命令したならなおさらだ。

◇？

◇？

◇？

◇？

時計の針が0時をまわった頃、横浜の中華街では国防軍の襲撃から上手く逃げ出した陣が周を訪れていた。

「先生。お世話になりました」

「恐縮です」

「本国から艦艇が派遣されることになりました。これも先生のおかげだと思っています。ただ・・・」

「閣下？」

「副官が捕まってしまいました。もう一度手を貸してくれませんか？」

「もちろんですとも。同胞を救うためです」

陣は真剣な表情で周に副官である呂剛虎の救出を頼んだ。無論頭

を下げるような真似はしない。

それなのに周は笑顔で了承し、移送ルートや日時を陣に教えた。もちろんただではない。

「そのかわり。この街への被害は・・・」

「わかっています。荒事になります。中華街に被害がおよばないように指揮官に念押しします」

こうして呂の奪還が決まった。

しかし、それを知っていたのは彼らのみ。国防軍も公安も、誰一人この情報を得ることはできなかった。

論文コンペまであと1日。

横浜に・・・いや、この日本に巨大な嵐が来ることはまだ誰も知らない。

第69話 嵐の前日

10月29日土曜日。

今日は土曜授業だが、どのクラスも自習が続いた。特に二科生は半分が自習だ。

何かと騒がしいわけでもなく、静かに自習をいているが、時々中庭から爆発音がしても「うわっ」と数人がびつくりするだけだった。

ちなみに達也は教室で自習をしている。別にクビになっただけではない。達也の仕事がないのだ。今は達也がいなくてもできる事を五十里がやっている。

実は、今朝鈴音から「午後から登校します」との連絡を受け、やる事が無くなってしまったのだ。

達也が教室にいるということは、智宏の仕事も一旦中断となっている。智宏も教室で深雪達と自習をしていた。

一限が終わると、いつも通りに深雪の机の周りに智宏と雫、ほのかが集まりだした。

「いやーとうとう明日だな。達也は大丈夫そうか？」

「はい。でもお兄様は少しお疲れのようで・・・」

「え！」

「ほのか、達也さんなら大丈夫だよ」

「そ、そうよね。でも休んでもらいたいな」

智宏が達也の事を聞くと深雪は何故か少し顔を赤くして答えた。

その理由はわからなかったが、実は深雪は昨日の事を思い出していただけ。しかしそれを知る人はいない。

休み時間も後半になると、話は達也の事から明日の論文コンペに変わった。

「智宏さんは明日行くの？」

「もちろん。警備隊だからね」

「じゃあ会場には入らない？」

「配備場所によるな。十文字先輩次第だ」

「そういえば十文字先輩は警備隊の総隊長でしたね」

「どうやら雫は智宏が行くか心配だったらしいのだが、警備隊である智宏は会場に入れる確率は低い、と伝えると少ししょんぼりした。

まあ警備隊の配置は適当にやるわけにはいかない。誰がどの魔法を得意としているのかで場所は変わる。

近接戦が得意な人、遠距離戦が得意な人、防御が得意な人、オールマイティな人など、得意な事は人それぞれだ。

その後、明日は誰と行くのかという話になり、智宏は達也と深雪の3人で行くと言った。エリカ達の方は知らないが、雫とほのかみたいペアやグループで行くのだろう。

◇? ◇? ◇? ◇?

さて、午前中に学校を休んでいた鈴音はどこにいたのだろうか。

それは千秋が入院している病院である。

時期上1人では行けないため、服部も同行者として病院に来ていた。(鈴音は1人でいいと言ったらしいが、真由美と摩利が猛反対していた)

鈴音はドアをノックし、中からの返事を待ってから新しく取り付けられたドアノブ掴んで開けた。

「安宿先生でしたか」

「こんにちは市原さん。そこに掛けて」

中にいたのは千秋だけではなかった。

ベッドの脇にいたのは魔法科高校の保健医である安宿^{あすか}^{さとみ}^{だつた}。ちなみに千秋本人はベッドの上でジツと座っている。

「先生。平河千秋さんは大丈夫ですか?」

「ええ。精神に疾患を生じている症状もなさそうだし」

「では・・・」

鈴音は立ち上がり、ベッドを回り込んで窓際に立ち、千秋に目を向けないで外を見ながら話しかけた。

「平河千秋さん。あなたのやり方は正直間違っています。このままで

は好意も敵意も引き出せないでしょう」

「それがなんだって言うんですか！あたしはアイツにとってその他大勢に過ぎないなんてわかってますよ！」

その言葉にはそれが真実だと思いき知らされるほどの力があつたのか、鈴音は千秋から言葉と感情を引き出すことができた。

そして鈴音の予想通り、千秋は紗耶香や花音にとつたいた態度と同じように接している。ただ、鈴音はほかの2人とは違う。

「あなたの司波君に対する評価は合っていると思いますよ。しかしいくら喚こうが彼は虫に集られるのと同じくらいに感じる程度でしょう」

だからそれがなんだ！

と千秋は思った。

しかし、内心ではそれをわかっているため、口には出せなかった。

魔法を撃ち込まれても微動だにしなかったのなら、直接手を出さなかった自分は虫けら以下ではないか。

そう思い始め、千秋は爪が掌に食い込むくらいに拳を握り締める。

そんな千秋に鈴音は目もくれない。

「知っていますか？司波君は筆記試験でトップでした」

「それがなんですか？」

「他の分野で司波君を負かす事は不可能です。しかし、魔法工学なら可能かもしれません」

その言葉を聞いた千秋は初めて大きく目を見開き、「信じられない」と言いたげな目を鈴音に向けていた。

「彼はハードウェアが苦手なようです。もちろん他の生徒よりは上ですが……貴女はハードウェアが得意だそうですね」

千秋は鈴音の言っている事が理解できた。

1年生の内は魔法工学もソフトが中心なのだが、2年生に上がるとハードの比重が増えてくる。

つまり、逆転のチャンスがあるということがわかった。

「明日会場に来てください。何か得られるものがあるはずですよ」

「……行ってもいいんですか？」

「先生、大丈夫ですよね？」

「ええ。外傷も内傷も精神的な傷もないから大丈夫よ」

「だそうですよ」

千秋の瞳から自暴自棄の色が消え、光が戻ってきているのを鈴音は確認し、病室を出ていった。

達也を負かせる事ができる可能性。

今の鈴音の言葉は麻薬に近い。

追い詰められた少女に注入された「可能性」という薬は、確実に千秋の心に変化をもたらしていた。

夕方になり辺りが赤く染まってきた頃、横浜に向かう列車に3高の生徒達が乗っていた。

九校戦の時もそうだったが、首都圏や国内の中央部から離れている地方の魔法科高校は前日に横浜にで1泊することになっている。

今回のコンペはほとんどの学校が泊まりに来るだろう。

列車が線路を走る一定のリズムに揺られながら、吉祥寺はコンペのために作成した資料を読みふけていた。

「ジョージ」

「・・・将輝」

「もう着くぞ」

「わかった」

自分呼びに来た将輝に返事をする、手に持った電子書籍の電源を切り、荷物をまとめ始めた。

横浜で達也と再び対決する。

今はその事が頭の中から離れずにいる。

自分もだが、密かに達也の事をライバル視している将輝を見ながら、吉祥寺はこれからどうやって時間を潰そうか考えていた。

◇？

◇？

◇？

◇？

横浜の街を見下ろせる横浜ベイヒルズタワーの最上階。

この階にあるバーラウンジでは1組のカップル(?)が夜景を見な

がらワインの入っているグラスを傾けていた。

「今年のワインは美味しいですね」

「私、実はお酒はあまり飲まないものですから……味が変わらないのです。申し訳ないですわ」

「いえ！それならそれで、これから飲み比べてみては……？あつ、それより今回のヤマなんですけど、なんとかメドが立ちました」

「本当ですか？」

「はい。今日は本官からのお礼です」

「お互い様ですよ、警部さん。そうそう。今晚だけでなく、明日も付き合ってくださいませんか？」

不意に言った言葉で、危うくワインをこぼしそうになった寿和を見て響子はクスリと笑みを見せた。

「ほ、本官でよければ！」

千葉家の長男である寿和は、次男の修次と比べても全く異性に縁がない生活を送ってきた……わけでもない。

道場に摩利のように女性も通っているし、学生時代もそれなりにやんちゃしていた。

妹からは「不真面目だ」と言われているが。

なのでこのような反応は珍しいのだ。

「では、朝8時半に桜木町の駅でよろしくお願いします」

「朝ですか？」

「論文コンペがありました、それに知り合いの男の子が出場するんですよ」

「はあ……」

寿和の反応の意味、響子はわかっていた。

しかしそれを指摘することなく話を進めていく。

「それですね？是非とも部下の方々にお声をかけてくれませんか？」

「部下に？」

「はい。それに武装デバイスと実弾銃も持ってきてくれれば助かります」

「ツ！それは・・・」

響子はさらりとそう言った。そして寿和も伊達に警察官をやっているわけではなく、この言葉を聞いた瞬間顔を引き締めた。

実弾銃まで携帯させるとなるとただ事ではなくなってくる。テロか暴動か、これらの騒動を想定していないと考えられない要求だ。

目の前で同様している寿和から目を夜景に移した響子は、静かにワイングラスを傾けた。

「まあ、何も起きなければいいんですけどね」

第70話 論文コンペ開催

全国高校生魔法学論文コンペティション当日。

呂剛虎の襲撃以来そのようなトラブルに見舞われることなく、無事に当日を迎えられた。

智宏と達也、深雪の3人は時間通りに到着したが、どうやら智宏達が最後のようだ。

一高生徒が集まっている場所には五十里も桐原も紗耶香もいる。

「お兄様」

「なんだい?」

「あれを何とかした方がいいと思いますよ?」

「……あれか」

「ああ……エリカと千代田先輩ね(またケンカしてるよ)」

「俺がやるのか……」

「お兄様、お願いします」

3人の視線の先ではエリカと花音がまた睨み合っている。智宏も達也もわざと視界から外していたが、深雪は放っておけないらしい。

肩を落とした達也だったが、深雪の頼みは断れない。智宏達はエリカと花音に近づいていく。

「どうかしたんですか?」

「あつ、3人ともおはよー」

「司波君。このお嬢さんに何か言ってくれないかしら?」

智宏達が近づくとすぐにわかったのか、エリカはパツと振り向いて軽い挨拶をした。

ケンカしていた花音をそっちのけで。

自分を放っておいて別の人に話しかけるエリカを見て、花音の眼差しが余計に邪険なものとなる。どっちか一方に味方できないのが辛いところ。

しかも智宏と深雪は被害を受けなかったので、巻き込まれたのは達

也だけだった。

「はあ、では俺が預かりますよ」

この時、花音はすぐく嫌そうな顔をしたが、五十里を見て彼が異を唱えてない事を確認すると、渋々頷いた。

開幕間近になると、どの学校の控え室も賑やかになっている。

生徒達は控え室やロビーでも他の学校の生徒と談笑していたが、話しているのは生徒同士ではなかった。

ロビーには一高のカウンセラーである遙も来ている。ただし、カウンセラーとしてではなく公安の情報員としてだ。

遙の目的は達也を探る事。

春に起こったブランシユの事件で、公安は達也に興味を向けていたのだ。ところが、達也の身辺を探ろうとすると上層部から圧力がかかり、調査を止められてしまったらしい。まあ遙が直接圧力を受けたわけではないが、上司にその事について愚痴を聞かされていた。

これで諦めればいいのだが、圧力がかかったことにより逆にやる気が高まつたらしく、正規の情報員ではない遙も巻き込まれてしまった。

もちろん遙も「はい、わかりました」などと答えていない。抵抗はした。

自分になんとかできる相手ではないですし、逆に反撃を受けるかもしれない、と（聞き入れてもらえなかったが）。

だが智宏が、四葉家の現当主の息子が護衛につくととなると余計に怪しくなってくるのは職業柄仕方の無い事だった。

缶コーヒを片手に智宏達がいる一高の控え室を監視し始めた遙。消極的な対応だったが、その行動は無駄ではなかった。

「……やっぱりあの人は」

監視を初めて数分後、一高の控え室に女性が入っていくのを目撃する。遙と年代代で、顔も見覚えがあった。

携帯端末に搭載されている盗み撮り用カメラで写真を撮り、公安のネットワークで画像検索をかけた。

「エレクトロン・ソーサリス？」

部屋に入っていったのはエレクトロン・ソーサリスこと藤林響子だった。

遥の学生時代、響子はヒーローだった。二高に入学し、九校戦で自校を優勝へと導いた電子の魔女。魔法科高校卒業後は魔法大学に行き、さらに防衛省に入省したと噂では聞いていた。

しかし何故響子が一高の控え室を訪れるのかがわからない。二高の出身なら二高を訪れる方が普通なのに。

怪しい。

でも達也の素性のヒントになるかもしれない。

そう思った遥は監視を続けた。

部屋の外でピリピリした見張りがいるとも知らず、いや、少なくとも智宏と達也は知っている上で客人と談笑していた。

「深雪さん、お会いするのは半年ぶりですね」

「ええ。お久しぶりです」

「達也君に聞いてると思うけど、私九校戦に行ってたのよ？お茶会に深雪さんも来ればよかったのに」

「藤林さん。深雪といると自分は目立ってしまいます」

そう達也が言うと、深雪は少し恥ずかしそうに、響子はやれやれという顔で笑った。

そして達也は響子に【少尉】を付けていない。盗聴器や盗撮機等を完全に除去してある部屋はまだしも、このような公共施設では油断してはいけないのだ。

「ところで藤林さん」

「何かしら智宏君？」

「ここにいていいんですか？確か、二高のOGでしたよね？」

響子の学生時代しか知らない者なら、部屋の外で監視している遥みたいに「なぜ二高のOGが？」と思うだろう。

しかし響子は全く気にしていないようだった。

「いいのいいの。今の私は防衛省技術本部兵器開発部所属の技術士官。高度な技術を持った達也君の所を訪れてもおかしくはないわ。

肩書きつて便利よね〜」

「そういう事ですか」

「ええ。だから『藤林さん』でも『少尉』でも『お姉様』でもいいのよ？」

「二「お姉様（ですか）？」」

意外とお茶目なジョークに智宏達は半分本気で驚いた。

「さてと。良いニュースと悪いニュースがあるの。どっちから聞きたい？」

「良い方からお願いします」

「わかったわ。達也君、例のムーバルスーツが完成したわよ。もうこっちにあるらしいの」

「さすがですね」

「今度は悪いニュース。例の件、多分終わっていないみたい」

「問題でも？」

「詳しい事はこれを見て」

良いニュースから一変して悪いニュースになると、響子は厳しい顔つきになった。

事情はわからなかったが、響子は懐のケースからチップを取り出して達也に渡した。

電話やメールはもちろん直接話すこともできない内容らしい。

「私の方でも保険はかけておいたけど……キナ臭い事になるかもしれないの」

「わかりました。俺達も準備はしておきます。智宏も深雪もいいな？」

「もちろんだ」

「はい、お兄様」

「じゃあもしもの時はお願いします」

頷き合った兄妹とそのいところ。

響子は心苦しかった。

だが智宏達は貴重な戦力である。彼女の立場でら止めることはできない。

午前8時。

客席が埋まり始めてきた頃、五十里が花音を連れて控え室に入ってきた。

「司波君、交代だよ」

「お願いします」

この控え室からも会場の様子がモニターで観れる。

それをわかっているのか、達也は遠慮なく智宏と深雪を連れて控え室から客席に向かった。

ところが、控え室から出て10歩も歩かない内に深雪は声をかけられた。

「司波さんー！」

「一条さん」

名前を呼んだ男は一条将輝。2ヶ月ぶりの再開だった。

左腕には警備の腕章を付けているので、今回は克人が指揮する警備隊の一員として論文コンペに参加しているのがわかる。

智宏も腕章は持っているがまだ達也の護衛をしているため、腕章はまだポケットの中だ。

「ご無沙汰しております」

「い、いえこちらこそ！」

丁寧に一礼する深雪。

その完璧な作法にセレブな付き合いに慣れているはずの将輝とその隣にいる警備隊のメンバーは棒立ちになった。

「見回りですか？」

「はい」

「一条さんも警備に参加するなら安心ですね。今日はよろしく願います」

「ご期待に添えるよう全力を尽くします！」

「十三束君も頑張ってください」

「りよ、了解です！」

深雪に少し訪ねられただけで緊張するのは少し情けくないかと智宏と達也は思った。

まあ確かに深雪の美貌に勝てる女性はいない。兄である達也もたまに見とれてしまう時があるのだ。

赤の他人だが高嶺の花に手が届く距離にいれば一条でも固まってしまうのは無理もない。むしろ当然だろう。そんな深雪を見て智宏は内心誇らしかった。

突然深雪に話しかけられた十三束もしどろもどろになりながらも堅すぎる返事を返した。同級生なのに・・・。

智宏と達也は、この2人が今日1日持つのか不安だった。

将輝と十三束がやる気十分で去っていくと、今度は智宏に深雪が向き直った

「智宏さん」

「ん？」

「私とお兄様は会場に入ります。智宏さんも警備隊の仕事をなさってください」

「いいのか？」

「はい。お兄様、よろしいですよね？」

「ああ。会場なら護衛はなくてもいいからな」

「じゃあそうするよ」

「頑張ってくださいね」

「任せとけ」

こうして智宏はポケットから腕章を取り出して左腕につけ、会場の警備に戻って行ったのだった。

第71話 殺気立つ街中

会場内では、警備隊と張り合う必要はないエリカが不審人物を探しやすい席を確保して座っていた。

辺りを監視しているため、エリカは後ろの方に見覚えのある顔に気がつく。

見覚え……というか以前は毎日会っていたし、今でもよく顔を合わせている。

相手の方もエリカに気がついたようで、ヒラヒラと手を振っていた。

「あれ？エリカ、あれって」

「げっ……ただのナンパ野郎よ」

幹比古も気がついたが、エリカは他人のフリをすることに決めた。

自分の兄に対する態度としてはどうかと思うが、エリカが寿和の事をあまり良く思っていないのは確かだ。

視線もそらしたエリカだったが、その先に智宏と別れた達也と深雪の姿を発見する。

幹比古に付近の監視を頼むと、エリカは小走りであの兄妹のところに向かった。

「おはよー」

「あらエリカ」

「おはよう。ところでレオはいないのか？」

「あ、あのねえ。アイツとあたしをワンセットにしないでくれない？」

エリカは人がたくさんいる会場内だからか、小声で達也に講義した。

しかしエリカはレオと一緒にいるのはよく見る光景だ。この前だって仲良く登校してきたし。

達也も意味ありげに言ってるわけではない。いつも一緒にいるからこのような質問をしたのだ。

「ところで他の連中は？」

「ミキ達はあそこ。クラスの皆は午後からじゃない？」

Fクラスのクラスメイトは九校戦で達也達が活躍して以来自信を取り戻したらしく、妙なノリも染み付いてこの論文コンペも全員で応援に行くと思り上がったのを達也は覚えている。

午前9時。

論文コンペティションが開幕し、トップバツターの2高のプレゼンが始まった頃、遥は喫茶室でコーヒーを飲んでいた。

達也が会場にいる以上下手に動けないので、終わるまで暇な時間を潰そうと考えていた遥だったが、そこまで運はよくなかった。

「前の席、いいかしら？」

不意に声をかけられた遥はビクツとなり、声した方に振り向いた。

遥に声をかけたのは響子だった。

「ど、どうぞ？」

「ありがとう」

この時遥は焦りの色を隠せずにいた。

当たり前である。監視していた対象に接触した響子から声をかけてくるなんて想像もできない。

注文した紅茶が運ばれてくると、響子は落ち着いた雰囲気でカップに口をつけた。

「ふう」

「.....」

「見つめられると恥ずかしいんですけど、ミス・ファントム？」

「ツ！いえ、エレクトロン・ソーサリスが私に興味持っていただけなんです、光栄ですわ」

ミス・ファントム。それは響子のエレクトロン・ソーサリスと同じ2つ名だが、響子とは違って遥のは広く知られた名前でない。

遥の2つ名は非合法的な諜報活動で情報を仕入れている正体不明の女スパイのコードネームなのだ。

そんな事をあっさり言った響子だが、彼女は落ち着いたままだ。

「それで、何の御用でしょうか？」

「私から言わなくてもわかっているではありませんか？」

「・・・私は貴女と違って優秀ではありませんから」

「ご謙遜を。とても優秀な成績で卒業されているではありませんか。九重先生も高い評価を付けていましたわ」

遥は響子の要求がなんなのかわかっていたが、それに素直には応じる事はできなかった。

誤魔化そうとしたが、響子は遥が九重八雲の弟子である事も知っているようだ。まあ藤林家は古式魔法の名家なので、同じ古式魔法の権威である九重八雲との繋がりもあるだろう。

なので遥についての情報も多い。一方遥が持つ響子の情報は少ない。

カードの枚数ではむこうが上手だ。

「無理なお願いはしません。ただ、お互いの領分は守りましょ、と提案しているだけです」

「意味がわかりません」

「ハッキリ言った方がよろしいですか？でも貴女にお咎めはありませんから、大丈夫ですよ」

響子の要求は遥が予想した通りのものだった。響子は軍がやる事に公安が首を突っ込むなど言っているのだ。

ここで響子を睨みつけても負け犬の遠吠えにしなければならないのは遥本人もわかっていた。そして自分のところにお咎めがこないという事は、そこまで手が回っているのだとわかる。

用は済んだと言わんばかりにスッと立ち上がった響子は、遥の伝票まで持ってレジに向かった。2人の戦いの初戦は響子の勝利で終わった。

しかし、遥も収穫があった。このタイミングで仕掛けてきたのなら、達也と響子の間に秘密にしなければならぬ関係がある。それだけはわかった。

◇？

◇？

◇？

◇？

2高が終わり、次のコンペが順調に進んでいる頃、智宏はロビーの

一角を警備していた。

会場の警備は2人1組だが、智宏は達也の護衛をしていたためにペアがいない。ペアがいてもその人に迷惑をかけるかもしれないので、智宏は克人から1人での警備を言い渡されても文句は言わなかった。するとそこへ真由美と摩利、鈴音がやってきた。予定していた到着時間より1時間早い。

3人を見たいると、真由美が智宏の視線に気がついて近づいてきた。

「智宏くん、来ちゃった」

「……（いや知らんがな）」

「そ、そんな嫌そうな顔しなくても」

真由美の第一声が予想外の言葉だったので、うっかり智宏は表情を表に出してしまった。

少し遅れて到着した摩利は相変わらずニヤニヤしている。

「やあ、頑張ってるかい？」

「はい。ところで何故こんなにも早く？」

「うん。訊問が早く終わったんだ」

「今日やったんですか」

誰の訊問かはわかっていない。関本のだろう。呂剛虎の襲撃の日は途中で訊問が遮られてしまったため、十分な情報は得られなかった。

無論襲撃の次の日に訊問の続きを行おうとしたところ、関本は錯乱状態になっていたらしい。職員曰く、自分の命が狙われてパニックをおこしているからだそうだ。

本人の精神が安定していない状態では、まともな訊問もできない。七草の名前を使うわけにもいかなかったのだ。

「関本と平河の目的がコンペ資料だったから狙いは論文コンペだろうと思っただ。事件が起きてからでは意味が無いだろう？」

「まあそうですね。それで何か聞き出せましたか？」

「ああ、ちょっとこっちに来てくれ」

摩利は智宏をロビーの柱の影に呼んだ。ここなら他の生徒からは見にくいはずだ。

「実はだな。関本はマインドコントロールを受けていた可能性がある
る」

「マインドコントロール？確か1高はブランシユの事件以来1ヶ月に
1回メンタルチェックがあったはずですよね？」

「メンタルチェックの後に受けたんだろう」

「それ以前に彼は魔法を国家が秘密裏に管理するのが気に入らなかつ
たみたいなの。彼みたいに魔法式と起動式は世界で共有されるべき
だと言う人はたくさんいるわ」

「なるほど。精神干渉魔法にかかりやすい下地があつたんですか」

催眠術は人によつてかけやすさが異なる。いくら自分が相手に命
じても、人の意思は意外に強固なものなので、行動原理に干渉するの
は難しい。

関本のように利用しやすい人がいればいるほどスパイが作りやす
いし、上手く催眠術をかければやがて被術者が捕まっても自分たちの
尻尾には辿り着けないのだ。

「関本の考えはわからなくもない。しかし今の世界情勢では難しいん
だ」

「下手に高度な技術を渡したらその時点で国賊ですからね」

いつの時代も機密情報が他国に流出する事がある。第三者を通し
て情報を流したり、工作員が自ら情報を掴んだり、パターンは様々だ。

特に軍事技術の情報漏洩は利敵行為にもなりうる。国賊と言われ
ても文句は言えない。

今回のパターンは論文コンペ狙いだと事前にわかつたので、何か
あつても体勢を立て直せるだろう……多分。

「とにかく、今日は気をつけてくれ」

「わかりました」

智宏と話し終えた真由美達は控え室に向かう。今あそこには達也
を含めたコンペのチームがいるので、一緒に来た鈴音を送りに行くの
だろう。

3人を見送った智宏は、携帯端末に達也からメールがきている事に
気がついた。

「ん？（メールだ。なにになに……えっ、呂剛虎に逃げられただつて？）」

その内容には驚いた。

達也は響子から連絡があったらしく、トイレに行くついでに智宏にメールをしたのだ。

詳しい内容は書いてなかった。おそらく響子が簡潔にメールを送ったため、達也も知らないのだろう。

響子がこの情報を得たのは通信ブースの中。風間からの緊急コールで回線に出たらこの事がわかった。呂剛虎を乗せた護送車が襲われ、生存者は無し。全滅だった。

5高の発表が終わって昼休憩になる頃、克人は警備隊本部で昼食をとっていた。

目の前に服部と桐原がいて、服部は訊問の結果について報告している。

「——以上です」

「わかった。お前達は会場の外周を監視しろ」

「わかりました」

「あとは……現在まで周囲に違和感はないか？」

「違和感ですか……そうですね、いつもよりアジア系の外国人が多い気がします」

「俺は街中の空気が殺気立っているように感じました」

「……なるほど」

服部の言う通り、会場近くはもちろん横浜に見られる外国人の姿は多い。日曜日の横浜は観光客でいつも賑わっているが、今日はなんだか様子がおかしい。白人や黒人はいつも通りだが、アジア系の外国人が普段より増えているのだ。

それに付け加え、桐原が感じた殺気は冗談ではないだろう。桐原は1高でも高い実戦能力を持つ者の1人なのだから。

数十秒後、黙り込んでしまった克人は2人にこう言った。

「服部、桐原。警備に行く前に防弾チョッキを着ろ」

「ッ！」

克人の言葉を聞いた2人は目を見開いた。

そんな2人を気にとめた様子もなく、克人はマイクを手に取り、スイツチを入れてこう言った。

「1高の十文字だ。警備隊に告ぐ。午後から防弾チョッキを着用しろ。繰り返し。午後から防弾チョッキを着用しろ」

第72話 重力制御型熱核融合炉

1高のプレゼンはあと30分で始まる。

鈴音と五十里と達也は最終の打ち合わせに入っていた。

ちなみに控え室にいるのは達也達意外に深雪と花音、真由美と摩利だ。

一方、客席ではいつものメンバーが固まって座っていた。

午後から合流した雫とほのかや、得物を隠して持ち込んだエリカとレオは1高の出番を待っている。

もちろん何もしていないわけではない。幹比古も美月も、自分が最大限出来ることで敵の襲来に備えていた。

智宏もロビーから発表会場とは反対側の2階のフロアに移動し、警備を続けた。今のところ異常は見られない。

午後3時。とうとう第1高校のプレゼンテーションが始まった。

今回の論文コンペで注目されているのは吉祥寺だが、加重系魔法の技術的3大難問の1つである「重力制御型熱核融合炉」をテーマにしている1高チームも大きな注目を浴びていた。

ステージにはコンペに使う機械が並び、鈴音はその横で説明を行っていた。達也は舞台袖でモニターと起動式の切り替え、五十里は鈴音の隣でデモンストレーションの機器を操作している。

始めの説明を終えた鈴音はガラス球の横に立った。

「熱核融合炉の実用化に何が必要か。それは燃料となる重水素をプラズマ化し、反応に必要な時間の間は状態を保つ事です」

鈴音がCADに触れると、ガラス球に入っていた重水素ガスがプラズマ化して内側に塗られた塗料に反応、煌びやかな閃光を放った。

今言った鈴音の言葉は過去に何度も実演されており、会場に訪れている魔法大学の教授や研究機関の研究者も予想通りだというふう

頷いている。

「しかし、発電を行うにあたって、問題があります。プラズマ化した原子核の電氣的斥力に逆らい、反応が起こる瞬間原子核同士が接触してしまうのです」

ガラス球の閃光が止むとステージが暗くなり、スクリーンが降りてきた。

スクリーンには今まで繰り返されてきた実験の映像や結果が映っていた。

これまで、何人もの研究者がこの問題に立ち向かってきた。

超高温による気体圧力の増加。

表面物質の気化を利用した爆縮。等々……。

だが、容器の耐久性や燃料の補充、生み出すエネルギーが大きすぎるといった別の問題が出てきた。

鈴音がスクリーンの説明を終えると、再びステージが明るくなりスクリーンが上がった。

彼女の後ろには円筒型の電磁石が2つ向かい合わせで吊るされている。昔の公園にあった遊具のよう。

五十里が魔法で持ち上げ、触れていた手を離れた。すると反対側の電磁石は間にゴムボールでも挟まっているかのように、ぶつかる前に振り上がった。

「強い同極のクーロン力を持つ物体が接近すると斥力が増大し、衝突はしません。しかし——」

鈴音は五十里は実験機器の付近に備えられたヘッドセットを装着してパネルを操作した。

その瞬間、2つの電磁石は中央で衝突し、会場に轟音が木霊する。機器から離れているとはいえ、ヘッドセットを付けていない生徒達は耳を塞いだ。それが1番後ろの生徒まで響いていたのだから相当な

音なのだろう。

再び鈴音がパネルを操作すると電磁石は無音の弾き合いに戻った。

「——このように魔法によって電気的斥力は低減できます。そして私達はこのクローン力を10万分の1に低下する魔法式を完成させました」

会場は大きくどよめいた。

そして1高のメインのデモ機が舞台下からせり上がってくる。その見た目は巨大なピストンがついたエンジン。コンペ用の中が透けて見える素材を使っている。

鈴音はこのデモ機の説明を始めた。

「この装置は中性子線の有毒性を考慮して水素ガスを使っています。まず、円筒内に充填させた水素ガスを放出系魔法によってプラズマ化し、クローン力と重力制御の魔法を同時に発動させます」

デモ機は五十里が操作し、ゆっくりと動き出した。

「そしてクローン力制御魔法によって斥力の低下したプラズマは円筒中央に集められ、核融合反応が発生します。この過程に必要な時間は0.1秒です」

鈴音の説明は続く。

「核融合反応は自律的に継続できません。そこで、私達の融合炉機関は核融合反応停止後に水素ガスを振動系魔法で冷却します。この時回収した熱量は重力制御とクローン力制御のエネルギーに当てられます」

説明通りに動くデモ機に会場にいる誰もが見入っていた。

あたりまえだ。

誰も成し遂げたことがない事を、今、この場で見る事ができているのだから。

「現段階では高ランクの魔法師が必要です。しかし、いずれは点火用の魔法師だけで十分な重力制御型魔法式熱核融合炉が実現できる……そう私達は確信します」

こう鈴音が締めくくると、会場は今まで以上に大きな拍手に包まれた。

審査員の席に座っているあずさや他校の生徒、深雪やほのか達、研究者や教授らも全員が拍手していた。

これまで重力制御型熱核融合炉が不可能とされてきたのは、対象の質量が減少してしまうからだだった。

それを新技術である「ループ・キャスト」を使って実現させる事ができた。もし、実験機ではなく本物の機関の制作に成功すれば鈴音達の名前は教科書に載るだろう。

会場内全体が高揚している頃、埠頭の一角では無人のトラックがある場所を目掛けて走り出した。荷台の中に危険な物を乗せて。

もちろんそんな事はまだ誰も知らない。トラックは徐々にスピードを上げていった。

他校の発表まで10分ある。この時間は交代時間となっており、デモ機の片付けや次の舞台のセッティングをする。ただのコンペではないため、メンバー達はこの短い時間での作業が一番忙しいのではないだろうか。

片付けをしている達也は、不意に後ろから声をかけられた。

「やあ。見事だったよ」

「カーディナル・ジョージか。ありがとう……とでも言うべきかな？」

「別にいいよ」

狙ったかのように話しかけたのは吉祥寺だった。

吉祥寺はわざわざ達也と同じ場所にコンソールを設置した。効率

よくコンペを進めるためにもう1つコネクターがあるのだが、おそらく達也に話しかけたかったのだろう。

「まさか重力制御型熱核融合炉がテーマだったとはね。でも、僕も負けないよ」

吉祥寺は舞台から降りようとした達也の背中にそう言った。

そしてその頃、警備の学生らはコンペが順調に進む事で完全に油断していた。もちろん全員ではない。しかし、高校生の身で長時間の警備活動は心身共に疲労が溜まる。実戦経験のある生徒は10人に1人いれば良い方だろう。

さすがにもう大丈夫。

そう思う彼らを嘲笑うかのように……………

爆発の衝撃と轟音が会場を揺らした。

第73話 横浜事変

西暦2095年10月30日午後3時30分。

後世において人類史の転換点と評された事件【灼熱のハロウィン】。その発端として起こった【横浜事変】はこの時刻に発生したと伝えられている。

1 高の発表が終わり、ロビーで話していた響子と寿和は、遠くない場所で発生した爆発音にお喋りを中断し、スッと立った。

状況を確認しようとした寿和は携帯端末を取り出し、部下に電話をかける。

「俺だ。何があった?」

『た、大変です! 港の管制ビルにトラックが突っ込みました!』

「何っ!? よし、すぐ向かう」

寿和が電話を終えて振り返ると、響子も同じように状況を伝えられていたらしく、携帯端末を耳から離していた。

「本官は現場へ向かいます」

「私は残ります」

「了解です。何かあったら連絡を!」

そうして寿和は駐車場へ向かい、自分の車へ飛び込むようにして乗り込む。

数分後、現場へ急行している車の中で搭載してある通信システムに向かって寿和は情報を求めた。

「他に情報は?」

『追加のトラックはありません。しかし特攻してきた車両は炎上中。管制ビルの職員は避難を開始しました』

(避難だって? 船の管制ビルの職員がか!?)

狙われたのは山下埠頭の出入口に建てられている出入港管制ビル。空港にある管制ビルと同じように船の入港や出港の指示を送っている。

幸い構造物は強固だったために建物に被害は無く怪我人も少なかったが、職員は直ちに避難を余儀なくされた。

つまり、避難の間は警備隊に引き継がれるまで山下埠頭は無防備な状態となる。これは政治家の影響でもあり、国防軍や警察の勢力拡大を嫌っていたので港に戦闘員は配置されていないのだ。

『あっ！』

「どうした！」

『貨物船からミサイルが発射されました！』

「船の船籍は？」

『オーストラリアです。しかし偽装国籍の可能性大！埠頭に着岸しつつあり！』

「くそっ・・・俺はまだ着きそうにない！沿岸防衛は諦めろ！」

『了解！』

船籍は偽装。しかもミサイルを積んでいるVLS付きの揚陸艦。陸上部隊もたんまり積んでるだろう。

寿和は別の連絡先に電話をかけた。

「親父！現在横浜山下埠頭で偽装した揚陸艦が侵攻中。国防軍に出撃要請を！あと俺の雷丸とエリカの大蛇丸を届けてくれ！」

『かまわんが、何に使うのだ？』

「何言ってるんだ。戦うのさ！」

◇？ ◇？ ◇？ ◇？

午後3時37分。

会場に集まっている生徒達はまだパニックにはなっていないものの、状況を理解していなかった。

「お兄様！」

「深雪！」

ステージの上に立っていた達也は深雪が駆け寄ってくると、ステージの端からバツと跳んで妹の傍に降り立った。

「何があったのでしょうか？爆発・・・ですよね？」

「グレネードだな。場所は出入口付近だろう」

達也はこの爆発がグレネードによるものだとすぐにわかった。独

立魔装大隊での訓練で似たような爆発を体験している。

発生場所も音の方向から簡単に推測できた。

「グレネード!? 智宏さんは大丈夫でしょうか」

「智宏は……いまはこの会場と反対方向にいるな。巻き込まれてはいないみたいだ。正面は手配した警備員が担当している。ここに来るなら簡単には突破されないはずだよ」

「そうですか。よかった」

深雪は安堵していたが、達也の中の違和感は無くならない。

突破されないと言ってもそれは通常の犯罪組織であつて、もしどこかの国家機関が関与しているならばここに到達する可能性は高くなる。いくら実戦経験がある警備員であつても、本職に太刀打ちできないだろう。

爆発の余波が収まると、次に複数の独特な銃声が聞こえてきた。

(この銃声は対魔法師用のハイパワーライフル!)

現在、銃の弾丸は魔法によって防ぐ事ができる。例えば十文字家のフアランクスや、まだ非公開だが智宏のラムなど、歩兵の戦闘において敵の銃撃を防ぐ手段はこちらに大きなアドバンテージをもたらしている。

しかし、魔法師を敵視している連中は恐ろしい物を編み出した。

それは魔法師の防壁を無効化し、高い貫通性を誇る高速銃弾を搭載したハイパワーライフルだ。

高速弾の開発により、これを防御するには魔法力を集中して注ぎ込まなくてはならない。と、言うがそんなじよそこの小国では高い実戦レベルのハイパワーライフルは作れない。それこそ国家の支援を受けていなければならぬだろう。

ならば敵のパトロンは大亜連合。いや、侵攻軍自体が大亜連合の正規軍という可能性もある。

ここで達也は考えた。

自分のすべき事はただ一つ。深雪を安全な場所まで避難させることだ。

だがここには1高の生徒が、智宏や深雪の友人がいる。彼らを守る

義務は無いが、深雪も1人だけ避難するような行為は絶対にしないだろう。それに達也自身も抵抗があった。

考えている内に、ハイパワーライフルの銃声が大きく聞こえるようになり、バタバタと足音と共に武装した兵士が会場になだれ込んで来た。

◇? ◇? ◇? ◇?

一方、グレネードの爆発音を聞いた智宏は、「しまった」という顔をしていた。

(油断していた!まさかこのタイミングで仕掛けてくるとは!)

智宏は仕掛けてくるなら人がごった返すコンペ終了時と考えていたのだ。

さらに正面入口から銃声が聞こえ始めると、本格的にヤバいと実感する。

ここは会場とは反対と場所。もしかすると逃げる可能性を考慮してここにも敵が来るかもしれない。

そう思った直後、廊下の角から敵と見られる男達が現れた。その数はパツと見で2個分隊。

「お前は魔法科高校の生徒だな? デバイスを外せ!」

(ここまで来てるんなら会場にも到達した部隊がいるかもしれない... あいつらとの距離は20mもないか)

「おいっ!」

突然しびれを切らした兵士の1人がハイパワーライフルを智宏の近くに向けて発砲した。

弾丸は智宏を狙ったものではなかったが、防御魔法【ラム】を展開してオートで防いでしまったため、智宏の横を通り過ぎる事は無く、途中でチカツと見えた光と共に消えてしまった。

「あれ?」

「おい... お前、今撃ったな?」

「な、なんだ」

智宏の迫力に発砲した兵士が後ずさる。

「撃ったな？」

「こいつ何を言ってる……」

「何をしている、撃て！射殺して構わん！」

隊長らしき男が命令を下した直後、智宏達がいる空間は電気が消えた時のように暗くなり、天井には無数の星が現れる。

「二階級特進おめでとう。さらばだ、諸君」

室内戦闘において最強の一角である収束系魔法【流星群】。その本領がこの場で発揮される。

煌めく星は敵兵が銃を撃つ前に降り注ぎ、ハイパワーライフルごと敵兵の身体を穴だらけにした。

傍から見れば光が貫通したように見えるが、攻撃対象のみに穴を開けるようになってるので、床や壁には穴が開かなかつた。

もちろん威力を上げて発動すれば、床にも穴を開ける事が可能だ。

彼らが床に倒れると、傷口から血が噴き出した。流星群の光は特別高い温度を持っているわけではない。高熱による火傷で傷口を塞ぐどころか、それ以前に熱を持っていないのだから。

「やばいな。これだけ裏から来てるってことは正面は突破されてるかもしれない」

そう言って智宏は死体を放置して正面入口に走っていく。

◇? ◇? ◇? ◇?

なだれ込んできた男達に真っ先に反応したのはステージに上がっていた三高の生徒だった。九校戦でもトップの順位を維持し続けているだけあって、個人のレベルが高い。

しかし、それに気がついた侵入者はステージに向けてハイパワーライフルを発砲した。

弾丸が壁にめり込み、重機関銃が命中したかのような弾痕から見て相当な威力だと達也は思った。

「大人しくしろ！」

「デバイスを外して床に置くんだ！」

悔しそうな顔で床にCADを置く吉祥寺達三高生徒。それを見た会場の生徒もCADを手放した。

「おいっ、お前もだ！」

ただ、達也と深雪だけCADを置いていなかったため、侵入者は銃を構えたまま近づいてくる。

達也はこの時会場に入ってきた侵入者6名に既に照準を合わせており、いつでも消せる・・・準備は整っていた。しかしこの場である魔法を使うのは好ましくない。ただ、いざと言う時は仕方がない。そう判断した。

「貴様ー！」

苛立ちを隠せない侵入者は、智宏の時とは違い初弾から達也を狙って発砲した。

その距離およそ3m。魔法が発達したこの時代でも、ハイパワーライフルを近距离で防ぐ手段は限られている。会場の間は2人に注目しており、誰もが弾丸があのかの生徒の身体を破壊するだろうと思ってしまう。

だが――

「な、何？」

達也から血は出ておらず、先程までだらんと下がっていた腕はいつの間にか胸の位置に来ていた。

不思議に思った侵入者は、悪い予感を頭に浮かべながらハイパワーライフルを連射した。

その予感は当たる事となり、発砲と同時に達也の腕の位置が変わり、何かを掴み取っているように拳が握られていた。

「掴み取ったのか!?!あの弾を!?!」

「おいどうするー！」

「化け物めっー！」

後ろで問いかけた仲間の言葉は耳に入らず、侵入者はナイフを抜いて、良く訓練された動きで達也に襲いかかった。

防げるはずのない弾丸を防いだ。その事が侵入者の脳内を刺激し、

銃ではダメだという判断を導き出したのだろう。

しかし達也にそんな近接戦闘は通じない。一瞬で間合いを詰めた達也は、手刀で侵入者の腕を切り落としたのだ。

吹き出す鮮血。

その血は達也の服を赤に染め、首や頬にも飛び散った。腕を切られた侵入者は、達也のパンチで沈む。

結果、その侵入者が出来たのは自分の血で達也を染めるだけだった。

第74話

梓弓

会場に舞う鮮血。

侵入者はその場に倒れると血溜まりを作った。

「お兄様、血糊を落とします」

そう言った深雪はCADを操作して達也の制服や身体についた返り血を落とした。「埃を落とします」と同じような落ち着いた声だったため、会場の人間は今起こっているのが現実なのかそうでないのかが一瞬わからなかった。

ハツとなる警備隊。

彼らはすぐに動いた。

「取り押さえろー!」

魔法が侵入者に放たれ、あつという間に制圧された。回収されたハイパワーライフルは、深雪が中の弾を凍らせて使用不能となる。

それと同時に深雪は床に倒れている男の傷口を塞ぎ、血溜まりを凍結させて粉状にした。

ニツコリ微笑んだ深雪。

その素晴らしい顔を達也が見ていると、座席の方から走ってくる者がいた。

「達也くん!」

「達也!」

そう達也を呼んだのはエリカとレオ。

2人は既にCADを持っていつでも戦えるようにしていた。

好戦的?なのは変わらない2人。

しかしそれよりも強い圧が2人をどけた。

「達也さん!お怪我はありませんか!?手は大丈夫ですか!」

嵐のようにステージ下まで掛けてきたほのかは、心配のあまりエリカとレオを横に押しつけて達也に心配そうな声で話しかけた。

実際は弾丸を分解して無力化したのだが、バレるわけにはいかない

ので、掴んだという演技をした。なので怪我はしていない。もちろん口には出さなかったが。

「大丈夫だ」

そう達也は手を閉じたり開いたりして見せる。

「ほのかってこんな力あったっけ？まあいいや。達也くん、これからどうする？」

「そうだな……まず正面の敵を片付けないと建物からは出れなさそうだ」

「じゃ、あたし達も行くわ。戦力は必要でしょ？」

「おう！その通りだ！」

レオがそう言って拳を上げる。やる気は十分そうだが、ここで断ったら勝手に突撃されそうで正直不安だ。

時間もないため、達也は連れて行くという選択肢を選ばざるをえなかった。

「仕方ない。じゃあ行くぞ」

達也を戦闘に一行は出入口へ向かったが、彼ら呼び止める者がいた。

「待て！司波達也！」

それは九校戦で戦った相手、吉祥寺真紅郎だった。

「なんの用だ」

「今のは分子ディバイダーじゃないのか！なぜUSNA軍所属のスターズが持つ魔法を君が使える!？」

吉祥寺の発言に会場がざわめく。

(知識を持つが故の誤解……か)

「なぜだ！」

「君には関係ない。奴らの狙いは俺達魔法師だ。今はそんな事言ってる場合なのか？」

達也はそう切り捨て、真由美とあずさに視線を向けた後さっさと会場を出て行ってしまった。

彼らが会場から消えた後、一際大きな爆発が会場を揺らし、多くの女子生徒がパニック状態となってしまう。

だが、中でも冷静な者は何名かおり、生徒を落ち着かせようと動いている。真由美もその1人だった。真由美はステージから降りてあずさの座っている席に向かった。

「あーちゃん、あーちゃん！」

「……………」

呼びかけても中々反応しない。あずさは混乱しているのだ。

「中条あずさ生徒会長！」

「はっ、はい！」

肩を揺さぶられようやく真由美に気が付くあずさ。

「このままじゃパニックが大きくなって怪我人がでてしまうわ。だからあーちゃん、貴女が鎮めてちょうだい」

「え!?!でもあれは……………」

「あーちゃんの魔法はこういう時のために使うべきよ。お願い、貴女の力が必要な。責任は私が取るわ」

「会——七草先輩……………わかりました」

あずさは力強く頷くと席を立ち、制服の第1ボタンと第2ボタンを開け、中からどنگりのようなロケットを取り出した。

このロケットはただのロケットではない。実はこれ、CADなのだ。あずさが使う魔法の中で1つだけの魔法を補助するためのデバイス。たった1種類の魔法だけを記録しているので、これだけ小さくできるのだ。

ロケットを握りしめ、あずさはサイオンを注ぎ込んだ。

彼女が使うのは情動干渉魔法【梓弓】。あずさだけが使える魔法だ。この魔法は精神に干渉するため、未成年の使用に関しては極めて大きな規制がかかっている。先程あずさが躊躇ったのはそのためだ。

サイオンが注ぎ込まれると、ロケットを中心に弓が現れる。あずさは弦を引き、パツと離すと澄んだ音色が会場を通り抜けた。

すると会場の人々は数秒の間無意識となり、混乱が収まった。

「皆さん！私は第一高校の七草真由美です！」

すかさず真由美はステージに上がると、会場全体にマイクで呼びかける。

「現在横浜は謎の勢力により攻撃されています！情報によれば港に停泊している所属不明艦からのミサイル攻撃もあるそうです」

普通なら信じられない事だ。しかし、真由美が言えばそうではない。七草という名は伊達ではなく、彼女に注目している人々はその事が事実であると察してしまった。

十師族とはそれだけの立場と責任があるのだ。

「先程捕縛した男達もその仲間でしょう。狙いは魔法師や魔法技術である可能性もあります。この会場は地下通路でシエルターに繋がっています。まずはそこへ避難しましょう」

そう言う真由美に賛同する者、本当にそれでいいのかと疑う者、そもそもシエルターは耐えられるのかと考える者が会場に現れる。

真由美もステージからそういった者達の表情がよく見えた。

しかし騒ぐ者はいない。己の考えが絶対に正しいとは思っていないからだ。

「シエルターは敵の空襲に耐えるくらいの耐久性はあるはずですが魔法攻撃に対しては不明です。だからと言って避難しないわけには行きません。最も危険なのは、ここに留まり続けることです！」

真由美の言葉に頷く教師達。各学校の頭の回る生徒も理解しているようだ。

「それでは各学校の代表は生徒を集めて避難を開始してください！」

その言葉で会場は一気に騒がしくなる。しかしそれはパニックではなく、代表生徒が自校の生徒を集めている声だった。

その動きを見て大丈夫だと思った真由美は、ステージから降りて一高の生徒を集めているあずさに話しかけた。

「あーちゃん」

「はい？」

「私はやる事があるから残るわ」

「え！でも！」

「心配しないで。皆や先生方もいるから」

「……わかりました。ご無事で」

残ると言った真由美にあずさは狼狽えたが、生徒会長は自分である

と直ぐに立ち直る。そんな成長したあずさに満足した真由美は、身体を翻して鈴音や摩利のいる控え室へ走って行った。

◇? ◇? ◇? ◇?

会場を出た達也達は、正面入口に向かっていた。

正面入口ではハイパワーライフルと魔法の撃ち合いが発生しており、互いにバリケードやシールドを作って応戦していた。

敵戦力は不明だが、統一された服を着ている者やバラバラな服を着ている者が敵にいたとなると、一般市民に化けたゲリラも居ることになる。少しやっかいだ。

対するこちら側には魔法協会が雇ったプロの魔法師。何名か負傷しているが、突破される様子はない。おそらく、会場に来た敵の後続を遮断して今のようになっているのだろう。

達也達は小走りで正面入口へ向かっているが、突き当たりに来た時、達也はレオの襟首をガシツと掴む。

「ぐえっ」

「生まれ！ハイパワーライフルの射線に入るぞ！」

「……先に言ってくれよ……ゲホッ」

「でもおかげで命拾い」

先行する達也、深雪、エリカ、レオに続き、雫、ほのか、幹比古、美月が到着した。

達也はチラリと角から顔を出し、戦況を確認。そして深雪に目を向けた。

「深雪。ハイパワーライフルを黙らせてくれ」

「よろこんで。しかしこの人数となると……」

「わかっているさ」

困惑する一同。それを他所に深雪は達也の差し出した手を取り、指を絡めた。若干ほのかの視線が厳しくなった気もするが、深雪は気にせず続けた。

深雪の左手にはCADが握られており、目をつぶって標的を定める

と、魔法が発動された。

それは火をも凍りつかせる魔法。振動減速系概念拡張魔法
【凍火】だ。
フリーズ・フレイム

この魔法は燃焼を妨害する魔法で、対象物の熱量を一定以下に抑制する事ができる。つまり、火薬を使用する銃火器はその役目を果たせない、ただの鉄の塊と化す。

引き金を引いても弾が発射されない現象にみまわれたゲリラ達。その隙を逃さず、達也とエリカ、幹比古は突進した。レオはまだゲホゲホやっている。

達也は手刀でゲリラを切り裂き、エリカは武装一体型デバイスに仕込まれていた刃で頸動脈を的確に斬り、幹比古は術で複数の敵を殲滅させた。

辺りは返り血で汚れ、柱にも血が飛び散った。

「さて………下がれ！」

達也が叫ぶと同時に、エリカと幹比古は柱の影に隠れた。そしてそこへ弾が降り注ぐ。まだ敵の陣地があったようだ。

(面倒な………あれは)

ふと達也が上を見ると、ちょうど智宏が正面入口に着いたタイミン
グだった。

達也の視線に気がついたゲリラは、その方向へ視線を向けると、智
宏に気が付き射撃を開始する。

だが――

「馬鹿な！」

「なぜ弾かれる!?!」

混乱するゲリラ。当たり前だ。智宏は全て【ラム】で防いでいるの
だから。

それでも射撃を止めないゲリラに、智宏は冷たい視線を向けてい
た。

「智宏……」

達也が話しかける。

「遊んでいる暇はないぞー！」

「……………わかってるよ！」

智宏はC A Dを敵集団に向け、引き金を引く。すると【重力核】が発動し、対象のゲリラ数人が圧縮、死亡した。必死に撃っていたわりに、呆気ない最後であった。

正面入口の敵を全滅させたところで、ようやくレオが駆けつけた。た。

「ありや……出る幕がなかったぜ」

「ドンマイ」

「こんにやろ……」

戦えなくて残念がるレオに、エリカは背中を叩いて励ました。いや、あれは励ましているのだろうか。ニヤニヤしながら叩いているため、煽っているように見える。

レオの後には、顔色の悪い美月達が続いてきた。周囲には切断された死体もあり、吐き気を催す。

「すまない。刺激が強かったか？」

「いえ……！大丈夫です」

達也に尋ねられたのは気丈に応える。

「エリカ、その武器はなんなの？」

智宏はエリカが珍しい武器を持っているのに気がつく。

「これ？これはねえ、刃を隠しておける武装一体型CADよ」

「へえー」

「来年から警察に正式導入されるの。どう？智宏君も買ってかない？」

「あー、うん。遠慮しとく」

別にここで商売を始めなくてもいいのに。と智宏は思ったが、場の空気を変えるにエリカがやっているのだと察する。

しかしエリカが営業するのも間違いいはない。実は千葉家の収入は白兵戦用の武器を売った金がメインなのだ。

「さて、今は情報が欲しい。どこかにアクセスできる場所があればいいんだが……」

悩む達也。

「じゃあVIP会議室を使おうよ」

ほのかを支えていた雫は、達也達が歩いてきた通路とは別の通路を指さした。

「そんな部屋があるのか？」

「うん、ここは政治家とかも使うから。大抵の情報にはアクセスできるはずだよ」

「よく知ってるわね」

深雪が感心した様子で言う。

「暗証キーもアクセスコードも知ってる」

「「うそお・・・」」

「御父様、雫の事溺愛してるからねえ！」

そうほのかが付け足す。

その理由に一同は納得してしまった。

夏休みに出会ったあの男性、もとい雫の父親は確かに雫の事を大事に思っていた。車に乗り込むまで雫をチラチラ見てたのを覚えている。

とりあえず道は出来た。迷っている暇はない。

「じゃあ行くぞ」

達也の言葉に一同は頷き、雫の案内でVIP会議室へと走り出した。

VIP会議室へ到着すると、雫はコンソールに手を伸ばし、素早い動きでアクセスコードを使ってモニターに情報を映し出した。

ちなみにVIP会議室の扉の鍵も雫が持っていたりする。どんだけ溺愛されてるんだ。

「雫、よくやったな」

「うんー」

智宏は雫の肩に手を置く。雫は恥ずかしそうに頬を染めたが、智宏の顔を見て微笑んだ。

雫に変わり、達也が操作すると、巨大なモニターに現在の状況が映し出された。

侵攻された場所は真っ赤に染まり、敵部隊のおおよその侵攻ルート

も示される。これだけの短時間でここまで制圧されたのだ。敵の規模は予想以上に大きいだろう。おそらく揚陸艦と市内に潜んでいた敵兵士は600人から800人。歩兵1個大隊が敵戦力の予想だ。

「これは……」

智宏がモニターを見て唸る。

「何よ、敵の動きがはや過ぎるじゃない」

そういう知識もあるエリカも、この状況に焦りを覚える。

「お兄様、これからどうなさいますか？」

「ここについては敵に見つかってしまおう。避難する方がいいだろう」

達也は全員を見ながら言う。反対する者はいなかった。

「じゃあシェルターに行くかい？」

「そうなるよ……この地下通路だな」

幹比古の提案にレオも賛同し、ルートを考える。

「いや、地下はダメだ。理由は後で説明する。今は避難するよりやる事があるんだ」

「やる事？あつ、デモ機か！」

幹比古は達也の考えた事がわかった。デモ機は巨大なため、避難する際には置いていかなければならない。ここは魔法科学の重要機密となりうる技術が集まる場所。敵には渡したくない。

「データは残せない。皆すまない、少し時間をもらう」

そして一行はデモ機が置かれている部屋へ向かう。

部屋に入ると、そこには先客がいた。もちろん敵ではなく、知った顔だった。

「先輩方何しているんですか！」

「四葉か。それに達也君も」

智宏が声をあげると、摩利がそれに応える。なぜ摩利かというところ、いきなり開いた扉に真っ先に反応したのが彼女だったからだ。

よく見ると真由美や鈴音、五十里、花音も部屋にいた。真由美は智宏の顔を見るとスススと近寄ってくる。

「七草先輩！なんでここに!？」

「ごめんね智宏君。リンちゃん達を置いてはいけないわ」

「僕達はデータの消去をしてるのさ。もしかして司波君も？」

「ええ」

「だったらそっち頼めるかい？」

「わかりました」

データはもうひとつの機械に入っている。だが五十里は鈴音のサポートで動けないため、達也に協力を仰いだ。達也も了承し、直ぐにデータ消去に取り掛かる。

それ以外のメンバーは、女性を中心に、智宏達は警戒陣を敷いた。数分後、何事もなく達也が戻ってきた。

「お疲れ様。こっちも終わったよ」

「ならよかったです」

データの消去は完了した。

さらに――

「お前たち、まだいたのか」

克人が服部と沢木を引き連れて部屋に入ってきた。克人は智宏を見つけると咎めるような視線を送る。

「四葉、お前の持ち場はどうした？」

「これまで分隊規模の敵を数回全滅させましたが、途中達也達と会いまして、現在は彼らの護衛です」

「……よかろう。他の生徒は地下通路で避難しているからな。我々も急がねば」

「地下通路ですって？」

珍しく達也が大きな声で発言する。克人も不思議に思ったらしく、達也に向き直った。

「地下通路では不味いのか？」

「いえ、何事もなければいいのですが、地下通路は直結しているため逃げ場がありません。ですから――」

「遭遇戦！」

服部が達也が言うより先に答えを出した。達也は気にせず続ける。

「はい。ですから敵と正面衝突する可能性が！」

「よし、服部と沢木は中条達を追え！」

「はい！」

2人は克人の指示で素早く動き、あずさの後を追う。

「お前達は どうする？」

「一旦情報を整理してから地上を通って避難します」

「わかった。俺は外で敵を迎え撃つ。できるだけ早く避難しろ」

そう言つて克人も部屋を出て行った。

残された智宏達は、隣の控え室で情報を再び集め出した。この部屋も雫のおかげで情報が得られやすくなっており、真由美が情報をまとめ、全員に説明した。

「敵はミサイルを搭載した揚陸艦1隻ともう1隻、計2隻よ」

「2隻？1隻だけじゃなかったんですか？」

エリカが問う。

「こつちは元々泊まっていたみたいね。なんでわからなかったのかしら」

「と、いう事は海岸沿いは制圧されていますね。どう避難するのですか？」

「国防軍の輸送船が来るそうよ」

敵は海岸沿いを制圧したが、一定以上の範囲外には出ていなかった。おそらく兵站的な問題もあるのだろうが、防衛に回す兵力に余裕がないのかもしれない。

理由はどうであれ、全ての埠頭が制圧されたわけではないため、国防軍は館山港所属の輸送船をこちらへ回してくれるらしい。

「ねー啓、敵は何が目的なんだろう？」

「ここにしかない物じゃないかな？メインデータバンクとかね。ここ以外には京都にしかないから」

魔法を使用した科学技術。それは機密と言える物が多く、五十里が言っていたように、横浜以外には京都にしか存在しない。

だったら何故ここなのか。それはおそらくこのコンペ。ここには優秀な学生と、彼らの研究成果がある。まとめてかささうにはもってこいの日だった。

それに京都は山に囲まれており、制圧まで時間がかかる。一方横浜

は港からの奇襲攻撃で今のような状態を生み出せるほど防御面が弱い。どちらを攻めると問われたら横浜と答えるのが普通だろう。

「……中条さんからです。司波君の読み通り戦闘が地下で始まっています」

鈴音が携帯端末に入ったメールを確認する。

「戦況は？」

「戦える生徒や先生方が頑張つて持ちこたえているそうです。早く服部君達が到着すれば良いのですが……」

達也の予想通り、地下通路には敵兵が潜んでおり、あずさ達を待ち伏せしていた。

論文コンペに來ている生徒は全員魔法を使えるが、九校戦と違って武闘派の者は少ない。障壁を張つたりして抵抗しているが、あまり持ちそうになかった。

今そこへ服部と沢木が向かっている。間に合うのを願うしかない。すると、智宏と達也は背後から迫る何かを感じ取った。2人は瞬時に懐から拳銃型CADを抜き取り、その方向へ構える。

(達也?)

しかし、智宏は達也にCADを下げさせられた。

「2人共!?!」

真由美が驚くのもつかの間、達也は引き金を引いた。その目標は会場出入口に迫る大型トラック。

達也の魔法【雲散霧消】ミスト・デイスパージョンが命中すると、その大型トラックは塵と成って消え去った。運転していたドライバーは外に放り出され、階段に頭をぶつけて気絶。大型トラックの残骸(粉)は勢いを殺さずに、会場出入口に降りかかった。

「何……今の」

真由美が達也に恐る恐る聞いた。真由美は智宏と達也のような能力を持っているわけではないが、「マルチ・スコープ」という多角的な視覚的情報を取得できる魔法が使えるのだ。

そんな真由美を見て智宏はしまったという顔をした。

(だから俺がやった方がよかったのに……いや待てよ?)

だが智宏は考える。なぜ自分でも【重力核】で止められたのに押さえられたのかと。

そして理解する。あのトラックに爆発物が積んであった場合、潰した途端に爆発する恐れがあったと。それに、どれくらいの威力かもわからずに爆発させるといふのは非常にまずい。

おかげで会場に被害は出なかったが、その代償として知られたくない魔法を面倒臭い人に見られてしまった。

真由美の問に達也は答えない。彼女は再び問いただそうと口を開いた瞬間――

「やっほー。お待たせ」

野戦服を着た女性、藤林響子が控え室に入ってきた。

第76話

封印解除

トラックが消滅すると敵もその異変に気がついたのか、ミサイル攻撃を開始した。目標は論文コンペ会場。どうやらこの脅威度が上がったらしい。

外の警備をしていた克人もこちらに向かってくるミサイルの群れを目視しており、急いで会場の出入口へ走った。克人は高速移動の魔法も得意としており、その巨体からは考えられないスピードで疾走する。

命中する前にたどり着いた克人は「フアランス」を発動。世界トップクラスの防御を空中に展開した。

しかし、そこにミサイルが命中することはなかった。障壁に命中する寸前、横から別の魔法がミサイルを迎撃したからだ。

克人は近づいてくる軍用車両を見つける。一瞬警戒したが、それが国防軍のものであると確認すると警戒を解いた。

「スーパー・ソニック・ランチャー……？101の方ですか！」
「国防陸軍第101旅団独立魔装大隊大尉、真田であります。さすがは十文字家、我々の事をご存知とは」

真田はロケットランチャーみたいな武器を車内に戻し、そのまま外へ出た。

「失礼。あまり話すべき内容ではなさそうですね」

「おそれいります。ここは部下が守りますので、次期当主殿はこちらへ」

車内からは真田の部下が数名出てくる。克人はその一人一人が普通の国防軍兵士よりも実力が上であると気がつく。

それにしてもこの士官は自分に何の用だろうか。克人はそう思いながら会場の中へと戻って行った。

突然響子が現れた控え室では、彼女の事をよく知っている真由美がいきなりの登場に驚いていた。

「な、なんでここに？」

その質問に響子が答えることはなかった。

別の人物が現れたからだ。その者は響子と同じ野戦服を身にまとい、少佐の階級章をつけた壮年の男性だった。

「特尉。情報統制は一時的ですが解除されました」

そう響子が言うと、達也は姿勢を正して入ってきた男性に向かって敬礼をした。これにはたった今控え室に入った克人も、その場にいる真由美やほのか達も驚きを隠せない。

「私は国防陸軍少佐、風間玄信です。所属は詮索しないよう」

「貴官がああ……師族会議十文字家代表代理、十文字克人です」

克人の名乗りに風間は小さく頷くと、身体の向きを変え、全員に向き直った。

「藤林、状況を」

「はっ。現在我が軍は保土ヶ谷駐留の中隊が交戦中。さらに鶴見と藤沢より各一個大隊が向かっています。また、魔法協会関東支部も義勇軍を結成。これもまた交戦中とのことです。敵の規模は不明ながら、敵艦2隻分の戦力と街中に潜んでいたゲリラを含め、かなりの数です」

響子は状況を智宏達に説明する。先程VIPルームでみた情報より細かい。敵軍は国防軍や義勇兵によってなんとか侵攻を抑えられており、戦闘区域は拡大していない。

また、敵の規模もわかっていないらしく、予想した一個大隊よりも多い可能性があった。

ただ、一般国民の避難が完了していないため、彼らが戦闘に巻き込まれる可能性は十分にある。それだけは避けなければならない。

「よろしい。では特尉」

智宏と深雪以外の生徒達は、その呼称で呼ばれた達也に顔を向ける。

「本部から我が隊も戦闘に加わるよう命令が下った。よって、貴官にも出動を命ずる」

「「っー」」

ほぼ全員が驚いた。当たり前だ。今まで一緒の学校生活を送ってきた同級生が軍人として招集されるなんて、一体誰が予測出来ただろうか。

誰かの口から言葉が出る前に、風間は視線一つで黙らせた。

「皆さんには、特別規則故この事は他言無用でお願いします」

その鋭い視線には誰も逆らえず、さすがの真由美や克人も黙り込んでしまった。これが実戦を経験したものの強さだ。

静かになる控え室。

では、と響子が言いかけた瞬間、控え室に携帯端末のコール音が鳴り響いた。

「ん？あ、俺か．．．．．もしもし」

その携帯端末の持ち主は智宏。全員が注目する中、智宏は気まずそうに表示された番号を確認してから電話に出た。

『私よ』

「母上」

電話は真夜からだった。

そして智宏が発した言葉に深雪がピクリと反応する。

『遅くなってごめんなさいね。こっちでも色々あって』

「ええ、構いませんが．．．．．どうかしたのですか？」

『四葉家当主として、あなたに命じます。敵を殲滅しなさい。生かしてこの国から帰さないように』

冷たい声だった。それは深雪ほどではないが、全てを凍らせるような．．．．．。

だが智宏は怯まない。それどころか――

「もちろんです」

そう返したのだ。

『必要とあらば、あの魔法の使用も許可します。徹底的にやりなさい』
「はい」

『専用CADはもうすぐ智宏さんの家に届くはずですよ。ああそれと、あの2人に伝えて。許す、とね』

「は、はあ。わかりました」

『じゃ、頑張つてね』

そう言つて真夜は電話は切つた。

達也達も智宏にかかつてきた四葉家当主、四葉真夜からの電話が気になつていたようで、智宏が皆の方を向くと全員がまだこちらを見ていた。

すると智宏の近くにいた克人が口を開く。

「四葉。今のは四葉家当主殿からか？」

「はい、そうです」

「なんの用だつたのだ？」

「ちよつと十文字君！」

克人のストレートな質問に真由美が非難するような声を出す。プライベートな電話だつたのなら確かに克人の行動は非難されるものだ。

しかし今は違う。このタイミングでかかってくる電話の内容は限られる。それが十師族の当主からならなおさらだ。

「いいんですよ。命令があつただけです」

「命令？」

「敵を殲滅せよ。これだけです」

「………わかつた」

克人はなんとか納得したようだが、真由美や摩利達はその命令に畏怖する。

あの四葉真夜が殲滅せよと言つた。

あの魔王がその命令を息子に下した。

そしてその命令を智宏が受諾した。

それは敵に同情したくなるような結果になるだろう。

そしてこれは一部の者、風間や達也などといった実戦経験者しかわからなかつたが、智宏の目がいつもものそれとは違うものとなつているのに気がついた。

「さて、達也君。そろそろ」

先程コール音に遮られた響子が達也に言う。

「わかりました。皆すまない、先に避難してくれ」

そう言つて達也は控え室から出ていこうとする。

「達也」

しかし、智宏が達也を止めた。

「頑張れよ」

「……………ああ」

智宏は達也の手をしつかり握り、発破をかける。だが智宏が本当に伝えたい事は別にあった。智宏は達也の頭の中に直接真夜からの伝言を伝える。

真夜からの伝言に達也は一瞬驚いた表情を見せたが、直ぐに深雪へ顔を向けた。

「お兄様？」

「深雪」

「え、え、あのっ!?!」

達也は深雪に顔を近づける。いきなりということで深雪は混乱したが、達也が耳元で真夜からの伝言を深雪にも教えた。真剣な顔になる深雪。真夜の言葉、それが何を意味するのか。当事者である深雪は全てわかつていた。

全員が見守る中、深雪の前に跪く達也。深雪も兄の枷を外す覚悟を決める。

真夜が許してくれたのならそうしよう。

兄が全力で戦えるのならそうしよう。

深雪は達也の頬に手を添え、少し顔を自分の方へ向ける。そしてその額へ口付けをした。

その瞬間、眩い光の粒子が達也の身体から沸き立ち、通常では考えられないほどのサイオンの嵐が控え室に吹き荒れる。それなりの実力を持つエリカや真由美でもその勢いに負けてよろめいていた。

立ち上がった達也。深雪は慣れた動作で軽く膝を折り、スカートをつまんで達也にこう言った。

「お兄様、ご存分に」

「ああ。行ってくるよ」

達也は頷くと、今度こそ控え室を出ていった。彼が全力で戦うと知

り、その光景を思い浮かべる者はわずか数名。智宏もその中の1人
だった。

(達也が全力で戦う、か。ああ怖い怖い)

第77話

クリムゾン・プリンス

会場を出た智宏達は3手に別れた。

1つが響子が深雪や真由美達を護衛して徒歩でシエルターに向かうグループ。

1つが魔法協会関東支部へ向かう克人と、彼を護衛する2人の軍人の車。

1つが深雪達の避難経路を確保するため先行する智宏だ。

単身で行く智宏に対し、エリカや雫が「私も行く」と言ったが、智宏はそれを断って走り出した。彼女達を危険な目に合わせたくなかったのだ。

そして智宏達が会場から避難を始めた頃、あずさ達はまだ敵と戦闘中だった。しかし服部と沢木が到着したことにより戦況は有利になっている。

もちろん彼らだけが戦っているわけではない。あずさも空気の塊を銃口に固定し、発砲時に銃が暴発するようにしていた。その結果、現場はかなりエグいことになっており、手や指を失ったゲリラが血まみれでそこかしこに倒れていた。もちろん沢木や警備隊のメンバーが拘束済み。ナイフは警備隊が押収し、銃器は魔法で破壊している。

非日常的な光景に思わず目を塞ぎたくなかったあずさだが、生徒会長として今自分にできることは全員をシエルターまで送り届けることだと感じていたため、なんとか足を進めて前へ前へと歩いていった。

普通ならシエルターまでかかる時間の倍以上をかけてシエルターに到着したあずさ一行。辺りを警戒してあずさと沢木はシエルターの入口を開けた。中には誰もいなかった。それに電力は通っているし、非常食もある。ここは使えそうだった。

「皆さんー着きましたよー！」

そうあずさが喜んで呼びかける。無事についたのにホッとしたのか、他の生徒達も力を抜いた。だが、突然地下通路の天井にひびが

入った。

「いけない！全員中へ！」

沢木が叫ぶが遅かった。天井は一気に崩れ、鉄筋コンクリートや鉄骨が落ちてきた。先頭の何名かはシエルターに入れたが、ほとんどが外にいたままだった。

あずさが悲鳴をあげて顔を覆う。悲惨な光景を見たくなかったからだ。

沢木もあずさを庇って自身の後ろへ移動させたが、砂埃が収まるとあることに気がついた。

「中条！みんなは無事だぞ！」

「え？」

あずさは沢木の後ろから地下通路の方を見る。すると中腰くらいの高さまで空間ができていたのだ。

よく見ると、教師の甘楽が魔法で瓦礫を押さえていた。

「早く、中へ！」

苦しそうに甘楽が言う。

その言葉に真っ先に動かされたのは警備隊のメンバー。彼らは恐怖で動けない者の手を取り、シエルターへ引っ張っていく。

少しずつだが、瓦礫が下がってきている。時間がない。残りは数人で、鈴音に誘われて会場に来ていた千秋もその中の1人だった。

「早く来て！」

千秋の手を掴んだのは十三束だった。

そして甘楽を含めた3人がシエルターに飛び込んだ瞬間、魔法が解除されて瓦礫が地下通路へ落下した。

沢木は全員無事なのを確認する。あずさも同じ事をしていた。

甘楽は限界だったのか、肩で息をしていた。よく頑張ったものだ。

十三束と飛び込んだ千秋は、自分が彼に抱きついていたのに気が付き慌てて離れた。十三束も千秋を抱き寄せていた手を離し、距離を置いた。しかし、2人は恥ずかしそうにチラチラと互いの顔を見ては俯くを繰り返していた。

地下通路が崩落した後、地上で先行していた智宏は予想外の光景を

目にする。2機の直立戦車がシエルター入口を破壊していたのだ。直立戦車は1人乗りの戦闘車で、巨大チェーンソー、榴弾砲、バルカン砲などを積んでいる。

(しまったー地下通路がー)

すると対人センサーにでも反応したのか、直立戦車はこちらを向こうとしている。時間がないためのんびり戦えない。一気に終わらせる必要があった。

智宏は【重力核】をコックピットらしき中央部分に発動。すると中の操縦者ごとコックピットは潰れ、両腕両足が残った。全て潰してもよかったのだが、これから来る響子に渡した方がいいと思い、念の為に残しておいたのだ。

「……………さて」

携帯端末を取り出した智宏は、真由美に電話をかける。ワンコールで出た。

『智宏君?』

「先輩。シエルターの入口までの敵は掃討しました。でもシエルター入口が潰れています」

『なんですって!?!』

「原因は直立戦車でした」

『……………わかったわ。もう少しでそっちに着くから待ってて』
「了解です」

智宏がシエルター入口に到着してから10分が経過すると、ようやく深雪達もたどり着いた。人数も少し増えているようだが、おそらく途中で逃げ遅れた市民を合流したのだろう。

真由美や響子は陥没した地面を見て呆然となった。

「吉田君、あーちゃんや服部君達は無事?」

「はい。生き埋めにはなっていないようです」

幹比古は精霊を地下に送ってシエルター内の様子を確認する。九校戦で使った術と同じものだ。

智宏も響子に直立戦車の事を伝える。

「藤林さん。あれが直立戦車です」

「こんなものまで持ち出すなんて……これはサンプルとして回収しましょう。もしかして残してくれたの?」

「ゴックピットは潰してしまいましたが、一応残した方がいいと思つて」

「助かるわ」

兵器の質を見る限り、敵の装備は国防軍に遠く及ばない。しかし回収して研究材料にする事はできる。

「それで、どうします?」

深雪が響子に話しかける。

「ここが使えない以上、別の避難方法を考える必要があるわね」

「だったら私がへりを呼びます」

「私も。父に連絡して会社のへりをこつちにまわしてもらいます」

真由美と雫がそう言った。ここから移動するのは危険。かと言って留まるのも危険。残されるのは軍のトラックかヘリコプターによる市民の避難だ。なので2人の提案は非常にありがたい。

ただ、ここをへりポートとするには周囲の安全を確保することが必須だ。開けた場所ではあるが数本の道路と繋がっているため、そこが敵の侵入ルートになってしまう。

そのルートを遮断する者が必要だ。

「しかしここを守るには道路が多すぎるのでは?」

鈴音が真由美に言う。

「そうね……こんな時は立体的な地図が欲しいわね」

「ありますよ!」

「光井さん?」

「私の魔法ならできます!」

ほのかは携帯端末に映し出された地図を、目の前に立体的に展開した。

「こ、これは……」

さすがの響子も驚いた顔をしている。

「ありがとうございます光井さん。では——」

鈴音も一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに防衛線の作成を始めた。

地図をよく見ると、敵の侵攻ルートからこちらに通じる道が2本だけしかない場所がある。1つは地上の交差点、1つは立体交差点だ。ここを封鎖すれば少なくとも直立戦車や装甲車両等は通ることはできない。

しかし歩兵を無力化できるわけではないため、ヘリポートにも人員を配置する必要がある。話し合いの結果、地上の交差点には深雪、エリカ、レオ、幹比古、美月の5人。立体交差点には桐原、紗耶香、花音、五十里の4人が選ばれた。摩利は機械化部隊と相性が悪いため、真由美達を守ることになった。

さて、智宏はどこにいるのかと言うと、敵戦力を引きつけるための囮として前へ出向くことになった。もちろん智宏が言い出した事だ。

「智宏さん本気ですか!?!」

「1人じゃダメだよ」

深雪や雫が止めようとする。

「いいんだ。これも十師族の役目。十文字先輩も戦闘に参加するだろうから俺も行かなくちゃ」

「智宏君……」

「ここは七草先輩に任せます。では」

そして智宏は前線へ走って行く。

残された真由美達は、智宏が去った方をしばらく見ていた。

「頼もしいですね。私もここで部下と防衛を手伝います」

「それにはおよびませんよ」

響子の後の声はここにいる避難民のものではなかった。とつさに摩利がCADに手を伸ばしたが、声の主は彼女の見知った顔だった。

「え、寿和さん?」

「げ、和兄貴」

そう。ここにきたのはエリカの兄、千葉寿和だった。摩利は道場で度々顔を合わせ、彼氏である修次からも紹介されていた。

「久しぶりだね。未来の妹さん」

「あつ、いえ、そのお……」

摩利が顔を真っ赤にして俯く。もしかして摩利が千葉家に入るの

は決定事項なのだろうか。

恥ずかしがる摩利に対し、エリカは二つの意味で不機嫌だった。

「なんの用よ」

「まあまあ。あ、藤林さん。ここは我々警察に任せてください。あなた方は敵を排除するのが仕事のはずです」

「よろしいのですか？では我々は本隊と合流します」

寿和の申し出をありがたく受けた響子は、敬礼をした後部下を引き連れ本隊がいるであろう方向へ走り出した。

さらに寿和の同僚が数名遅れて到着する。

念の為、真由美はこれからの事を寿和達に説明すると、立体交差点が1人足りないと知った寿和が自分もそっちに行くと言ってくれた。

全員が配置に着く前に、寿和はエリカに近づいた。

「なによ」

「いい物持ってきたぞ。ほれ」

「あっ！」

寿和がエリカに手渡したのは大太刀【大蛇丸】。全長180cmもある巨大な武器だ。この武器は現在使いこなせるのがエリカしかないため、彼女専用の装備らしい。

欲しかった物が手に入ったのが嬉しかったのだろう。エリカは自然と笑みを浮かべていた。

「嬉しそうじゃないか」

「ふんっ………ありがとう」

◇？

◇？

◇？

◇？

一高とは別のコースで避難している三校勢。彼らは乗ってきたバスまで避難しようとしていた。

しかし、彼らがバスに到着した途端敵に見つかってしまい、バスのタイヤがやられてしまった。

「しまった！」

将輝が叫ぶ。

「先生！ここで防衛線を張り、バスを修理する間応戦しましょう！」

「よ、よしそうだな。吉祥寺、指揮はまかせる」

「はー！」

すぐに思考を切り替えた吉祥寺は、引率の先生に意見具申を行った。九校戦に参謀役として出ただけあつて、先生にとつても心強い存在だった。

「皆ーこれからバスを直す間敵と交戦する！バリケードを作つて応戦する班とタイヤを交換する班に分かれるんだ！」

吉祥寺の指示で生徒達は次々に動き出す。上級生も下級生もない。全員が一丸となつて動いていた。

怪我をした運転手をバスから運び出し、バリケードを作るまで防衛魔法を展開し、タイヤを取りに行く生徒達を援護し始める。

数分もすると防衛線が完成し、戦闘は膠着状態となる。だが本職である敵の方が優勢のため、徐々に押されつつあつた。

(・・・よし)

将輝はCADを操作し、ある魔法の起動式を選択した。そして立ち上がり、敵に向けて魔法を発動する。敵に魔法が命中すると、敵の身体は爆発するように弾けた。これは対象物内部の液体を瞬時に気化させる一条家の魔法【爆裂】。これをくらつた人間は血漿が気化し、その圧力で筋肉や皮膚を弾き飛ばし、真紅の花を咲かせる。

そのまま将輝は前進を開始。ゆっくりと進みながら魔法を連射。敵は次々に爆散していった。その光景に味方には吐き気を催す者が出てきた。敵も啞然とし、銃撃を止めてしまう者もいた。

しかし将輝は止まらず、敵を全滅させるまで魔法を撃ち続けた。クラスメイトは【クリムゾンプリンス】の真の意味を知ることとなる。

第78話 ムーバルスーツ

侵攻軍の揚陸艦に設けられた司令部では、予想以上の被害に焦りを覚えている将官が多数いた。こんな短時間に歩兵主力が抑えられるとは思っていなかったからだ。

司令官は主力の機甲部隊を出撃させることに決定。指示を出す隣りの輸送艦から装甲車が、揚陸艦から直立戦車が上陸し、隊列を組んで街へ進撃して行った。

同時刻、達也は独立魔装大隊の大型トレーラーに来ていた。

「これは……………」

「どうだい特尉」

「よくここまで量産できましたね」

トレーラー内には達也が開発した飛行魔法を搭載する「ムーバルスーツ」が人数分配備されていた。

急な注文だったのに対しここまで生産できた事に達也は感服する。達也は早速来ている服を脱ぎ捨て、ムーバルスーツを身につけた。

「大丈夫かい？」

「ええ。問題ありません」

「防弾、耐熱、緩衝、対BC兵器にパワーアシスト。詰め込めるものは全部詰め込んだよ」

「想像以上の性能ですね」

「そろそろいいか？」

風間が達也と真田の間に割って入る。

「申し訳ありません。長話がすぎました」

「では特尉、柳の所へ向かえ」

「了解」

達也は飛行魔法専用のCADが埋め込まれたバックルを叩き、空へ登って行った。そしてどれくらい上昇しただろうか。人がゴマ粒くらいにしか見えなくなるまでの高度に達した達也は、下に全長1mほ

どの小型無人偵察機を発見した。

辺りをよく見ると、戦闘が発生している上空に無人偵察機がぐるぐる回っていた。

そして達也は無人偵察機の排除に動き出す。無人偵察機の真上で飛行魔法をキャンセルし、自由落下で一気に降下。近づいた瞬間にミステイクスパージョン【雲散霧消】を発動。無人偵察機は消え去った。

一方、駐車場で交戦していた三高の生徒達は、将輝の活躍により脱出できる用意ができた。駐車場には敵の残骸と思われる皮膚片や血溜まりができており、三高の生徒に重傷者や死者が出なかった事が奇跡みたいだった。

「将輝……っちはOKだよ！脱出するなら今のうちだ！」
「……………」

吉祥寺が声をかけても将輝は動かない。ある方角を向いてなにか考え事をしているようだった。

「将輝？」
「俺はこのまま魔法協会支部に向かう。援軍に加わるよ」
「そんな！」

将輝の言葉に吉祥寺は驚いた。

「俺は一条だ。国を守る義務が責任がある」
「なら僕も行くよ」
「ダメだ。ジョージは皆を脱出させてくれ。お前にしか頼めないんだ」

「将輝……………わかった。無理しないでね」

吉祥寺は魔法協会支部がある方向へと走っていく将輝の姿が見えなくなるまで見送る。将輝に止められたが、本当は自分もついて行って戦いたかった。

しかし他の生徒を無事に脱出させるという将輝の頼みがある。信頼する友の頼みだ。やらないわけにはいかない。

吉祥寺はバスに乗り込むと、四方の座席に警戒役の生徒を配置させる。そしてバスは都心へと避難を始めた。

◇? ◇? ◇? ◇?

「……っ！来た！」

道路にばらまいた呪符により呼び出された精霊が直立戦車の接近を幹比古に知らせる。

「もうすぐ見えるよ……3. 2. 1. 今！」

カウントが終わると共に、ビルの影から直立戦車が姿を現した。

こちらに気がついた直立戦車はスピードを上げて一気に突破しようとする。しかし、深雪の魔法によって直立戦車のキヤタピラが凍りつき、停止してしまった。さらに「凍火」で銃火器を使用不能にしまったため、反撃する事ができない。

その隙を逃さず、レオとエリカが前に飛び出し、各々の刃で直立戦車のコックピットを切り裂いた。すると直立戦車は道路に倒れ、辺りにパイロットの血が広がった。

また、五十里がいるチームでも戦闘に突入していた。

五十里の合図で花音は【振動地雷】を発動。道路を液状化させ、直立戦車の足を止めた。キヤタピラは不整地な場所を走行するためのものだが、泥んこな場所には弱く、進むことはできない。

さらに花音はキヤタピラが埋まるのを確認すると水分を蒸発させ、直立戦車の脚を飲み込んだ地面を再び凝固させた。

立ち往生した直立戦車へ寿和と桐原が飛び出した。パイロットが落ち着きを取り戻し、搭載火器で攻撃される前に無力化しなければならぬのだ。

寿和はパイロットが追いつけないスピードでコックピットを連続で斬り裂き、桐原は紗耶香の援護で一気に近づき、【高周波ブレード】で突き刺した。肉を貫く感触。桐原は顔を顰めた。ブランシユの件で腕を斬った事はあったが、殺しは初めてだったのだ。

そして、囷として敵がいる所をプラプラしている智宏も、既に数グループの敵と会敵していた。

「いたぞー！戦闘員は射殺しろ！」

遮蔽物から智宏を狙って射撃を続ける兵士達。しかし智宏に命中

する前に銃弾は光に阻まれた。

智宏は歩みを止めず、CADを敵に向けて【重力核】を発動し、銃やCADごと潰した。仲間の無惨な死に方を見た敵もいたが、逃げる背中にCADを向けると、容赦なく引き金を引いた。

そのまま歩き続けると、智宏はT字路にたどり着く。ちなみに彼が歩いた道は赤く染まっている。将輝同様、殺戮の嵐だった。

「さて、敵は……」

道路のど真ん中で周囲をみまわしていると、こちらに向かってくる直立戦車に気がついた。

（この方向は深雪達の……援軍に行くつもりか）

そう思った智宏は近づいてくる直立戦車に対して魔法を放つ。直立戦車は1発の銃砲弾を撃つことなくただの鉄の塊と化した。

敵を無力化した智宏は、直立戦車がやってきた方向に向かって進んだ。おそらくその先は敵が完全に制圧している区域だろう。

すると着信音がポケットから聞こえた。智宏は携帯端末を取り出して画面を見る。相手は雫だった。一応周囲を警戒をしながら電話に出る。

「雫？」

『智宏さん、そろそろヘリコプターが来そうだよ。今どこ？』

「んー……正確な位置はわかんないね。でも深雪達よりは港側にいると思うよ」

『わかった。じゃあそこで待ってて。ヘリコプターで拾うから』

「ん？いや俺は……ごめん雫、敵だ」

そう言うと智宏は電話を切る。歩兵がこちらに向かってきていたからだ。智宏は処理するためにCADを構えた。

現時刻は午後4時30分。

戦況は侵攻軍が防御にまわるはめとなった。偽装輸送船には元から弾薬が大量に積まれていたため、兵站に困ることはなかったが、兵士の損耗が予想以上に激しく、戦線を支えることで精一杯だった。

建物への奇襲は成功したものの、学生による反撃と警備員の抵抗により、主要施設の占拠は叶わなかった。

市民や魔法師の誘拐に関しても国防軍が盾となって守っているため、こちらも成功していない。

侵攻軍の司令官は、予想以上の損害に険しい表情を隠せていなかった。

「司令、無人偵察機からの通信が全機途絶しました！」

「論文コンペ会場の制圧失敗。兵士達と通信が取れません」

「全部隊に一次防衛線までの撤退を指示しました。これで突出する部隊はいなくなるはずです」

オペレーター達が次々に報告を入れる。

「偵察機がやられ、戦況は不利。くそっ！」

「……………前線の部隊長からです。数機のヘリが直立戦車が向かっていたシエルター入り口に接近しているそうです」

「市民を逃がす気か……………よし、部隊を再編成。1個小隊を囿に分隊規模の魔法師部隊を向かわせろ」

「はっ！」

司令官は真由美達の方角へ部隊を向かわせた。だが、本人達はその脅威に気がついていなかった。

第79話

油断と被弾

『お嬢様、まもなく到着いたします』

「黒沢さん。うん、ローター音は聞こえるよ」

雫はハウスキーパーの黒沢が操縦するヘリコプターの音を聞き取っていた。

「では皆さん！女性と子供を優先で収容します！並んでください！」

その報告を聞いた真由美は避難してきた人達に呼びかけた。生徒や市民は真由美や警備員の指示に従って並び始める。

ヘリコプターが姿を現すと、並んでいた市民達は安堵の表情を浮かべる。しかし、突如として現れた謎の黒い物体がヘリコプターへと近づいていく。よく見るとイナゴの大群だった。

雫はポーチから小型拳銃のようなCADを取り出し、九校戦でも使った「フォンン・メーザー」でイナゴの大群を焼き払った。

「数が多い……！」

何度も熱線でイナゴを消しているが、空いた隙間を埋め尽くすように別のイナゴがやって来る。このままではヘリコプターの吸気口に飛び込まれてしまう。こんな時深雪がいれば全て凍らせるだろうが、今彼女はここにいない。

焦る雫達。イナゴの大群はヘリに取り付くかに見えた。だが、その瞬間全てのイナゴが消え去ってしまった。

「あれはー！」

避難してした市民の1人が空中を指さす。雫や真由美がその方向へ視線を向けると、黒づくめのスーツを着た集団がヘリポートを囲むようにして陣を組んでいるのが見えた。

そしてその中には見覚えのある銀色のCADを持つ人も……。

「達也……さん？」

ほのかがそう呟く。

また、脅威が消えたヘリは着陸体勢に入り、ゆっくりと地面に着陸

した。

市民を収容している間、不気味な黒い1団はヘリを囲むようにして待機していた。周辺を警戒しているようなので、彼らは真由美達を守ってくれているのだろう。

それから10分後、北山家のヘリは人を乗れるだけ乗せると飛び去っていく。護衛なのか、ムーバルスーツを着た2人の隊員もついていた。

それと同時に、今度は真由美が手配したヘリが到着し、乗せられなかった市民や生徒達を収容。1機を残して北山家のヘリと同じ方向へ飛んでいく。

「じゃあ私達も行きましょるか」

最後に残った真由美達も最後のヘリに乗り込んだ。このヘリには深雪や花音達を乗せるため、スペースが空けられていた。市民がいては避難が最優先になるため、戦場で回収ができないのだ。だからこれは真由美達専用。

回転翼が動き出し、真由美達を乗せたヘリはゆっくり上昇する。その時真由美は、建物の屋上にいる銀色のCADを持った男に「あつかんべえ」と舌を出した。顔は見えなかったが、彼女はあれが達也であると確信していたのだ。

達也もそんな真由美に苦笑しながら通信を入れた。

「こちら大黒。七草真由美嬢はヘリでの避難を開始、途中で同級生を回収した後避難するようです」

『了解。対象を戦闘区域より脱出まで護衛。その後は隊へ合流せよ』
「了解」

本部への通信を終えると、達也は真由美達がのるヘリにロケットランチャーの照準を合わせていた敵に向けて魔法を放つ。建物の角で火が一瞬だけ上がった。

そして敵がいなことを確認した達也は、ヘリを護衛するために飛行魔法を発動し、空へ上がった。

◇？

◇？

◇？

◇？

「魔法協会の組織した義勇軍。彼らはなんとか善戦していたものの、負傷者が増えてきたためにジリジリと後退していた。」

敵は歩兵と魔法師、直立戦車の混成部隊だった。人の数は若干敵が多かったが、魔法師が召喚した化成体の数に押されつつある。

「撤退！撤退！」

「1ブロック後退して戦線を立て直す！」

実戦なれしている男達（実は国防軍の予備役）の指示で義勇軍は後退しようとした。

しかし――

「後退するな！」

その声の方向に視線を向けると、まるで鎧のようなヘルメットとプロテクターを装着した克人が仁王立ちしているではないか。

「奮い立て！魔法を手にするもの達よ！進め！我らが祖国を守るのだ！」

そう克人が叫ぶと、直立戦車や化成体がぺしゃんこに叩き潰された。その様子を見た義勇兵からは歓声があがる。

するとお返しだと言わんばかりに、克人に向けて銃撃が放たれた。だが【フアランクス】を展開しているため全く効果がない。克人はそのまま直立戦車を次々に潰していき、1分もしないうちに全ての直立戦車は潰れてしまった。

直立戦車という最大の兵器を失った敵はその歩みを止め、逆に後退するような素振りを見せた。

自分達が苦戦していた相手が一気に不利になる。このシチュエーションで士気が上がらないはずはなく、義勇軍は魔法を放ちながら前進を始め、敵を追い詰めていった。

また、義勇軍として参加した将輝も別の戦線を支えていた。だがここは道が狭く、市民を巻き添えにしないために被害が拡大するような反撃ができなかった。

そこで将輝は左腕にはめたCADを起動させ、液体分子の振動による加熱魔法【叫喚地獄】を発動する。

魔法が命中した敵は身体が熱くなるのを感じるが、それはすぐに激痛へと変わり、数十秒地面にのたうち回った後に死亡した。

【爆裂】とは違ってなかなか死ねないが、この魔法は便利などころもある。【叫喚地獄】は情報強化を纏う魔法師には効きにくいいため、今立っている者が魔法師ということになるのだ。

敵の中に魔法師がいる場合、この魔法なら見分けはつく。どのみち死ぬだろうが……。

深雪達のグループも敵の襲撃に何とか耐え、接近する敵は徐々に少なくなっていた。幹比古が雷撃で敵を無力化すると、辺りは静かになり、敵の気配はしなかった。

「ふう。これで一段落かな」

「皆、七草先輩がヘリコプターで迎えに来てくれるそうよ」

「そりゃよかったぜ」

真由美からの連絡を受け取った深雪がヘリコプターの接近を全員に話す。

「来たみたいですよ」

美月がヘリのローター音を聞き取った。しかし肝心の機体は見えない。音の大きさからして上空にいてもおかしくないはずだ。

すると深雪の携帯端末に着信があった。真由美からだ。

『深雪さん？ごめんね、そこ狭くて着陸できないの。だからロープを下ろすわ』

深雪が返事をする間もなく、人数分のロープが地面に下りてきた。まさかこれに捕まれと。ロープの先には足を引っ掛ける金具がついているが、美月は大丈夫なのだろうか。

しかし時間がないのですぐに動く必要があった。レオと幹比古が周囲を警戒している間に、女性陣3名が上がっていく。

深雪達がヘリの中に收容されたのを確認したレイと幹比古は、自分達のロープに足を引っ掛け、同じように上昇していった。

ヘリの中に入ると、ほのかが必死に手を組んでいた。

「ほのか……？もしかして光学迷彩は……」

「すごいだろ？私にはできないね」

摩利が深雪の言葉にそう反応した。

「光井さん、大丈夫？辛かったら解除してね？」

「だ、大丈夫です……」

魔法の制御で友人と話す余裕もないのは、真由美の言葉に返すだけでも精一杯だった。ビルなどの建物がある場所では、何も無い空と比べて景色の変化が激しく、光学迷彩を維持するのはとても大変なんだそう。

後部ハッチが閉められると、ヘリは移動を始め、五十里達がいる立体交差点へと向かう。しかし、空での移動はそんなに苦ではなかったが、五十里達を回収する事は困難だった。まだ下で銃撃戦が続いているからだ。

ほのかの負担も考えるとあまり長居はできないと考えた真由美は、窓から下を覗いてCADを操作。ドライアイスの弾丸が機関銃のように敵に降り注ぎ、防護服を貫通した。ドライアイスの大きさは12・7mm弾と同じくらいだったため、炸裂こそはしなかったが、敵の命中箇所はえぐれていた。

敵が全滅したのを確認した真由美は、後部ハッチを開きながら携帯端末を操作し、電話をかける。

「もしもし五十里君？ロープを下ろすから捕まってるね」

『わかりました』

真由美との通話を切った五十里は、全員にヘリが来たことを話す。だが寿和を除いた五十里達高校生はこういった戦闘は初めてだったがために、ようやく避難できるといふ油断を生み出してしまう。

寿和も一瞬気を許してしまったのが間違いだった。後方からの殺気に気がついた寿和と桐原は、振り向いてその光景に目を見開く。敵がこちらに銃口を向けていたのだ。

「危ない！」

2人の声に五十里は花音を庇うが、紗耶香は尻もちをついてしまい、逃げられなかった。

そして攻撃が開始され、鮮血が舞った。

第80話 氷の女王

「危ない！」

寿和と桐原の声と同時に敵がハイパワーライフルとロケットランチャーによる攻撃を開始した。

尻もちをついて動けない紗耶香を桐原が、いきなりの奇襲で回避が遅れた花音を五十里がそれぞれ庇う。寿和は4人と少し離れた所にいたため、彼らを守ることができない。

遮蔽物に隠れる事が困難な寿和と桐原は、弾丸を弾いて攻撃を防ぐ。しかし、経験と実力が寿和に劣る桐原は全ての弾丸を弾くことはできなかった。

片腕で刀を持っていた上、弾を弾いた反動で下半身までカバーしきれなかったのだろう。桐原の右足に弾丸は命中。膝から下を吹き飛ばしてしまった。

また、ロケット弾が遮蔽物になっていた車に命中。その破片が花音を庇っていた五十里の背中に突き刺さった。

2人の傷口からは血が止まることなく溢れ出る。危険な状態だ。失血死、ショック死の可能性もあるのだ。

敵はこちらの様子を確認している。何人か話し合っているのを見るに、五十里達を捕虜にするかどうか決めているのだろう。

負傷した2人を見た寿和は、その隙にそっちへ移動しようと考えたが、下手に動くとも攻撃が再開してしまうと考え、その場に留まった。

「桐原君！しっかりして！」

「啓！啓！」

紗耶香と花音の悲鳴が辺りに響く。だが五十里も桐原も痛みで呻き声を上げるしかなかった。

すると上空から1人の少女が降ってきた。深雪である。後部ハッチから下の様子を見ていた彼女は、不意打ちで知り合いを傷つけられた事により逆上してしまった。

深雪はそのままハッチから飛び降り、魔法で落下スピードを抑えて着地した。敵からすると何も無い空中からいきなり現れたように見えただろう。

下に降りた深雪は魔法を発動するため、意識を敵へ向ける。今の彼女にC A Dは必要なく、自身の圧倒的魔法領域が深雪の最も得意としている魔法を編み上げた。

なぜそのような事ができたのか。

それは力が元に戻ったからだ。

力を封じられていたのは達也だけではない。達也の力を封印していた深雪にもその制限がかかっていた。深雪は兄の魔法を封印するのに、自身の魔法力の半分を常にそちらへ向けていなければならず、いつもは半分の実力しか出せていなかったのだ。

しかし達也の力を解放した今、深雪の魔法力は100%の状態となり、C A Dがいらないほどの力を手にしていた。

さて、ここで少しだけ四葉の話しよう。

四葉家とは日本だけでなく、海外からも恐れられている家だ。

外からはアンタッチャブルと呼ばれる一族。しかし一条家のように一族の2つ名はない。その理由は、四葉家の本家や分家の者一人一人が特殊な力を持っているため、1つのカテゴリーに収めることができないのだ。

もちろん智宏は「流星群」が使えるので、それが智宏の子供に継がれば四葉家の2つ名に流星群が入るかもしれない。

そして深雪の母、深夜（智宏の叔母）は他人の精神構造に干渉する系統外魔法を得意としており、その魔法は見事に娘にも受け継がれていた。

深雪は自身の中で魔法が完成したのを感じると、手を前に出してその魔法を発動した。

系統外・精神干渉魔法【コキユートス】

世界が凍りついた。

だが寿和や花音に変化はない。

凍りついたと感じたのは敵の方だ。それも一瞬だけ。その後は精

神が凍りついたため、何も考えることはできなかった。

その光景を見ていた寿和は深雪を恐ろしく思った。彼女が魔法を発動したかと思うと、目の前にいた敵全てが硬直したまま動かなくなっていたからだ。

敵は自分が死んだことさえわからないだろう。それに肉体はまだ死んでいなかった。精神が凍りついたために、命令ができなくなっていたのだ。

(精神を凍らせた？あの少女はいたい……)

妹のエリカも人を殺すのに抵抗はないが、あそこまで恐ろしい事はできないかもしれない。

その恐ろしい魔法を発動した深雪は、一瞬自分の行いを悔いるような表情をした後、手を上げて大声で叫んだ。

「お兄様！」

すると愛する妹の声に反応した達也は、すぐに深雪のそばに着地してバイザーを上げた。

深雪に桐原と五十里のところに案内された達也は、2人の状態に顔を顰める。

「お兄様、お願いしますー！」

「何するの!?!」

達也の腕にしがみついた深雪。達也は頷いて腰からCADを抜いた。そして銃口を五十里に合わせる。

花音は許嫁に向けられた銃口に反応したが、止める時間はなかった。

引き金を引く達也。そして奇跡とも言える魔法【再生】が発動された。

(エイドス変更履歴の遡及を開始)

(肉体を10分前までの物に復元)

(復元開始)

この時間は一瞬。だが達也にとっては長く感じられた。

五十里の身体は、負傷をしなかった状態に復元され、そもそも負傷した事実を無かったことになった。

背中に突き刺さった破片は消え、破けた制服も、服についた血も元通りだ。

(復元、完了)

五十里の治療を終えた達也は、次に桐原へCADを向けて再度引き金を引いた。

桐原の千切れた足は主人の下に引き寄せられ、接触したかと思っただら桐原の足は元通りになった。視覚効果はこっちの方があるかもしれない。

達也は痛みを耐えながら深雪を抱き寄せ、耳元で「よくやった」と囁いてから再び空中へ戻っていく。深雪達は達也が去っていった方向をしばらく見ていたが、寿和がハツとなった声を上げた。

「皆・ひとまずへりに乗るんだ！君、へりと連絡取れるかい？」

「は、はい！」

深雪が手を上げて合図をすると、光学迷彩が施されているへりからロープが垂れてきた。

「じゃあさつき負傷した君達と彼女さんからだ」

「か、かの……!!」

寿和の言葉に紗耶香は顔を真っ赤にするが、五十里と花音が立ち上がるのを見ると、まだ現状を把握できていない桐原の肩を抱いて立ち上がらせた。

4人はロープの先に足を引っ掛けると、スルスル上に上がっていき、ホバリングしているであろうへりの高さになると姿を消した。

残るは寿和と深雪だけだ。2人を回収しようと2本のロープが垂れてくる。

「千葉さん。行きましようか」

「いや、ここで別れるよ。俺は他の市民を探しに行くから」

「そう、ですか。では失礼いたします」

深雪はお嬢様らしく一礼すると、ロープに捕まってへりに収容されていく。

へりで深雪を出迎えたのは、達也の魔法を目撃してしまった全員の視線だった。

そこからはしばらく無言だったが、五十里がポツリと呟く。

「僕は確かに怪我を負ったはずだったよね。桐原君も」

「ああ」

桐原は千切れたはずの足をさすっている。

「この足は確かに千切れた。でも今はこうやってくつついている」

「司波さん。あの魔法はどの程度持続するの？」

五十里が深雪に問いかけた。

魔法による治療は一時的なもの。魔法が進歩したと言っても、完璧な治癒魔法は今も存在していないのだ。

出血を魔法で止めても、持続時間が短い場合は新しい魔法を施す必要があった。五十里や桐原にかかった魔法に持続時間がある場合、直ちにこのへりは病院へ行かなければならない。五十里の問は真つ当なものだ。

どれくらいの間二人は持つのか。

しかし深雪の返答は全員の予想を遥かに上回った。

「永続的です。お2人は完治しているので病院に行く必要はありません」

「ということとはこれまで通りの生活ができるのか!？」

摩利が興奮したように言う。

「はい。運動も戦闘も問題ありません」

「そんな魔法があるのか……司波、あの魔法はなんなんだ？」

「摩利！それはマナー違反よ！」

真由美から摩利に叱責が飛ぶ。だが深雪は気にしていないようだった。

「かまいませんよ。本来ならダメですが、今ならお兄様も許してくださいと思います。しかし絶対に他言無用でお願いします」

「わかった」

「もちろんよ。七草の名前に誓って誰にも言わない。もし話したら私が処理するわ」

少々物騒だが、これで達也の魔法が表に出ることはなくなった。

では、と深雪が口を開く。

「お兄様が使った魔法は治癒魔法ではありません。あれの固有名詞は【再生】。エイドスの変更履歴を最大24時間まで遡り、外的な損傷を受ける前のエイドスをコピー。それを今の状態に上書きすることで復元されるのです」

深雪の説明に一同は声が出なかった。

「治癒魔法が一時的なものでしかない理由は、エイドスの復元力が作用するからです。外からの魔法にかかった自分を、かかる前に戻そうとする。しかし【再生】はそうではありません。あれは負傷する前のものに復元するのでそもそも負傷しなかった事になるのです」

「つまり、今の五十里君と桐原君の身体は負傷する前の身体ってこと？」

「その通りです」

そんな凄い魔法があるのか。深雪以外はそう思っただろう。

「それは生物に限られるの？」

「違うわエリカ。生物でも機械でも、お兄様は一瞬で復元できるわ。でも、その魔法のせいでお兄様は他の魔法を使う事ができないのよ」

「だから達也君はあんなにアンバランスなのね」

「でも凄いわよ！それなら疲れない限りは多くの人が救えるじゃない！」

花音がそう叫ぶ。まあ普通に考えればその通りなのだが、そんなオイシイ魔法があるわけない。何も知らない花音を責めるのは間違っているが、深雪は内なる激情を抑える事ができなかった。

「千代田先輩。お兄様が何の代償も無しにあの魔法をお使いになつてるとお考えですか？」

見つめた者を凍らせるような冷たい視線が花音に向けられる。

「エイドスの変更履歴を遡って復元する。その場合、それまでの対象の情報全て読み取らなければなりません。そこには当然負傷した痛みも」

深雪の声は冷静だったが、その内容は聞いている者をゾツとするような寒気を覚えた。それは視線を向けられた花音以外も例外ではない。

「しかもその苦痛は一緒に凝縮されてきます。今回五十里先輩が治るまで30秒ほどの時間がありました。そしてお兄様がエイドスの履歴を読み取るのに0.2秒。この間お兄様は五十里先輩の味わった150倍の痛みを受けているのです」

「150倍……」

五十里が顔を青くして呻く。あの痛みの150倍とはいったいどれほどか。想像ができなかった。

「それでも【再生】を使えと？お兄様の苦しみをわかって軽々しく使えと仰るのですか？」

それきりヘリの中は誰も喋らなくなった。

うっかり発言をしてしまった花音は五十里達に助けを求めるが、五十里はそれどころじゃなかったし、上級生の真由美や摩利は我関せずというような感じで目線を下げていた。今は花音が悪い。

ヘリはそのまま智宏がいるであろう方向へ向かう。

同時刻。義勇軍に加わった将輝は敵が逃げ込んだと思われる中華街へと来ていた。現在、中華街は東西南北にある門が全て閉じられている。なぜ門があるのか。それは智宏や将輝が生まれるはるか前、時の総理大臣（任期は1年もなかった）が親中派であり、中華街の無秩序な開発を推進し、拳句の果てには今のよう要塞（？）を築きあげるのを許してしまったのだ。

建ててしまったのは仕方がなく、そのままの状態で今に至る。将輝は頭の中で当時の総理大臣に文句を言いながら門に近づく。

「開けろ！開けなければ敵と見なす！」

将輝は門に向かって叫んだ。門の中にはいるのは侵攻軍と民間人（に、見せかけた仲間かもしれない）。念の為、反撃に備えて他の義勇兵は下がらせているし、将輝自身もすぐに魔法を発動できるようにしていた。

まあ開かないだろうな。と思っていた将輝だったが、意外なことに門はすぐに開いた。門が開くと、貴公子のような青年を先頭に、黒服達が縛られている敵を囲って立っていた。

「初めまして。周公瑾と申します」

「……………一条将輝だ」

「侵略者は私達で捕らえました。お渡しします」

正規軍の兵士をいっただいどうやって捕らえたのか。見たところ青年や黒服に負傷している者は見受けられない。

だが捕まえてくれたのはありがたい。将輝は周という男に警戒心を抱きながら、捕まった敵を受け取ったのだった。

五十里と桐原を再生で治した達也は、部隊に戻って柳率いる部隊と合流。侵攻する敵機甲部隊に向かっていった。

このタイミングでなぜ機甲部隊が動いたか。それは侵攻軍司令官による決断だった。

人質の確保に失敗し、兵士や直立戦車の損耗も激しい。

しかしなんの成果もなく本国に戻る事はできなかった。そのため、魔法協会関東支部にある現代魔法技術のデータを奪取し、ついでに日本の魔法師を1人でも多く殺害して日本の戦力を削いでおこうという結論が出される。

そして港に集結した残存機械科兵力の半分が魔法協会関東支部へ向かって行った。

独立魔装大隊の一隊は響子からの連絡で報告された地点へ向かうと、ビルの間を一直線に走っている機甲部隊を発見した。

「敵機甲部隊発見」

「よし。攻撃開始！」

柳の合図でビルの屋上に降りた隊員達は一斉に攻撃を開始した。

貫通力を高めたライフルが装甲車を貫き爆発。その中に燃料タンクに当たったのか、一際大きい爆発の装甲車もあった。

しかし敵も黙って殺られるわけではなかった。

装甲車に備え付けてある機関砲や、直立戦車のバルカン砲や榴弾砲が火を吹きビルの屋上に着弾していく。榴弾砲の破片や機関砲弾の直撃を受けた隊員はバタバタと倒れていった。

『特尉』

「了解」

達也は柳の指示でCADを隊員に向けて引き金を引いた。すると被弾したはずの隊員は何事もなかったかのように立ち上がり、再びライフルで装甲車を破壊した。

そう、「再生」である。

この魔法を乱用することで独立魔装大隊はほぼ不死の軍隊となっていた。

(9・・・10・・・11)

復元した人数を数えながら飛び回る達也。その痛みは桐原達を治した時よりも大きく、大量の汗がムーバルスーツの中に流れていた。

復活した隊員はグレネードを装甲車に投げつける。だがグレネードは装甲車を無力化できず、穴を開けるだけ。隊員は機関銃による反撃でまた被弾してしまう。

達也はすかさず「再生」でその隊員を復元。彼は再び武器を持って立ち上がった。

もちろん達也は衛生兵としてこの場に来ているわけではない。左手のCADで味方を復元しながらも、右手のCADで直立戦車を優先的に攻撃していた。

戦闘開始から6分。敵機甲部隊は既に直立戦車4両、装甲車8両を失っている。

『柳大尉。奴らはどこへ向かっているのでしょうか』

少し余裕ができたのか、隊員の1人が柳にそう尋ねる。

『無謀な進撃とは思えん。おそらく魔法協会関東支部に行くのだろう』

柳の考えは当たっていた。まあ侵攻している方向を考えると簡単に推測できるのだが。

『このタイミングでの侵攻。焦っているのでは？』

『自分も同感であります』

『ああ。だから我々はここを守るしかない。やるぞ!』

独立魔装大隊の攻撃は一層激しくなり、装甲車は次々に破壊されていった。

その会話を聞きながら、達也は敵を排除し続けていた。

残る直立戦車は2両。達也は右手のCADをそのうちの1両に向けて引き金を引いた。

直立戦車のパイロットはいきなり隣の直立戦車が消えたことに驚

き、それを実行したと思われる達也に視線を向けた。そして数年前に自身が体験したあの戦闘を思い出す。

「マヘーシユヴァラ
摩醯首羅！」

次々に消えていく戦友、強烈な一撃で沈んでいく艦隊。パイロットは忘れていた恐怖を、頭の奥に封印していた記憶を無意識に呼び覚ましてしまう。

気がつくと、目の前の男が銃口をこちらに向けているのがわかる。慌ててレバーを操作するも、それより早く達也が引き金を引いたため、パイロットの意識はそこで途切れてしまった。

◇？ ◇？ ◇？ ◇？

機甲部隊と独立魔装大隊の戦闘は、逐一双方の司令部へ報告されており、偽装揚陸艦の司令部は悲壮な空気に満ちていた。

「し、司令！魔法協会関東支部に向かっていた機甲部隊が……全滅しました！」

「なんだと!？」

「報告によりますと、敵は飛行魔法を使った謎の部隊による襲撃を受けた模様です」

「飛行魔法……この前の九校戦で第一高校が使用した物か」

司令官は歯ぎしりをしながら参謀の言葉に耳を傾ける。

大亜連合はこの作戦を開始するにあたり、日本の魔法技術がどれくらいのものなのかをよく調べていた。

もちろん高校生が競う大会、九校戦も例外ではない。九校戦の会場に来ていた諜報員の報告によると、ミラージ・バットにおいて第一高校が飛行魔法を使用したとのことだった。

大亜連合上層部はこの魔法を問題視したが、作戦決行日までに日本

軍が採用するとは思えないという結論が出たため、飛行魔法による襲撃は想定されていなかった。

「司令、飛行魔法は他の日本軍では確認されていません。もしかすると1部にしか配備されていないのでは？」

「うむ。それだけでも重要な情報だ」

「それと……」

別の参謀が追加で何か言おうとする。

「何だ」

「最後の通信で摩醯首羅という言葉が……」

その言葉に司令官はピクリと反応する。実は彼も沖縄へ侵攻した兵の1人だったのだ。

「司令……」

そして隣の参謀も然り。

「いや、何かの間違いだ。そうに違いない！」

だが司令官は認めなかった。否、認められなかった。

沖縄での敗北は大亜連合政府、軍部の中ではタブーとなっており、当時の侵攻軍上層部は現在行方がわからず、あの戦闘を知る者も今では少数となっていた。

よって下っ端の兵隊は詳しい事は何も知らずにこの作戦に参加していた。

「そうだ……これは……間違いなのだ」

司令官は椅子に座って現実から目を背けていた。これ以上は耐えられなくなるため、暗示をかけようとしているようだ。

侵攻軍司令部の動きが鈍くなった頃、達也は柳達と逃走する機甲部隊を追撃していた。

「こちら大黒。敵装甲車が街へ突っ込んで行きます」

『近寄らせるな。破壊しろ』

「了解」

達也はCADを向けて装甲車を消し去る。敵からすれば、さっきまで隣を走っていた友軍がいきなり消えたように見えるだろう。まあ実際その通りなのだ。達也の【分解】は人としての死を迎えられない

ほど恐ろしいもの。表には決して出せない魔法だ。

独立魔装大隊の追撃により、敵機甲部隊は全滅。それに追従していた歩兵も全員殺られてしまった。

一方こちらの被害といえば、ビルが破壊されただけで人的被害は皆無だった。理由はもちろん達也が治したから。

「大尉。敵は全滅しました」

『の、ようだな』

『これで敵の残存兵力は全て港湾沿いにはいるはず。さらに追撃すべきでは?』

辺りを見渡している柳に、隊員の1人が意見具申をする。

『それは別の部隊にやらせよう。我々は別命あるまで市内のゲリラを掃討する』

『『了解』』

柳達はまだ市内に残っていると思われる敵を排除するため、内陸の方へ戻っていく。達也も追従しようとしたが、突然強い魔法力を感知した。

「これは!？」

『む、なんだ?』

どうやら柳と他数名の隊員も気がついたようだ。

(この魔法力は……智宏か? 一体何が……)

達也が感知した智宏の魔法力。それはへりに乗って智宏を迎えに行っていた深雪達も感じ取っていた。

「え?」

「智宏君?」

深雪や真由美は真っ先に反応する。一体彼に何があったのだろうか。真由美はパイロットに急ぐよう伝えた。

第82話 重力の暴走

——数分前。

交差点の1角で智宏は敵を排除し続けていた。この場所での戦果は直立戦車3両、装甲車4両、歩兵20名。それも1度ではなく何度かに分けた戦力の逐次投入だったため、苦戦せずに排除できた。

1度に来ればそれなりの戦力なのだが、小出しで来る敵に智宏は飽き飽きしていた。

深雪達がへりに乗ったのも確認しており、へりの進行方向から察するにこちらへ来ようとしているのだろう。

だがこちらは未だ敵の勢力圏内。へりを飛ばすなんて真似はできない。智宏は雫に電話して自分を無視して避難するように言おうとした。

しかし、突然の悲鳴と銃声で電話が出来なくなってしまった。

(どこだ……俺を狙ったわけではないな)

避難は完了しているはずだが、もしかすると逃げ遅れた人がいるのかもしれない。智宏は銃声がした方向へ走った。

100mほど走ると、再び銃声が聞こえた。今度は何かを狙うような射撃間隔だった。

交差点から別の道に飛び出すと、智宏は現れた光景に目を疑った。智宏の20m前で、2人の敵兵が民間人と思われる母子を見下ろしていたからだ。

(まさか民間人を撃ったのか!?そんな馬鹿な!)

すると驚いている智宏に気がついたのか、敵兵がこちらに銃を向けた。

「おい!こうなりたくなかったら武器を捨てるんだ!」

「その制服は第一高校の生徒だな。こいつは魔法師じゃなかったからやっちまったが、てめえを持ち帰れば俺たちや昇進ものよ」

やけに日本語が上手い。服は民間人の格好なので、作業員として訓

練を受けてきたのだろう。だが智宏はそれどころではなかった。

(・・・・・・・・・・は？まさかそんな事で殺したのか?)

「聞いてんのか?」

「・・・・・・・・・・そんな・・・・・・・・・・そんなくだらない理由で!」

智宏はCADを向けて【重力核】を発動。敵兵はぐしゃつと潰れてしまった。

辺りに血が広がるが、智宏はそんな事を気にせず親子のところへ駆け寄った。10歳くらいの子供はもう手遅れだったが、母親の方はまだ息があつた。しかし――

(血を出しすぎてる。こっちもダメか)

「あの・・・・・・・・・・」

震える智宏の手に母親が自らの手を添える。

「え、あ・・・・・・・・すみません。間に合わず」

「謝らなくて・・・・・・・・いいわ。それで・・・・・・・・あの子・・・・・・・・・・は?」

この母親は智宏の身体で子供の姿が見えていないようだ。

「・・・・・・・・・・まだ助かります。病院に連れて行きますのでご安心を」
智宏は嘘をついた。だが他になんて言えばいいのかわからなかったのだ。とてもじゃないが本当の事は言えない・・・・・・・・・・言いたく
なかつた。

「そう・・・・・・・・・・よかつ・・・・・・・・た」

それつきり女性は動かなくなった。

智宏は女性が亡くなったのを確認すると、2人を寄り添うようにして歩道の端にそつと移動させた。

それから智宏の頭の中に負の感情がぐるぐると回り始め、正常な判断ができなくなつてきてしまった。

そして2人の遺体に近くにあつた店の旗を被せると、智宏は港の方へ足を進めた。

別の交差点までたどり着くと、5名ほどの敵が辺りを警戒しながら歩いていて。おそらく歩哨だろう。

普通なら隠れてやり過ごすのだが、今の智宏は正常な判断ができな

い。敵の姿を視認すると、怒りに支配された感情が爆発し、とてつもない魔法力が辺りに広がった。

「て、敵襲！」

敵兵は慌てて銃を智宏に向けるが、それよりも早く智宏の魔法干渉力が作用し、立っていられないほどの重力が彼らを襲う。10m以上の距離があるはずなのだが、それでも智宏の干渉力は作用した。

発砲しようとしても銃口は下を向き、智宏を見ようとしても頭も押し付けられるように下がる。そして智宏がこちらに歩いてくるにつれ、徐々に全身が地面に近づき、敵兵は智宏にひれ伏すように地面に押し付けられた。

「がっ……………」

「く、そ……………」

智宏が彼らの中心に立った時、彼らを襲う重力は頂点に達し、呼吸すらままならない状態となる。

苦しむゲリラの1人にCADを向ける智宏。そのまま引き金を引くと、その男の両腕両足が折れた。ありえない方向に手足がねじ曲がり、悲鳴……………のような呻き声が聞こえる。

「お前らには……………」

引き金を引く。

「わからないだろうな……………」

また引き金を引く。

「家族を失った……………」

さらに引き金を引く。

「残された者の気持ちなんて……………」

自分でもありえないほどの低い声で敵を殺す事無く無力化する智宏。

抵抗する手段を失ったゲリラは、しばらく呼吸ができない状態が進み、圧死でその命を終わらせた。

智宏はあの親子に自分を重ねていた。自分は中坊の時に育ての母親を失ってしまった。それは鮮明に覚えており、亡き育ての母を夢で見るといいだ。

だからこそ智宏は家族を失った者の気持ちを理解できた。それが幼ければ幼いほど苦しみが大きなものになる事も。とはいえあの女性には夫がいたはずだ。鎮圧後の身元確認の場面など想像もしたくない。

助けられなかった親子にも未来があつた。こんな事で失う命ではなかったのだ。

しばらく港の方を見つめた智宏は、携帯端末を手に取つてある場所へ電話をした。

『はい智宏様』

「彩音。あれは届いているか？」

『先程到着いたしました。リビングに置いてあります』

通話の相手は彩音だつた。

「今すぐ俺のところへ持つてこい。場所は後で指定する」

『・・・・・・・・智宏様？何かあつたのですか？』

主からの電話にうきうきして出た彩音だったが、いつもとは違う智宏の様子が携帯越しでもわかつてしまった。

「敵を殲滅する。あれが必要だ」

『あれを人口密集地で使用するのですか!?!いけません!いくら智宏様でも奥様がお許しになるかどうか・・・・・・・・』

「命令だ。いいな」

『・・・・・・・・つ、わかりました』

智宏のいつもとは違う雰囲気。殺意や憎しみの籠った声に彩音は従うしかなかった。念の為に四葉本家に連絡を入れ、直ぐに自身も武装し、荷物を持って家を出たのだつた。

通話を終了した智宏は集合場所を港沿いのビルにしようと思ひ、そこへ向かつて歩き始める。

だが――

「智宏ー!」

「・・・・・・・・達也」

上空からムーバルスーツを着用した達也が降りてきた。

「さっきのはなんだ。それにどこへ行くこうとしているー!」

「いや、別に」

「あの干渉力……あいつらはお前が？」

智宏はさつきと目的のビルに向かいたかった。だがそれを達也が阻止する。

そしてさらに智宏を止める者達もいた。

「智宏（君）さん！」

現れたのはヘリに乗っているはずの深雪、雫、真由美だった。実は彼女達、敵が完全に制圧した区域のギリギリ外側で飛び降りたのだ。彼女らは智宏と達也、そしてヒビの入った地面に転がるゲリラの死体を交互に見る。

血溜まりや異型な死体に彼女達は口を押さえ、あまり目に入らないように迂回してこちらに近づいて来た。

「智宏君、さっきの魔法はあなたね。何があつたの？」

近づいて来る真由美に目も合わさず、智宏はその場を去ろうとする。

「なんでもないです」

「なんでもないわけじゃない！じゃああの遺体は何よ！」

いつもとは違う対応に真由美は声を荒らげて智宏に掴みかかる。普段なら軽く適当な事を言って振り払うだろうが、智宏は何もせずにかかるがまだ。

「ねえ智宏君、教えて」

「智宏さん……」

服を掴んだ真由美とギュッと智宏の手を握った雫。2人のまつすぐな視線に智宏は低い声で言う。

「……敵が民間人の親子を射殺していた。しかも狙って撃つていたみたいだった」

「えっ……」

「そんな！」

固まる2人。

深雪は声を上げて達也にしがみつく。

「これ以上犠牲者を出すわけにはいかない。だから行くよ」

智宏は2人の手を優しく握り、自分から引き離した。

「敵は殲滅する。これが俺の任務、役目、使命だ」

ふらりとその場を離れようとする智宏。それを見て達也はハツとなる。

「智宏！降伏した奴も殺す気か！」

その言葉に一瞬止まる智宏だったが、ぐりんと達也達の方に振り返る。鋭くなった目に光は一切無く、どこまでも深い闇が広がっていた。その目を見た女性陣は小さく悲鳴をあげてしまう。

「達也、奴らは兵隊じゃない。テロリストだ。テロリストを保護する条約など……ない」

「……ダメッ！」

「雫!？」

別人のような雰囲気を出す智宏に雫は抱きついた。このままでは彼が彼でなくなってしまう。自分が想う彼でなくなってしまう。そう思った。

「智宏さんお願い。私達のところに戻ってきて、ね？」

雫は智宏にヘリへ行こうと誘う。戦況はヘリの中で傍受した無線でわかっている。敵が引いてきているし、国防軍の援軍も来ている。もう学生が戦う必要はなくなったのだ。

「……いや。まだ奴らは残ってるんだ」

それでも智宏は行こうとする。
すると――

「いい加減にしなさい！智宏君、あなたは彼らとは違って野蠻ではないわ！だから同じように彼らを殺す事はないのよ！」

真由美が智宏を叱った。めったに見ない光景だが、深雪にはわかった。あれは本気で想い人を心配しているのだと。だからこそあれだけ怒る事ができるのだと。

雫と真由美は必死に智宏を止めようとする。下を見たままの智宏。彼女達の声は届くのだろうか。

「……確かに奴らと同類になり下がる事はない、ですね。すみません」

そのままの状態で固まっていたが、智宏から発せられた声は、いつも通りのものだった。

「智宏（君）さん！」

「ですが十師族としての役割は果たさなければいけません。俺は戻らずに前線へ行きます」

「……………わかったわ。北山さんもいいわね？」

「……………はい」

雫はまだ不満がありそうだったが、十師族としての役割と言われてしまえば止める事はできない。だから真由美も納得したのだ。すると達也に連絡が入る。おそらく上官の柳か響子だろう。

「深雪、この辺は完全に制圧したから短時間ならここにへりを呼んでも構わない」

「わかりました。七草先輩、お願いします」

深雪の要請に真由美は直ぐに応え、携帯端末でへりを呼んだ。数分後、ほのかの光学迷彩によって守られたへりが到着した。

「ご迷惑をおかけしました。雫、ありがとう」

「うん、大丈夫」

「……………ねえ、私には？」

抱きついたらままの雫や、それを受け入れている智宏にジーツと視線を向ける真由美。わずかながら眉もつり上がっている。

「もちろん先輩にも感謝していますよ」

「わっ！」

真由美の手を引き寄せて至近距離でニツコリと微笑む智宏。左に雫が抱きつき、右に真由美を引き寄せている状況から、智宏がとんでもないヤローに見えなくはないが、彼は本当に感謝していたため悪気はなかった。

その後、へりの中から呆れた声で深雪達を呼んだ摩利の声に雫と真由美はハツとなり、3人はへりに搭乗した。

智宏と達也も女性陣を見送った後、再び戦場へ向かったのだった。